ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告60

富山市内遺跡発掘調査概要X

－南部Ⅰ遺跡・願海寺城跡・今市遺跡・西二俣遺跡・
花ノ木C遺跡・砂川カタダ遺跡・東老田Ⅰ遺跡－

2014

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告60

富山市内遺跡発掘調査概要X（正誤表）			
頁	行	誤	正
46	表-22	2～26	2～6
55	表-1・30	器	器台
107・163	欄外（底径列下）	-	＊高台径
164	34	写真4	写真2

P47 ＊訂正は下線箇所

（誤）

第1表 南部Ⅰ遺跡遺構一覧（3）南側調査区

遺構No.		地区	平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
SD	101	A	東西	0.8	0.5	28	弥生土器(216)	SK101＜SD101
SD	102	A	南北	1.6	0.4	17	弥生土器(214・215)	
SD	103	A・B・C	北西-南東	117.0	28.7	110	弥生土器(236～269) 古墳土師器 古代土師器 古代須恵器 近世伊万里 近世肥前	SD103＜SD109
SD	104	C	北西-南東	2.3	22.9	9	近現代の鋤先	
SD	108	E	北西-南東	0.8	0.8	62	弥生土器(354)	
SD	109	B	北西-南東	1.9	85.5	148		SD103＜SD110
SD	110	E	北西-南東	1.0	0.2	32		
SD	111	D	南北	1.4	2.1	15		
SK	101	A		0.83	0.80	17		＜SD101SP101
SK	102	A	楕円形	0.98	0.25	12		
SK	103	A	楕円形	0.76	0.47	15		
SX	101			0.80	0.40	—	須恵器	
SX	102			—	—	—	近世陶磁器	

（正）

第1表 南部Ⅰ遺跡遺構一覧（3）南側調査区

遺構No.		地区	平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
SD	101	A	東西	0.8	0.5	0.28	弥生土器(216)	SK101＜SD101
SD	102	A	南北	1.6	0.4	0.17	弥生土器(214・215)	
SD	103	A・B・C	北西-南東	(117.0)	28.7	0.11	弥生土器(236～269) 古墳土師器 古代土師器 古代須恵器 近世伊万里 近世肥前	SD103＜SD109
SD	104	C	北西-南東	2.3	22.9	0.9	近現代の鋤先	
SD	108	E	北西-南東	0.8	0.8	0.62	弥生土器(354)	
SD	109	B	北西-南東	1.9	85.5	1.48		SD103＜SD109
SD	110	E	北西-南東	1.0	0.2	0.32		
SD	111	D	南北	1.4	2.1	0.15		
SK	101	A		0.83	0.80	0.17		SK101＜SD101・SP101
SK	102	A	楕円形	0.98	0.25	0.12		
SK	103	A	楕円形	0.76	0.47	0.15		
SX	101			0.80	0.40	—	須恵器	
SX	102			—	—	—	近世陶磁器	

カラー図版1　遺物集合写真（南部Ⅰ遺跡）

カラー図版2　遺物集合写真（願海寺城跡）

カラー図版３　漆塗膜分析結果写真１（願海寺城跡）

写真１　No. 1 内面

写真２　No.1 内面の断面

写真３　No.1 外面

写真４　No.1 外面の断面

写真５　No.2 内面

写真６　No.2 内面の断面

写真７　No.2 外面

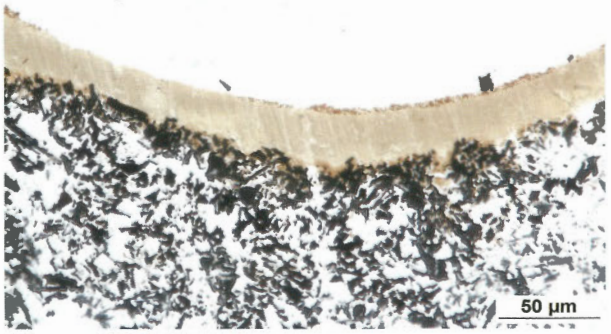


写真８　No.2 外面の断面

カラー図版4　漆塗膜分析結果写真2（願海寺城跡）

写真 9　No.3 内面

写真 10　No.3 内面の断面

写真 11　No.3 外面

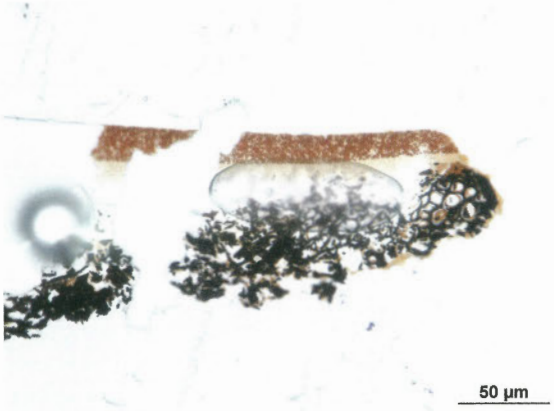


写真 12　No.3 外面の断面

写真 13　No. 4 内面

写真 14　No.4 内面の断面

写真 15　No.4 外面

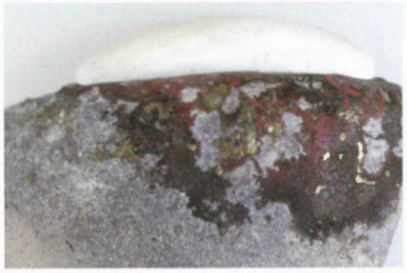
写真 16　No.4 外面の断面

【取鍋 1】

内面写真

外面写真

口縁部（接写）



外面金色部（接写）

内面赤色部（接写）

内面黒色部（接写）

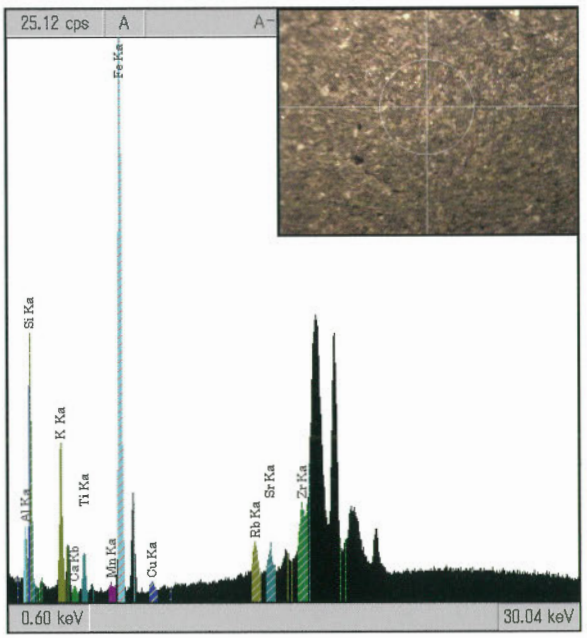


図 1　裏面胎土

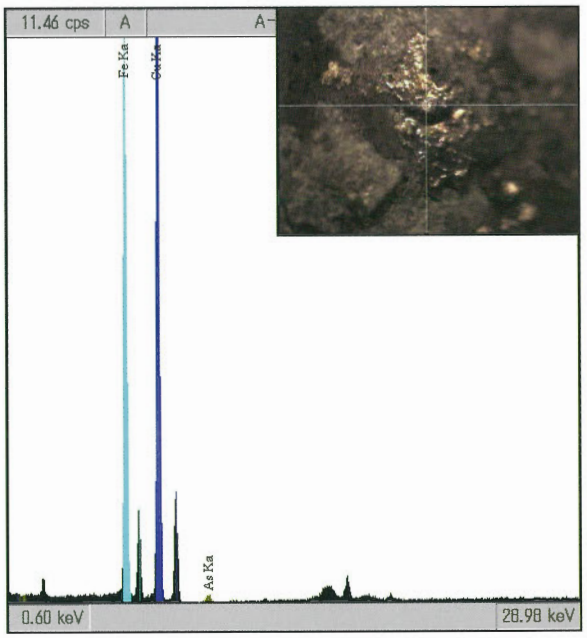


図 2　外面金色部

カラー図版6　取鍋分析結果写真2（願海寺城跡）

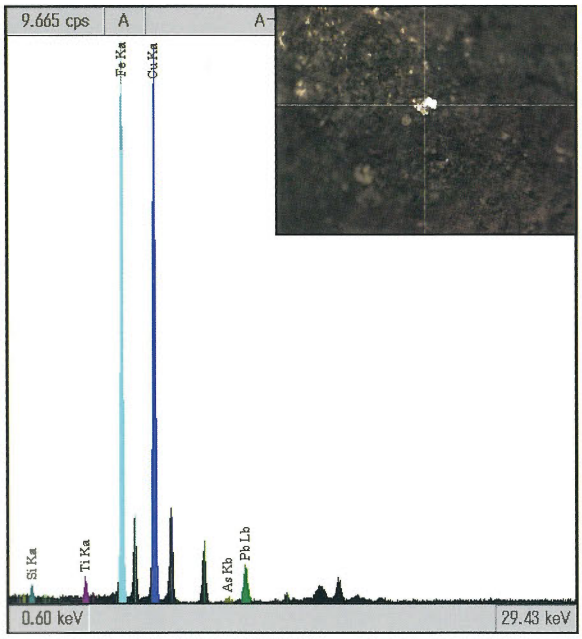


図３　内面金色部Ⅰ

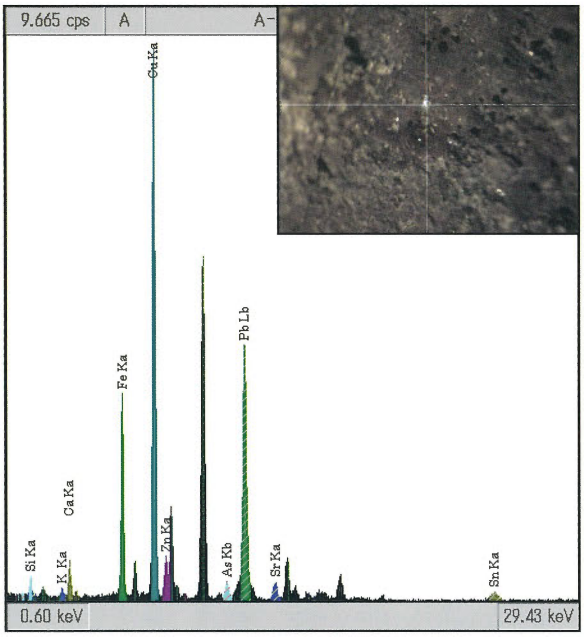


図４　内面金色部Ⅱ

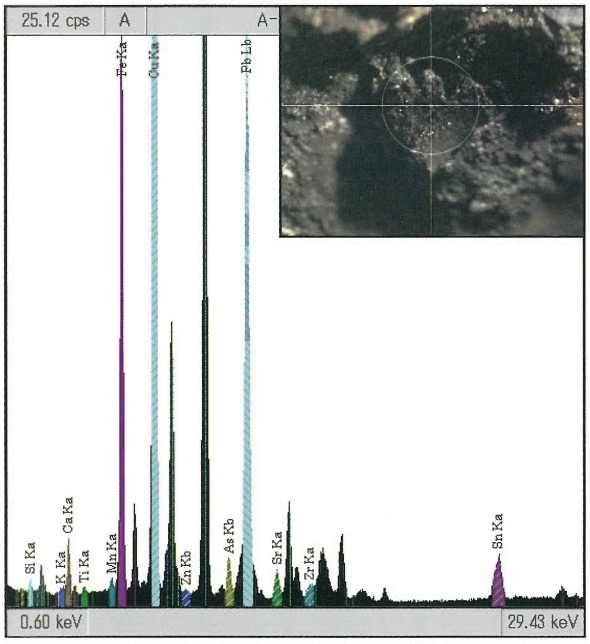


図５　内面黒色部

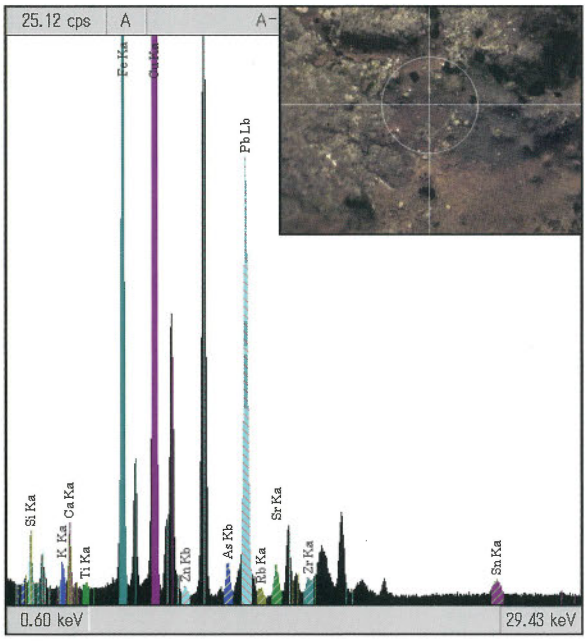
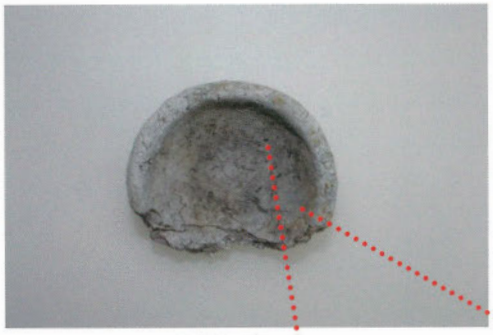


図６　内面赤色部

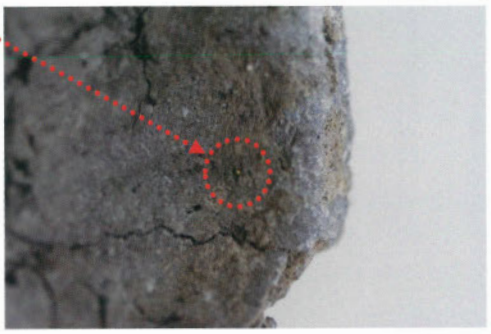
【取鍋 2】



内面写真

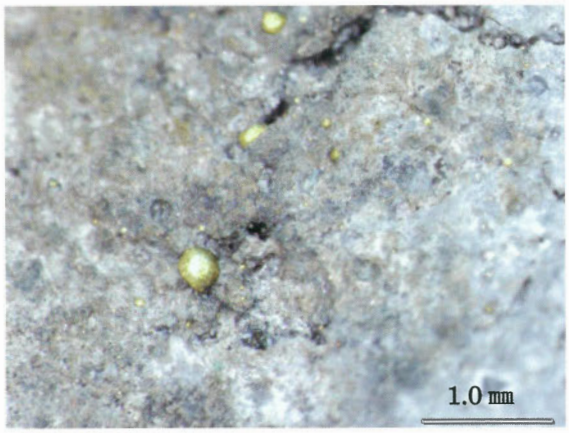
外面写真

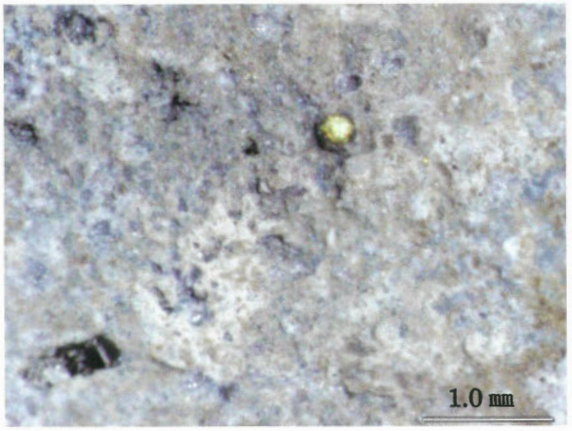
金粒群（接写）

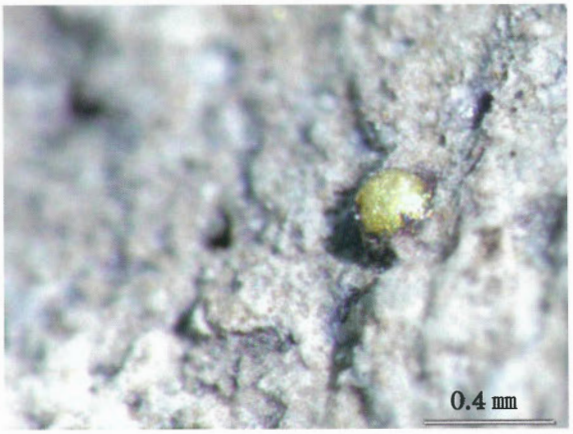


金粒（接写）

●顕微鏡写真（図群１）







●蛍光X線分析スペクトル

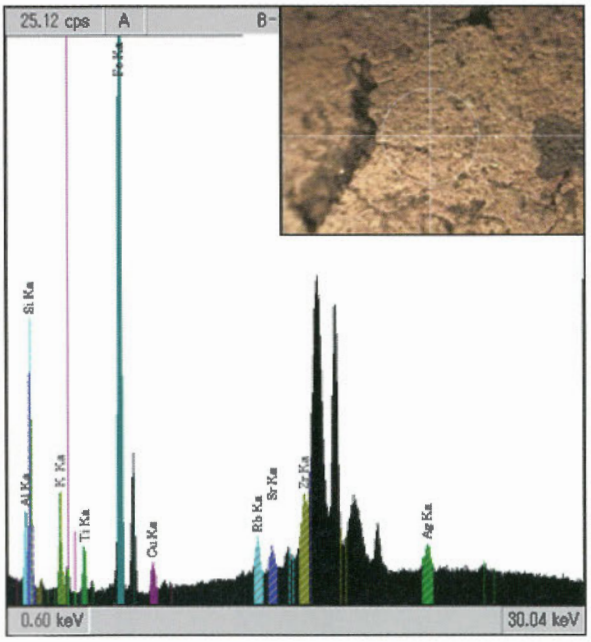


図 7　裏面胎土

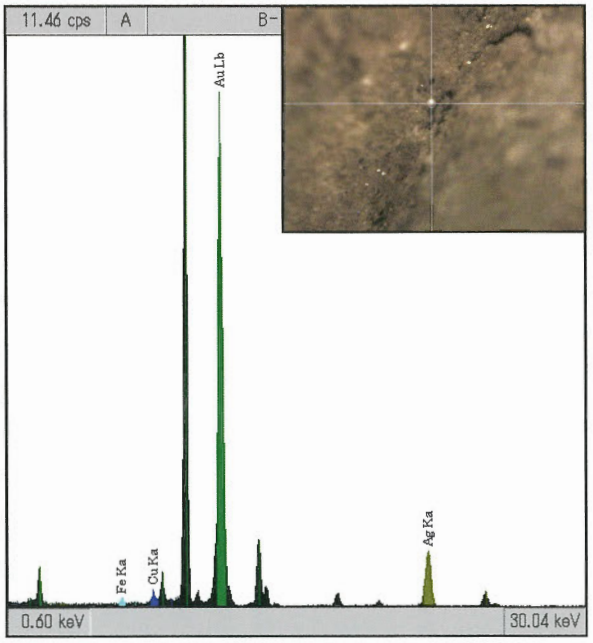


図 8　金粒子Ⅰ

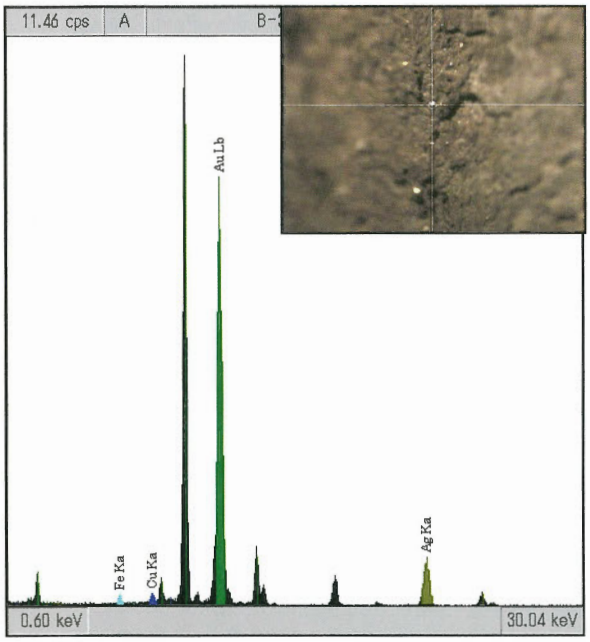


図 9　金粒子Ⅱ

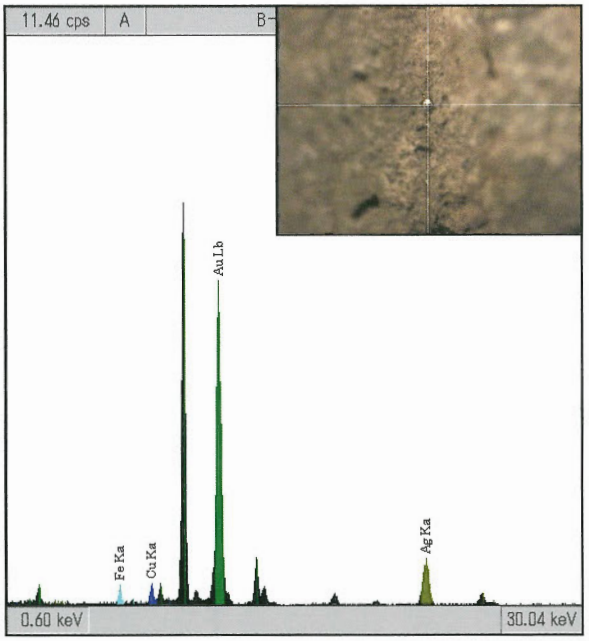


図 10　金粒子Ⅲ

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅹ

－南部Ⅰ遺跡・願海寺城跡・今市遺跡・西二俣遺跡・
花ノ木Ｃ遺跡・砂川カタダ遺跡・東老田Ⅰ遺跡－

２０１４

富山市教育委員会

例　言

1　本書は、流域関連富山特定環境保全公共下水道管渠築造に先立つ平成 19 ～ 25 年度富山市内遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、富山市上下水道局下水道課が行う流域関連富山特定環境保全公共下水道管渠築造に先立つもので、工事立会中に確認された遺構等について、記録保存調査を行った成果を報告するものである。富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。また現地調査・出土品基礎整理調査の一部は、株式会社エイ・テック（南部Ⅰ遺跡、願海寺城跡、西二俣遺跡）、株式会社太陽測地社（願海寺城跡）に、出土品整理調査は北陸航測株式会社に委託して実施した。

3　本書で報告する遺跡の名称・現地調査期間・出土品基礎整理調査期間・出土品整理調査期間は次の通りである。

（1）現地調査期間

南部Ⅰ遺跡　　平成 22 年 3 月 8 日～平成 24 年 10 月 11 日（富山市婦中町島田・熊野道地内）
願海寺城跡　　平成 20 年 1 月 14 日～平成 25 年 1 月 8 日（富山市願海寺・野々上地内）
今市遺跡　　平成 20 年 7 月 30 日～平成 20 年 12 月 24 日（富山市布目・八幡地内）
西二俣遺跡　　平成 21 年 12 月 9 日～平成 25 年 6 月 5 日（富山市西二俣地内）
花ノ木C遺跡　　平成 20 年 6 月 11 日～平成 24 年 11 月 12 日（富山市東老田地内）
砂川カタダ遺跡　平成 19 年 1 月 8 日～平成 23 年 9 月 14 日（富山市東老田地内）
東老田Ⅰ遺跡　　平成 19 年 12 月 11 日～平成 24 年 6 月 25 日（富山市東老田地内）

（2）出土品基礎整理調査期間

平成 22 年 1 月 4 日～平成 22 年 3 月 12 日
平成 23 年 10 月 20 日～平成 24 年 1 月 10 日
平成 24 年 8 月 22 日～平成 25 年 2 月 28 日

（3）出土品整理調査期間

平成 25 年 7 月 10 日～平成 26 年 2 月 28 日

4　現地調査担当者

南部Ⅰ遺跡：堀内大介・小黒智久・近藤顕子・鹿島昌也・細辻嘉門・野垣好史・三上智丈・新川広久・納屋内高史（富山市埋蔵文化財センター）、吉田有里（株式会社エイ・テック）
願海寺城跡：堀内大介・野垣好史・細辻嘉門・小松博幸・小林高太・蓮沼優介・三上智丈・新川広久（富山市埋蔵文化財センター）、澤田雅志（株式会社エイ・テック）、小川幹太（株式会社太陽測地社）
今市遺跡：古川知明・鹿島昌也・野垣好史・小黒智久・細辻嘉門（富山市埋蔵文化財センター）
西二俣遺跡：堀内大介・細辻嘉門・野垣好史・三上智丈・納屋内高史・新川広久（富山市埋蔵文化財センター）、澤田雅志（株式会社エイ・テック）
花ノ木C遺跡：堀内大介・野垣好史・新川広久・納屋内高史（富山市埋蔵文化財センター）
砂川カタダ遺跡：古川知明・小林高範・堀内大介・野垣好史・長谷部真吾・真田泰光・蓮沼優介（富山市埋蔵文化財センター）
東老田Ⅰ遺跡：細辻嘉門・鹿島昌也・堀内大介・小黒智久・真田泰光・新川広久・納屋内高史（富山市埋蔵文化財センター）

5　出土品整理調査担当者

監理担当　堀内大介主査学芸員（富山市埋蔵文化財センター）
整理担当　朝田要学芸員　橋日奈子学芸員（北陸航測株式会社）

6 現地発掘調査及び出土品整理調査に際し、下記の諸氏、諸機関のご指導、ご協力をいただいた。記して謝意を表します。（敬称略）

赤塚次郎、小阪大、寒川旭、高橋浩二、中村晋也、三辻利一、学校法人金沢学院大学、学校法人大谷大学

7 自然科学分析・木製品保存処理は、株式会社吉田生物研究所・株式会社古環境研究所に委託し、その成果を本書の下記各章に掲載した。

8 出土遺物・原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。

9 本書の執筆・編集は、堀内（富山市埋蔵文化財センター）、朝田・橋（北陸航測株式会社）が担当し、各々の責は文末に記した。

凡　例

1 本書で用いた座標は世界測地系第Ⅶ系に基づき設定したものである。方位は真北、水平基準は海抜である。

2 遺構の表記は以下の通りである。

竪穴建物 :SI　溝・自然流路・堀 :SD　土橋 :SA　井戸 :SE　土坑 :SK　ピット :SP　柱穴 :P

3 図中の土器の表現は以下の通りである。それ以外については、使用した各図版に凡例を掲載した。

珠洲・須恵器　赤彩　煤・被熱痕

4 土器・陶磁器の分類・年代については主に下記の文献・編年を使用した。

弥生土器　2003 婦中町教育委員会『富山県婦中町　鍛冶町遺跡発掘調査報告』

瀬戸美濃　2005『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

中世土師器　宮田進一 1997「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』

珠洲　吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

越中瀬戸　宮田進一　1997「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』

肥前陶磁　大橋康二　1993『肥前陶磁』

目　次

カラー図版

Ⅰ　南部Ⅰ遺跡

ⅰ）調査の経過・・1

ⅱ）遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1．地理的環境　2．歴史的環境

ⅲ）調査の概要・・5

1．座標軸の設定　2．基本層序　3．遺構と遺物

ⅳ）自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

出土土器の蛍光X線分析

ⅴ）総括 ・・・

Ⅰ　南部Ⅰ遺跡

ⅰ）調査の経過

南部Ⅰ遺跡は、平成 6 年～平成 9 年に婦中町教育委員会が県営担い手育成基盤整備事業（婦中南部地区）に先立ち分布調査を行い、確認した遺跡である。平成 17 年、市町村合併に伴い遺跡範囲の見直しを行い、南側に隣接する「翠尾Ⅰ遺跡」と統合し、「翠尾Ⅰ・南部Ⅰ遺跡」（市№.362129・361065）として『富山市遺跡地図』に登載した。平成 25 年、『富山市遺跡地図』改訂にあたり、翠尾Ⅰ遺跡と南部Ⅰ遺跡との間に明確な隔たりが確認できたので、両遺跡を別の遺跡として取扱うこととし、「翠尾Ⅰ遺跡」（市№.2010638）と「南部Ⅰ遺跡」（市№.2010636）とした。

遺跡内では、これまで数度にわたり試掘調査や発掘調査を実施した。平成 7 年～平成 11 年の県営担い手育成基盤整備事業（婦中南部地区）に先立つ試掘調査では、対象約 352,900 ㎡のうち、約 149,200 ㎡に遺跡の所在を確認した。その結果、本遺跡は弥生時代終末期～近世の複合遺跡であることが分かった〔婦中町教委 2000〕。

平成 9 年、個人住宅建築に伴う発掘調査では、弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴建物、溝などを確認し、当該期の集落が存在することが分かった〔婦中町教委 1998〕。

平成 11 年、県営担い手育成基盤整備事業（婦中南部地区）の六ヶ用水改修工事に伴う発掘調査では、弥生時代終末期～古墳時代前期、奈良～平安時代、室町時代、江戸時代の4時期の遺構を確認し、集落が長期間存続していたことが分かった。古墳時代前期の竪穴建物では、床面で 1 条の噴砂跡を検出した〔婦中町教委 2000〕。

平成 14 年、一般県道小倉線消雪工取水施設設置工事に伴う発掘調査では、弥生時代終末期～古墳時代初頭、平安時代、室町時代の遺構を確認した〔婦中町教委 2003〕。

平成 23 ～ 24 年にかけて、本遺跡内で公共下水道工事が計画され、工事による掘削幅が狭隘であることから工事立会調査を実施することとした。工事立会で遺構等が確認された場合は、記録保存のための調査を行うこととした。

平成23年3月～4月、婦中町島田地区の調査では、遺構は所在しなかった。平成24年3月～10月、婦中町熊野道地区の調査では、竪穴建物など多数の遺構を確認した。同年 8 月～ 11 月の調査は、下水道課から埋蔵文化財発掘調査業務委託を発注し、埋蔵文化財センターの監理の下、株式会社エイ・テックが調査を実施した。平成24年8月22日～10月11日まで現地において工事立会調査を行い、平成 24 年 8 月 22 日～平成 25 年 2 月 28 日まで出土品基礎整理調査を行った。

調査年度	調査地	主たる調査担当者	調査年月日	遺跡の有　無
H22	婦中町島田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成23年3月8日～ 平成23年3月14日	×
H23	婦中町島田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成23年3月10日～ 平成23年4月11日	×
H24	婦中町熊野道	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成24年3月28日～ 平成24年5月29日	○
	婦中町熊野道	堀内大介（埋蔵文化財センター） 吉田有里（㈱エイ・テック）	平成24年8月22日～ 平成24年10月11日	○

ⅱ）遺跡の位置と環境

1．地理的環境

南部Ⅰ遺跡は、富山市街地から南西約 10km に位置し、富山市婦中町熊野道・島田・高日附地内に所在する。本遺跡周辺は、西側には富山平野を東西に二分する牛岳から呉羽丘陵へ延びる丘陵が、東側には県中央を北流する神通川がある。本遺跡は、神通川とその支流である井田川・山田川

によって形成された複合扇状地上で、井田川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は 23 ～ 32mを測る。神通川と井田川の合流点からは南へ約 8km、井田川から西へ約 0.6km の距離に位置する。

2. 歴史的環境

本遺跡周辺の平地・丘陵には、旧石器時代から中世に至る数多くの遺跡が存在する。

旧石器時代～縄文時代草創期は、千坊山遺跡や鏡坂Ⅰ遺跡でナイフ形石器・有舌尖頭器が出土した〔婦中町教委 1996・2000〕。

縄文時代中期には、鏡坂Ⅰ遺跡で竪穴建物 3 棟、土器捨て場などが確認され、土器捨て場からは縄文時代中期中葉の良好な土器資料や石錘が多量に出土した〔婦中町教委 2000〕。

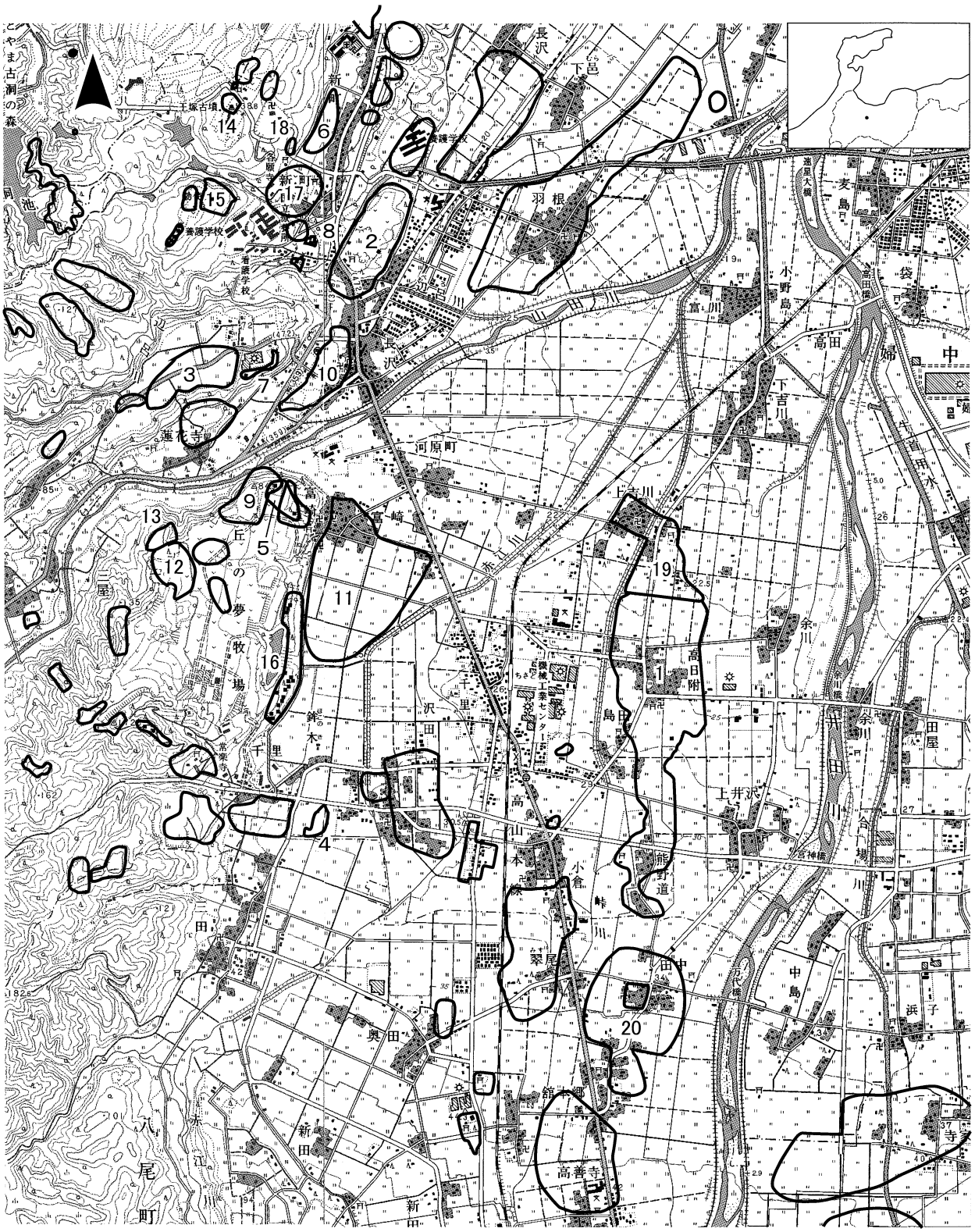
弥生時代中期には、小規模集落である千里C遺跡が確認された。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、井田川・山田川流域に墳墓・集落が継続的に築かれた。弥生時代の墳墓は、富崎墳墓群、六治古塚墳墓、鏡坂墳墓群で山陰地方との関係性の強い四隅突出型墳丘墓が見られ、東海地方が源流とされる前方後方型墳丘墓である向野塚墳墓もある〔婦中町教委 2002〕。集落遺跡は、独立丘陵上に竪穴建物が 20 棟以上検出された千坊山遺跡〔婦中町教委 1996〕、その南側の低位段丘に鍛冶町遺跡〔婦中町教委 2003〕、山田川を挟んだ対岸に富崎遺跡〔富山市教委 2008〕、富崎丘陵上に高地性集落である富崎赤坂遺跡、離山砦〔婦中町教委 2002〕などがあり、墳墓被葬者の基盤集落と考えられている。古墳時代前期には、前方後方墳である王塚古墳や勅使塚古墳、富崎千里古墳群も築かれた。これらのうち、千坊山遺跡・富崎墳墓群・六治古塚墳墓・向野塚墳墓・王塚古墳・勅使塚古墳・富崎千里古墳群の 7 遺跡は国史跡王塚・千坊山遺跡群に指定されている。

奈良時代には、大宝元（701）年に天武天皇第 7 皇子一品親王（仏性上人）の開基とされる真言宗北叡山各願寺が羽根丘陵上に造られた。建武 2（1335）年、戦火に巻き込まれ焼失したが、大永 3（1523）年玄弘僧都により再建された。各願寺前遺跡では、奈良時代～平安時代の掘立柱建物 3 棟や柵列などが確認された〔婦中町教委 2004〕。その北にある新町Ⅱ遺跡でも、平安時代の掘立柱建物 3 棟や柵列などが確認されており、掘立柱建物の規模から新町Ⅱ遺跡は「中核集落」であり、村落首長クラス主導によって形成された計画集落と推定した〔婦中町教委 1986〕。

鎌倉時代末～室町時代初期には、越中の有力国人である土岐長沢氏が長沢に土着し、国・郡支配に深く関わっていた〔久保 1996〕。戦国時代には、山田川流域が西の砺波や南の飛騨に抜ける交通の要衝として戦略上重要であることから、神保氏によって富崎城が築かれ、周囲にも長沢城、大館城、下瀬砦、赤坂砦などの山城が多数築かれた〔富山県教委 2006〕。富崎丘陵の東側の山裾には、集落が営まれた。小倉中稲遺跡では、12 世紀後半～ 13 世紀前半と 14 世紀前半、15 世紀後半～ 16 世紀前半の 3 時期の遺構が見つかり、中世全般にわたり集落が存続していた〔婦中町教委 1993・1994〕。富崎遺跡では、12 世紀後半と 15 世紀後半～ 16 世紀代の集落があり、長沢氏、神保氏を支えた集落と考えられる〔富山市教委 2008〕。

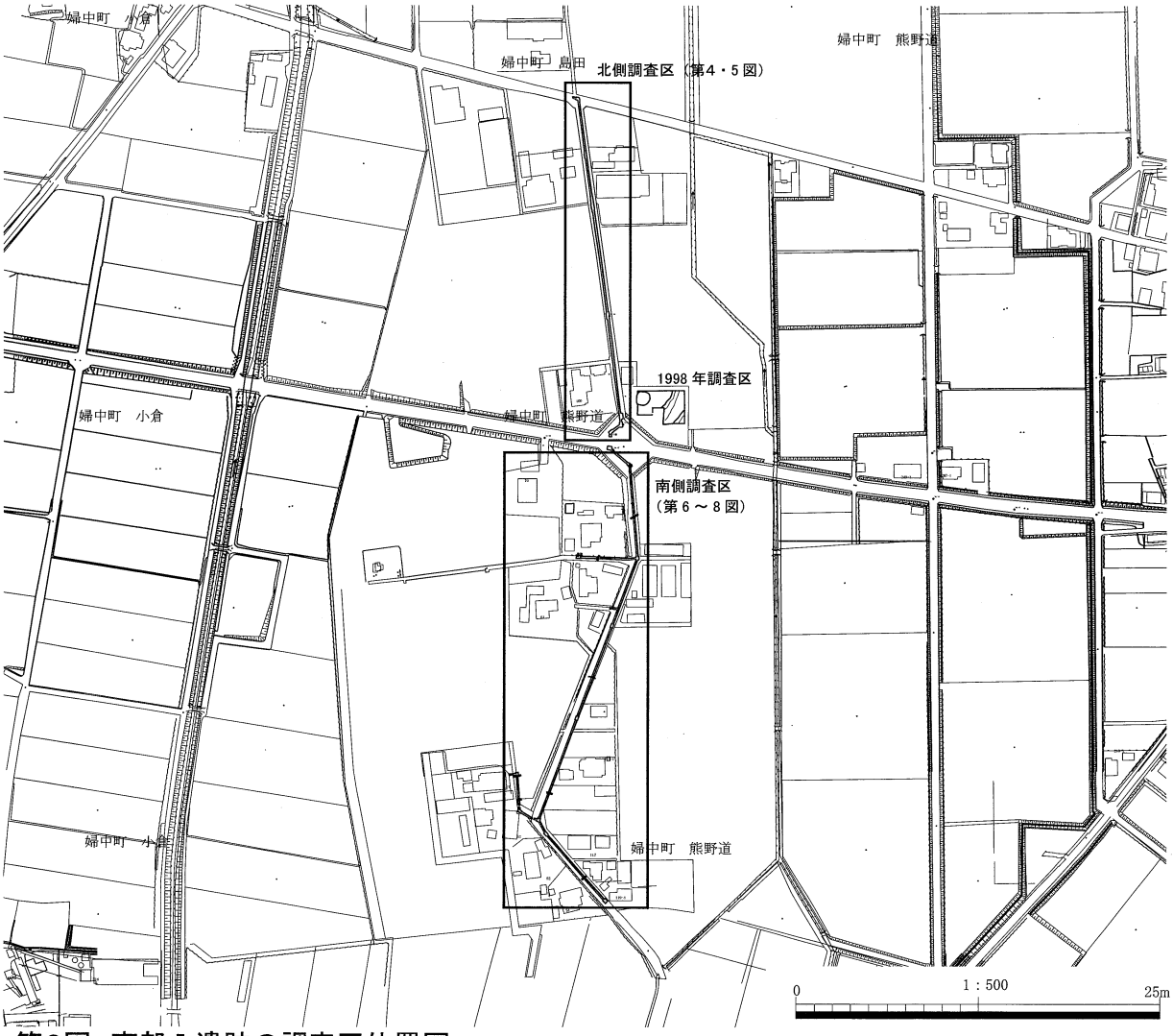
（堀内）



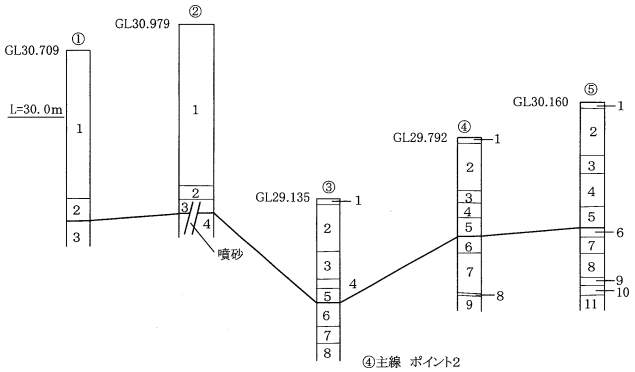
1. 南部Ⅰ遺跡
2. 千坊山遺跡
3. 鏡坂Ⅰ遺跡
4. 千里C遺跡
5. 富崎墳墓群
6. 六治古塚墳墓
7. 鏡坂墳墓群
8. 向野塚墳墓
9. 富崎城跡
10. 鍛冶町遺跡
11. 富崎遺跡
12. 富崎赤坂遺跡
13. 離山砦
14. 王塚古墳
15. 勅使塚古墳
16. 宮崎千里遺跡
17. 各願寺前町遺跡
18. 新町Ⅱ遺跡
19. 上吉川Ⅰ遺跡
20. 翠尾Ⅰ遺跡

0　1：50,000　2,500m

第1図　南部Ⅰ遺跡と周辺の遺跡



第2図　南部Ⅰ遺跡の調査区位置図



①マンホールB2
1. 盛土
2. 暗灰色粘土質シルト(遺物包含層)
3. 灰色粘土質シルト(地山)

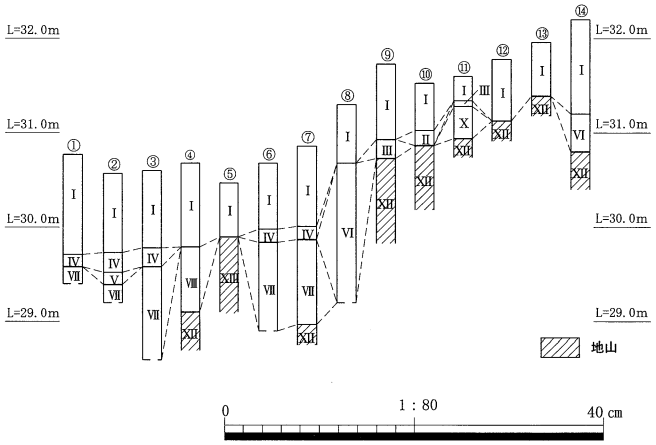
②マンホールB4-1
1. 盛土
2. 褐灰色粘土
3. 粘土質シルト(遺物包含層)
4. にぶい黄褐色粘土質シルト(地山)

③主線　ポイント1
1. アスファルト
2. 砕石(路盤)
3. 灰黒色シルト(盛土)
4. 灰黒褐色粘土質シルト(盛土？)
5. 黒褐色シルト(遺物包含層)
6. 灰黄褐色粘土質シルト（炭化物混　SI埋土？遺物包含層）
7. 黒褐色粘土質シルト（炭化物混　SI埋土）
8. 灰褐色シルト(砂、炭化物混　SI埋土　遺物多い)
9. 黄褐色砂質土(貼床か)
10. 黄灰色砂質シルト(貼床か)
11. 灰色粘質土(地山)

④主線　ポイント2
1. アスファルト
2. 砕石
3. 盛土
4. 灰黒色シルト
5. 黒褐色シルト
6. 灰黄褐色砂質シルト(炭化物混)砂質強い
7. 黄灰褐色砂質シルト(炭化物混)砂質弱い
8. 薄い炭層
9. 明黄褐色シルト(地山)

⑤主線　ポイント3
1. アスファルト
2. 砕石
3. 盛土
4. 灰黒褐色粘土質シルト(盛土？)
5. 黒褐色シルト(遺物包含層)
6. 灰黄褐色粘土質シルト(炭化物混　SI埋土か遺物包含層)
7. 黒褐色粘土質シルト(炭化物混 SI埋土)
8. 灰褐色シルト(砂、炭化物混 SI埋土　遺物多い)
9. 黄褐色砂質土(貼床か)
10. 黄灰色砂質シルト(貼床か)
11. 灰色粘質土(地山)

北側調査区土層柱状図（第４図に対応）



A～E地区共通
　Ⅰ層:近現代造成土
　Ⅳ層:黒褐色シルト(遺物包含層)
　Ⅻ層:褐色粗砂～礫(地山)
A地区
　Ⅴ層:黒褐色シルト(遺構埋土)
　Ⅶ層:青灰色シルト(SD103埋土)
B地区
　Ⅵ層:灰黄褐色砂・青灰色粘土(SD109埋土)
　Ⅶ層:青灰色粘土(SD103埋土)
C地区
　Ⅺ層:溝SD104埋土
D地区
　Ⅱ層:にぶい黄褐色シルト(耕作土)
　Ⅶ層:青灰色シルト(SD103埋土)
　Ⅷ層:青灰色シルト(SD111埋土)
　ⅩⅢ層:黄橙色シルト(地山)
E地区
　Ⅱ層:灰黄褐色シルト(耕作土)
　Ⅲ層:青灰色砂(洪水堆積土)
　Ⅸ層:灰黄褐色砂・青灰色粘土(SD108埋土)
　Ⅹ層:にぶい黄橙色粘土(SD110埋土)

南側調査区土層柱状図（第７図に対応）

第3図　南部Ⅰ遺跡の基本層序

iii）調査の概要

1．座標軸の設定

測量図を作成するため、座標軸は南側調査地区北東を任意で0原点として設定した。略南北軸をX軸とし、略東西軸をY軸として、測量座標系を用いた。北方向および東方向へ進むに従い数値が大きくなる。調査区の範囲は、X＝－310 ～ 257、Y＝－105 ～5となる。

調査地区は直線的に掘削しており、北側の調査区は任意座標0原点より南北軸に沿って北側 X250 から順に 50m単位で1～5地区とした。南側の調査区は直線の変化点で5地区に分割し、下水道本線をマンホールB3 -2からマンホールB3 -1までをA地区、マンホールB3 -1～マンホールB1－1までをB地区、マンホールB1－1～マンホールB1－1－1までをC地区とし、A地区とB地区との境界のマンホールB3－1から西へ延びる支線をD地区、B地区とC地区との境界のマンホールB1－1から西～北方向へ延びる支線をE地区とした。

南側調査区の標高原点は、工事基準点のレベル値 30.402mを基準とした。

2．基本層序（第3図）

（1）北側調査区

マンホールB2：1層は近現代の盛土である。2層は暗灰色粘土質シルトの遺物包含層である。3層が灰色粘土質シルトで遺構検出面である。

マンホールB4 - 1：1層は近現代の盛土である。2層は褐灰色粘土、3層は粘土質シルトの遺物包含層である。4層がにぶい黄褐色粘土質シルトで遺構検出面である。断面に噴砂の痕跡が確認できる。

主線ポイント1：1～4はアスファルト、砕石、近現代盛土、5は褐色シルトで遺物包含層である。6～8は灰黄褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルト、灰褐色シルトで竪穴建物の埋土である。9・10は黄褐色砂質土、黄灰色砂質シルトでいずれも貼床の可能性がある。11 は灰色粘質土で遺構検出面である。

主線ポイント2：1～4がアスファルト、砕石、近現代盛土、5が黒褐色シルトである。6は灰黄褐色砂質シルト、7は黄灰褐色砂質シルトで、8は薄い炭層である。9が地山で明黄褐色シルトである。

主線ポイント3：1～4がアスファルト、砕石、近現代盛土、5が黒褐色シルトで遺物包含層である。6～8は灰黄褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルト、灰褐色シルトで竪穴建物の埋土である。9・10 は黄褐色砂質土、黄灰色砂質シルトでいずれも貼床の可能性がある。11 は灰色シルトで遺構検出面である。

（2）南側調査区

A地区：Ⅰ層は近現代造成土である。Ⅳ層は黒褐色シルトの遺物包含層（厚さ 0.13 ～ 0.21m）、Ⅴ層は黒褐色シルトの遺構埋土、Ⅶ層は青灰色シルトを基調とする自然流路SD103 の埋土（厚さ1m以上）、Ⅻ層は褐色粗砂～礫の地山である。

B地区：Ⅰ層は近現代造成土である。Ⅳ層は黒褐色シルトの遺物包含層（厚さ 0.14m）、Ⅵ層は灰黄褐色砂・青灰色粘土を基調とする自然流路SD109 の埋土（厚さ1m以上）、Ⅶ層は青灰色シルトで自然流路SD103 の埋土（厚さ1m以上）、Ⅻ層は褐色粗砂～礫の地山である。

C地区：Ⅰ層は近現代造成土である。Ⅳ層は黒褐色シルトの遺物包含層である。Ⅺ層は溝SD104 の埋土（厚さ 0.86 ～ 1.26m）、Ⅻ層は褐色粗砂～礫の地山である。

D地区：Ⅰ層は近現代造成土である。Ⅱ層はにぶい黄褐色シルトの耕作土（厚さ 0.4 ～ 0.5m）、Ⅳ層は黒褐色シルトの遺物包含層（厚さ 0.08m）、Ⅶ層は青灰色シルトを基調とする流路SD103 の埋土（厚さ 1.08m以上）、Ⅷ層は青灰色シルトを基調とする流路SD111 の埋土（厚さ 0.69m）、Ⅻ層は褐色粗砂～礫の地山、XⅢ層は黄橙色シルトの地山である。

E地区：Ⅰ層は近現代造成土である。Ⅱ層は灰黄褐色シルトの耕作土（厚さ 0.1 ～ 0.34m）、Ⅲ層は青灰色砂の洪水堆積層（厚さ 0.14 ～ 0.24m）、Ⅳ層は黒褐色シルトの遺物包含層、Ⅸ層は灰黄褐色砂・青灰色粘土を基調とする自然流路SD108 の埋土（厚さ 1.06m）、Ⅹ層はにぶい黄橙色粘土の溝SD110 の埋土、Ⅻ層は褐色粗砂～礫の地山である。

3. 遺構と遺物

（1）遺構

遺構は北側調査区から竪穴建物 11 棟、溝4条、土坑 14 基、ピット 57 基を、南側調査区から溝8条、土坑3基、ピット3基を検出した。

A. 北側調査区

a. 竪穴建物

SI10：1区に位置し、検出した竪穴建物のうち最北端にある。検出長 0.86m、幅 4.60m、深さ 0.33mを測る。調査区外東西に延びる。SP11・12 を伴う可能性がある。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の甕（1）、須恵器（389）が出土している。古代の竪穴建物の可能性がある。

SI18：1区に位置する。長さ 3.02m、幅 0.46m、深さ 0.22mを測る。調査区東側に延びる。平面形は隅丸方形の可能性が高い。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は出土していない。

SI20：1区に位置する。検出長 7.95m、深さ 0.29mを測り、SP21 を伴う可能性がある。調査区外東西に延びる。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は弥生土器の甕（2～4）、鉢（5）、高坏（6）が出土した。

SI25：2区に位置する。検出長 1.25m、検出幅 0.45m、深さ 0.08mを測る。調査区外東側に延びる。平面形は隅丸方形と考えられる。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は弥生土器の甕（7）が出土した。

SI42：2区に位置する。検出長 2.68m、検出幅 0.88m、深さ 0.25mを測る。調査区外東西に延びる。平面形は円形の可能性が高い。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は弥生土器の甕（8～ 13）、壺（14 ～ 16、20）、器台（17）、高坏（18・19）が出土した。

SI45：3区に位置する。長さ 3.71m、検出幅 0.84m、深さ 0.14mを測る。調査区東西に延びる。平面形は隅丸方形の可能性が高い。SI46 内に位置する。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は弥生土器の壺か甕の底部（21）、鉢（22・23）が出土した。

SI46：3区に位置する。検出長 7.91m、検出幅 0.84m、深さ 0.31mを測る。調査区東西に延びる。平面形は円形の可能性が高い。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の甕(24)が出土した。

SI53：3区に位置する。長さ 9.32m、検出幅 0.84m、深さ 0.44mを測る大型の竪穴建物である。埋土は黒褐色土を基調とする。SP54・55 を伴う可能性がある。遺物は弥生土器の甕（25 ～ 30）、壺（31・32）、鉢（33・34）、器台（35・36）、高坏（37 ～ 41）が出土した。

SI57：3区に位置する。長さ 7.35m、検出幅 0.84m、深さ 0.28mを測る。調査区東西に延びる。柱穴SI57 -P1を伴い、SP56・SK58 より古い。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の甕（42 ～ 48）、壺（49 ～ 54･63）、鉢（55 ～ 57）、高坏（59 ～ 61）、器台（58）、蓋（62）が出土した。

SI76：4区に位置する。長さ 9.85m、検出幅 0.83m、深さ 0.54mを測り、SP77 より古い。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の甕（65 ～ 120）、壺（121 ～ 134）、鉢（135 ～ 138）、手づくね（139）、器台（140 ～ 146）、高坏（147 ～ 162）、蓋（163 ～ 167）、坩（168・169）、台付鉢（170）が出土した。

SI82：5区に位置し、検出した竪穴建物のうち最南端に位置する。長さ 2.6m以上、幅 0.83m、深さ0.26mを測り、柱穴SI82-P1を伴う。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は甕（171）、壺（175）が、P1から弥生土器の甕（172）、壺（173・174）が出土した。

b. 自然流路・溝

SD72：4区に位置し、東西方向に流れる溝である。検出長 0.83m、幅 6.34m、深さ 0.55mを測る。SK73 より新しい。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の甕（213）が出土した。

c. 土坑

SK43：2区、SI42 の南約 1.87mに位置し、東側調査区外に延びる。平面形は楕円形と考えられ、長軸 1.51m、検出幅 0.70m、深さ 0.41mを測る。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の甕（179 ～ 187）、壺（188 ～ 194）、高坏（195 ～ 198）、蓋（199）が出土した。

SK50：3区に位置し、西側調査区外に延びる。平面形は楕円形と考えられ、長軸 1.52m、検出幅 0.73m、深さ 0.20mを測る。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の甕（200）、壺（201）、高坏か器台（202）が出土した。

SK58：4区に位置し、西側調査区外に延びる。SI57 より新しい。平面形は楕円形と考えられ、長軸 1.12m、短軸0.71m、深さ0.26mを測る。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の甕(203)、壺（206）が出土した。

SK73：4区に位置し、東側調査区外に延びる。平面形は楕円形と考えられ、長軸 0.51m、検出幅 0.50m、深さ 0.10mを測る。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の高坏（207 ～ 210）が出土した。

SK78:4区に位置し、西側調査区外に延びる。平面形は楕円形と考えられ、長軸 0.8m、短軸 0.8m、深さ 0.17mを測る。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の甕（212）、高坏（211）が出土した。

（4）ピット

SP33：2区に位置し、東側調査区外に延びる。周囲直径4m内には多くのピットが集中している。平面形は円形と考えられ、長軸 0.30m、検出幅 0.19m、深さ 0.18mを測る。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の甕（176）が出土した。

SP47:3区に位置し、東側調査区外に延びる。平面形は円形と考えられ、長軸0.40m、検出幅0.20m、深さ 0.15mを測る。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は弥生土器の壺（177）が出土した。

B. 南側調査区

溝・自然流路は調査区全体（A～E地区）で検出した。土坑・ピットはすべてA地区に集中している。土坑・ピットの埋土は、弥生時代以降に堆積したと考えられるⅣ層を埋土とし、自然流路SD103 の上面から掘り込む。

a. 自然流路・溝

SD101：A地区北側に位置し、東西方向に流れる溝である。検出長 0.8m、幅 0.5m、深さ 0.28mを測り、南側で重複するSK101 より新しい。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は弥生土器の壺（216）が出土した。

SD102：A地区北側に位置し、南北方向に流れる溝である。検出長 1.6m、幅 0.4m、深さ 0.17mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は弥生土器の甕（214・215）が出土した。

SD103:A地区南側～B地区北側～ D 地区東側にかけて、北西～南東方向に流れる自然流路である。検出長 117.9m、幅 28.7m、深さ 1.10mを測る。北側で重複する自然流路SD109 より古い。

SK101・102・103、SP101・102・103 より新しい。埋土は青灰色シルトを基調とする。遺物は、弥生土器（270 ～ 352）、古代土師器、古代須恵器、近世陶磁器が出土した。なかでもA地区の北側肩部から南へ 5.4m～約 50mの範囲で、青灰色シルト～砂層と地山との間の褐灰色砂層に土器溜まりが確認でき、弥生土器（236 ～ 269）が多量に出土した。

SD104：C地区南端に位置し、北西～南東方向に流れる自然流路である。検出長 2.3m、検出幅 22.9m、検出深さ 0.9mを測る。埋土は褐色砂・青灰色粘土を基調とする。遺物は、近現代の鋤先が出土した。

SD108：E地区北端に位置し、北西～南東方向に流れる自然流路である。検出長 4.2m、幅 19.0m、深さ 0.62mを測る。埋土は褐色砂・青灰色粘土を基調とし、自然流路SD109 の埋土と同様である。遺物は、弥生土器の甕（354）が出土した。

SD109：C地区中央～南側に位置し、北西～南東方向に流れる自然流路である。検出長 1.9m、幅 85.5m、深さ 1.48mを測る。南側で重複する流路SD103 より新しい。埋土は褐色砂・青灰色粘土を基調とし、自然流路SD108 の埋土と同様である。

SD110：E地区マンホールB1-2-2の北側に位置し、北西～南東方向に流れる溝である。検出長 1.0m、幅 0.2m、深さ 0.32mを測る。埋土は灰白色土を基調とする。

SD111：D地区西端に位置し、南北方向に流れる自然流路である。検出長 1.4m、幅 2.1m、深さ 0.15mを測り、南側で撹乱に切られる。埋土は青灰色シルトを基調とする。

b. 土坑

SK101：A地区北側に位置する。平面形は不整形で、長軸 0.8m、短軸 0.8m、深さ 0.17mを測る。北側で重複するSD101、南側で重複するSP101 より古い。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

SK102：A地区中央に位置する。平面形は楕円形で、長軸 1.0m、短軸 0.2m、深さ 0.12mを測る。西側は調査区外である。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

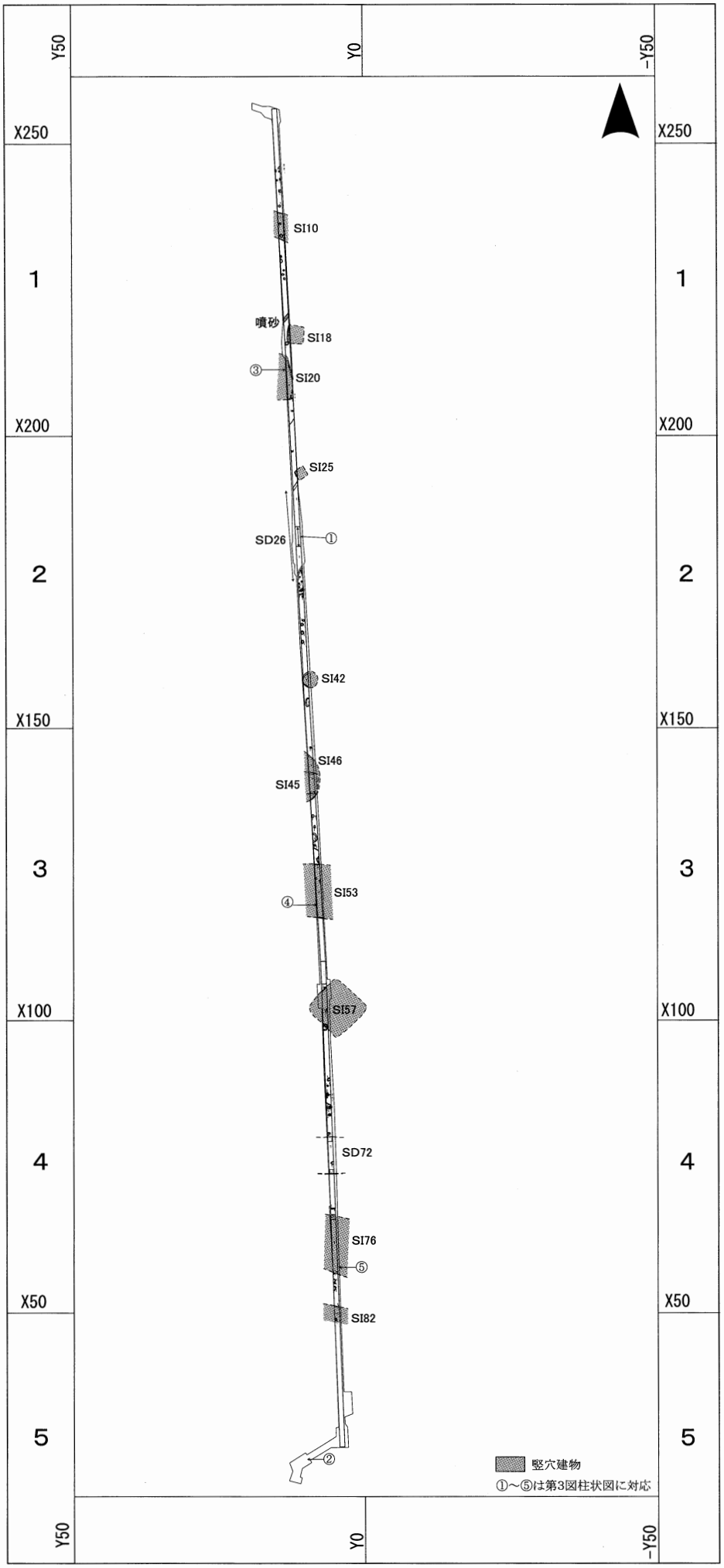
SK103：A地区中央に位置する。平面形は楕円形で、長軸 0.76m、短軸 0.47m、深さ 0.15mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。SK101 ～ 103 はいずれも自然流路SD103 が埋没した上面を掘り込み面とする。

c. ピット

SP101：A地区北側に位置する。平面形は円形で、長軸 0.4m、短軸 0.3m、深さ 0.16mを測る。土坑SK101 を切る。自然流路SD103 が埋没した上面を掘り込み面とし、埋土は黒褐色シルトを基調とする。

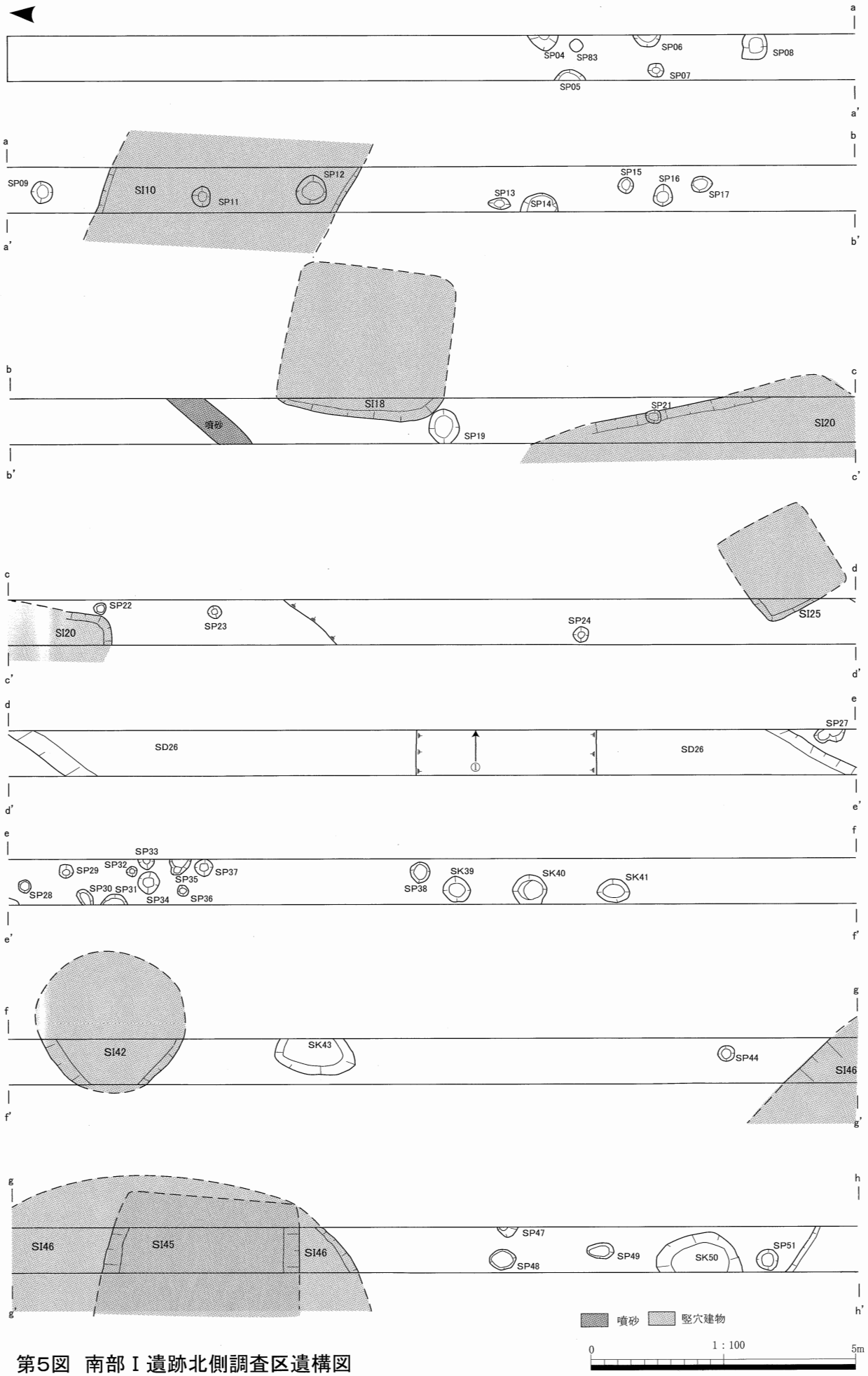
SP102：A地区中央に位置する。平面形は円形で、長軸 0.4m、短軸 0.3m、深さ 0.13mを測る。西側は調査区外である。自然流路SD103 が埋没した上面を掘り込み面とし、埋土は黒褐色シルトを基調とする。

SP103：A地区中央に位置する。平面形は円形で、長軸 0.4m、短軸 0.4m、深さ 0.12mを測る。自然流路SD103 が埋没した上面を掘り込み面とし、埋土は黒褐色シルトを基調とする。（朝田）

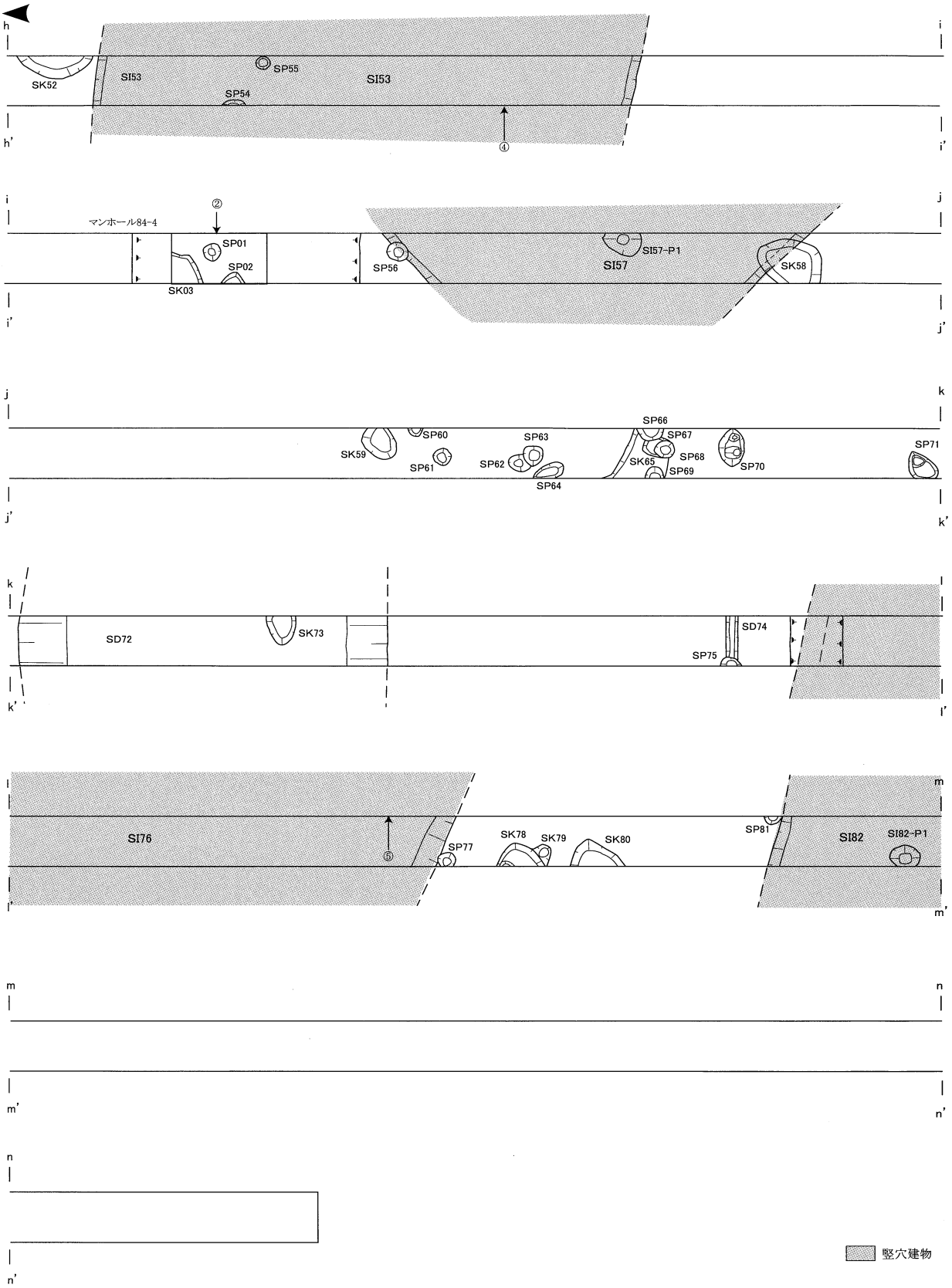


第4図　南部Ⅰ遺跡北側調査区全体図

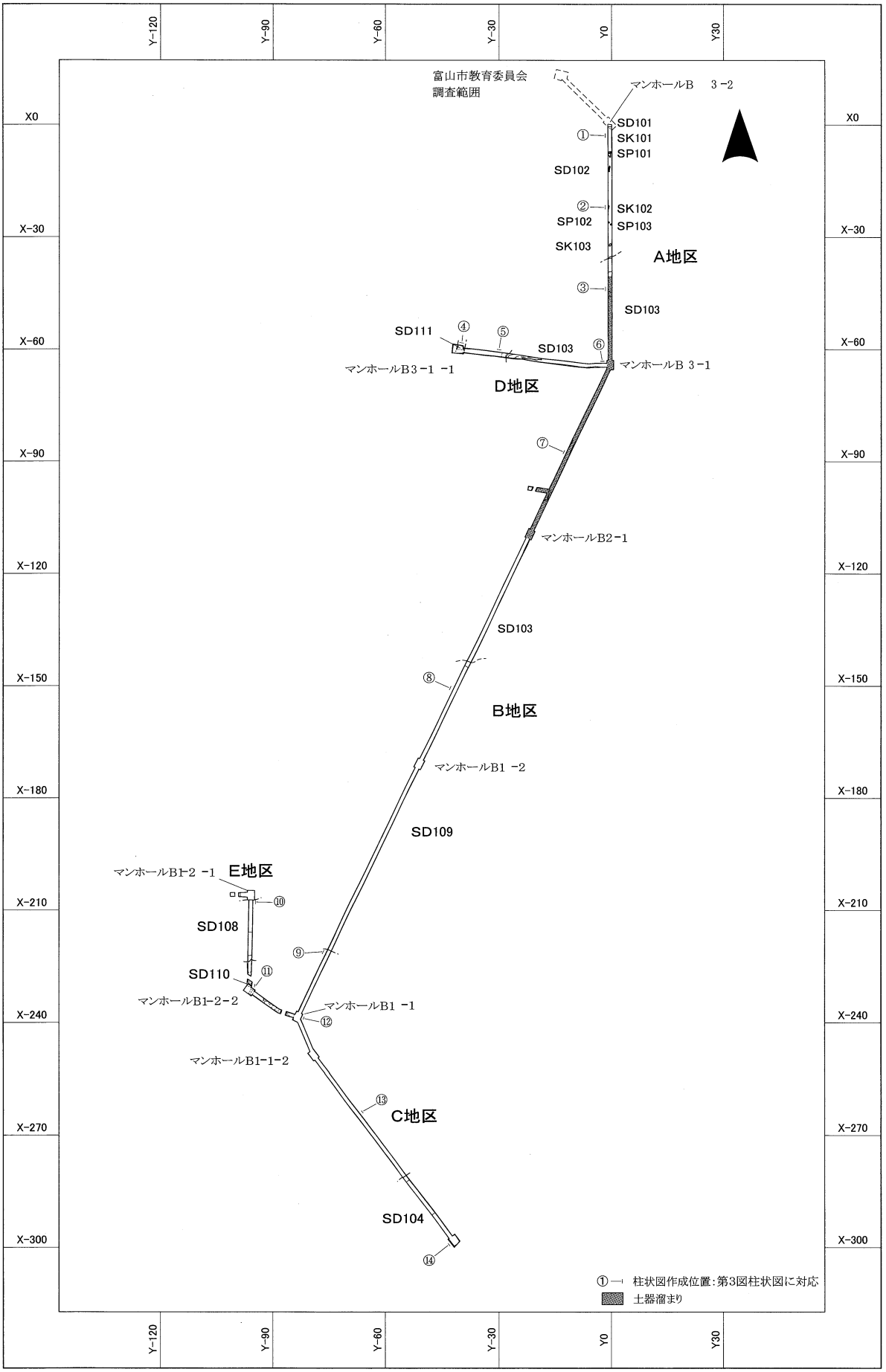
0　1：1,000　50m



第5図　南部Ⅰ遺跡北側調査区遺構図
1～3地区

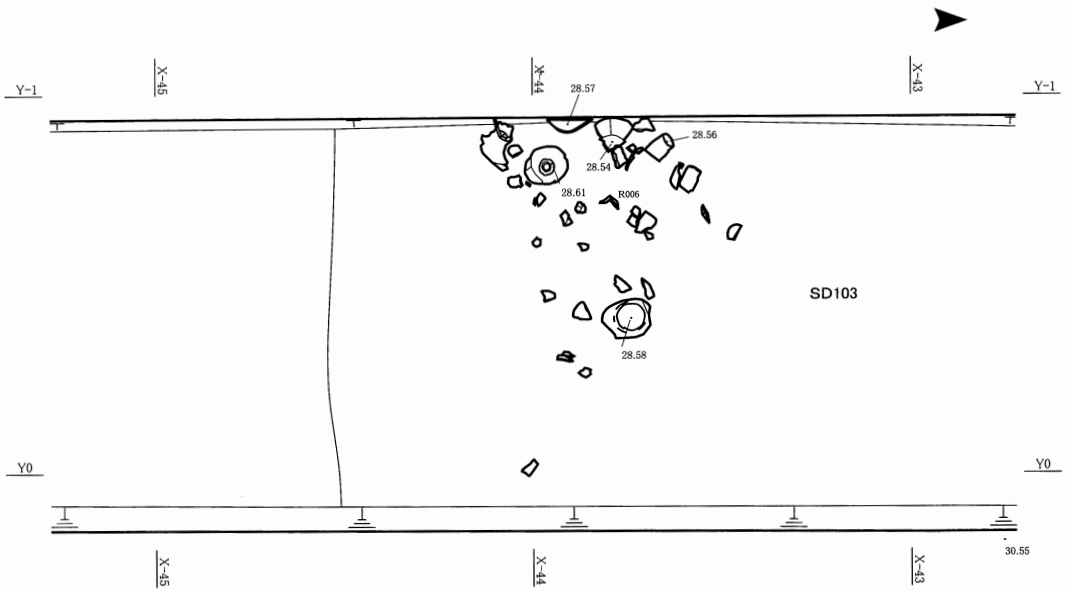


第6図　南部Ⅰ遺跡北側調査区遺構図
3～5地区

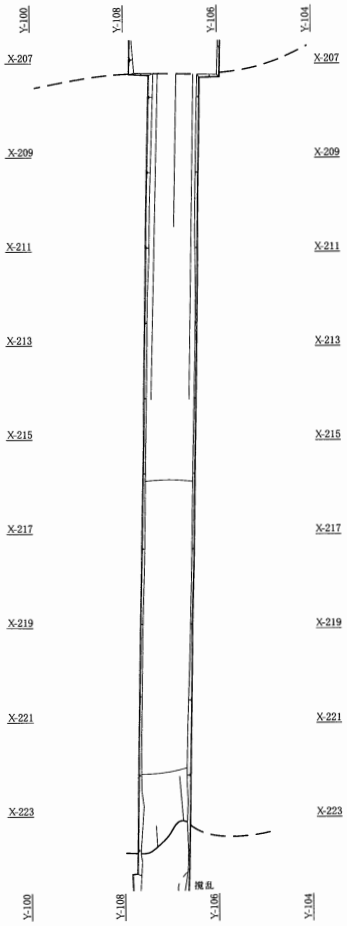


第7図　南部Ⅰ遺跡南側調査区全体図

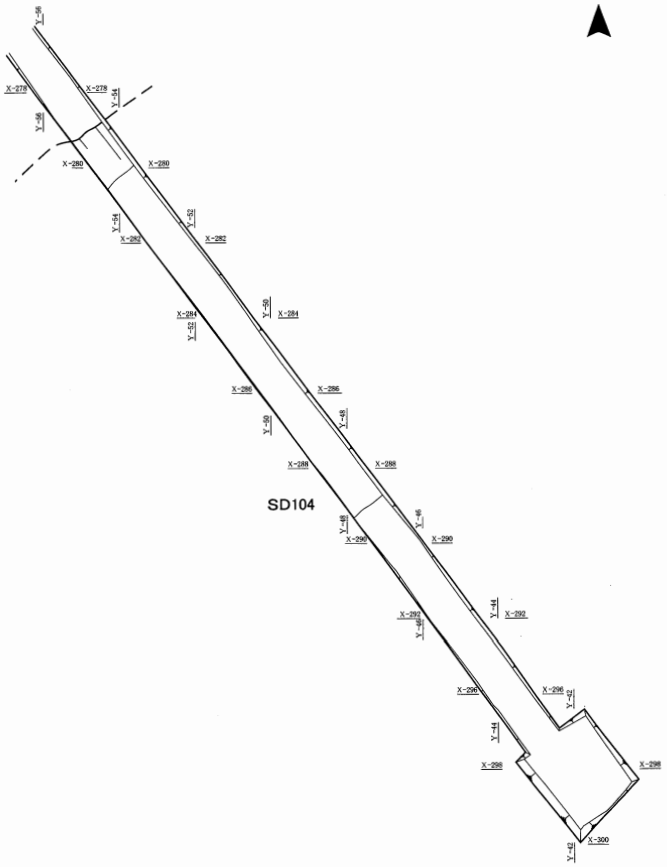
0　1：1,500　60m



B地区
SD103 遺物出土状況図（1：20）



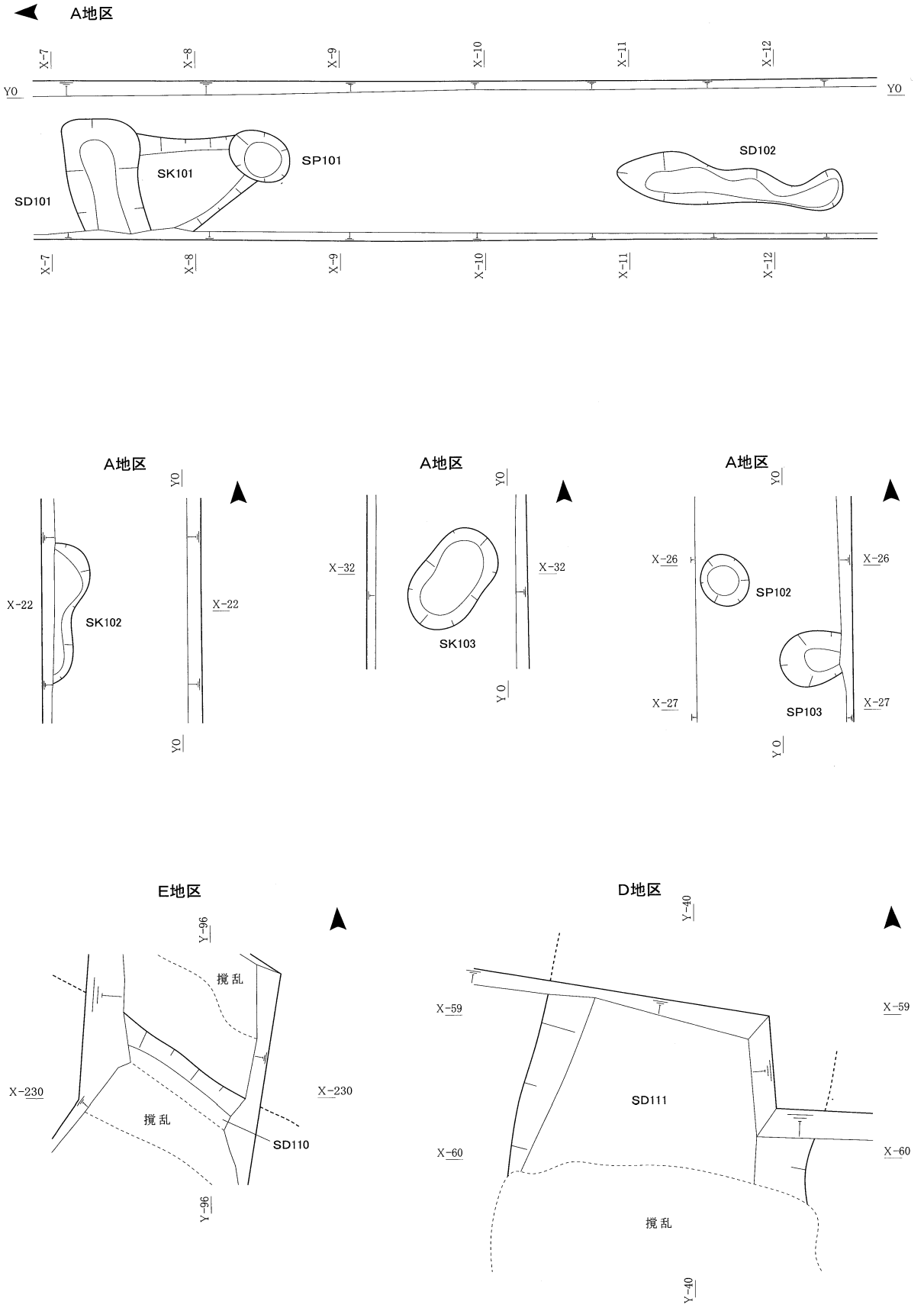
E区
自然流路SD108（1:80）



C地区
自然流路SD104（1:200）

1：20（SD103） 10m
1：80（SD108） 40m
1：200（SD104） 100m
0

第8図　南部Ⅰ遺跡南側調査区　遺物出土状況図・遺構図



第9図　南部Ⅰ遺跡南側調査区遺構図

（2）遺物

A. 土器・陶磁器・その他の遺物

a. 竪穴建物

SI10 1は、鍛冶町遺跡土器分類〔婦中町教委 2003〕の、甕 C1 に該当する。口唇部に横ハケを施す。以下、土器の分類は鍛冶町遺跡に準ずるものとする。

SI20 2～4は甕である。2は有段口縁甕 B11、3はくの字甕 C1 である。5は高坏の坏部Eである。6は器台の受部Bで、外面に赤彩を施す。屈曲部に2条の擬凹線を施す。月影Ⅰ式新段階に帰属する。

SI25 7は甕 B4 である。ヨコナデにより調整される。

SI42 8～13は甕である。8は甕 B4 で、肩部にはキザミを巡らせる。外面に煤が付着する。9は甕 B5 に類似するが、口縁は短い。9は器壁が厚く、屈曲部はつまみだしたように強調されている。10・11は受口状口縁甕 B10cに類似する。10は屈曲部が外に張り出し、口縁部が内傾し、口縁端部内面で面をもつ。11は、口縁部が直立し、端部を丸く収める。外面に煤が付着する。14～16は壺である。14・15は壺C3である。16は壺B3である。17～19・178は高杯である。17は坏部Dで、浅い坏部である。18はやや内湾する大きく開いた坏部で、口縁端部を上に若干つまみ出す。19は坏 B2 である。178は深めの坏部で、長い口縁が直線的に開く。20は口縁外縁に筒状の耳をもつ。器種は不明であるが、射水市布目沢北遺跡において、類似した装飾を2方向にもつ弥生時代後期の台付壺が出土している。月影Ⅱ式古段階に帰属する。

SI45 21は壺または甕の底部、22・23は鉢Fである。

SI46 24は甕C1である。外面に煤が付着する。

SI53 25～30は甕である。25は甕B3で、胴部が丸く張る。外面に煤が付着する。26～28は甕A5である。31・32は壺である。31は壺C7である。口縁部を2段に区画し、Y字あるいはK字状の線刻を上下に反転させながら繰り返し施す。口唇部は面取りをする。32は壺D3で、大型の広口壺である。33・34は鉢である。33は内湾口縁の大型鉢で、口唇部に面をとり擬凹線を施す。内面に煤が付着する。34は鉢A1で、内外とも精緻にミガキを施す。外面は縦ミガキを意識しているようである。35・36は器台脚部で、35は脚部B、36は脚部Eである。37～41は高坏である。37は坏部Dで、口唇部を面取りし、内外を赤彩する。38は脚部Dで、外反する短い脚に、8方向にごく小さい円形のスカシを施す。40は脚部C、坏部Dである。屈曲部に擬凹線文を施す。月影Ⅱ式新段階に帰属する。

SI57 42～48は甕である。42～44は有段口縁甕で、42は甕 A3、43は甕 B3、44は甕 A2 である。45・46はくの字甕 C1 である。45は口唇部の面に横ハケを施す。47は甕 B9 で、口縁部が内湾し、体部は丸く張る。49～54は壺である。49・50は壺 C2である。49は丸みをもった屈曲部から外反する口縁をもち、口縁端部も丸く収める。50は体部最大径より口縁が大きく、鉢 A2 とすべきか。51は擬凹線文を施す。52は細頸壺Hである。口縁部は外面にのみ弱い段をもち、肩部に突帯をめぐらせる。外面に赤彩を施す。55～57は鉢である。55は鉢Fで、内湾口縁で、口唇部に内傾する面をもつ。58～60は器台である。58は脚部Bである。59・60は受部Bである。59・60は坏部 A2 で、口縁部は直線的に外傾する。59は口唇部～内面に赤彩を施し、60は口縁部外面に擬凹線を施す。61は高杯で、坏部 B2 である。62は蓋Bである。63は壺Hで、脚付細頸壺であろう。月影Ⅱ式古段階に帰属する。

SI58 64は甕 A3 である。

SI76 65～120は甕である。くの字甕 C を主体とする。73～76は有段口縁甕で、73・74は A5、75は B5、76は B6 である。80・83・85～87・89・91・112は甕 C1 である。80・112は口唇部の

面に擬凹線を施す。67・68・77～79・82・84・88・95・96・102・108は甕C2aである。口縁は、やや内湾気味に調整されるものが多い。84・89は屈曲が比較的明瞭でC3bに近いが、口唇部は面取りをする。65・71・93・104・106は甕C2bである。71の口縁は非常に強く外傾する。66・69・72・81・90・92・97～100・109～111はC3aである。72・111は頸部から強く外反する口縁をもち、肩は張らず、最大器径が口縁部外径となる。66・101は甕C3bである。66は頸部が明瞭に屈曲し、口縁は直線的に外傾し、口唇部でやや薄く成形される。体部はヘラケズリで調整される。101は頸部で屈曲してやや外反気味に外傾する口縁で、端部に向かって薄く成形する。103・105・107は甕C3cである。70・94はC3dで、緩く屈曲する頸部に外傾する口縁部で、口唇部はやや受口気味に調整する。

121～134は壺である。121～128・130は有段口縁である。122・125は壺D1である。125は明瞭な段をもち、大きく外反する口縁部で、端部を面取りする。二重口縁壺かもしれない。121は壺D2で、屈曲部に凹線文を施し、口縁は丸く収める。123は壺D3である。127は壺E2である。有段口縁あるいは隆帯の痕跡のように、頸部をわずかにふくらませる。129は壺Jで、大型の甕壺である。130は広口長頸壺か。131は壺Hである。132は丸底壺である。135～138は鉢である。135は鉢A1、137はA2、138はE1である。139はミニュチュア土器で、手づくねの鉢型土器である。140～146は器台である。140～142は小型器台で、140は受部E脚部F、141は受部E脚部D、142は受部E、146は脚部Fである。144・146は脚部内面を含む内外に赤彩を施す。147～162は高杯である。147～149は坏部A2である。150は屈曲部から内湾し、内外を赤彩する。151は屈曲部にキザミを施す。154～156は坏部B3で、154・155は内外に赤彩を施す。159・160は大きく外反し開く脚部。161は脚部Fである。162は脚部Cで、端部は面を取り、外面を赤彩する。163～167は蓋である。163～165は蓋Bである。163は口縁は内湾し、内外全面に赤彩する。164は口径5.9㎝を測る小さなもので、外面に煤が付着する。166は盤を伏せたような扁平な形状で、やや鋭角に屈曲した口縁部分に擬凹線文を施し、外面を赤彩する。167は蓋Cである。外面に赤彩を施す。168・169は坩型土器である。口縁が大きく開く小型広口壺ないし鉢状の器形で、169は丁寧なミガキ調整が残る。170は台付鉢の脚台部である。脚内部以外を赤彩する。白江式に帰属する。

SI82 171・172は甕である。171は甕C1である。172は甕B11か。外面に煤が付着する。173～175は壺である。173は壺C2で、174は壺C3である。175は細頸壺Hで、外面に赤彩が施される。月影Ⅱ式新段階に帰属する。

b. ピット

SP33 176は甕C1である。

SP47 177は壺の口縁か。大きく開いた口縁の口唇部に面を取り、面の上下にキザミを施す。

c. 土坑

SK43 179～187は甕である。179・180は甕A5である。179は明瞭だが丸みをもって屈曲しており、受口口縁に近い形態である。181・182は甕B5で、屈曲部の直上に強いナデによる凹線文状の凹凸をもつ。188～194は壺である。188・189は壺C2で、口縁部外面に擬凹線を施す。190は細頸壺Hで、内面には段をもたない。191は壺B5bか。192は壺B5aで、外面に煤が付着する。195～198は高坏である。195・196は杯部B2で、195は屈曲部に3条の擬凹線をめぐらせ、内面に赤彩を施す。199は蓋Bである。外面を赤彩する。月影Ⅱ式古段階に帰属する。

SK50 200は甕の底部である。201は無頸壺で、外面はミガキ・赤彩を施す。202は高坏または器台の脚部である。

SK58 64・203・204は甕である。64は甕A5、203は甕A4である。206は壺C1である。207は脚

部Cである。月影Ⅱ式新段階に帰属する。

SK73 207～210は高杯である。207・208は盤状高杯、210は擬凹線文をもつ有段高杯である。月影Ⅰ式新段階に帰属する。

d. 自然流路・溝

SD72 213は受口口縁の甕である。口縁は外反し、端部を丸くおさめる。胎土分析の結果、伊勢湾岸地域の粘土を使用したことが判明している。

SD101 216は壺A2である。体部は丸く張り、全体に薄く成形されている。調整はハケメによる。白江式に帰属する。

SD102 214・215は甕C2aである。白江式に帰属する。

SD103

Ⅲ層（下層） 217～220は甕である。217～219はくの字甕で、217は甕C2a、218は甕C2b、219は甕C3aである。221～227は壺である。221は壺D2である。口縁部内面にミガキを施し、外面には煤が付着する。222は壺C5、223は壺D3である。224は外反する口縁の内面に擬凹線を施す。外面には煤が付着する。225は壺Jである。やや外傾・内湾傾向の口縁をもつ。体部はやや扁平な球胴型である。228～230は器台である。228は装飾器台で、受部は深く、大きく外反し、端部で内湾気味に丸く収める。脚部は脚F。受部に12方向、脚部に4方向の円形スカシを施す。229は小型器台で、受部E脚部Fである。230も脚部Fで、3方向の円形スカシを施す。231～233は高杯である。231は坏部B3で、深い坏部である。外面に赤彩を施す。232・233は脚Fである。

Ⅱ層 234・235は100～114m地点より出土した。234は器台の脚部、235は高杯で、脚部内面まで赤彩される。いずれも器台脚部Fの形態である。

236～269はⅡ層108～114m地点土器溜りから出土した土器である。236～252は甕である。236は有段口縁甕B5で、有段口縁甕はこの1点のみである。239は甕C2b、237・238は甕C3a、240・241は甕C3である。242は甕C3dである。243は直立する頸部を口唇部付近でごく短く外反させ面を取るもので、244・245は243と同様の口縁となるか。246～248・251は大型甕で、246は甕C2c、247・248は甕B8である。いずれも煤が付着する。252は底部に焼成前穿孔を施す。253～261は壺である。253は壺C4、254は壺E2である。255は壺D2である。257は壺Hで、丁寧にミガキを施した精製品である。258は壺B2で、口唇部の面に擬凹線を施し、頸部には横ハケを施す。259は小型丸底壺である。内外とも赤彩される。262は鉢Fである。263～265は赤彩の器台で、263は受部D、264・265は受部Aである。264は装飾器台で、受部に円形のスカシを8方向に施す。266～269は高杯の脚部である。いずれもハの字に開き、裾部が外反する形のようである。267は台付鉢や台付甕の台部の可能性がある。

270～311は、土器溜り以外からのⅡ層出土遺物である。270～284は甕である。270・273・280は甕C1である。270は口唇部の面に凹みをもつ。278は甕C2aである。272は甕C2cである。272は口縁内面に2条の擬凹線を施す。271・274・276・277・279は甕C3aである。281は甕C3c、275は甕C3dである。282～284は大型甕で、282・283は有段口縁甕B6である。284は甕C3cである。いずれも外面に煤が付着する。285～295は壺である。285～287は壺D1、288は壺C4、289～291は壺E2、292は壺F、295は壺Hである。296～299は鉢である。296～298は鉢F、299は鉢Dである。299は外面に煤が付着する。300～305は器台である。300・301は装飾器台で、300は受部に方形のスカシ、301は受部に円形のスカシを18方向に施す。302は受部B、303・305は受部Eである。306～308は高杯である。306は直線的な坏底部から屈曲して立ち上がる埦型の坏

部で、口縁部は内湾し、屈曲部に擬凹線を施す。309は器台または高坏の脚で、脚部Fである。310・311は台付鉢Bや台付甕の台部である。

Ⅰ層（上層） 312～345は、Ⅰ層68～72m地点土器溜りから出土した。312～338は甕である。口唇部に面をもつくの字口縁甕C1・C2が主体である。313・316・320・322～324・326～328は甕C1で、323は口唇部に横ハケを施す。312・319・321・329・331は甕C2aである。312は口唇部に擬凹線を施す。314は甕C2b、315・317・325・330は甕C2aである。318・332・333は、有段口縁甕B5で、形骸化が進む。337は小型のS字状口縁台付甕である。古墳時代初頭の東海地域に特徴的にみられる器種で、小ぶりながら形態、製作技法ともオリジナルに忠実に作られている。赤塚分類〔赤塚1996〕のS字甕B類に属する。338は、台付甕を模倣したものと推察される。手捏ねのようであるが、伏せた状態で安定し、上面は剥離している。338～341は壺で、338・339は壺D2である。340は壺Fである。341～344は高坏である。342は坏部A、342・343は坏部Dで、内外面に赤彩を施す。343の脚部は外反しながらハの字に開き、円形スカシを3方向に施す。345は蓋Aである。

346～353は土器溜り以外のⅠ層出土土器である。346～348はくの字甕C2a、349は壺D2、350は装飾器台で、受部に円形のスカシを16方向に施す。351は器台受部Aである。

SD103出土土器は、出土する層位や位置に違いがあるが、白江式に帰属する。

SD108 354は甕の底部である。

包含層

355～367は甕である。355～360は有段口縁甕Bである。361～364はくの字口縁甕Cである。366・367は大型甕A4である。いずれも有段口縁に擬凹線を施す。367は大きさの割に薄手で、屈曲部から直線的に開く口縁全面に、擬凹線を施す。368・369は有段口縁壺Cである。368は煤が付着、369は外面に縦ミガキを施し、内面の段は退化している。370は複合口縁壺の口縁端部である。付加状の口唇部に羽状の連続刺突を施す。器形・施文とも、東海地域の装飾壺に類似する要素をもつ。372は有段口縁の鉢、373はミニチュアの鉢である。374は器台、375・376は高杯と考える。377～379は高杯の脚、380は器台または高杯の脚である。

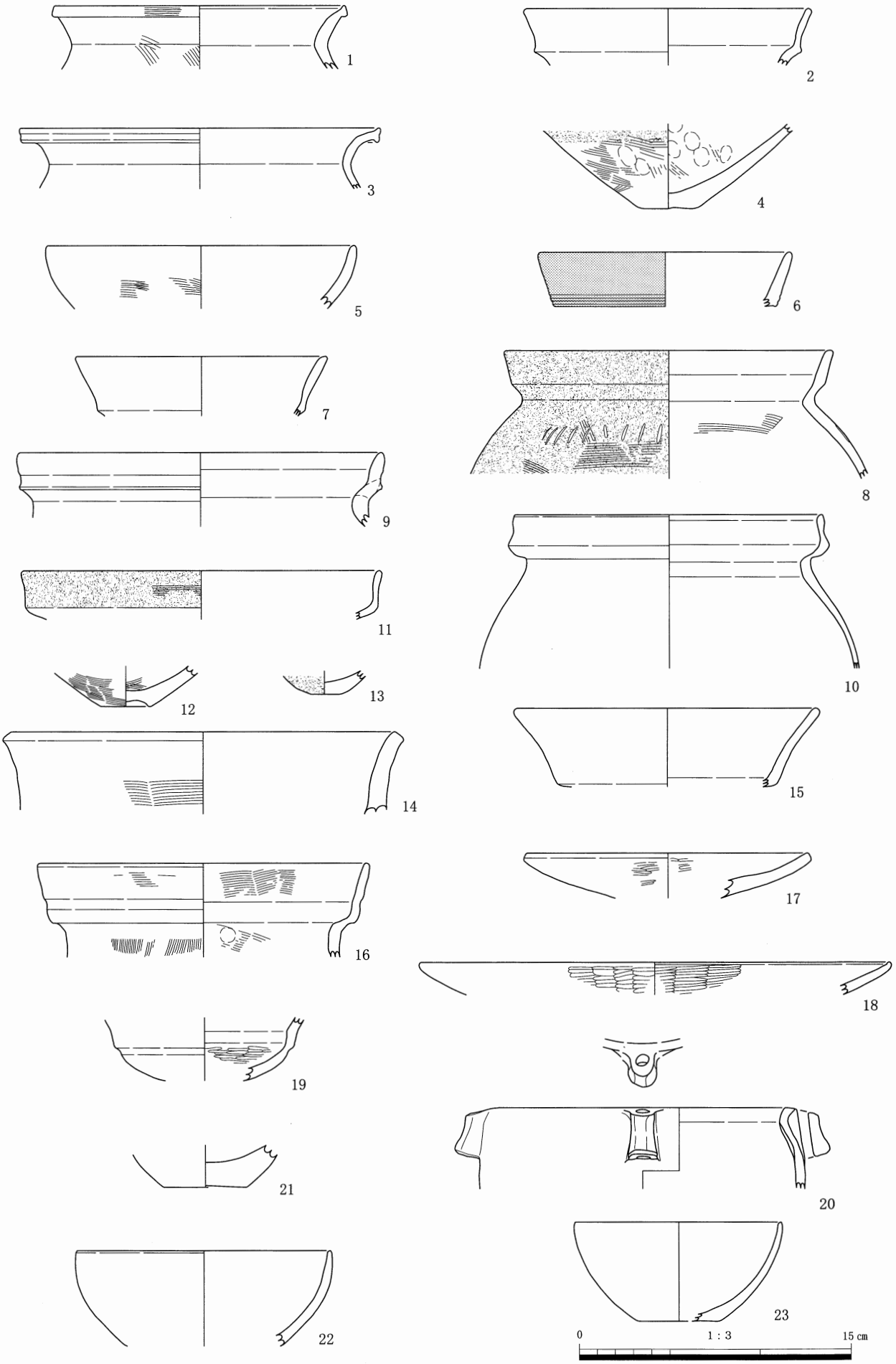
382は凹石である。緑色凝灰岩製で、秤量867.5gを測る。凹石としては大型である。側面に敲打痕が確認できる。

古墳時代以降の遺物

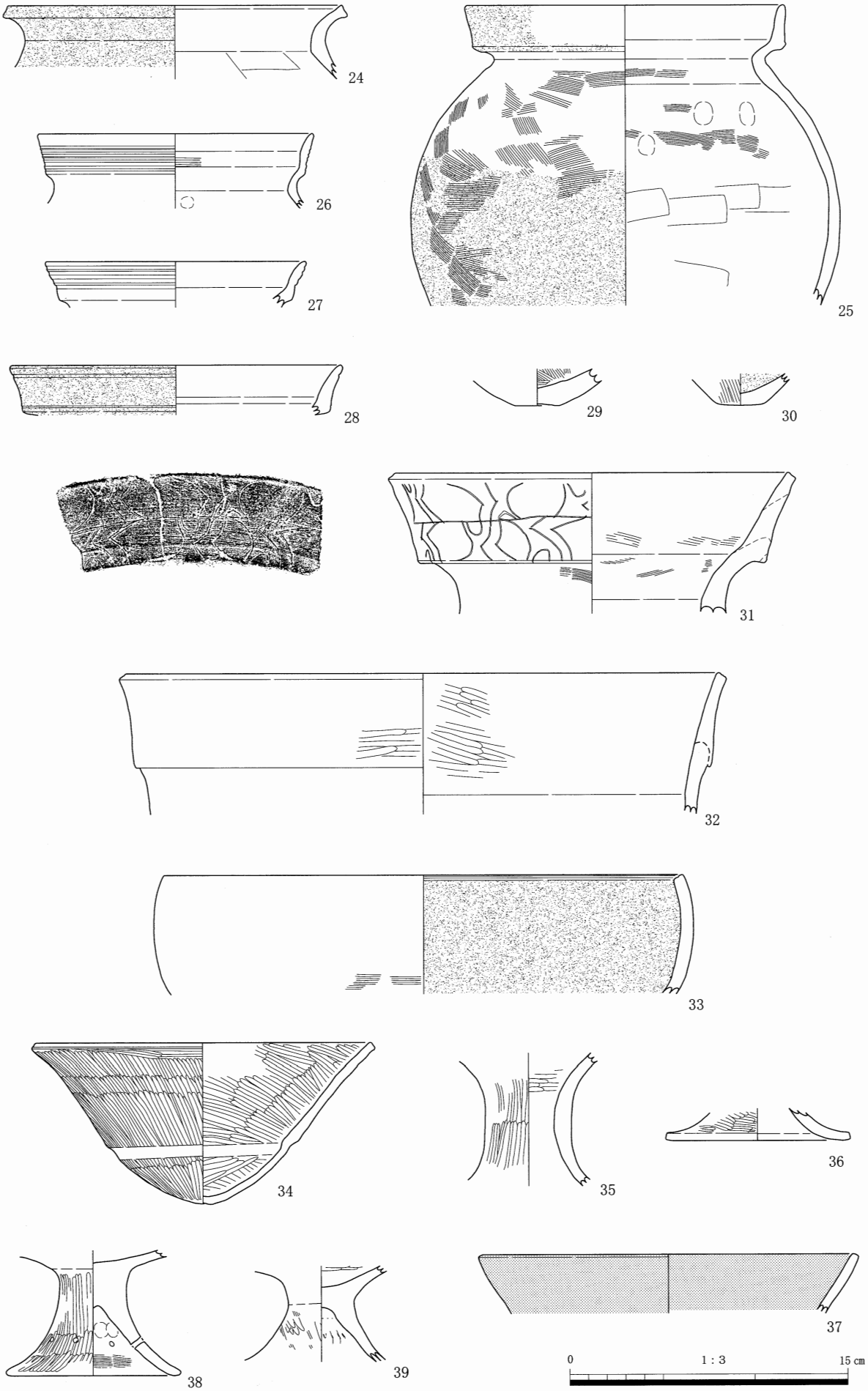
382～386は土師器である。382は内黒埦である。内面にミガキ、黒色処理を施し、高台内面に糸切り痕を残す。383～385は甕である。384・385は長胴甕で、外傾する口縁の端部に面取りをする。8世紀代に帰属する。385は強く外反する折り返し口縁をもつ。386は鍋である。9世紀代に帰属する。

387～393は須恵器である。387・388は蓋である。387は口縁断面が三角形を呈する。388は端部を折り返す。390は坏Bである。8世紀後半～9世紀に帰属する。393は瓶の可能性がある。

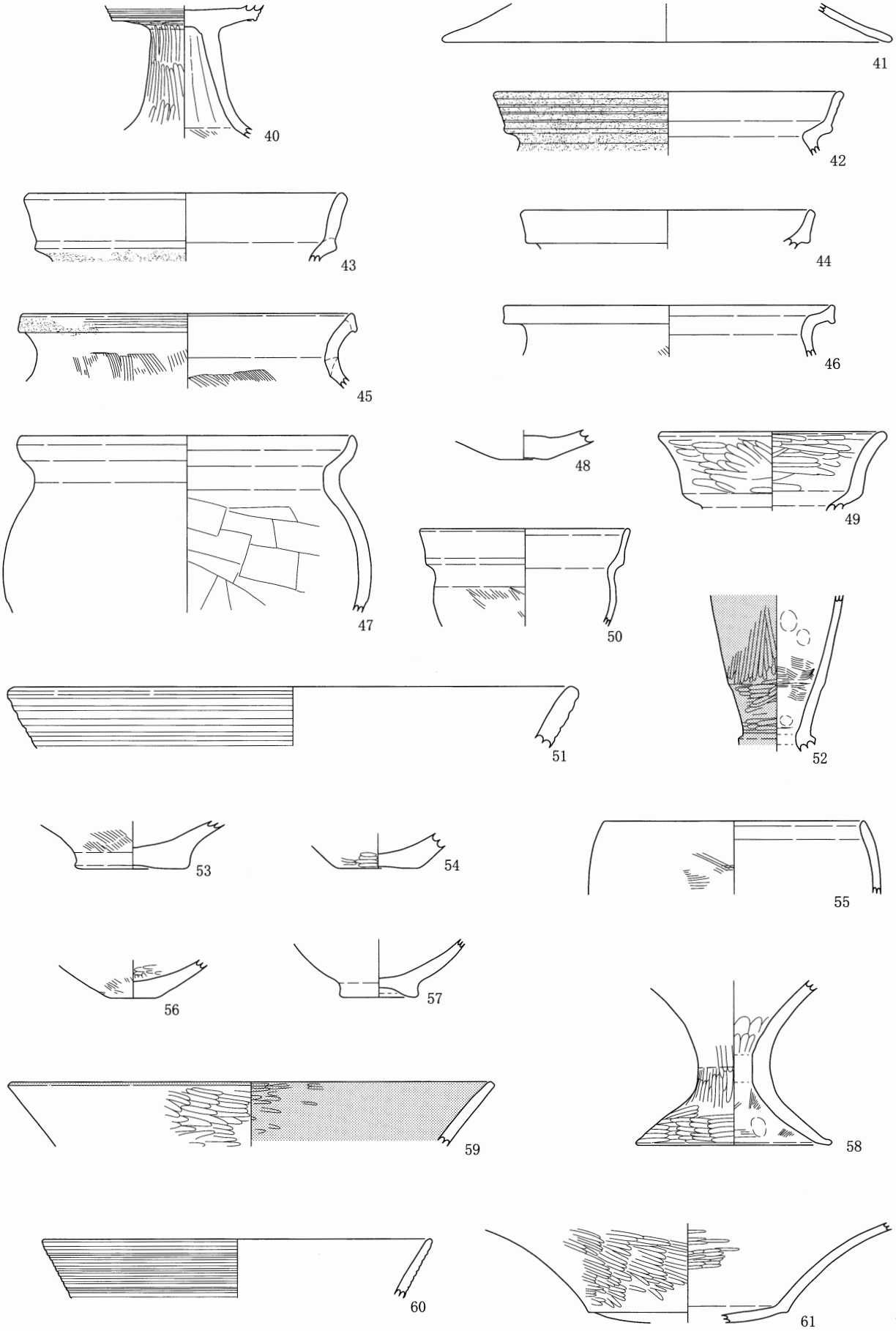
394は黄瀬戸の埦、395は肥前陶器、396は肥前の擂鉢である。397は伊万里染付埦、398は伊万里の皿である。（橋）



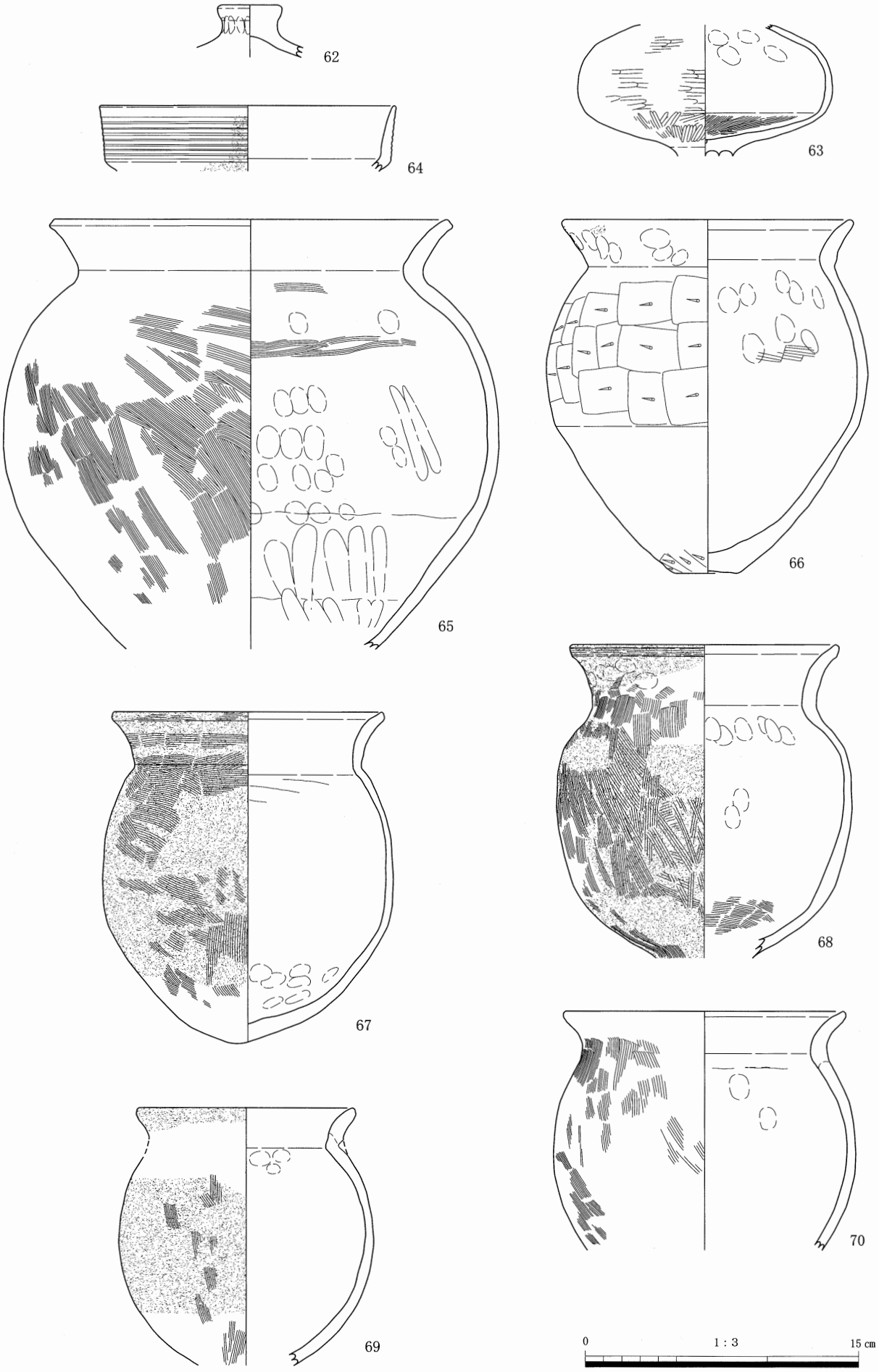
第 10 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
SI10(1)　SI20(2 ～ 6)　SI25(7)　SI42（8 ～ 20）　SI45（21 ～ 23）



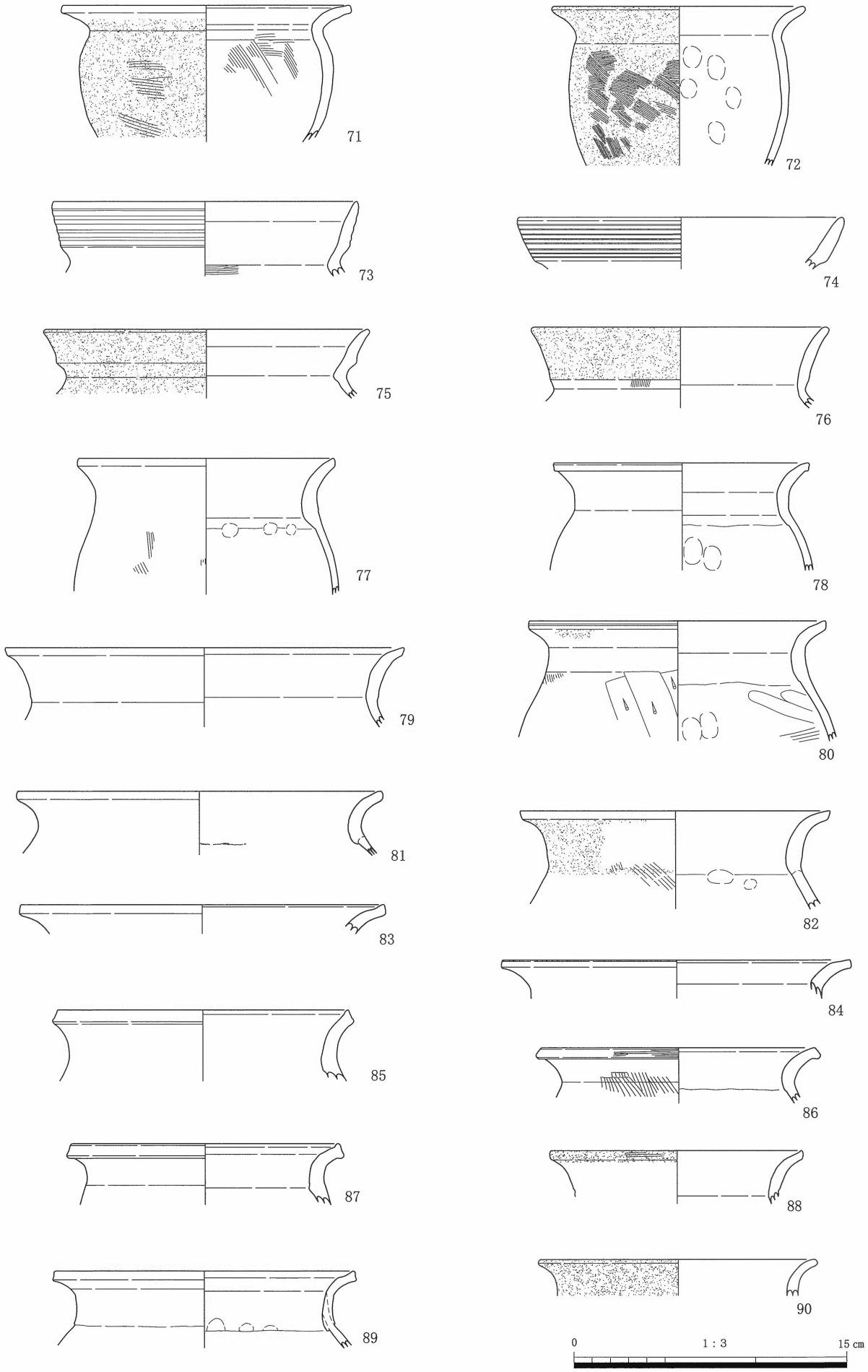
第 11 図　南部 I 遺跡遺物実測図
SI46(24)　SI53(25 ～ 39)



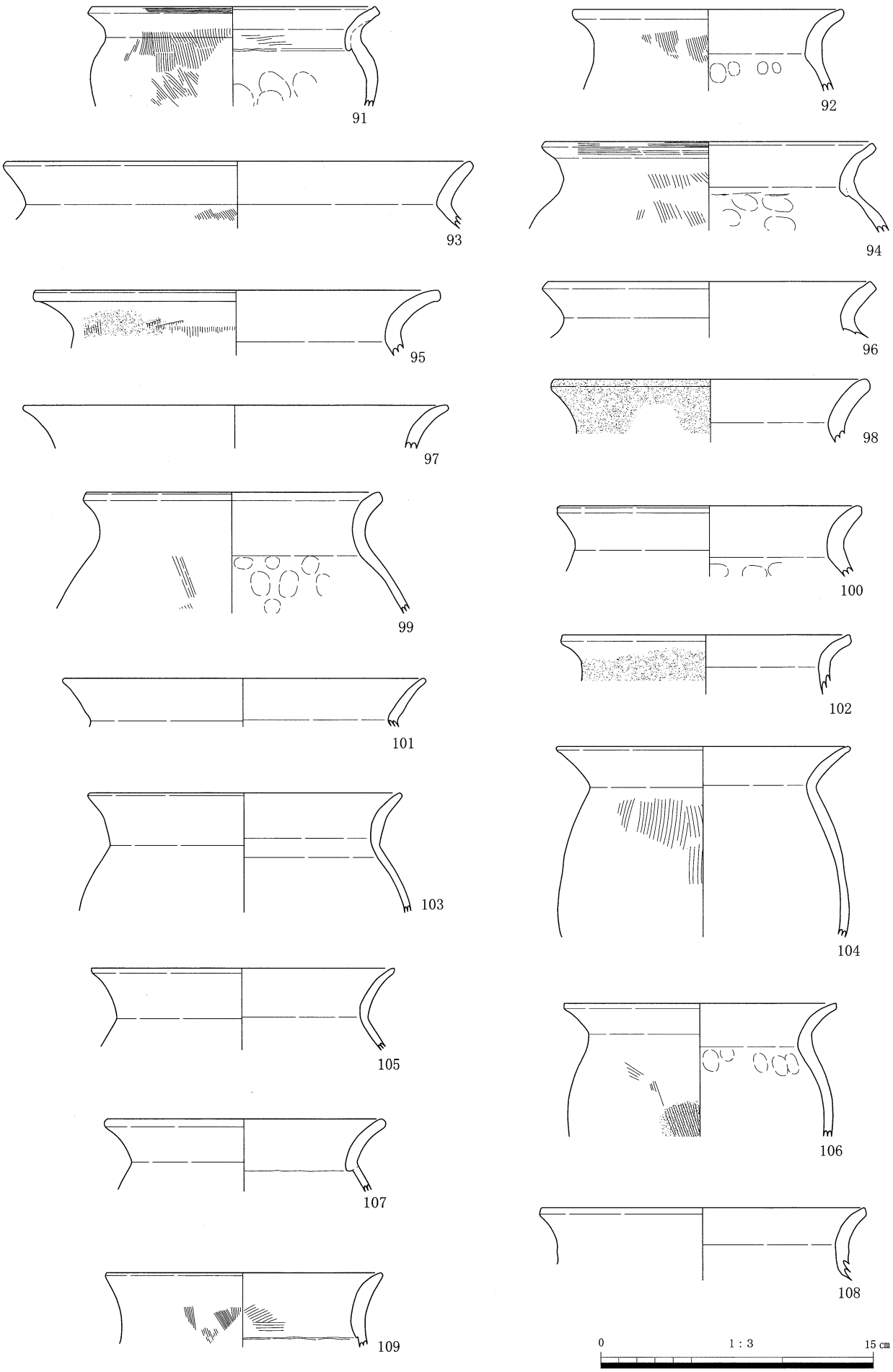
第 12 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
SI53(40・41)　SI57(42 ～ 61)



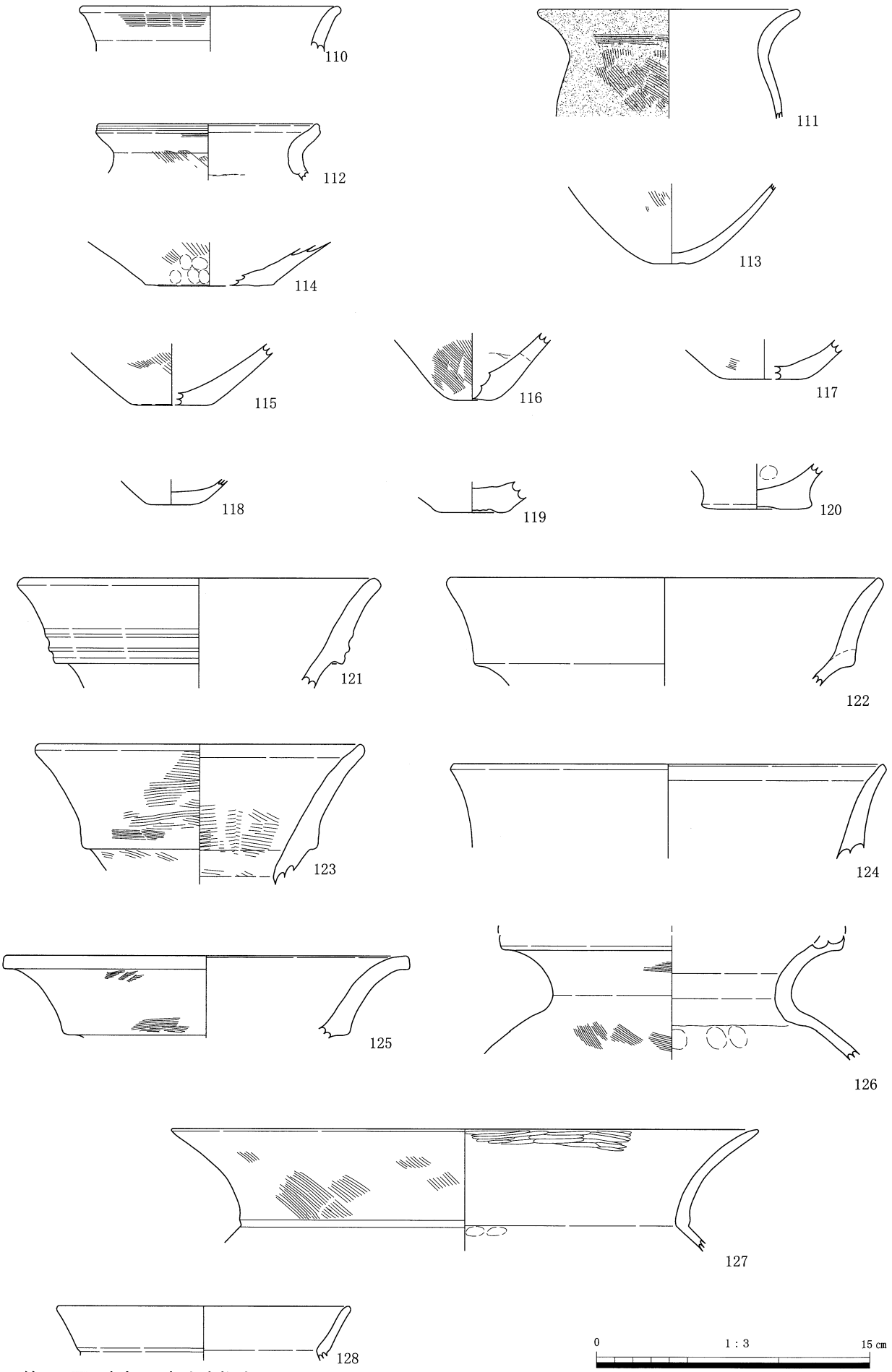
第 13 図　南部 I 遺跡遺物実測図
SI57(62・63)　SI58(64)　SI76(65 ～ 70)



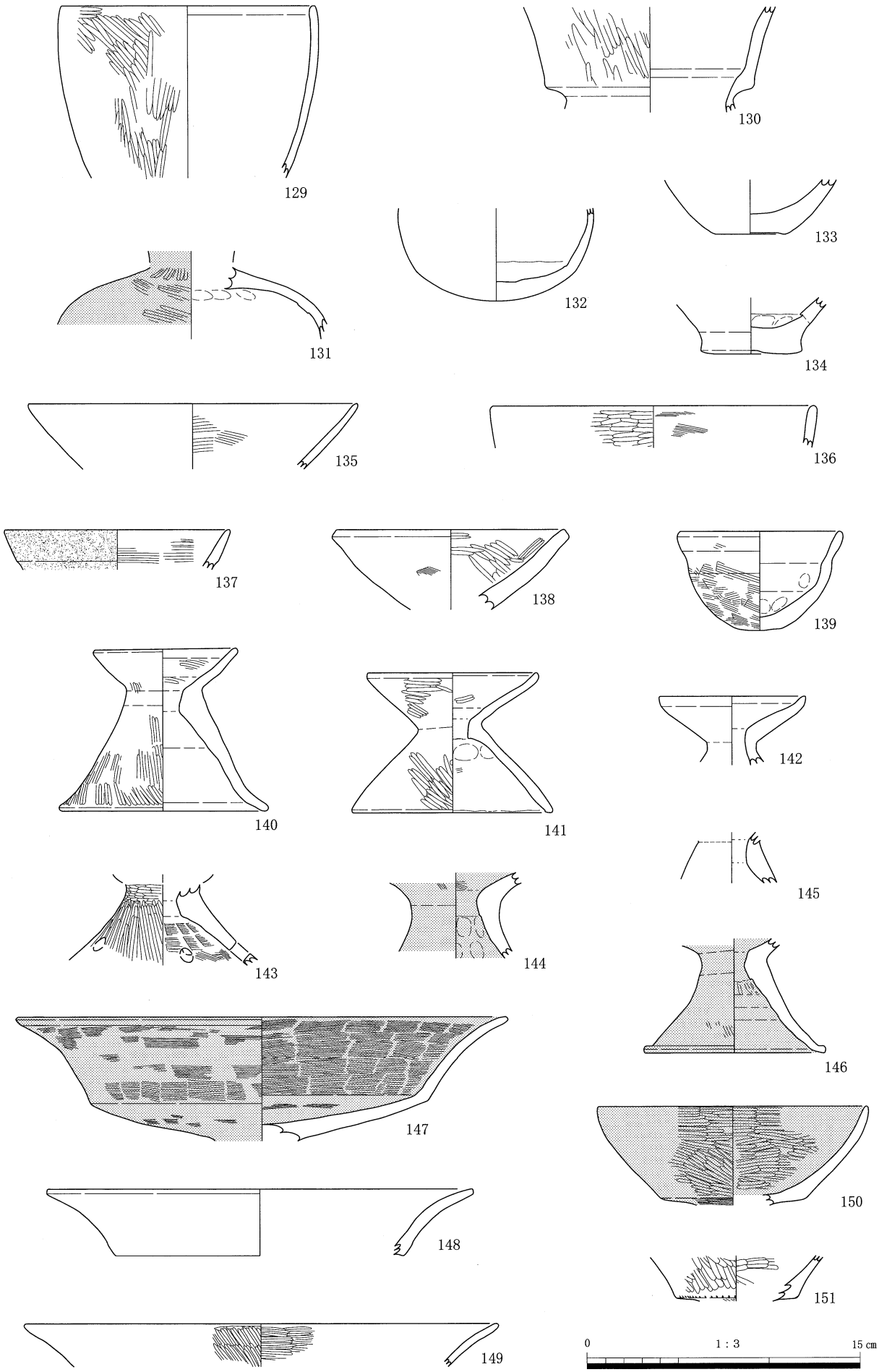
第 14 図　南部 I 遺跡遺物実測図
SI76



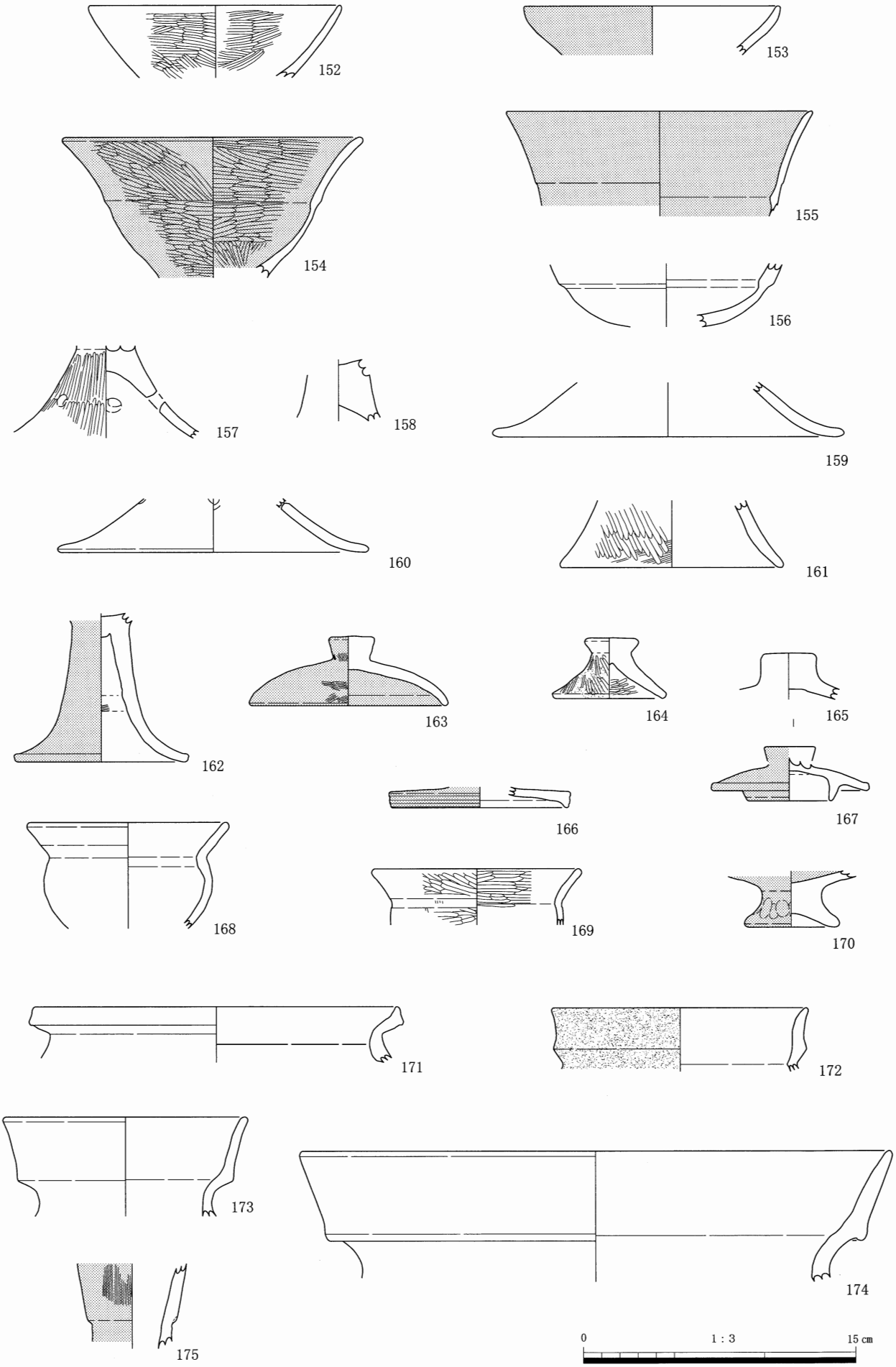
第 15 図　南部 I 遺跡遺物実測図
SI76



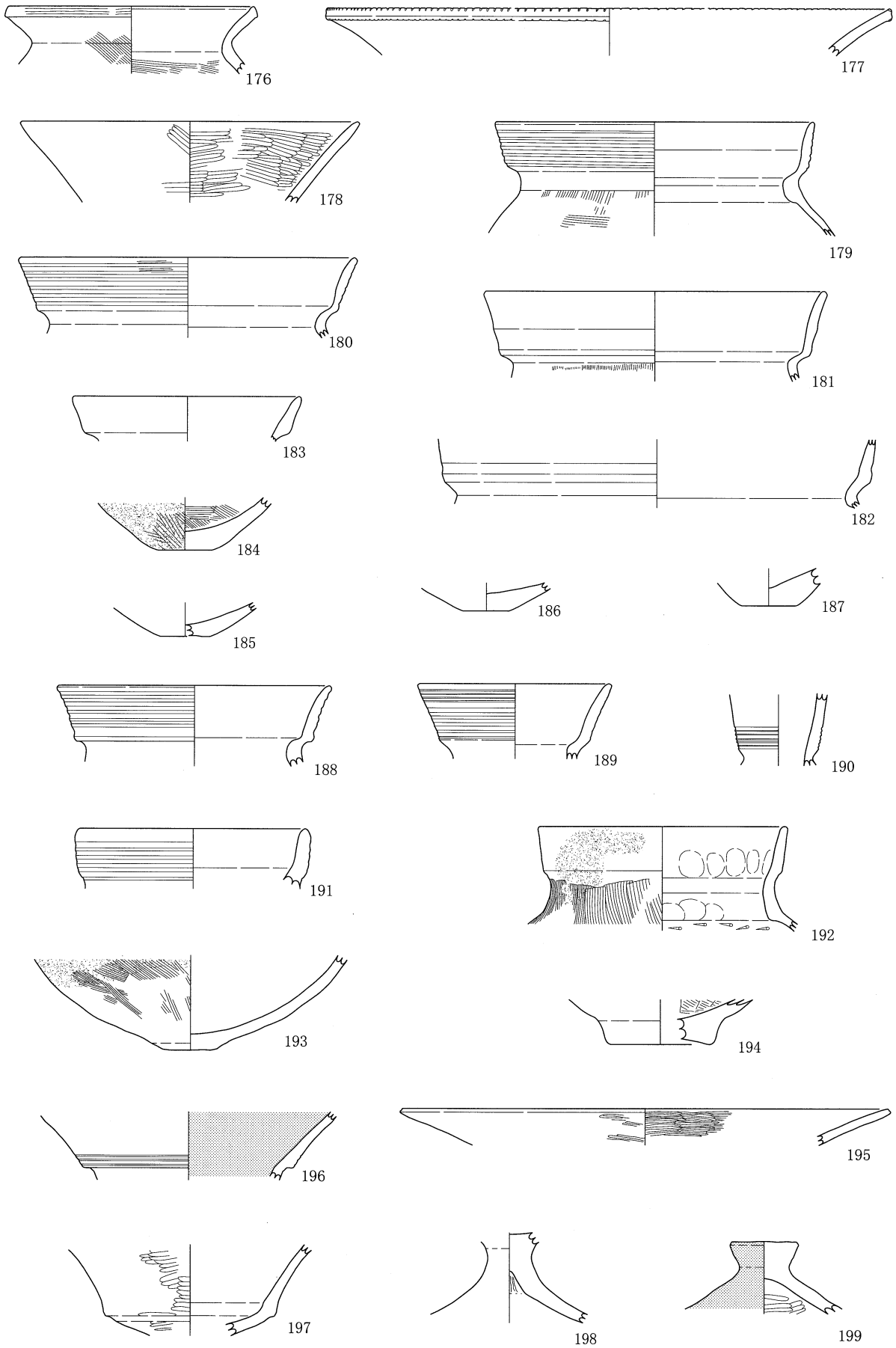
第 16 図　南部 I 遺跡遺物実測図
SI76



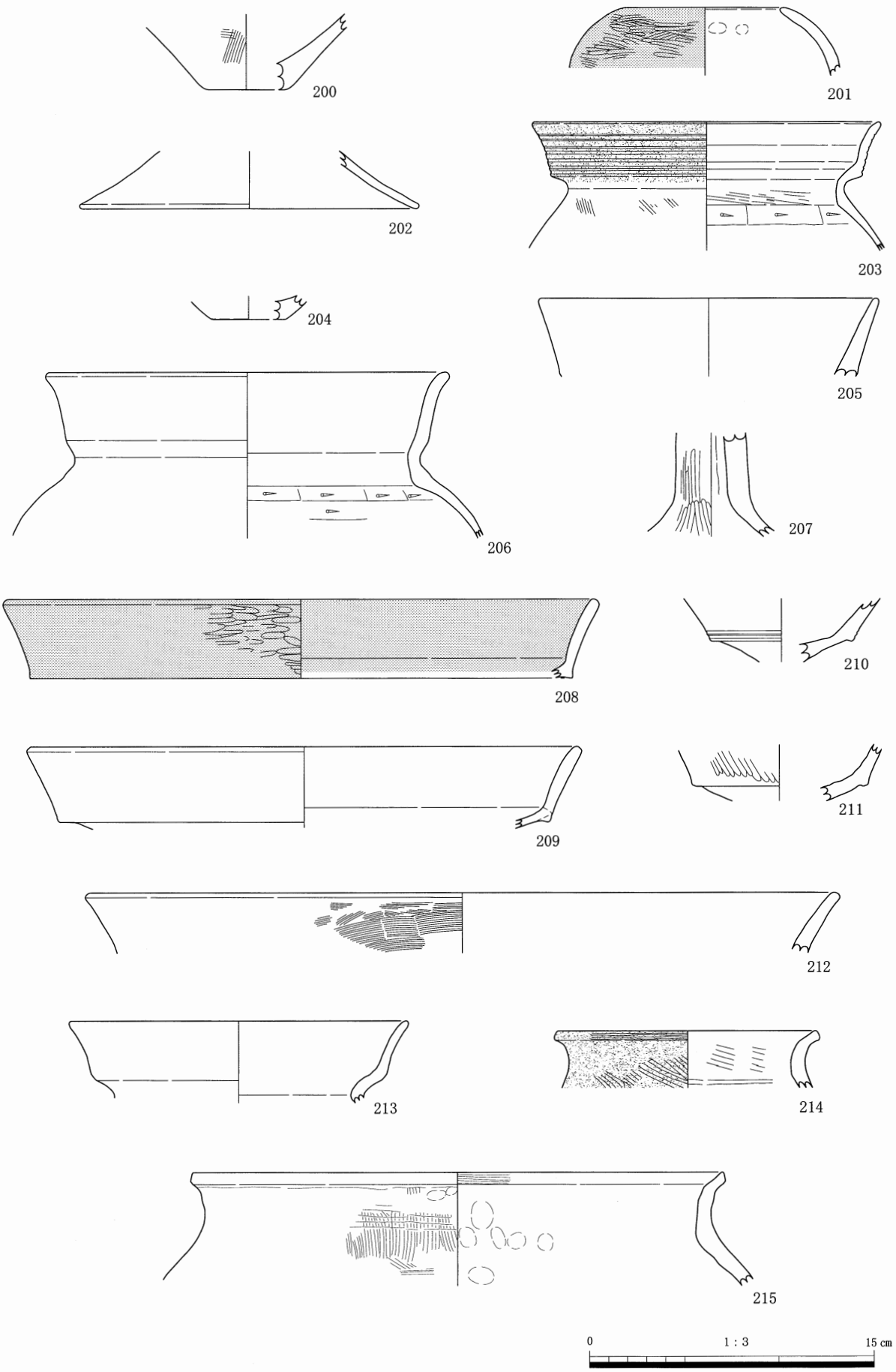
第 17 図　南部 I 遺跡遺物実測図
SI76



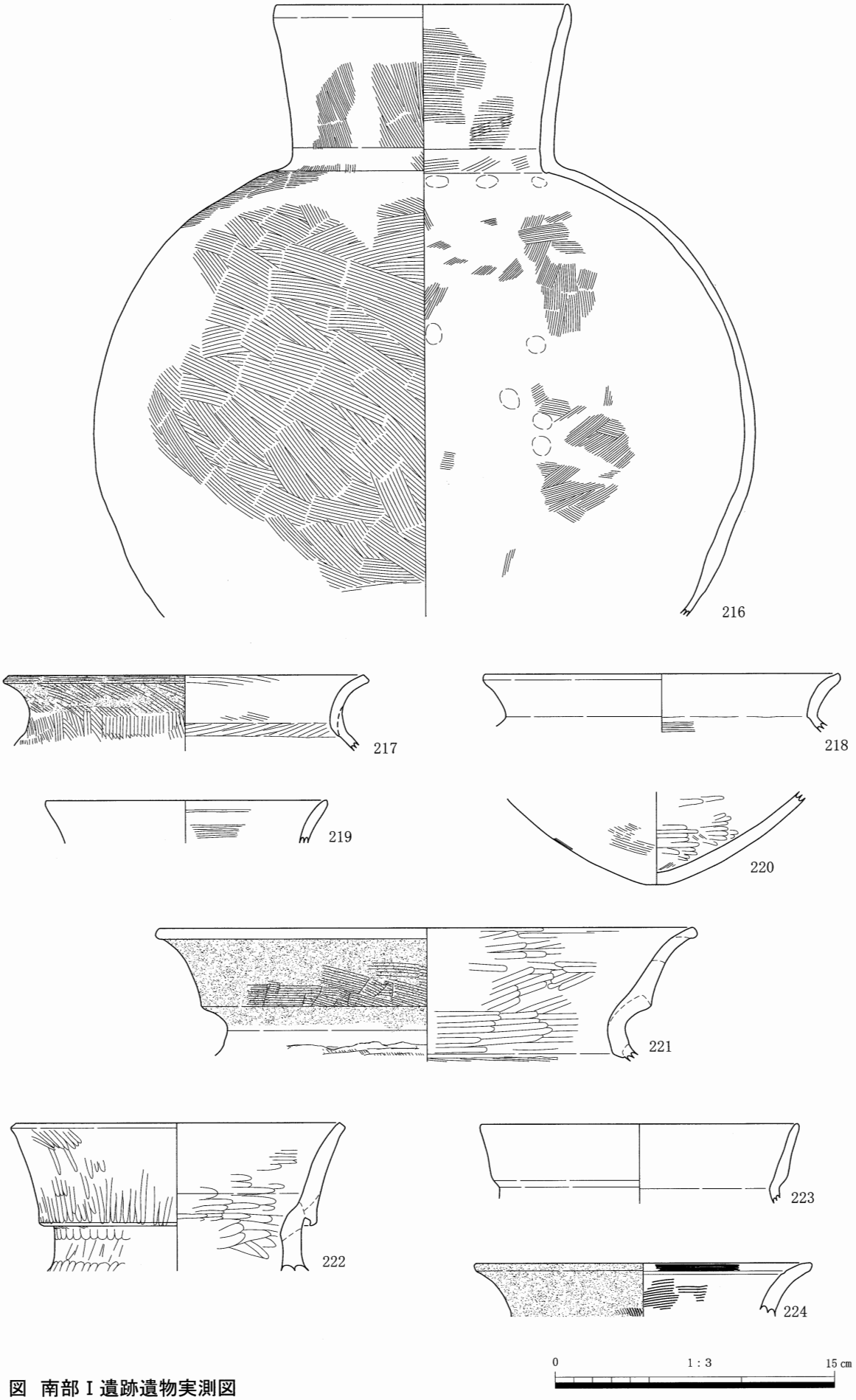
第 18 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
SI76(152 ～ 170)　SI82(171 ～ 174)



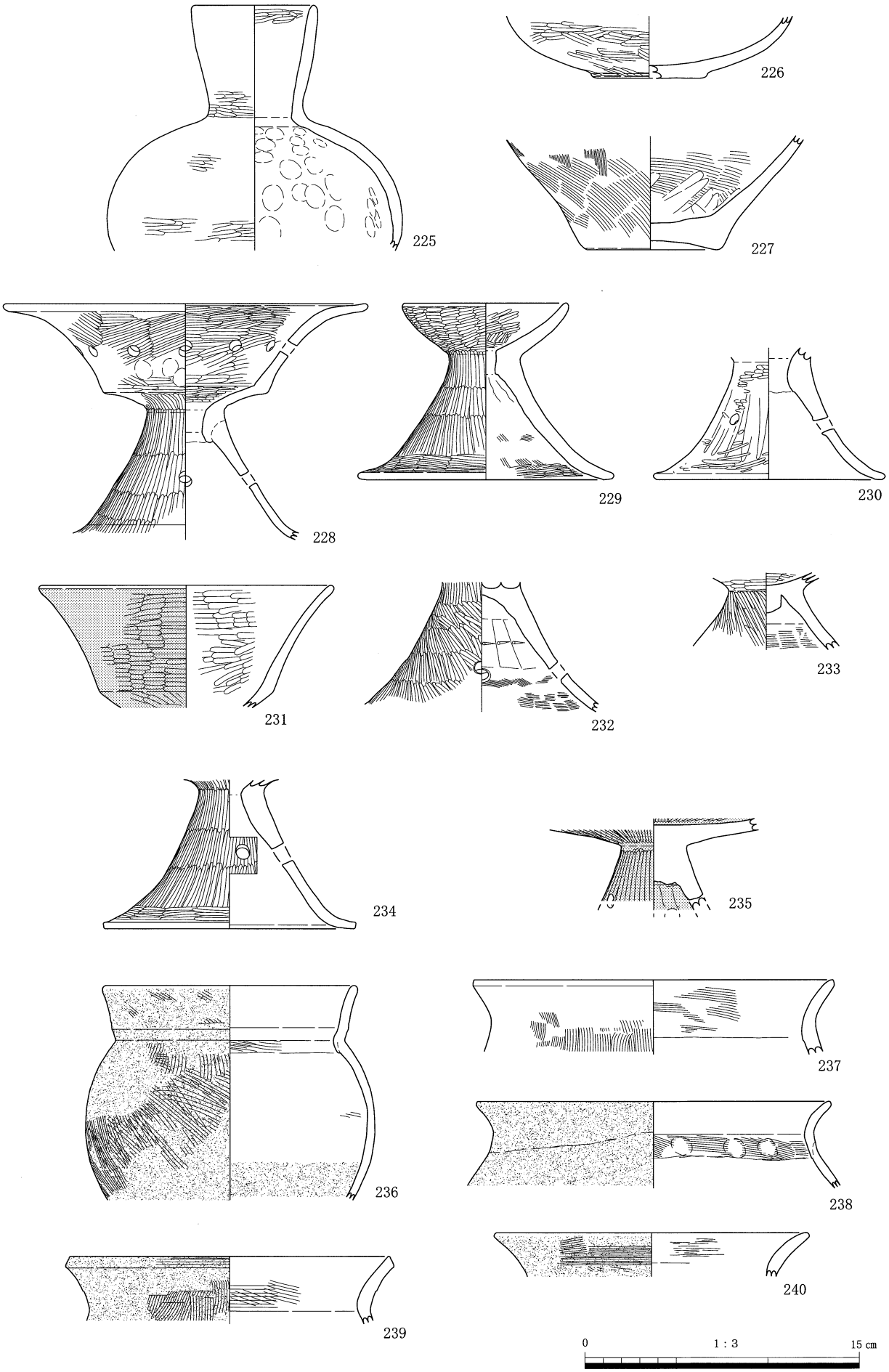
第 19 図　南部 I 遺跡遺物実測図
SP33(176)　SP47(177)　SI42(178)　SK43(179 ～ 199)



第 20 図　南部 I 遺跡遺物実測図
SK50(200 ～ 202)　SK58(203 ～ 207)　SK73(208 ～ 210)　SK78(211・212)　SD72(213)
SD102(214・215)

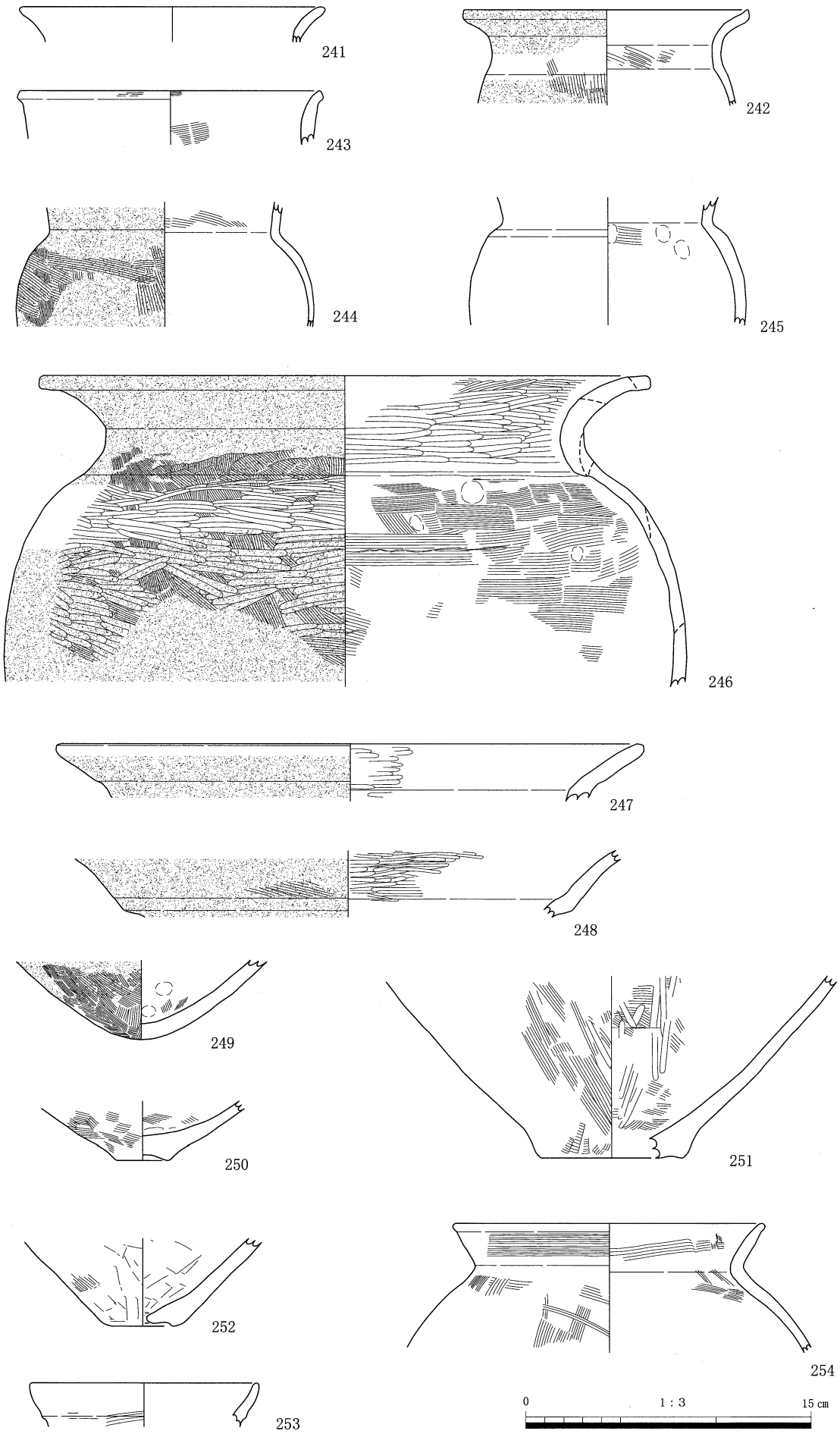


第 21 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
SD101(216)　SD103Ⅲ(下)　層出土(217 ～ 224)

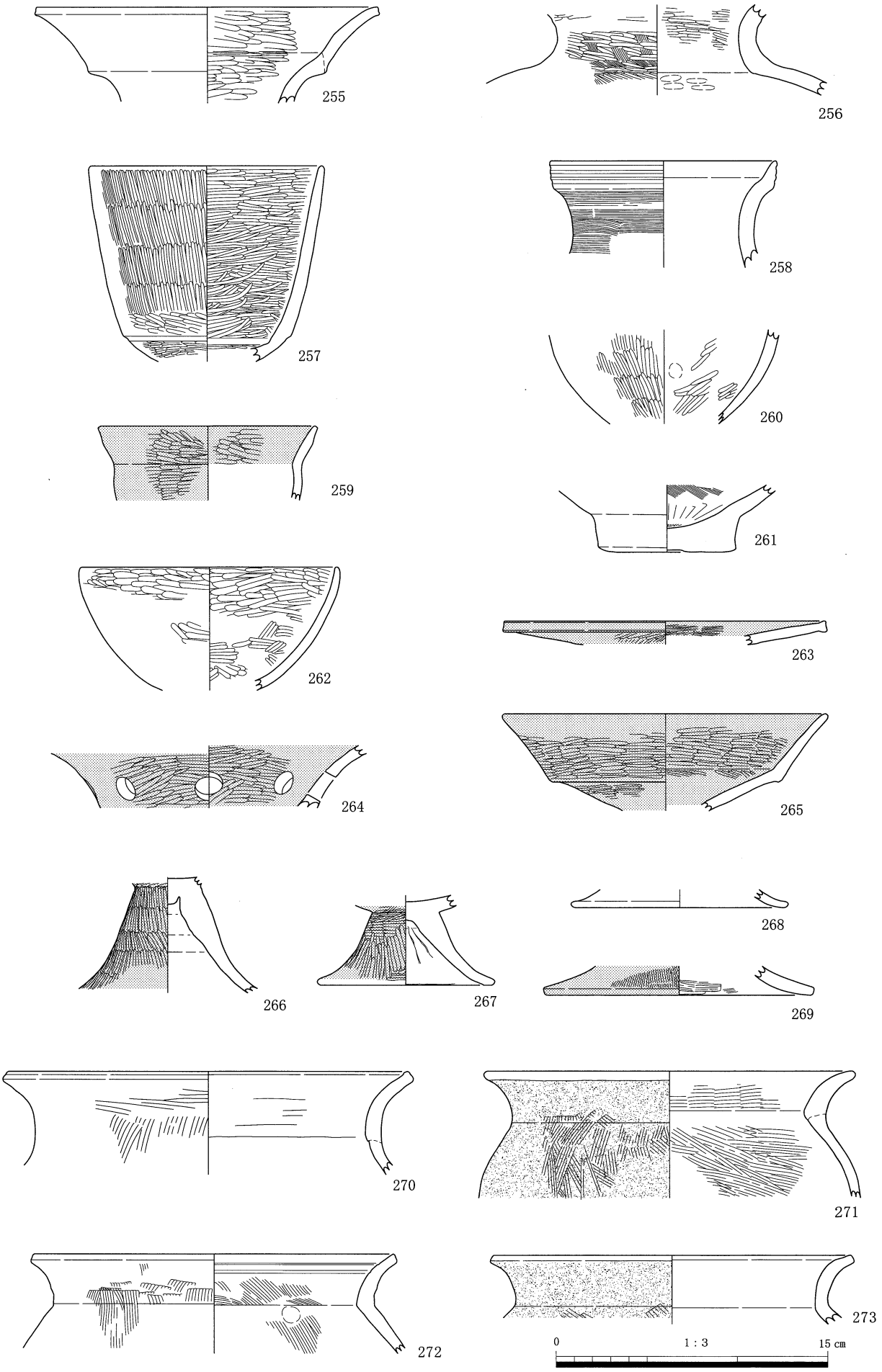


第 22 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図

SD103Ⅲ（下）層出土（225 ～ 233）・Ⅱ（中）層出土：北側肩部より 59.5 ～ 63.5m 地点（234・235）・Ⅱ（中）層出土：北側肩部より 67.5 ～ 73.5m 地点（236 ～ 240）

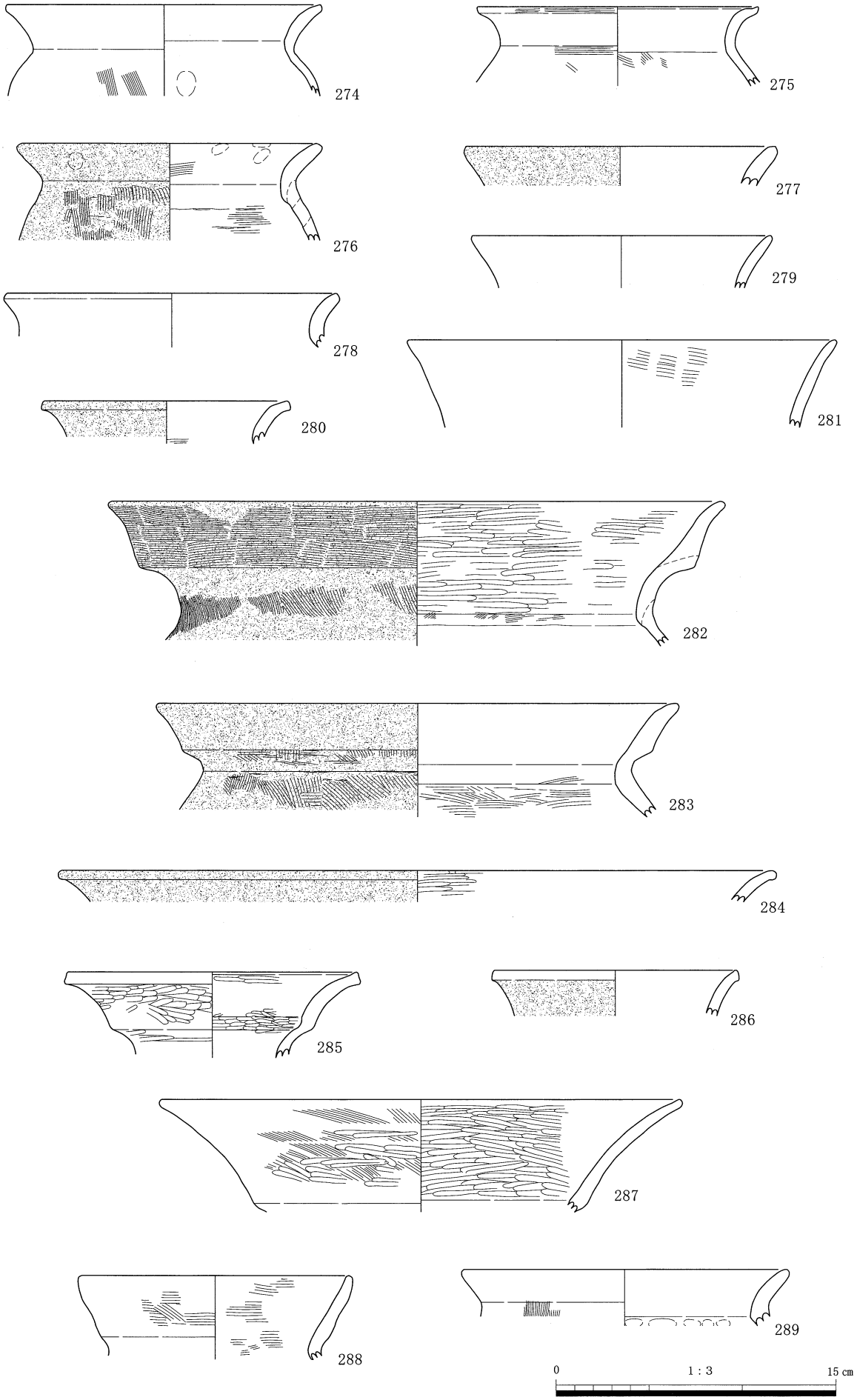


第 23 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
SD103Ⅱ（中）層出土：北側肩部より 67.5 ～ 73.5m 地点（241 ～ 254）

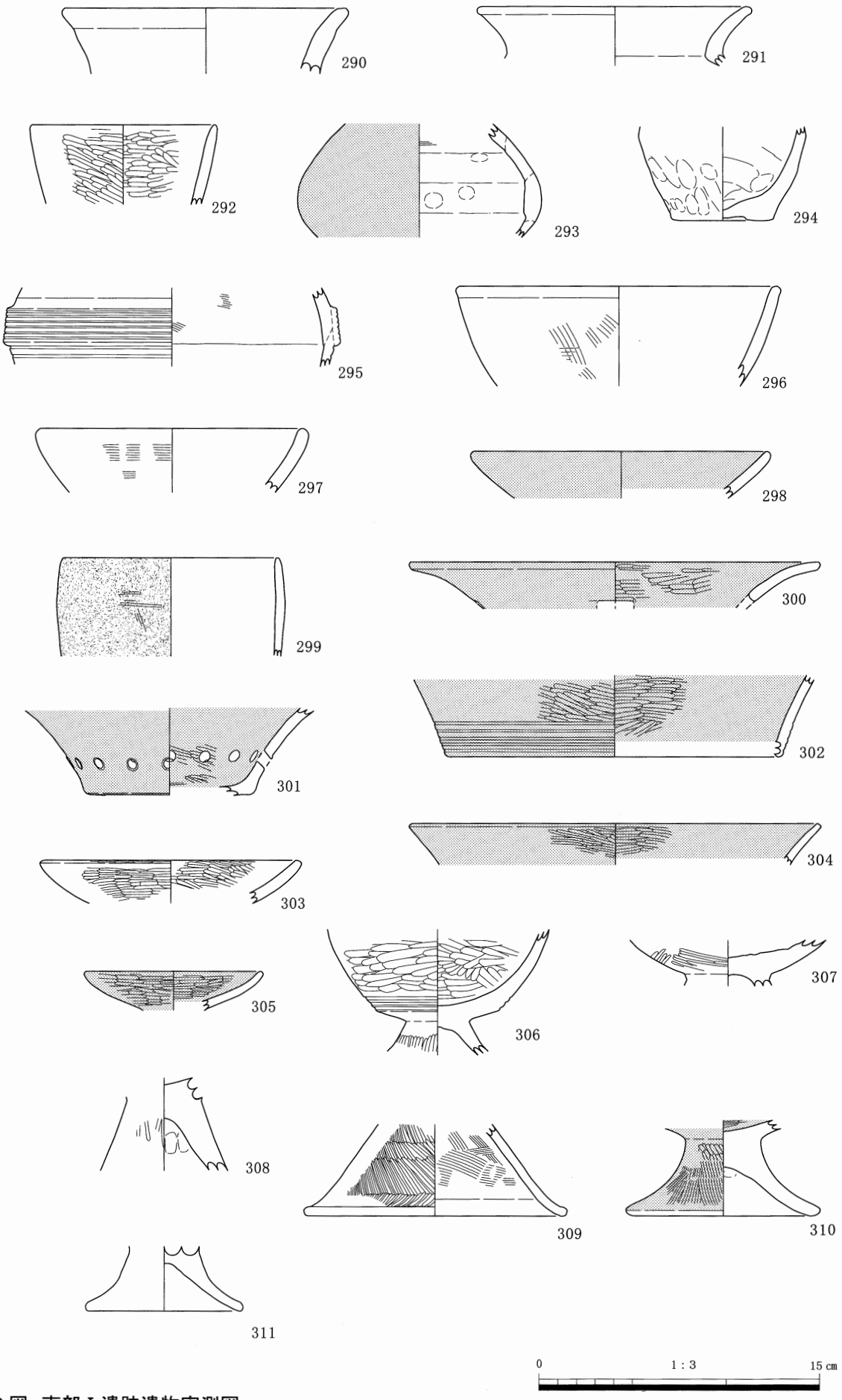


第 24 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図

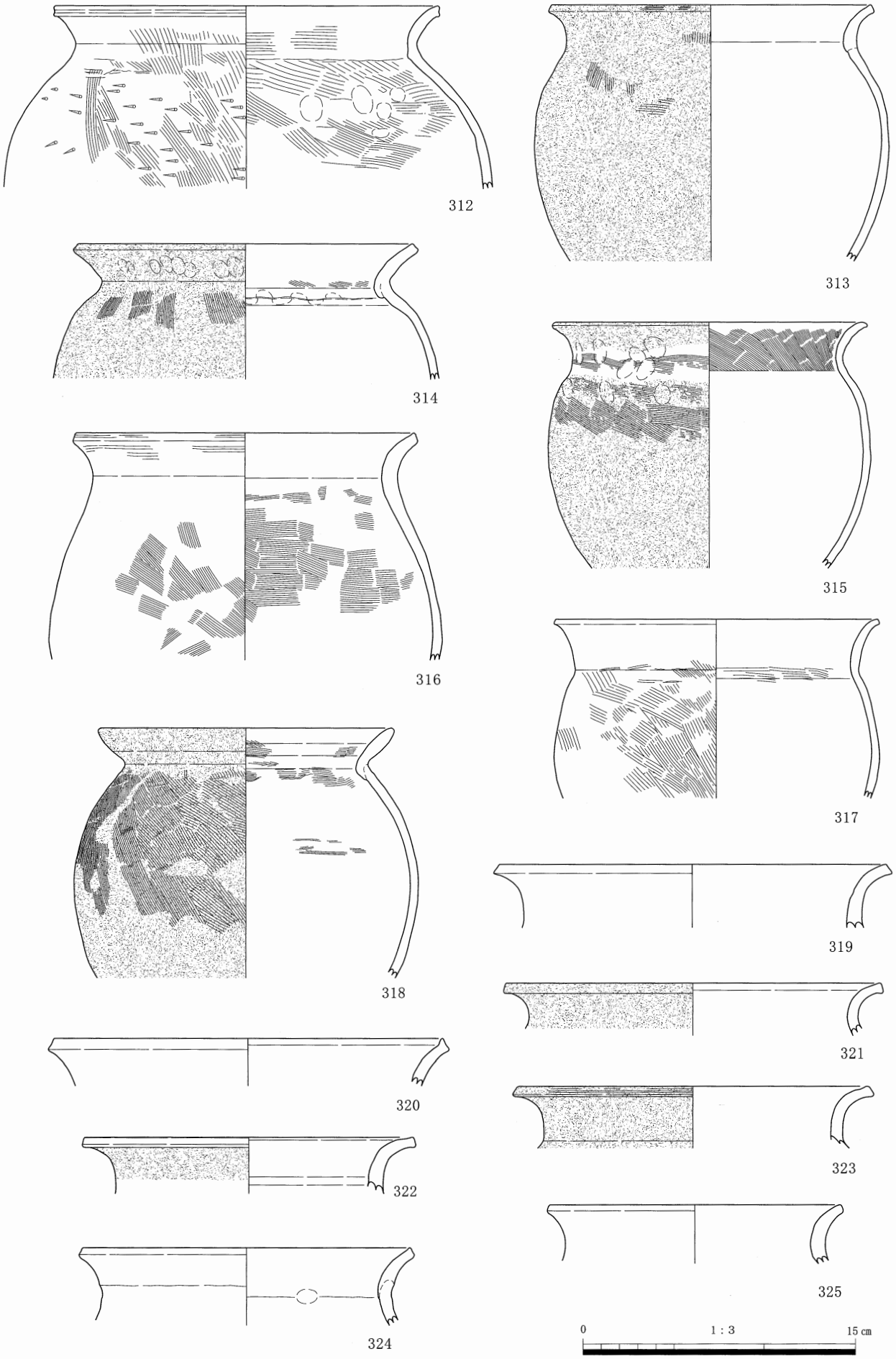
SD103Ⅱ(中) 層出土：北側肩部より 67.5 ～ 73.5m 地点 (255 ～ 269)・主にⅡ(中) 層出土：(270 ～ 273)



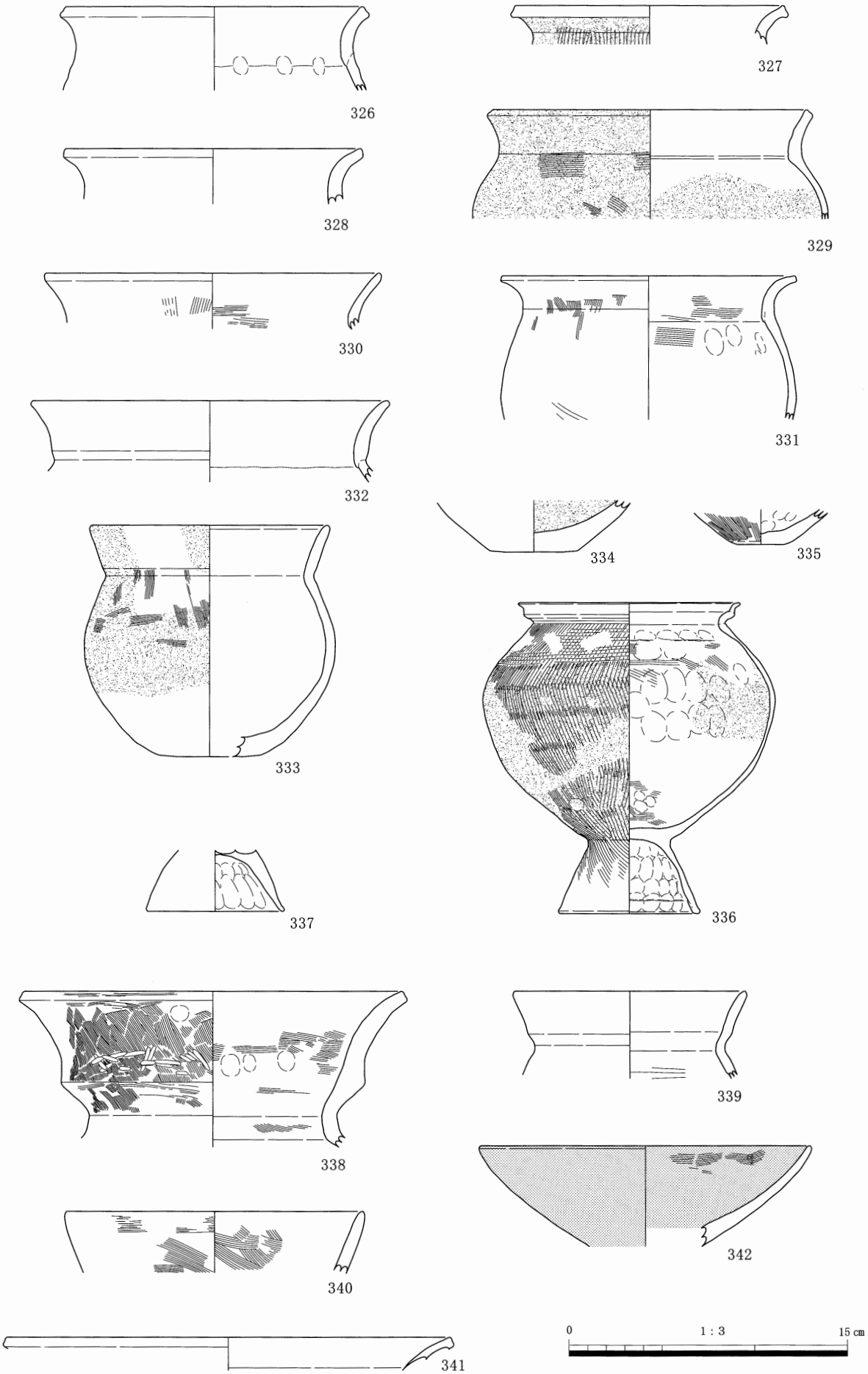
第 25 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
SD103Ⅱ主にⅡ（中）層出土（274 ～ 289）



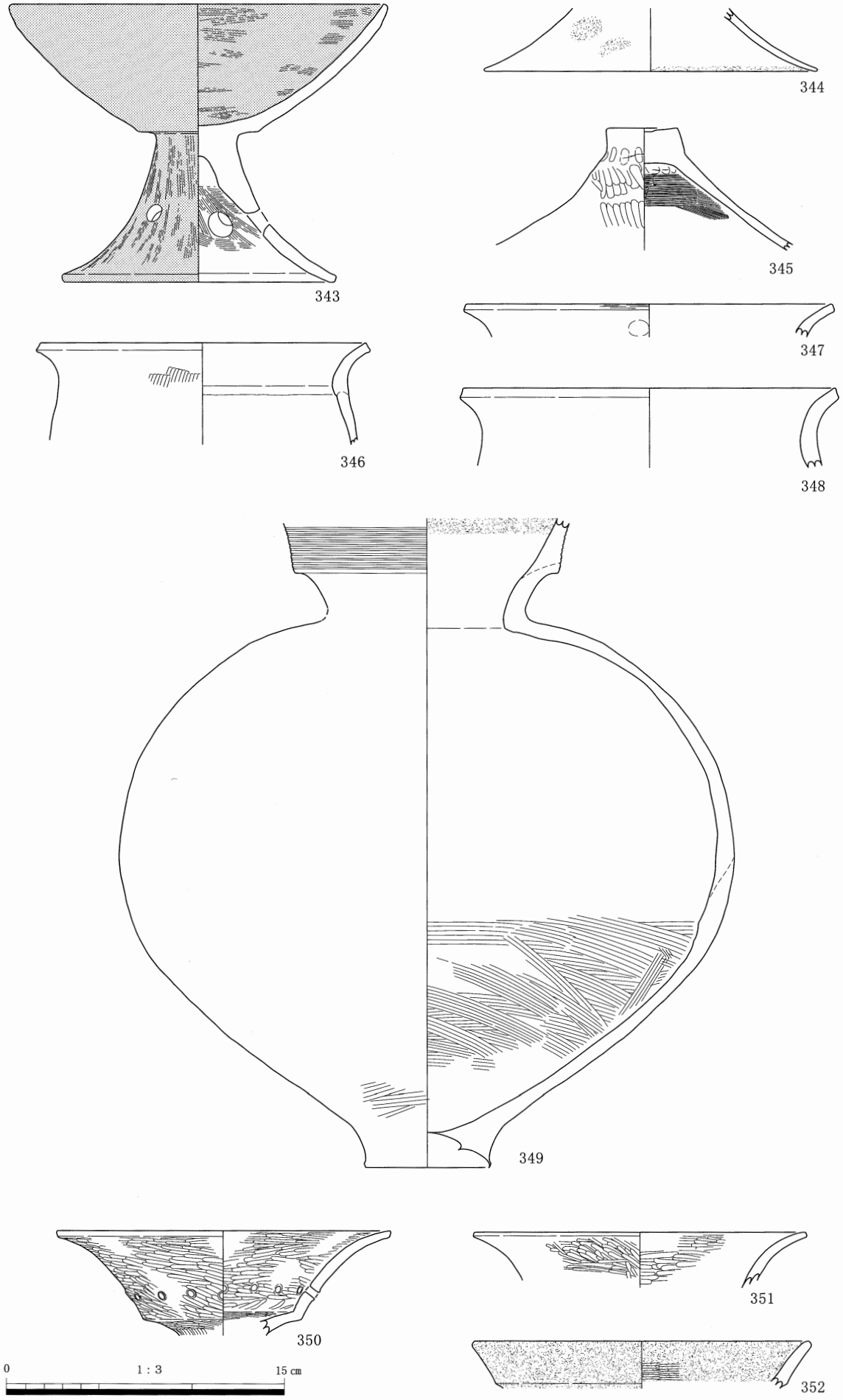
第 26 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
SD103 主にⅡ（中）層出土（290 ～ 311）



第 27 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
SD103Ⅰ（上）層出土：北側肩部より 27.5 ～ 31.5m 地点（312 ～ 325）

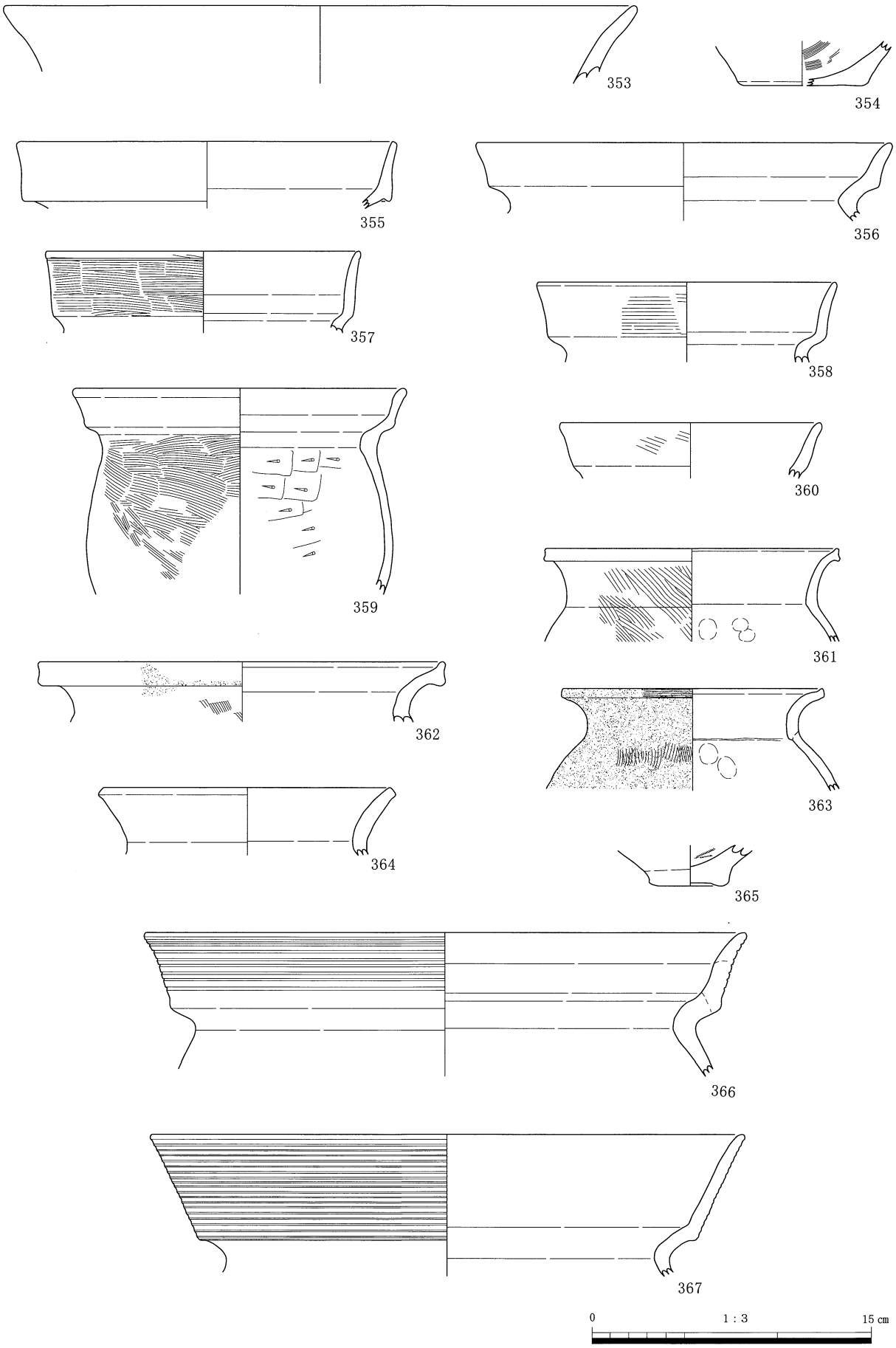


第 28 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
SD103Ⅰ（上）層出土：北側肩部より 27.5 ～ 31.5m 地点（326 ～ 342）

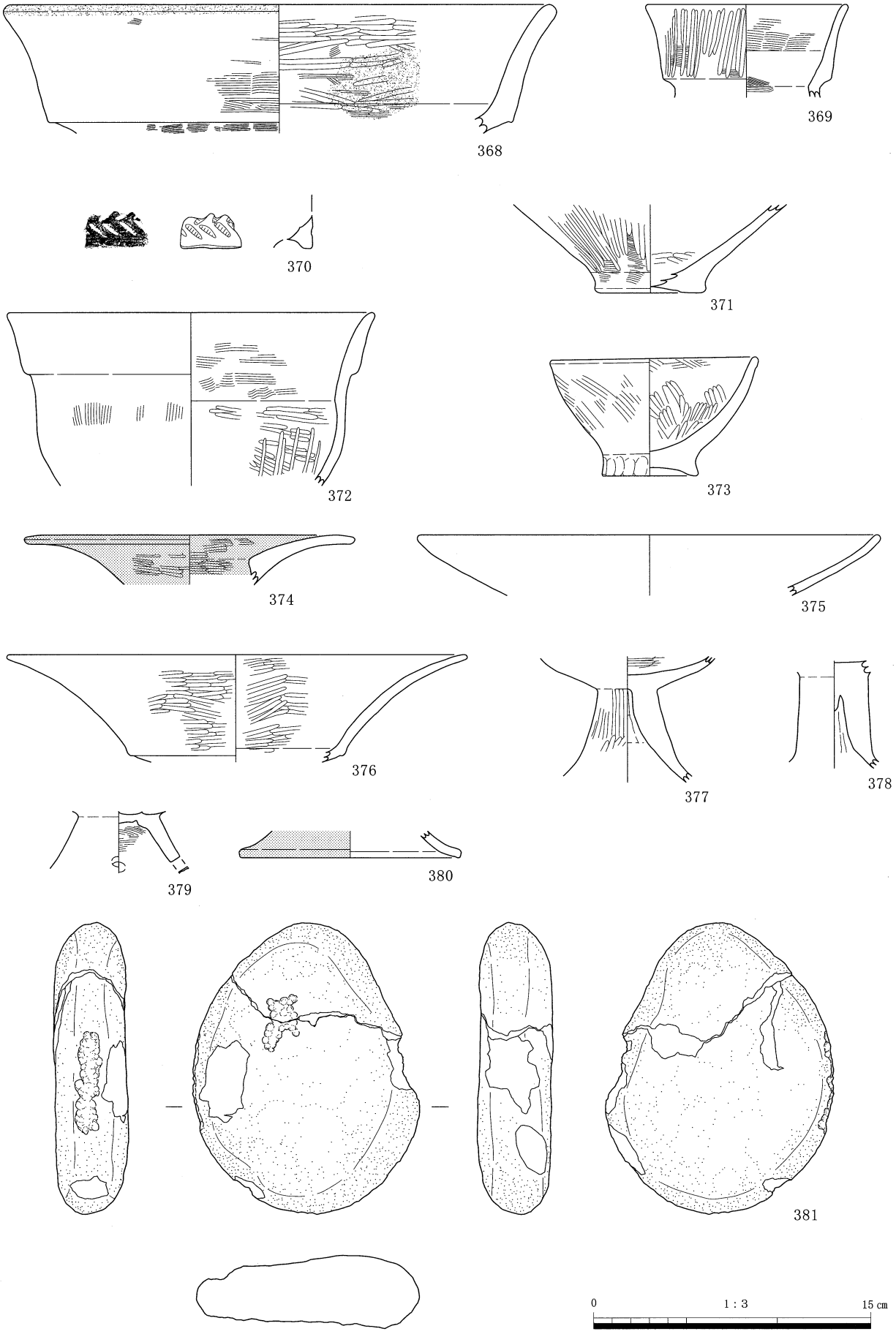


第 29 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図

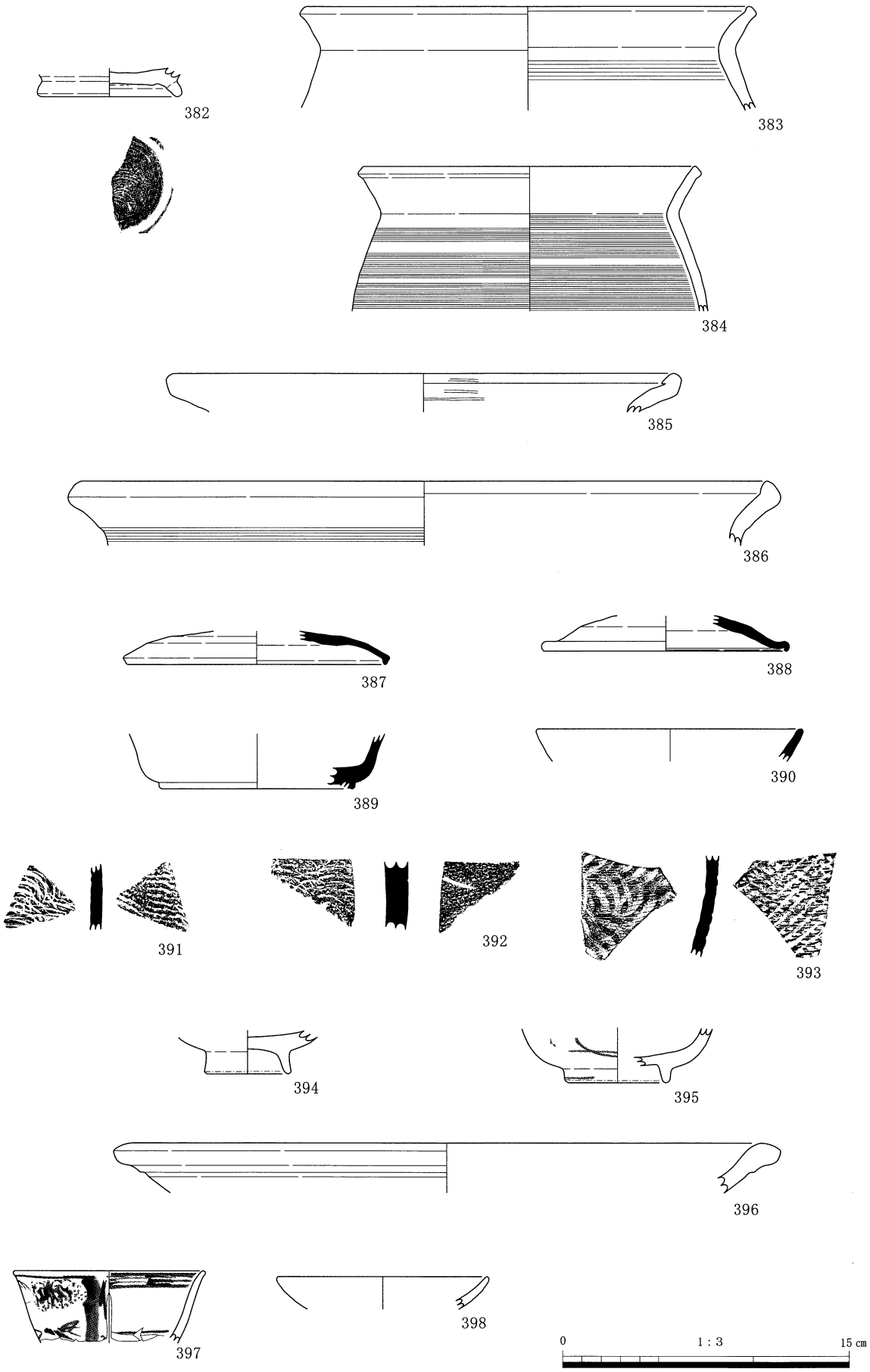
SD103Ⅰ（上）層出土：北側肩部より 27.5 ～ 31.5m 地点（343 ～ 345）・主にⅠ（上）層出土（346 ～ 351）SD103 か（352）



第 30 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
SD103(353)　SD108(354)　弥生・古墳時代の包含層出土土器(355 ～ 367)



第 31 図　南部Ⅰ遺跡遺物実測図
弥生・古墳時代の包含層出土土器（368 ～ 380）・石製品（381）



第 32 図　南部 I 遺跡遺物実測図
土師器 (382 ～ 386)　須恵器 (387 ～ 393)　瀬戸美濃 (394)　肥前 (395・396)　伊万里 (397・398)

ⅳ）自然科学分析

出土土器の蛍光X線分析

胎土分析研究会　三辻利一

(1) はじめに

玄武岩、安山岩、デイサイト、花崗岩類などのすべての火成岩の風化によって粘土ができる。しかし、須恵器などの固いやきものの素材粘土としては SiO2 に富み、K を比較的多く含み、逆に、Ca が比較的少ない粘土が適している。この特徴をもった火成岩は花崗岩類(花崗岩と花崗閃緑岩)である。実際、全国各地の須恵器窯跡群の後背地を構成する岩石は花崗岩類である場合が多い。富山県の後背地を構成する地質も花崗岩である。したがって、富山県内には須恵器の素材として適している粘土が広く分布している訳である。これが富山県内には須恵器窯跡が多い理由である。

図 1 には全国各地の花崗岩類の分布領域と窯跡群出土須恵器の分布領域を示してある。K-Ca 分布図では全国各地の花崗岩類は「花崗岩類のベルト帯」にまとまって分布した。他方、微量元素 Rb は主成分元素 K と正の相関性があることが花崗岩類でも確かめられている。同様に、微量元素 Sr も主成分元素 Ca と正の相関性をもつ。この結果、微量元素同志を組み合わせた Rb-Sr 分布でも「花崗岩類のベルト帯」を形成する。

他方、花崗岩類が風化して生成した粘土を素材とした全国各地の窯跡群出土須恵器は図 1 の「土器領域」に分布する。「花崗岩類のベルト帯」を形成した花崗岩類が風化して「土器領域」を形成したと考えられる。分布図における両者の大きな分布の違いは風化現象によるものである。風化過程で花崗岩類が溶解したコロイド溶液から粘土鉱物が再結晶して粘土が生成したことを考えれば、言い換えれば、岩石が構造的な変化を受けて粘土鉱物が再結晶したことを考慮に入れれば、この大きな変化は理解できるであろう。「土器領域」は通常、第 1、2、3、4 象限の四つの領域に分割される。そうすると、花崗岩を後背地にもつ窯跡群出土須恵器は第 2 象限から第 3 象限にかけて分布するものが多く、逆に、花崗閃緑岩を後背地にもつ窯跡群出土須恵器は第 4 象限から第 3 象限にかけて分布するものが多い。第 1 象限に分布する須恵器は少ない。窯跡群出土須恵器の両分布図上にみられるこの傾向は「花崗岩類のベルト帯」に関連する。地球化学の教科書によると、Ca に富む斜長石のほうが K に富むカリ長石に比べて風化が速いと書かれている。「花崗岩類のベルト帯」の勾配に比べて、「土器領域」内に分布する窯跡群出土須恵器が形成する逆相関状の分布の勾配が大きいことと一致する。この結果、窯跡群出土須恵器が「土器領域」の第 1 象限に分布するものが少ないことが理解できる。また、花崗岩が広く分布する西日本の窯跡群出土須恵器が「土器領域」の第 2 象限から第 3 象限にかけて分布するものが多く、逆に、東北日本の北上・阿武隈山系の花崗閃緑岩に由来する粘土を素材とした東北地方太平洋側の窯跡群出土須恵器は第 4 象限から第 3 象限にかけて分布するものが多いことも理解できる。また、近畿地方でも、花崗岩が分布する北部の窯跡群出土須恵器も第 2 象限から第 3 象限にかけて分布し、南部の葛城・金剛山を構成する花崗閃緑岩に由来する粘土を素材とした富田林市の中佐備窯跡出土須恵器や古市窯跡群出土埴輪などが第 3 象限から第 4 象限にかけて分布することも理解できる。

このように、花崗岩を後背地にもつ富山県内で生産された軟質土器も両分布図で第 2 象限から第 3 象限にかけて分布することが予想される。本報告では南部Ⅰ遺跡から出土した土器の蛍光 X 線分析の結果について報告する。

(2) 分析方法

土器試料は表面を研磨して付着物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で 100 メッシュ

以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして高圧をかけてプレスし、内径 20mm、厚さ 5mm の錠剤試料を作成して、蛍光 X 線分析用の試料とした。

蛍光 X 線分析には理学電機製、RIX2100（波長分散型）が使用された。この装置には TAP、Ge、LiF の 3 枚の分光結晶と、ガスフロー比例計数管、シンチレーションカウンターの二つの検出器が装備されており、これらはコンピューターの制御によって自動的に交換された。また、この装置には 50 試料が同時に搭載できる自動試料交換器が連結されており、完全自動分析ができる分析装置である。土器遺物の考古科学的研究には最適の分析装置である。

分析のための標準試料には日本地質調査所が配布している岩石標準試料、JG-1 が使用された。分析値は JG-1 の各元素の蛍光 X 線強度による標準化法が使用された。とくに、（%）や（ppm）表示が必要でないかぎり、データ解析には JG-1 による標準化法は便利である。もし、（%）や（ppm）表示が必要であれば、JG-1 による標準化値に地質調査所から公表されている、JG-1 の各元素の分析値を乗ずればよい。

(3) 分析結果

今回分析した南部 I 遺跡出土土器の分析データを表に示す。すべての分析値は同じ日に測定した岩石標準試料 JG-1 による標準化値である。風化過程で溶出し易い K、Ca、Rb、Sr などの元素は 1 以下の値をもつのに対して、溶出し難い Fe などの元素は 1 以上の値をもつ。表は風化過程で全く異なる挙動をとる元素の違いが如実にそのことを示している。JG-1 による標準化値を使うことによって、地域差は容易に比較できる。

図 2 には、SI76 から出土した土器の両分布図を示す。両分布図で土器の化学特性を比較するには、対照領域をつくると便利である。今回分析対象となった、南部 I 遺跡から出土した SI76、SK43、SD72、SD103 の土器を殆ど包含するようにして、南部 I 遺跡領域を定性的な領域として描いた。南部 I 遺跡領域に分布する土器群は同じ胎土をもつ土器群と考えられ、同じ所で作られた在地産の土器である可能性が高い。そうすると、SI76 遺跡出土の 4 点の軟質土器のうち 3 点は南部 I 遺跡領域に分布し、在地産の土器である可能性が高いことを示している。1 点、両分布で南部 I 遺跡領域を少しずれる試料があるが、これは素材粘土の不均質性によるばらつきであると考えている。とくに、外部から供給された土器であると判断できる根拠はない。Na や Fe 因子でも他の土器と類似しているからである。

図 3 には SK43、SD72 出土土師器の両分布図を示す。包含層出土の 2 点の土器は南部 I 遺跡領域に分布し、在地産の土器であると考えられる。また、SK43 から出土した 3 点の土器も南部 I 遺跡領域に対応し、在地産の土器と推定される。しかし、SD72 から出土した 1 点の土器は両分布図で南部 I 遺跡をずれて分布しており、在地産の土器ではないことを示している。そこで、表の分析値を点検すると、この試料の Na の分析値が他の土器に比べて少ないことがわかる。この特徴を持つ土器は名古屋市周辺で作られた土器胎土の特徴である。この土器は K-Ca、Rb-Sr の両分布図でも名古屋市周辺の土器群が分布する領域に分布していることから、名古屋市周辺から持ち込まれた可能性のある土器であると考えられる。

図 4 には、SD103 から出土した土器の両分布図を示す。1 点を除いて他の試料はすべて、南部 I 遺跡領域に分布した。在地産の土器であると考えられる。南部 I 遺跡領域の下側にはずれて分布する試料が 1 点あるが、南部 I 遺跡で作られた土器であるかどうかは不明である。富山県内の同じ地域内で作られた土器であると推定している。

追加された試料の分析データは表（右下部）に示してある。また、これらの土器の写真は図 5 に示してある。これらの試料の K-Ca、Rb-Sr 両分布図は図 6 に示してある。殆どの試料は南部 I 遺跡領

域に分布しており、南部Ⅰ遺跡で作られた土器と推定される。これらの試料のなかに、S 字甕が含まれている。南部Ⅰ遺跡領域近くに分布しているが、胎土は他の土器と同じ胎土であると考えている。S 字甕の底の黒色胎土部分からごく少量の試料を採取したが、黒色胎土部分には炭化物が付着していたものと思われる。そのため、K、Rb がやや少なく、他の土師器とは少しずれて分布したものと解釈される。また、Na も他の南部Ⅰ遺跡領域に分布した土器群と同じであることが表（右下部）からわかる。したがって、S 字甕は名古屋市周辺から持ち込まれた土器ではなく、南部Ⅰ遺跡でつくられた在地産の土器であると考えられる。

このようなデータを積み重ねていくことによって、軟質土器の生産・供給問題の研究は推進される。当然、縄文土器についても、このような方法でその伝播に関する研究は可能である。今後の研究の発展が期待される。

出土地点	遺物No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考	出土地点	遺物No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考
SI76	122	0.475	0.374	1.33	0.520	0.694	0.161		SD103	330	0.546	0.398	1.41	0.471	0.603	0.255	
	-	0.392	0.327	1.77	0.342	0.663	0.165			280	0.602	0.342	1.46	0.515	0.513	0.251	
	108	0.524	0.471	1.15	0.572	0.692	0.231			352	0.505	0.488	1.57	0.440	0.811	0.313	
	88	0.650	0.456	1.94	0.506	0.768	0.273			284	0.513	0.389	2.12	0.501	0.699	0.248	
SK43	180	0.569	0.223	1.69	0.613	0.591	0.252			279	0.480	0.391	2.33	0.533	0.580	0.228	
	182	0.558	0.352	1.94	0.491	0.778	0.358			328	0.509	0.361	1.78	0.425	0.516	0.188	
	195	0.467	0.316	1.70	0.493	0.618	0.315			-	0.494	0.441	1.50	0.477	0.499	0.206	
SD72	-	0.391	0.144	1.52	0.428	0.277	0.058	外来系	追加試料 (SD103)	336	0.409	0.436	1.11	0.380	0.612	0.279	S字甕
包含層	-	0.518	0.310	1.39	0.501	0.526	0.247			315	0.569	0.389	1.35	0.548	0.553	0.145	
	355	0.492	0.287	1.76	0.462	0.517	0.300			257	0.517	0.346	2.51	0.451	0.478	0.221	
SD103	327	0.580	0.436	1.35	0.521	0.709	0.255			225	0.481	0.463	1.61	0.455	0.611	0.249	
	336	0.365	0.402	0.772	0.317	0.501	0.147	S字甕		283	0.536	0.319	2.21	0.539	0.628	0.302	
	341	0.489	0.435	1.84	0.460	0.486	0.202			306	0.484	0.472	1.47	0.548	0.715	0.320	
	248	0.537	0.320	2.17	0.537	0.609	0.273			333	0.515	0.440	1.44	0.540	0.657	0.285	

表　出土土器成分分析データ

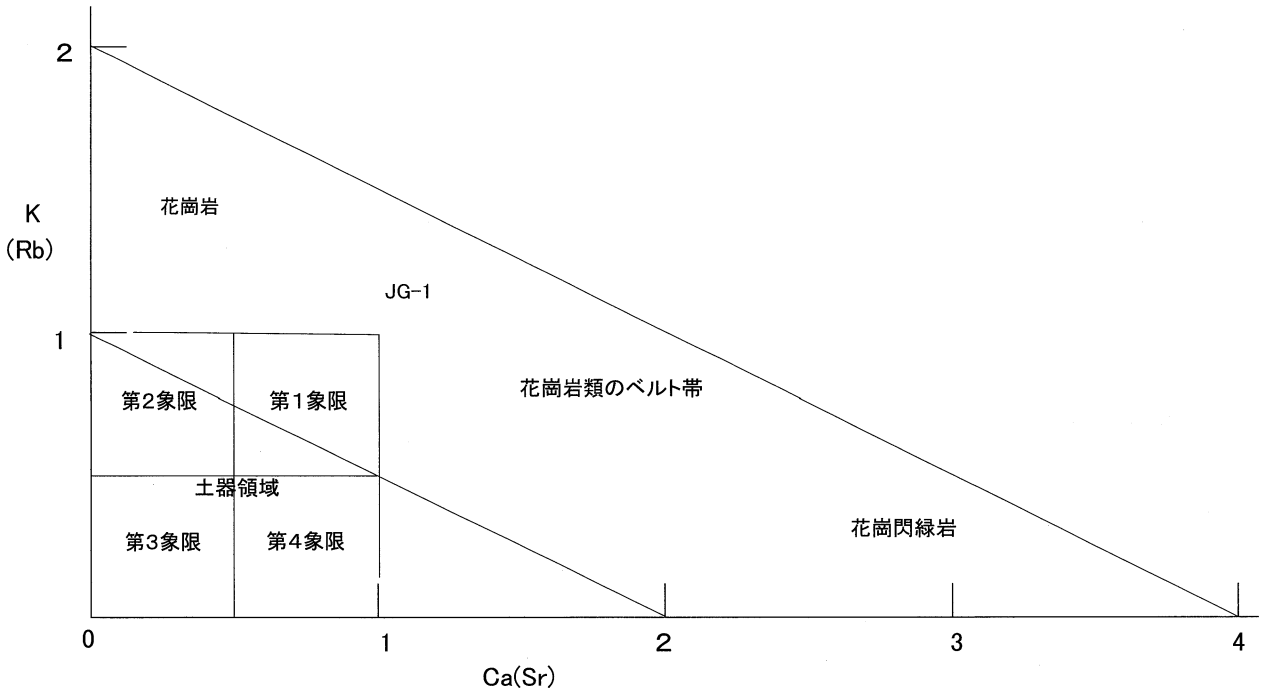


図1　花崗岩類と土器類の分布領域

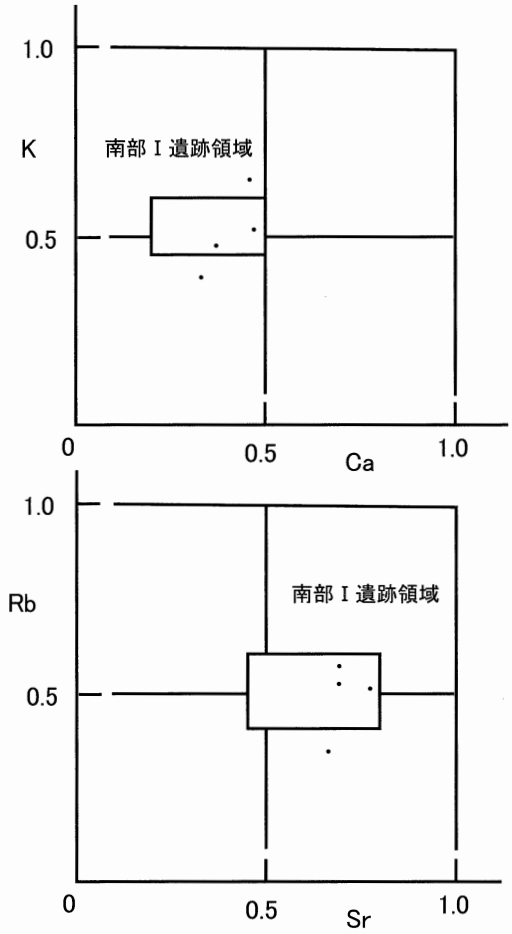


図2　SI76出土土器の両分布図

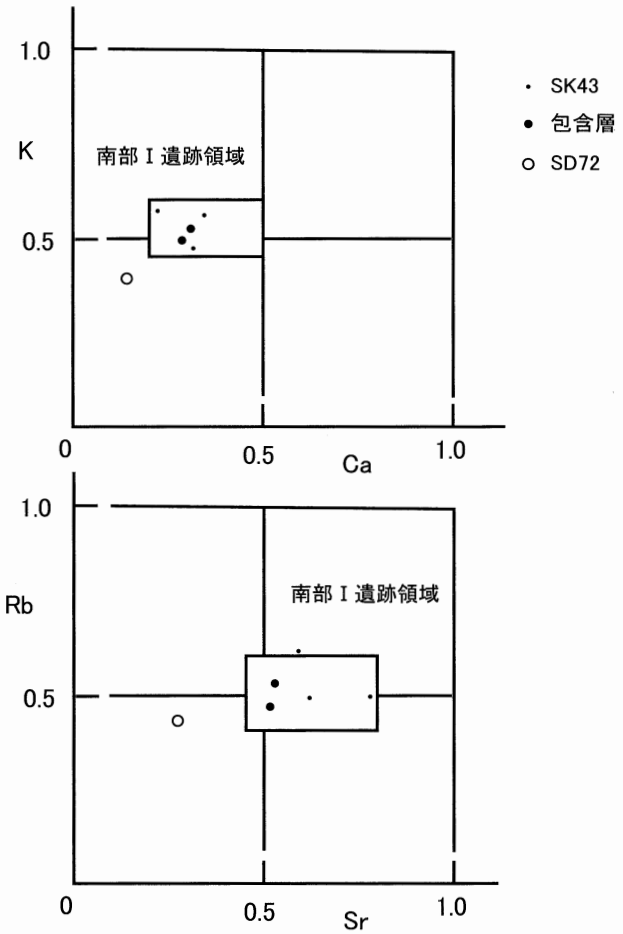


図3　SK43、包含層、SD72出土土器の両分布図

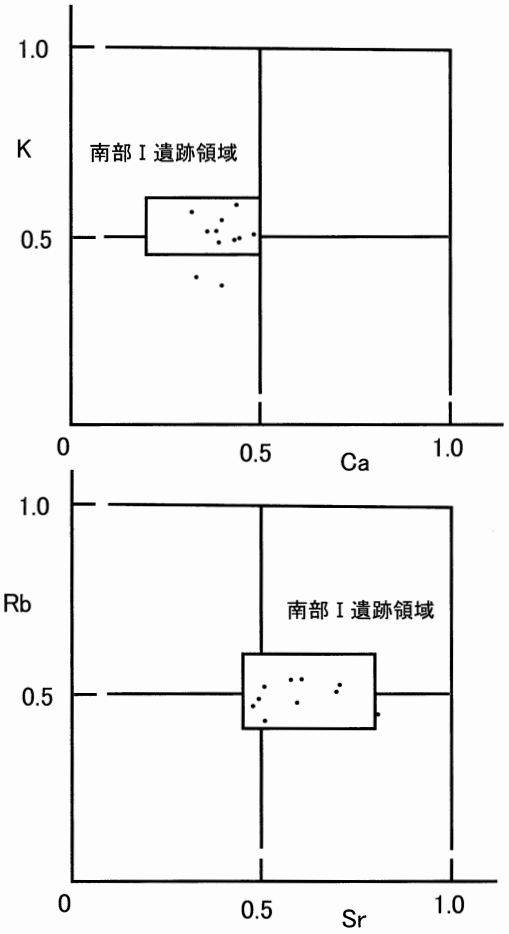


図4　SD103出土土器の両分布図

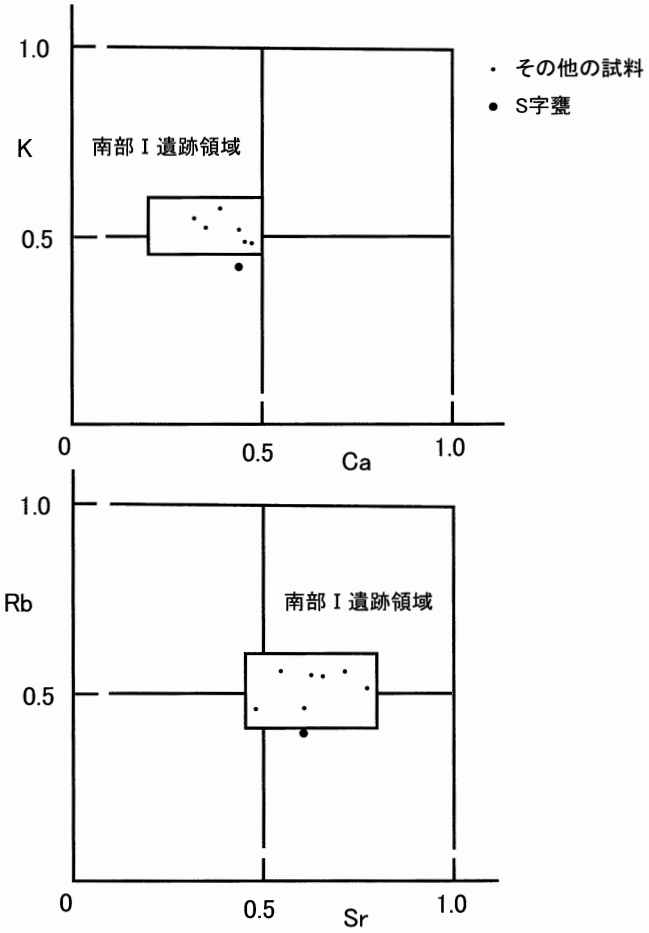


図5　S字甕等追加試料の両分布図

第1表 南部Ⅰ遺跡遺構一覧(1)北側調査区①

遺構No.		地区	平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
SP	1	3	円	0.31	0.29	0.43		
SP	2	3	(楕円)	0.36	(0.2)	0.14		
SK	3	3	−	(0.56)	(0.55)	0.10		
SP	04	1	(楕円)	0.60	(0.30)	0.16		
SP	83	1	円	0.25	0.25	−		
SP	05	1	(楕円)	0.60	(0.21)	0.12		
SP	06	1	(楕円)	0.52	(0.22)	0.34		
SP	07	1	円	0.30	0.24	0.12		
SP	08	1	楕円	(0.48)	0.45	0.35		
SP	09	1	円	0.42	0.40	0.15		
SI	10	1	東西	(0.86)	4.60	0.33	弥生土器(1)、須恵器(389)	SI10＞SP11・12 古代か
SP	11	1	円	0.38	0.35	0.09		SP11＜SI10
SP	12	1	円	0.56	0.54	0.18		SP12＜SI10
SP	13	1	楕円	0.42	0.21	0.11		
SP	14	1	(楕円)	0.72	(0.35)	0.28		
SP	15	1	円	0.30	0.30	0.15		
SP	16	1	楕円	0.41	0.35	0.80		
SP	17	1	円	0.42	0.31	0.16		
噴砂		1	−	(0.24)	0.50	−		
SI	18	1	(楕円)	3.02	0.46	0.22		
SP	19	1	楕円	(0.65)	0.57	0.37		
SI	20	1	隅丸方形？	7.95	−	0.29	弥生土器(2～26)	SI20＜SP21
SP	21	1	円	0.30	0.25	0.31		SP21＞SI20
SP	22	1	円	0.22	0.22	0.18		
SP	23	1	円	0.28	0.23	0.12		
SP	24	2	円	0.30	0.30	0.38		
SI	25	2	隅丸方形？	(1.25)	(0.45)	0.08	弥生土器(7)	
SD	26	2	北東-南西	(0.86)	14.80～25.20	0.45		
SP	27	2	不整形	0.60	(0.27)	0.23		
SP	28	2	円	0.24	0.24	0.23		
SP	29	2	円	0.27	0.26	0.21		
SP	30	2	(楕円)	(0.32)	0.25	0.28		
SP	31	2	(楕円)	0.50	(0.20)	0.17		
SP	32	2	円	0.20	0.19	0.13		
SP	33	2	(楕円)	0.30	(0.19)	0.18	弥生土器(176)	
SP	34	2	円	0.42	0.40	0.04		
SP	35	2	(楕円)	0.36	(0.30)	0.16		
SP	36	2	円	0.20	0.20	0.28		
SP	37	2	円	0.34	0.32	0.19		
SP	38	2	(楕円)	0.38	0.36	0.33		
SK	39	2	円	0.50	0.48	0.19		
SK	40	2	円	0.65	(0.55)	0.26		
SK	41	2	楕円	0.61	0.43	0.23		
SI	42	2	(円)	(2.68)	(0.88)	0.25	弥生土器〈8～20〉	
SK	43	3	(楕円)	1.51	(0.70)	0.41	弥生土器(179～199)	
SP	44	3	円	0.33	0.29	0.13		
SI	45	3	(円)	3.71	(0.84)	0.14	弥生土器(21～23)	
SI	46	3	隅丸方形？	7.91	(0.84)	0.31	弥生土器(24)	
SP	47	3	(楕円)	0.40	(0.20)	0.15	弥生土器(177)	
SP	48	3	(楕円)	0.51	0.39	0.11		
SP	49	3	(楕円)	0.50	0.30	0.15		
SK	50	3	(楕円)	1.52	(0.73)	0.20	弥生土器(200～202)	
SP	51	3	(円)	0.40	0.38	0.17		

第1表　南部Ⅰ遺跡遺構一覧(2)北側調査区②

遺構No.		地区	平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
SK	52	3	(楕円)	1.29	(0.40)	0.06		
SI	53	3	―	9.32	(0.84)	0.44	弥生土器(25～41)	
SP	54	3	(楕円)	0.40	(0.10)	0.14		
SP	55	3	(円)	0.25	0.22	0.23		
SP	56	3	(円)	0.38	0.31	0.44		SP56＞SI57
SI	57	34	(隅丸方)	7.35	(0.84)	0.28	弥生土器(42～62)	SI57＜SP56・SK58
SI	57-P1	3	(楕円)	0.65	0.39	0.35		
SK	58	4	不整形	1.12	0.71	0.26	弥生土器(203・206)	SK58＞SI57
SK	59	4	楕円	0.65	0.50	0.26		
SP	60	4	(楕円)	0.26	(0.14)	0.16		
SP	61	4	円	0.30	0.28	0.32		
SP	62	4	円	0.39	0.30	0.01?		SP62＜SP63
SP	63	4	円	0.34	0.33	0.42?		SP63＞SP62
SP	64	4	楕円	0.56	0.38	0.40		
SK	65	4	楕円	(0.80)	0.78	0.06		SK65＜SP66・69
SP	66	4	(円)	0.46	(0.20)	0.28		SP66＞SK65・SP67
SP	67	4	円	(0.27)	(0.21)	0.29		SP67＜SP66・68
SP	68	4	(円)	0.33	0.29	0.30		SP68＞SP67
SP	69	4	(楕円)	0.32	(0.20)	0.35		SP69＞SK65
SP	70	4	楕円	0.65	0.43	0.70		
SP	71	4	楕円	0.60	0.41	0.29		
SD	72	4	東西	6.34	(0.83)	0.55	弥生土器(213)	SD72＞SK73
SK	73	4	東西	0.51	(0.50)	0.10	弥生土器(207～210)	SK73＜SD72
SD	74	4	東西	(0.72)	0.20	0.10		SD74＜SP75
SP	75	4	(楕円)	0.36	(0.15)	0.10		SP75＞SD74
SI	76	4	―	-	(0.83)	0.54	弥生土器(65～170)	北肩不明、SI76＜SP77
SP	77	4	円	0.30	(0.26)	0.24		SP77＞SI76
SK	78	4	(楕円)	0.87	(0.40)	0.58	弥生土器(211・212)	SK78＞SK79
SK	79	4	(楕円)	0.32	(0.23)	0.20		SK79＜SK78
SK	80	4	不整形	0.94	(0.47)	0.36		
SP	81	4	(円)	0.31	(0.14)	0.28		
SI	82	4・5	-	-	(0.83)	0.26	弥生土器(171・175)	南肩不明
SI	82-P1	5	円	0.51	(0.37)	0.05	弥生土器(172～174)	

第1表　南部Ⅰ遺跡遺構一覧(3)南側調査区

遺構No.		地区	平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
SD	101	A	東西	0.8	0.5	28	弥生土器(216)	SK101＜SD101
SD	102	A	南北	1.6	0.4	17	弥生土器(214・215)	
SD	103	A・B・C	北西-南東	117.0	28.7	110	弥生土器(236～269)　古墳土師器　古代土師器　古代須恵器　近世伊万里　近世肥前	SD103＜SD109
SD	104	C	北西-南東	2.3	22.9	9	近現代の鋤先	
SD	108	E	北西-南東	0.8	0.8	62	弥生土器(354)	
SD	109	B	北西-南東	1.9	85.5	148		SD103＜SD110
SD	110	E	北西-南東	1.0	0.2	32		
SD	111	D	南北	1.4	2.1	15		
SK	101	A		0.83	0.80	17		＜SD101SP101
SK	102	A	楕円形	0.98	0.25	12		
SK	103	A	楕円形	0.76	0.47	15		
SX	101			0.80	0.40	―	須恵器	
SX	102			―	―	―	近世陶磁器	

第2表　南部Ⅰ遺跡遺物観察表（1）

遺物No.	地区	遺構	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整 内面	外面	残存率 口縁部	底部	備考
1		SI10		弥生土器	甕	14.0	3.5		密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコハケ、ヨコナデ、ハケメ	0.5/12		
2		SI20		弥生土器	甕	15.6	3.2		密	良	10YR8/3 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.9/12		
3		SI20		弥生土器	甕	19.8	3.4		密	やや良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.3/12		
4		SI20		弥生土器	甕		4.7	3.2	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ	ハケメ、ナデ		12.0/12	スス付着(外面)
5		SI20		弥生土器	高杯	17.0	3.5		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.0/12		
6		SI20		弥生土器	器台	13.8	3.0		密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	1.1/12		擬凹線2条
7		SI25		弥生土器	甕	14.0	3.3		密	良	10YR8/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.6/12		
8		SI42		弥生土器	甕	18.0	7.1		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ後ナデ消し、ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ、ハケメ、キザミ、ハケメ	1.1/12		スス付着(外面)
9		SI42		弥生土器	甕	20.0	4.1		密	良	10YR8/3 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		
10		SI42		弥生土器	甕	17.0	8.5		やや密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	磨滅	磨滅	2.0/12		
11		SI42		弥生土器	甕	19.7	2.7		密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	0.5/12		スス付着(外面)
12		SI42		弥生土器	甕		2.3	2.6	密	良	10YR4/1 褐灰色	ハケメ後ナデ	ハケメ、ナデ		12.0/12	
13		SI42		弥生土器	甕		1.3	1.5	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		10.0/12	スス付着(外面)
14		SI42		弥生土器	壺	21.2	4.0		密	良	10YR6/2 灰黄褐色	ナデ	ナデ、ハケメ	1.0/12		
15		SI42		弥生土器	壺	16.5	4.4		密	良	10YR6/2 灰褐色	ナデ	ナデ	0.8/12		
16		SI42		弥生土器	壺	18.0	5.2		密	良	7.5YR6/6 橙色	ハケメ+指頭圧痕、ヨコナデ、ヨコハケ	ヨコナデ、ヨコハケ、ハケメ	2.0/12		
17		SI42		弥生土器	器台	15.5	2.5		密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	0.6/12		
18		SI42		弥生土器	高杯	26.0	1.8		密	良	10YR4/2 灰黄褐色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	0.7/12		
19		SI42		弥生土器	高杯		3.5		密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	ミガキ、ナデ	ヨコナデ			
20		SI42		弥生土器	高杯？	15.9	4.5		密	やや良	5YR5/6 明赤褐色	ナデ(磨滅)	ナデ(磨滅)			把手あり(2ケ所の可能性あり)
21		SI45南		弥生土器	壺or甕		2.4	4.6	やや密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		2.5/12	
22		SI45		弥生土器	鉢	14.0	5.3		密	良	7.5YR6/6 橙色	ナデ	ナデ	1.8/12		
23		SI45南		弥生土器	鉢	11.4	5.5	4.6	密	やや不良	10YR6/4 にぶい黄橙色	ナデ(磨滅)	ナデ(磨滅)	1.3/12		
24		SI46		弥生土器	甕	18.0	4.0		密	良	7.5YR6/4 にぶい橙色	ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ	2.5/12		スス付着(外面)
25		SI53		弥生土器	甕	17.1	16.3		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ケズリ、ハケメ後+指頭圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	8.3/12		
26		SI53		弥生土器	甕	14.8	4.1		密	良	5YR6/3 にぶい橙色	ナデ+指頭圧痕、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	1.1/12		擬凹線6条
27		SI53		弥生土器	甕	14.0	2.5		やや密	良	10YR7/6 明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコナデ	1.3/12		擬凹線4条
28		SI53		弥生土器	甕	17.8	2.7		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	1.1/12		スス付着(外面)
29		SI53		弥生土器	甕		2.0	2.4	密	良	10YR4/1 褐灰色	ハケメ	ナデ		6.0/12	
30		SI53		弥生土器	甕		1.7	2.6	密	良	10YR6/2 灰黄褐色	ナデ	ハケメ後ナデ、ナデ		12.0/12	炭化物付着(内面)
31		SI53		弥生土器	壺	21.2	7.7		密	良	10YR4/1 褐灰色	ナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ+線刻、ハケメ後ヨコナデ	2.5/12		線刻(口縁部外面)
32		SI53		弥生土器	壺	32.0	7.7		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ、ナデ	0.4/12		
33		SI53		弥生土器	鉢	28.0	6.5		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ、ハケメ後ナデ	1.1/12		スス付着(内面)
34		SI53		弥生土器	鉢	18.1	8.8	1.0	密	良	10YR6/6 明黄褐色	ミガキ、ヨコナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ、ヨコナデ、ミガキ、ナデ	8.8/12		沈線1条
35		SI53		弥生土器	器台		7.2		密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	ナデ、ミガキ	ミガキ			
36		SI53		弥生土器	高杯か器台		1.8	10.0	密	良	10YR5/2 灰黄褐色	ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ		1.8/12	
37		SI53		弥生土器	高杯	20.0	3.2		密	良	10YR8/3浅黄橙色 赤彩:10R4/6赤色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	0.8/12		赤彩
38		SI53		弥生土器	高杯		6.8	8.7	密	良	10YR8/3 浅黄橙色	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ナデ	ナデ、ミガキ、ヨコナデ		7.0/12	穿孔8ケ所
39		SI53		弥生土器	高杯		5.2		密	やや良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ナデ、しぼり痕、ミガキ(磨滅)	ハケメ後ミガキ(磨滅)			
40		SI53		弥生土器	高杯		7.2		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、しぼり痕	ミガキ、ナデ、ミガキ			擬凹線3本
41		SI53		弥生土器	高杯		2.1	24.0	密	やや良	10YR3/1黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		0.7/12	
42		SI57		弥生土器	甕	18.6	3.5		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	0.1/12		擬凹線4条、スス付着(外面)
43		SI57		弥生土器	甕	17.0	3.7		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5/12		
44		SI57		弥生土器	甕	15.5	2.1		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.0/12		
45		SI57		弥生土器	甕	18.0	4.1		やや密	良	10YR8/3 浅黄橙色	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ、ヨコナデ、ハケメ	1.9/12		
46		SI57		弥生土器	甕	17.7	2.8		密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.1/12		
47		SI57		弥生土器	甕	18.0	9.6		やや密	良	10YR7/1 灰白色	ケズリ、ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	1.8/12		炭化物付着(外面)
48		SI57		弥生土器	甕		1.6	2.5	密	良	10YR6/2 灰黄褐色	ナデ	ナデ		12.0/12	
49		SI57		弥生土器	壺	12.0	4.3		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ、ナデ	5.3/12		
50		SI57		弥生土器	壺	11.2	5.3		密	良	10YR8/2 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.2/12		

第2表　南部Ⅰ遺跡遺物観察表(2)

遺物No.	地区	遺構	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整 内面	外面	残存率 口縁部	底部	備考
51		SI57		弥生土器	壺	30.2	3.3		密	良	10YR8/2灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		擬凹線5条
52		SI57		弥生土器	壺		8.5		密	良	10YR8/3浅黄橙色 赤彩:10R5/6赤色	ハケメ後ナデ+ 指頭圧痕	ミガキ			赤彩
53		SI57		弥生土器	壺		2.6	5.4	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ナデ	ハケメ、ヨコ ナデ、ナデ		12.0/12	
54		SI57		弥生土器	壺		1.9	5.0	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	ナデ	ミガキ、ナデ 一部ミガキ		12.0/12	
55		SI57		弥生土器	鉢	14.0	4.0		密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、 ハケメ後ナデ	1.6/12		
56		SI57		弥生土器	鉢		2.0	2.4	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色 赤彩:10R5/8赤色	ミガキ	ハケメ後 ナデ、ナデ		12.0/12	
57		SI57		弥生土器	鉢		3.2		密	良	5YR7/6橙色	ナデ	ナデ(磨滅)、 ヨコナデ、ナデ		12.0/12	
58		SI57		弥生土器	器台		9.9	10.3	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ、ハケメ後 ナデ、ナデ、ミガキ	ミガキ、ヨコナデ		12.0/12	
59		SI57		弥生土器	器台	26.0	3.5		密	良	10YR7/3にぶい黄橙 色 赤彩:2.5YR5/6 明赤褐色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	0.7/12		赤彩(内面)、 口唇部赤彩色
60		SI57		弥生土器	器台	21.0	3.2		密	良	10YR8/3浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.0/12		擬凹線11条
61		SI57		弥生土器	高杯		5.4		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ			
62		SI57		弥生土器	蓋		2.9		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、指頭 圧痕、ナデ			
63		SI57		弥生土器	壺		7.2		密	良	7.5YR8/3 浅黄橙色	ハケメ、ミガキ	ミガキ			脚付細頸壺？
64		SI58		弥生土器	壺	16.0	3.6		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.0/12		擬凹線8条、 スス付着(外
65		SI76		弥生土器	甕	21.3	23.6		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ナデ、ナデ+指圧、 ハケメ後ナデ+指圧、 ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	3.2/12		
66		SI76		弥生土器	甕	15.6	19.4	3.3	やや 密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ+指頭圧 痕、ヨコナデ+指頭圧 痕	ヨコナデ+指頭圧痕、ケ ズリ、ナデ、ケズリ、ナデ	12.0/12		口縁部外面に 一部スス付着
67		SI76		弥生土器	甕	14.6	18.2		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、 ナデ、ヨコナデ	ハケメ	9.7/12		スス付着(外 面)
68		SI76		弥生土器	甕	14.4	17.2		密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	ハケメ、ナデ+指頭 圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ、 ヨコナデ+指頭圧痕、ハ ケメ	5.4/12		
69		SI76		弥生土器	甕	11.7	14.5		密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ、 ハケ	2.6/12		
70		SI76		弥生土器	甕	15.2	13.1		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、 ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	6.0/12		
71		SI76		弥生土器	甕	15.7	7.5		密	良	10YR6/2 灰黄褐色	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、 ハケメ後ナデ	3.0/12		
72		SI76		弥生土器	甕	13.7	8.8		密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	ナデ+指圧、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	2.0/12		スス付着(外 面)
73		SI76		弥生土器	甕	16.7	4.1		やや 密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	1.2/12		擬凹線5条
74		SI76		弥生土器	甕	17.7	3.1		密	やや 不良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		擬凹線8条、 全体的に磨滅
75		SI76		弥生土器	甕	17.7	3.8		やや 密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	3.0/12		スス付着(外 面)
76		SI76		弥生土器	甕	16.0	4.5		密	良	10YR5/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ 後ナデ	1.5/12		スス付着(外 面)
77		SI76		弥生土器	甕	14.0	7.5		やや 密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、 ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	2.5/12		
78		SI76		弥生土器	甕	14.0	5.9		密	やや 不良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ナデ+指圧、ナデ	ナデ	4.7/12		
79		SI76		弥生土器	甕	21.9	4.4		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	1.0/12		
80		SI76		弥生土器	甕	16.3	6.6		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、 ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ・ 一部ケズリ	3.0/12		
81		SI76		弥生土器	甕	20.0	3.5		やや 密	やや 良	10YR8/4 浅黄橙色	ヨコナデ(磨滅)	ヨコナデ(磨滅)	1.5/12		
82		SI76		弥生土器	甕	17.0	5.4		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、 ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.0/12		スス付着(外 面)
83		SI76		弥生土器	甕	20.0	1.6		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		
84		SI76		弥生土器	甕	19.0	2.1		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	2.2/12		
85		SI76		弥生土器	甕	16.0	3.9		やや 粗	良	10YR4/1 褐灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.8/12		
86		SI76		弥生土器	甕	15.0	3.1		密	良	10YR6/1 褐灰色	ヨコナデ	ヨコハケ、ヨコナデ、 ハケメ	2.0/12		
87		SI76		弥生土器	甕	14.6	3.4		密	良	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	ナデ	ナデ	1.9/12		
88		SI76		弥生土器	甕	13.8	2.9		密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		口縁部外面 スス付着
89		SI76		弥生土器	甕	16.4	4.3		やや 密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ナデ、ナデ+指頭 圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	5.0/12		
90		SI76		弥生土器	甕	15.1	2.0		やや 密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.2/12		スス付着(外 面)
91		SI76		弥生土器	甕	15.5	5.5		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ハケ メ後ナデ、ヨコナデ	ハケ工具によるヨコナ デ、ヨコナデ、ハケメ	1.1/12		
92		SI76		弥生土器	甕	14.7	4.5		密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、 ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.7/12		スス付着(外 面)
93		SI76		弥生土器	甕	25.4	3.7		密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.3/12		
94		SI76		弥生土器	甕	18.0	4.9		密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、 ヨコナデ	ヨコハケ、ヨ コナデ、ハケメ	1.9/12		
95		SI76		弥生土器	甕	22.0	3.6		やや 粗	やや 不良	10YR7/3 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	2.1/12		
96		SI76		弥生土器	甕	17.7	3.1		密	良	10YR8/4 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.0/12		
97		SI76		弥生土器	甕	23.2	2.4		密	良	10YR7/3にぶい 黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		
98		SI76		弥生土器	甕	17.2	3.5		密	良	10YR6/4にぶい 黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.4/12		
99		SI76		弥生土器	甕	16.0	6.7		やや 密	良	10YR7/4にぶい 橙色	ナデ+指圧、 ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.7/12		
100		SI76		弥生土器	甕	16.3	3.9		密	良	10YR7/3にぶい 黄橙色	ナデ+指頭圧痕、 ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	1.1/12		
101		SI76		弥生土器	甕	19.7	2.7		密	良	10YR6/4にぶい 黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		

第2表　南部Ⅰ遺跡遺物観察表(3)

遺物No.	地区	遺構	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整 内面	外面	残存率 口縁部	底部	備考
101		SI76		弥生土器	甕	19.7	2.7		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		
102		SI76		弥生土器	甕	13.7	3.3		密	良	10YR5/2灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.8/12		
103		SI76		弥生土器	甕	17.0	6.6		やや粗	やや不良	10YR7/4にぶい黄橙色	磨滅、ヨコナデ	ヨコナデ、磨滅	1.8/12		
104		SI76		弥生土器	甕	16.0	10.7		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	2.0/12		
105		SI76		弥生土器	甕	16.6	4.5		やや密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	1.6/12		
106		SI76		弥生土器	甕	15.0	7.3		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ+指圧、ナデ	ナデ、ハケメ	2.1/12		
107		SI76		弥生土器	甕	15.0	4.0		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	2.0/12		
108		SI76		弥生土器	甕	17.7	4.0		密	良	10YR6/6明黄褐色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	1.0/12		
109		SI76		弥生土器	甕	15.0	4.1		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.5/12		
110		SI76		弥生土器	甕	14.0	2.5		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ハケ後ナデケシ	ハケ後ナデケシ、ナデ	1.6/12		
111		SI76		弥生土器	甕	14.0	6.0		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、ハケメ	1.6/12		スス付着(外面)
112		SI76		弥生土器	甕	12.0	3.1		やや粗	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ケメ後ナデ、ハケメ	2.0/12		沈線2条
113		SI76		弥生土器	甕		4.4	2.0	やや密	やや良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ	ハケメ、ナデ		12.0/12	全体的に磨滅
114		SI76		弥生土器	甕		2.4	7.0	密	良	10YR5/1褐灰色	ナデ	ハケメ、ナデ+指圧圧痕、ナデ		3.0/12	
115		SI76		弥生土器	甕		3.4	4.4	やや密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ	ハケメ、ナデ		3.0/12	
116		SI76		弥生土器	甕		3.7	2.0	密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ	ハケメ		7.0/12	
117		SI76		弥生土器	甕		2.2	4.8	密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ	ハケメ(磨滅)、ナデ		3.0/12	
118		SI76		弥生土器	甕		1.4	2.8	密	良	10YR5/3にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		12.0/12	
119		SI76		弥生土器	甕		1.7	3.0	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		12.0/12	
120		SI76		弥生土器	甕		2.5	6.1	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕	ヨコナデ、ナデ(はなれ砂)		12.0/12	
121		SI76		弥生土器	壺	19.3	6.1		密	良	7.5YR6/6橙色	ナデ	ナデ、ナデ	1.0/12		押引による隆帯2条
122		SI76		弥生土器	壺	23.5	6.0		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.5/12		
123		SI76		弥生土器	壺	17.7	7.7		密	良	10YR7/6明黄褐色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ハケメ、ハケメ後ナデ	1.0/12		
124		SI76		弥生土器	壺	23.6	5.2		密	良	10YR8/4浅黄橙色	ナデ	ナデ	1.8/12		
125		SI76		弥生土器	壺	22.0	4.5		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5/12		
126		SI76		弥生土器	壺		6.7		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ			
127		SI76		弥生土器	壺	32.0	6.7		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ヘラナデ	2.7/12		
128		SI76		弥生土器	壺	16.0	3.0		密	良	10YR4/2灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.5/12		
129		SI76		弥生土器	壺	13.9	9.5		密	やや良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	1.5/12		
130		SI76		弥生土器	壺		5.8		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ	ミガキ、ナデ			
131		SI76		弥生土器	壺		4.1		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色 外面 2.5YR5/4にぶい赤褐色	ナデ、ナデ+指圧	ミガキ			赤彩(外面)
132		SI76		弥生土器	壺		5.1	8.8	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		12.0/12	
133		SI76		弥生土器	壺or甕		3.0	3.8	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		6.0/12	
134		SI76		弥生土器	壺		3.1	5.5	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ナデ	ナデ、ヨコナデ、ナデ		12.0/12	
135		SI76		弥生土器	鉢	18.0	3.6		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	1.1/12		
136		SI76		弥生土器	鉢?	17.6	2.3		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	0.6/12		
137		SI76		弥生土器	鉢	12.3.	2.2		密	良	10YR6/2灰黄褐色	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ	1.5/12		スス付着(外面)
138		SI76		弥生土器	鉢	12.4	4.4		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	2.1/12		
139		SI76		弥生土器	鉢	8.7	5.5	2.2	密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ+指圧、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ、ナデ	4.5/12		
140		SI76		弥生土器	器台	8.0	9.0	11.5	密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ、ミガキ、ナデ	9.0/12		
141		SI76		弥生土器	器台	9.2	7.7	10.8	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ後ナデ、指圧、ナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ、ヨコナデ、ミガキ、ナデ	10.0/12		
142		SI76		弥生土器	器台	8.0	3.8		密	やや良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	1.2/12		
143		SI76		弥生土器	器台		4.5		密	良	10YR4/1褐灰色	ハケメ、ナデ	ミガキ			透孔5孔
144		SI76		弥生土器	器台		4.7		密		10YR7/3にぶい黄橙色 赤彩 10R4/6赤色	ナデ+指頭圧痕、ナデ、ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ			赤彩
145		SI76		弥生土器	器台		2.8		密	やや良	10YR8/3浅黄橙色	ナデ	ナデ			
146		SI76		弥生土器	器台		6.3	9.8	密	やや良	10YR7/6明黄褐色 赤彩外面2.5YR4/6赤褐色／内面2.5YR6/6橙色	ヨコナデ、しぼり痕、ナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ		1.4/12	赤彩
147		SI76		弥生土器	高杯	26.7	6.8		密	良	10YR7/4にぶい黄褐色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	7.0/12		赤彩
148		SI76		弥生土器	高杯	23.2	3.7		密	良	10YR6/2灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.5/12		
149		SI76		弥生土器	高杯	25.7	2.4		密	良	10YR5/4にぶい黄褐色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	0.6/12		
150		SI76		弥生土器	高杯	14.7	5.5		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色 赤彩 10R4/8赤色	ミガキ	ミガキ	0.8/12		赤彩

第2表　南部Ⅰ遺跡遺物観察表(4)

遺物No.	地区	遺構	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整 内面	外面	残存率 口縁部	底部	備考
150		SI76		弥生土器	高杯	14.7	5.5		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色 赤彩 10R4/8赤色	ミガキ	ミガキ	0.8/12		赤彩
151		SI76		弥生土器	高杯		2.5		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ミガキ	ミガキ、列点文、ハケメ後ミガキ			
152		SI76		弥生土器	高杯か鉢	13.8	5.0		密	良	10YR5/3にぶい黄褐色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	1.0/12		
153		SI76		弥生土器	高杯	14.0	2.7		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色 赤彩 2.5YR3/6暗赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		赤彩(外面)
154		SI76		弥生土器	高杯	16.2	7.4		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色 赤彩 10R4/6赤色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	7.3/12		赤彩
155		SI76		弥生土器	高杯	16.8	5.8		密	やや良	10YR6/6橙色	磨滅	磨滅	0.5/12		赤彩
156		SI76		弥生土器	高杯		3.5		密	良	10YR8/2灰白色					
157		SI76		弥生土器	高杯		5.1		密	良	10YR7/2にぶい黄橙色	ナデ	ミガキ			穿孔5ケ所
158		SI76		弥生土器	高杯		2.4		密	良	10YR8/3浅黄橙色	ナデ	ナデ			
159		SI76		弥生土器	高杯		3.0	19.4	密	やや良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		1.8/12	
160		SI76		弥生土器	高杯・器台		3.0	17.2	密	やや不良	10YR8/3浅黄橙色	ナデ	ナデ		2.5/12	透孔4孔か
161		SI76		弥生土器	高杯		3.7	12.2	密	良	5YR6/6橙色	ヨコナデ	ハケメ後ミガキ、ヨコナデ		2.4/12	
162		SI76		弥生土器	高杯		8.2	9.2	密	良	5YR5/6明赤褐色 赤彩 10R4/8赤色	しぼり痕	ナデ		6.0/12	赤彩(外面)
163		SI76		弥生土器	蓋		3.9	10.7	密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、ハケメ後ナデ	3.0/12		赤彩:外面2.5YR5/6明赤褐色／内面5YR6/6橙色
164		SI76		弥生土器	蓋	5.9	3.4		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	9.5/12		
165		SI76		弥生土器	蓋		2.6		密	良	10YR8/3浅黄橙色					赤彩(？)
166		SI76		弥生土器	蓋？	9.6	1.2		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ、ナデ	ナデ、ヨコナデ	1.1/12		擬凹線2条、赤彩(外面)
167		SI76		弥生土器	蓋	4.5	2.4		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色 赤彩:2.5YR4/8赤褐色	ナデ	ナデ	5.0/12		赤彩(外面)
168		SI76		弥生土器	小型坩型	10.7	5.9		密	やや良	10YR7/4にぶい黄橙色			1.0/12		
169		SI76		弥生土器	坩型土器	11.2	3.1		密	良	10YR4/1褐灰色	ミガキ、ヨコナデ、	ヨコナデ、ミガキ、ヘラナデ、ハケメ後ミガキ	1.8/12		
170		SI76		弥生土器	台付鉢		3.1	4.7	密	良	10YR8/3浅黄橙色	ナデ	ナデ、ナデ+指頭圧痕			赤彩
171		SI82		弥生土器	甕	20.0	3.0		密	良	10YR5/6黄褐色	ナデ、ヨコナデ(磨滅)	ヨコナデ(磨滅)	0.9/12		
172		SI82-P1		弥生土器	甕	14.0	3.5		密	良	10YR5/8明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.6/12		スス付着(外面)
173		SI82-P1		弥生土器	壺	13.2	5.5		密	やや不良	7.5YR7/4にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	5.0/12		
174		SI82		弥生土器	壺		4.7		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色 赤彩:10R4/6赤色	ナデ	ハケメ後ナデ、ヨコナデ			赤彩(外面)
175		SI82-P1		弥生土器	壺	32.4	7.2		やや密	やや良	10YR7/6橙色	ヨコナデ	ヨコナアデ	0.1/12		
176		SP33		弥生土器	甕	13.0	3.6		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケメ、ヨコナデ	ヨコハケ、ヨコナデ、ハケメ	1.8/12		
177		SP47		弥生土器	壺	29.7	2.5		密	良	10YR7/2にぶい黄橙色	ヨコナデ、列点文	列点文、ヨコナデ	0.8/12		列点文
178		SI42		弥生土器	高杯	17.8	4.3		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ(磨滅)	2.1/12		
179		SK43		弥生土器	甕	16.8	6.1		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、、ハケメ	10.0/12		擬凹線6条
180		SK43		弥生土器	甕	17.7	4.3		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ	0.8/12		擬凹線6条
181		SK43		弥生土器	甕	18.0	4.8		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	0.9/12		
182		SK43		弥生土器	甕		3.7		密	良	10YR5/4にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ			
183		SK43		弥生土器	甕	12.0	2.4		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.1/12		
184		SK43		弥生土器	甕		2.8	2.8	密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ハケメ	ハケメ、ナデ		12.0/12	スス付着(外面)
185		SK43		弥生土器	甕		1.8	2.6	密	良	10YR7/6明黄褐色	ナデ	ナデ(磨滅)		6.0/12	
186		SK43		弥生土器	甕		1.5	2.4	やや密	良	10YR3/2黒褐色	ナデ	ナデ？		12.0/12	全体的に磨滅
187		SK43		弥生土器	甕		2.0	2.8	密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	6.3/12		
188		SK43		弥生土器	壺	14.4	4.3		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.7/12		擬凹線6条
189		SK43		弥生土器	壺	10.0	4.0		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.1/12		擬凹線9条
190		SK43		弥生土器	壺		3.8		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ	ヨコナデ			擬凹線6条
191		SK43		弥生土器	壺	12.0	3.2		密	良	5YR6/6橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	3.6/12		擬凹線4条
192		SK43		弥生土器	壺	13.1	5.6		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	3.3/12		
193		SK43		弥生土器	壺		5.1	2.5	密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ	ハケメ、ナデ		12.0/12	
194		SK43		弥生土器	壺		2.4	5.2	密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ	ヨコナデ、ケズリ		3.0/12	
195		SK43		弥生土器	器台		3.7		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色 赤彩:2.5YR5/8明赤褐色	ナデ	ナデ			擬凹線3条、赤彩(内面)
196		SK43		弥生土器	高杯	25.7	2.0		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ミガキ	ミガキ	1.0/12		
197		SK43		弥生土器	高杯		4.8		密	良	10YR6/6明黄褐色	ナデ	ミガキ、ヨコナデ、ミガキ			
198		SK43		弥生土器	高杯		4.8		密	良	10YR8/4浅黄橙色	ナデ、しぼり痕	ナデ			
199		SK43		弥生土器	蓋		3.8		密	やや良	10YR7/4にぶい黄橙色	ミガキ、ナデ	ナデ			赤彩(外面):2.5YR5/4にぶい赤褐色
200		SK50		弥生土器	甕		4.0	4.4	密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ	ハケメ、ナデ		3.3/12	

第2表　南部Ⅰ遺跡遺物観察表(5)

遺物No.	地区	遺構	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整 内面	外面	残存率 口縁部	底部	備考
201		SK50		弥生土器	無頸壺	8.4	3.6		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、ハケメ後ミガキ	2.0/12		赤彩(外面)
202		SK50		弥生土器	高杯	17.7	3.1		密	やや良	10YR8/2灰白色	ナデ	ナデ	2.9/12		
203		SK58		弥生土器	甕	18.2	6.8		やや密	やや良	10YR8/4浅黄橙色	カズリ、ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ(磨滅)	3.0/12		擬凹線7条、スス付着(内面、口縁部外面)
204		SK58		弥生土器	甕		1.3	4.0	密	良	10YR5/2灰黄褐色	ナデ	ナデ		2.5/12	
205		SK58		弥生土器	壺	17.7	4.2		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.9/12		
206		SK58		弥生土器	壺	21.0	8.8		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	3.1/12		
207		SK58		弥生土器	高杯		5.5		密	良	10YR7/2にぶい黄橙色	ナデ、しぼり痕	ミガキ			
208		SK73		弥生土器	高杯	31.0	4.2		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色　赤彩:10R 5/8赤色	ヨコナデ、ミガキ?(磨滅)、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	1.7/12		赤彩
209		SK73		弥生土器	高杯	29.0	4.3		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	0.9/12		
210		SK73		弥生土器	高杯		2.4		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ	ナデ			擬凹線2条
211		SK78		弥生土器	高杯		2.1		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	磨滅	ミガキ、ナデ			
212		SK78		弥生土器	甕	39.4	3.2		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	0.6/12		
213		SD72		弥生土器	甕	17.7	5.3		やや密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.9/12		胎土分析:東海産
214	北側肩部より67.5～73.5m	SD102	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	13.6	3.0		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ、ヨコナデ、ハケメ	1.5/12		スス付着(外面)
215	108m～112m	SD102	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	28.0	6.0		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ハケメ後ヨコナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	0.4/12		
216		SD101	Ⅰ(上)層	弥生土器	壺	15.6	33.0		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ+指頭圧痕、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.0/12		
217		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	甕	19.0	4.1		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ、ハケメ後ヨコナデ	ヨコハケ、ハケメ後ヨコナデ、ハケメ	4.5/12		スス付着(外面)
218		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	甕	19.0	3.3		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	0.8/12		
219		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	甕	15.0	2.3		密	良	10YR5/2灰黄褐色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	1.0/12		
220		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	甕		5.0	1.1	密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ後一部ミガキ	ハケメ後ナデ		12.0/12	
221		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	壺	28.5	7.2		密	良	7.5YR5/6明褐色	ハケメ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ、ハケメ	0.4/12		有段口縁大型甕
222		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	壺	17.4	8.0		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	1.3/12		
223		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	壺	17.0	4.3		密	良	10YR5/2灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.9/12		
224		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	壺	18.0	2.9		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ	ヨコナデ	1.3/12		スス付着(外面)
225		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	壺	6.5	13.4		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ(剥離)	12/12		
226		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	壺		3.4	6.2	密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ	ミガキ、ナデ		3.3/12	
227		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	壺		6.2	7.0	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケメ後ユビナデ	ハケメ、ナデ		12.0/12	
228		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	装飾器台	19.6	12.9		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ、ミガキ+指頭圧痕	1.7/12		穿孔12ケ所(受部)／4ケ所(台部)
229		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	器台	8.9	9.7	12.9	密	良	7.5YR6/4にぶい橙色	ヨコナデ、ミガキ、ハケメ後ナデ、しぼり	ヨコナデ、ミガキ、ヨコナデ	4.3/12		
230		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	器台		7.2	12.2	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ、ナデ	ミガキ、ヨコナデ		10.5/12	穿孔3ケ所
231		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	高杯	15.8	6.7		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	0.9/12		赤彩(外面)
232		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	高杯		7.1		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ケズリ、ナデ	ミガキ			穿孔4ケ所
233		SD103	Ⅲ(下)層	弥生土器	高杯		4.2		密	良	10YR7/2にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ナデ	ミガキミガキ			
234	北側肩部より59.5～63.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	器台		81.5	13.9	密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ		12.0/12	穿孔4ヶ所
235	北側肩部より59.5～63.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	高杯		5.0		密	良	10YR5/6黄褐色		ミガキ			赤彩、穿孔5ケ所
236	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	13.6	11.7		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.1/12		スス付着(外面)
237	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	19.6	4.1		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	0.3/12		
238	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	19.3	4.8		密	良	10YR5/2灰黄褐色	ナデ、ハケメ+指頭圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	5.5/12		スス付着(外面)
239	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	17.4	3.7		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ、ヨコナデ、ハケメ	1.0/12		スス付着(外面)
240	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	17.0	2.4		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ	1.1/12		スス付着(外面)
241	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	15.5	1.9		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		
242	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	14.8	5.0		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	2.0/12		スス付着(外面)
243	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	15.6	2.9		密	良	10YR5/4にぶい黄褐色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ、ヨコナデ	0.8/12		
244	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕		6.6		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ後ナデ	ヨコナデ、ハケメ			スス付着(外面)
245	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕		6.7		密	良	10YR6/6明黄褐色	ハケメ後ナデ+指頭圧痕、ナデ	ヨコナデ、ナデ			
246	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	31.4	16.3		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ+指頭圧痕、ハケメ後ナデ、ミガ	ヨコナデ、ハケメ後一部ミガキ	2.0/12		大型甕、スス付着(外面)
247	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	30.0	3.0		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ミガキ	ヨコナデ	0.5/12		スス付着(外面)
248	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕		3.5		密	良	10YR7/6明黄褐色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	0.1/12		スス付着(外面)
249	北側肩部より67.5～73.5m、北側肩部	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕		4.2		密	良	10YR7/6明黄褐色	ハケメ後ナデ+指頭圧痕、ヨコナデ	ハケメ		12.0/12	スス付着(外面)
250	北側肩部より67.5～73.5m	SD103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕		3.1	2.6	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ+指頭圧痕	ハケメ			

第2表　南部Ⅰ遺跡遺物観察表(6)

遺物No.	地区	遺構	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整 内面	外面	残存率 口縁部	底部	備考
250	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕		3.1	2.6	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケ後ナデ+指頭圧痕	ハケメ			
251	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕		9.5	7.4	密	良	10YR5/2灰黄褐色	ハケメ一部ミガキ	ハケメ一部ミガキ、ナデ		1.0/12	
252	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕		4.6	3.2	密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ヘラナデ	ハケメ+ヘラナデ、ナデ		6.0/12	底部穿孔土器
253	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	11.7	2.3		密	良	10YR6/6明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	2.0/12		
254	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	16.0	6.8		密	良	10YR6/6明黄褐色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.9/12		
255	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	18.4	5.3		密	良	10YR7/3にぶい黄褐色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	0.8/12		
256	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺		5.0		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ミガキ	ミガキ、ハケメ後ミガキ			
257	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	12.7	10.8		密	良	7.5YR6/6橙色	ミガキ、ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ、ヨコナデ、ミガキ	2.5/12		赤彩(外面):5YR5/6明赤褐色
258	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	12.4	5.9		密	良	7.5YR6/6橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	2.7/12		擬凹線3条
259	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	11.8	4.1		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色 赤彩 10R4/6赤色	ナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	0.8/12		小型丸底壺、口縁部内面赤色
260	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺		5.2		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ一部ミガキ+指頭圧痕	ミガキ			
261	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺		3.7	7.6	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ	ナデ、ヨコナデ、ナデ		12.0/12	
262	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	鉢	14.0	6.8		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	5.6/12		
263	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	器台	17.7	1.3		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	0.8/12		赤彩(外面):10R4/6赤色
264	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	装飾器台		3.5		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ミガキ	ミガキ			穿孔8ケ所、赤彩(外面):2.5YR4/8赤褐色
265	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	器台	17.7	5.4		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	5.5/12		赤彩(外面):10R4/8赤色
266	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	高杯		6.4		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ、しぼり痕	ナデ、ミガキ			赤彩(外面)
267	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	高杯		5.0	9.4	密	良	7.5YR6/6橙色 赤彩 10R4/6赤色	ヨコナデ、しぼり痕	ナデ、ミガキ、ヨコナデ		2.0/12	赤彩(外面):10R4/8赤色
268	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	高杯か器		1.0	11.5	密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ		1.9/12	
269	北側肩部より67.5～73.5m	SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	高杯		1.6	14.6	密	良	10YR6/6明黄褐色 赤彩 10R3/3暗赤褐色	ヨコナデ	ハケメ、ヨコナデ、赤彩		1.2/12	
270		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	22.0	5.6		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.1/12		
271		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	20.0	7.0		密	良	10YR7/2にぶい黄橙色	ハケメ、ナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.0/12		スス付着(外面)
272		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	19.8	5.5		密	良	10YR5/3にぶい黄褐色	ハケメ、ナデ+指頭圧痕、ハケメ後ナデ	ヨコナデ、ハケメ	2.1/12		
273		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	19.6	3.8		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコナデ一部ハケメ	2.0/12		スス付着(外面)
274		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	16.8	4.9		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	0.1/12		
275		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	15.0	4.3		密	良	10YR4/2灰黄褐色	ハケメ後ナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.5/12		
276		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	15.8	5.2		密	良	10YR6/6明黄褐色	ハケメ、ヨコナデ+指頭圧痕	ヨコナデ+指頭圧痕、ハケメ	1.5/12		スス付着(外面)
277		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	16.6	2.1		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.2/12		スス付着(外面)
278		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	17.6	2.9		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.1/12		
279		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	16.0	2.8		密	良	10YR6/6明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.7/12		外面一部剥離
280		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	13.0	2.3		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	1.0/12		スス付着(外面)
281		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	22.8	4.7		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、磨滅	0.9/12		
282		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	32.5	7.8		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ、ヨコナデ、ハケメ	6.0/12		スス付着(外面)
283		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕	27.7	6.1		密	良	10YR6/6明黄褐色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ハケメ	4.5/12		スス付着(外面)
284		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	甕か	38.0	1.7		密	良	10YR5/6黄褐色	ミガキ	ヨコナデ	0.5/12		
285		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	15.4	4.6		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ、ヨコナデ、ミガキ	3.0/12		
286		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	13.0	2.5		密	良	10YR5/4にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.5/12		スス付着(外面)
287		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	27.7	6.1		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後一部ミガキ、ヨコナデ	1.3/12		
288		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	14.2	4.5		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	0.2/12		
289		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	17.4	3.5		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	2.0/12		
290		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	15.0	3.5		密	良	10YR6/6明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.0/12		
291		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	14.0	3.6		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	1.1/12		
292		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺	9.7	4.3		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	1.2/12		
293		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺		6.1		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ハケメ後ナデ	ナデ			赤彩(外面):10R4/8赤色／10R4/6赤色
294		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺か		5.0	5.4	密	良	10YR5/4にぶい黄褐色	ユビナデ	ヨコナデ、ナデ		12.0/12	
295		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	壺		4.2		密	良	10YR7/3にぶい黄褐色	ハケメ後ナデ	ヨコナデ、突帯貼付時ナデ、ナデ			擬凹線8条
296		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	鉢	17.0	5.3		密	良	10YR6/2灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.5/12		
297		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	鉢	14.0	3.4		密	良	5YR5/6明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.0/12		
298		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	鉢類	15.6	2.5		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.0/12		赤彩(外面):10R4/6赤色
299		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	鉢	11.4	5.3		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.5/12		スス付着(外面)
300		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	装飾器台	21.8	2.2		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ	3.5/12		透孔、赤彩:10R4/8赤色

第2表　南部Ⅰ遺跡遺物観察表(7)

遺物No.	地区	遺構	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整 内面	外面	残存率 口縁部	底部	備考
301		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	装飾器台		4.7		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ミガキ	ナデ			穿孔18ケ所、赤彩:10R5/8赤色
302		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	器台		4.4		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ミガキ	ミガキ			擬凹線5条、赤彩:10R4/6赤色
303		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	器台	13.4	2.3		密	良	10YR6/2灰黄褐色	ミガキ	ミガキ	1.5/12		
304		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	高杯	21.7	2.2		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	0.9/12		赤彩:10R4/6赤色
305		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	器台	9.3	2.1		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	2.0/12		赤彩:10R4/6赤色
306		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	高杯		6.7		密	良	10YR4/2灰黄褐色	ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ、ミガキ			擬凹線3条
307		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	高杯		2.5		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ	ミガキ、ナデ			
308		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	高杯		4.9		密	良	10YR6/6明黄褐色	ナデ+指頭圧痕	ナデ、ナデ一部ミガキ			
309		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	高杯か器		4.9	14.0	密	良	7.5YR6/6橙色	ヨコナデ、ハケメ	ミガキ、ヨコナデ		1.0/12	赤彩(外面)
310		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	台付鉢		5.1	9.4	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ヨコナデ	ミガキヨコナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ		1.6/12	赤彩(杯部内面／脚部外面):10R4/8赤
311		SD 103	Ⅱ(中)層	弥生土器	台付鉢か		3.5	8.1	密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ		3.0/12	脚台部
312	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	21.0	10.1		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ+指頭圧痕、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ、ケズリ後ハケメ	0.9/12		
313	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	17.6	14.2		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコハケ、ヨコナデ、ハケメ(磨滅)			スス付着(外面)
314	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	18.4	7.5		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ+指頭圧痕、ハケメ後ナデ	3.3/12		スス付着(外面)
315	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	16.8	13.6		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ+指頭圧痕	12/12		スス付着(外面)
316	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	18.6	12.6		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ、ヨコナデ、ハケメ	4.5/12		
317	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	17.8	9.9		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	5.0/12		
318	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	16.0	13.8		密	良	10YR5/3にぶい黄褐色	ハケメ後ナデ、ハケメ、ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ、ハケメ			スス付着(外面)
319	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	21.4	3.5		密	良	10YR6/6明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.1/12		
320	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	21.3	2.6		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ　赤彩	0.6/12		
321	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	20.6	2.9		密	良	10YR5/3にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.4/12		スス付着(外面)
322	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	18.0	3.1		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.7/12		口頸部外面スス付着
323	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	19.2	3.4			良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコハケ、ヨコナデ　スス付着(外面	2.0/12		スス付着(外面)
324	69m～72m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	18.0	4.3		密	良	10YR7/6明黄褐色	ナデ+指頭圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ	1.1/12		
325	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	16.0	3.5		やや密	やや良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ(磨滅)	ヨコナデ(磨滅)			
326	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	16.0	4.5		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	1.6/12		
327	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	14.4	2.1		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	2.0/12		スス付着(外面)
328	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	16.0	3.0		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.5/12		
329	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	17.0	5.9		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.0/12		スス付着(外面)
330	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	18.0	2.9		密	良	10YR5/6黄褐色	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.0/12		
331	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	15.8	7.8		密	良	7.5YR6/6橙色	ハケメ後ナデ+指頭圧痕、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.0/12		
332	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	19.0	4.4		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	2.3/12		
333	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	12.7	12.5	5.5	密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ナデ	3.0/12		スス付着(外面)
334	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕		2.8	4.8	密	良	10YR5/4にぶい黄褐色	ナデ	ハケメ後ナデ		12.0/12	
335	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕		1.9	2.4	密	良	7.5YR5/4にぶい褐色	ナデ+指頭圧痕	ハケメ、ナデ		12.0/12	スス付着(外面)
336	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	11.8	16.8	7.4	密	良	10YR7/2にぶい黄橙色	ヨコナデ、ナデ+指頭圧痕、ハケメ後ナデ+指頭圧痕	ヨコナデ、ハケメ、ハケメ+ヨコハケ	4.8/12		東海系S字型口縁台付甕(廻間Ⅱ式)、小型品
337	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕？		3.3	7.3	密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕	ナデ		12.0/12	
338	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	壺	20.4	8.4		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ後ナデ+指頭圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ、ヨコナデ後ハケメ+指頭圧痕	1.6/12		
339	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	壺	12.4	4.7		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	5.5/12		
340	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	鉢	16.0	3.3		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	1.5/12		
341	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	壺	24.0	1.8		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.3/12		
342	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	高杯	17.8	5.5		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.1/12		赤彩:10R4/6赤色
343	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	高杯	19.9	15.0	14.5	密	良	10YR7/3にぶい黄橙色　赤彩:10R4/6赤色	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、しぼり痕、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	4.2/12		5ケ所穿孔、赤彩色(外面)、杯部内面赤彩
344	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	高杯		3.4	17.8	密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ		1.1/12	スス付着(内外面)
345	北側肩部より27.5～31.5m	SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	蓋		6.6		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ナデ+指頭圧痕	ナデ、ナデ一部ミガキ、ヨコナデ			
346		SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	17.5	5.5		密	良	10YR6/1褐灰色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	0.9/12		
347		SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	19.6	1.8		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ、ヨコナデ+指頭圧痕	0.9/12		
348		SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	甕	20.0	4.3		密	良	10YR5/3にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	2.6/12		
349		SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	壺		35.0	6.6	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ナデ、ハケメ、ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ		12.0/12	擬凹線10本、スス付着(口縁部内面)、外面一部剥離
350		SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	装飾器台	17.9	5.7		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	2.1/12		16カ所穿孔

第2表　南部Ⅰ遺跡遺物観察表(8)

遺物No.	地区	遺構	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整 内面	外面	残存率 口縁部	底部	備考
351		SD 103	Ⅰ(上)層	弥生土器	高杯か器	17.7	3.0		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	0.5/12		
352		SD 103		弥生土器	甕	18.0	2.6		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	0.9/12		
353	88～92m	SD 103		弥生土器	壺	33.8	4.2		密	やや良	10YR6/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.8/12		
354	B1-2・2北 12～15m	SD 108		弥生土器	甕		2.1		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ	ヨコナデ、ナデ		4.6/12	
355	基点から121～129m		包含層	弥生土器	甕	20.1	3.6		密	良	2.5YR5/8明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	0.1/12		
356	基点から210～214m		包含層	弥生土器	甕	22.1	4.2		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	1.3/12		
357	基点から97.6m西壁付近		包含層	弥生土器	甕	16.8	4.4		密	良	10YR7/2にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	3.6/12		沈線1条
358	基点から97m～103m		包含層	弥生土器	甕	16.0	4.3		やや密	やや良	10YR8/4浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ	1.0/12		
359	基点から98m西壁付近		包含層	弥生土器	甕	17.6	11.1		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	8.0/12		
360	104～119m		包含層	弥生土器	甕	16.0	2.6		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.3/12		
361	基点から58～69m		包含層	弥生土器	甕	15.7	5.0		密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	ナデ+指頭圧痕、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	0.9/12		
362	基点から104m～109m		包含層	弥生土器	甕	21.7	3.3		やや密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	0.9/12		スス付着(外面)
363	基点から72～76m		包含層	弥生土器	甕	14.0	5.5		密	良	10YR5/4にぶい黄褐色	ナデ+指頭圧痕、ヨコナデ	ヨコハケ、ヨコナ	0.8/12		スス付着(外面)
364	基点から121～129m		包含層	弥生土器	甕	15.4	3.7		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	1.0/12		
365	基点から210～214m		包含層	弥生土器	甕		2.2	3.4	密	良	10YR5/2灰黄褐色	ハケメ後ナデ	ナデ		12.0/12	
366	基点から121～129m		包含層	弥生土器	甕	32.2	7.7		やや密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	2.3/12		擬凹線8条、全体的に磨滅
367	マンホールB 4-1			弥生土器	甕	31.7	7.7		密	良	10YR5/3にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	2.6/12		擬凹線18条
368	基点から97.6m西壁付近		包含層	弥生土器	壺	29.2	7.0		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ハケメ後ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1.1/12		
369	基点から97.6m西壁付近		包含層	弥生土器	壺	10.7	5.1		密	良	10YR7/4にぶい黄褐色	ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ミガキ、ヨコナデ	4.5/12		
370	基点から150～160m		包含層	弥生土器	壺		1.9		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色		羽状刺突、ナデ			東海系、口唇部に羽状刺突
371	基点から97.6m西壁付近		包含層	弥生土器	壺		4.8	6.0	密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ナデ一部ミガキ	ハケメ後ミガキ、ハケメ後ヨコナデ、ナデ		5.0/12	
372	マンホールB 4-2			弥生土器	鉢	19.7	9.4		密	良	5YR5/6明赤褐色	ミガキ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	0.1/12		
373	マンホールB 4-2～B4-3		包含層	弥生土器	鉢	11.1	6.5	5.0	密	やや良	10YR7/3にぶい黄橙色	ハケメ後ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、指圧後ナデ、ナデ	6.0/12		
374	基点から137～140m		包含層	弥生土器	器台?	18.0	2.7		密	良	10YR6/4にぶい黄橙色 赤彩:10R4/8赤色	ミガキ	ミガキ、ヨコナデ	0.8/12		赤彩
375	基点から58～69m		包含層	弥生土器	高杯	24.6	3.3		密	良	10YR6/6明黄褐色	ナデ	ナデ	0.5/12		
376	基点から24～31m		包含層	弥生土器	高杯	24.6	5.9		密	良	10YR8/3浅黄橙色	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ、ヨコナデ	0.4/12		
377	基点から87～93m		包含層	弥生土器	高杯		6.9		密	良	7.5YR6/6橙色	ナデ、しぼり痕	ミガキ、ナデ、ミガキ			
378	基点から78～86m		包含層	弥生土器	高杯		5.9		密	良	10YR6/1褐灰色	ナデ、しぼり痕	ナデ			
379	マンホールB 4-2			弥生土器	高杯		3.4		密	良	10YR7/2明褐灰色	ナデ、ハケメ	ナデ			穿孔4ケ所
380	基点から28～34m		包含層	弥生土器	高杯か器		1.5	11.7	密		10YR6/2灰黄褐色 赤彩:10R5/6赤色	ヨコナデ	ヨコナデ		1.0/12	赤彩(外面)
382	基点から58～69m		包含層	土師器	内黒椀		1.5	7.1	密	良	10YR5/3にぶい黄褐色 内面色調:10YR 3/1黒褐色	ミガキ　黒色処理	高台貼付時ナデ、回転糸切り		2.5/12	
383	基点から16～24m		包含層	土師器	甕	13.2	5.5		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	ロクロナデ、カキメ、ロクロナデ	ロクロナデ	1.1/12		
384	基点から10m～16m		包含層	土師器	甕	17.3	7.6		密	良	7.5YR7/4にぶい橙色	カキメ、ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	0.7/12		
385		SP33		土師器	甕	26.2	2.0		密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	カキメ後ロクロナデ	ロクロナデ	0.4/12		
386	基点から0m～12m		包含層	土師器	鍋	36.0	3.4		密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	0.7/12		
387	基点から16m～24m		包含層	須恵器	蓋	13.5	1.8		密	良	10BG6/1青灰色	ロクロナデ	つまみ貼付時ナデ、ロクロナデ	2.0/12		
388	基点から78m～86m		包含層	須恵器	蓋	12.7	1.9		密	良	N7/0灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	2.3/12		
389		SD10		須恵器	杯B		2.9	10.0	密	良	10G7/1明緑灰色	ロクロナデ	ロクロナデ、高台貼付時ナデ		0.1/12	
390	基点から78m～86m		包含層	須恵器	杯	13.8	1.7		密	良	10YR7/2にぶい黄橙色	ロクロナデ	ロクロナデ	0.8/12		
391		SD 103	Ⅰ(上)層	須恵器	壺				密	良	5G5/1緑灰色	当て具痕(同心円)	タタキ痕			
392	マンホールB 1-1西3.5～13m	SX 101	褐灰色砂層	須恵器	甕・瓶類				密	良	10G5/1緑灰色	同心円痕	タタキ痕			
393	基点から16～24m		包含層	須恵器	瓶・甕類		5.0		密	良	10YR7/2にぶい黄橙色	カキメ後同心円あて具痕	カキメ後タタキ			
394		SK 102	Ⅰ(上)層	瀬戸美濃	椀		2.2	4.2	密	良	10YR8/3浅黄橙色	ロクロナデ	削り出し高台		12.0/12	黄瀬戸、釉調:灰釉7.5Y7/3浅黄色
395	マンホール		包含層	肥前陶器	陶胎染付				密	良	5BG4/1暗青灰色	ロクロナデ	ロクロナデ、削り出し高台		3.0/12	釉調:透明釉5B7/1明青灰色
396	基点から72～76m		包含層	肥前	擂鉢	33.0	2.6		密	良	2.5YR4/6赤褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	0.6/12		釉調:鉄釉7.5YR2/3極暗褐色
397	基点から0～6m		包含層	伊万里	椀	4.9	3.8		密	良	10YR8/1灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5/12		釉調:透明釉
398		SK 102	Ⅰ(上)層	伊万里	皿	11.0	1.7		密	良	N8/0灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	1.3/12		釉調:透明釉

遺物No.	地区	遺構	層位	種類	法量(cm・g) 長さ	幅	重量	石材	使用痕 左側面	正面	右側面	裏面	備考
381	基点から78～86m		包含層	凹石	15.9	12.4	867.5	緑色凝灰岩	敲打痕	敲打痕			

Ⅴ. 総括

1. 遺構・遺物について

北側調査区から竪穴建物 11 棟のほか、溝 4 条、土坑 14 基、ピット 57 基を検出した。周辺で行われた調査では、平成 8 年度に円形の竪穴建物 1 棟を確認した〔婦中町教委 1996〕。平成 10 年度の試掘調査では北側調査区周辺で竪穴建物 6 棟を確認し、遺構・遺物の密度から、最盛期である月影Ⅱ式～白江式（弥生時代終末期～古墳時代初頭）の集落が北側調査区の周辺にあると推察した〔婦中町教委 2000〕。今回北側調査区から 11 棟もの竪穴建物を検出したことは、これを裏付けるものといえる。

一方、南側調査区では自然流路 5 条、溝 3 条、土坑 3 基、ピット 3 基を検出した。このうち弥生土器が出土したのは、溝SD101・SD102、自然流路SD103・SD108 である。特筆すべき遺構として、多量の弥生土器がまとまって出土した自然流路SD103 がある。

SD103 は検出長 117.9m、検出幅 28.7mを測るきわめて大型の自然流路であり、現在の井田川から約 0.7 km西に位置していることから、井田川の旧河道であった可能性が指摘できる。その北側肩部から南へ 5.4m～約 50m（マンホールB2－1）の範囲の土器溜まりからは、多量の白江式期（漆町編年 4～6 群）の弥生土器が出土した。器種は、大型の甕・壺、高杯、器台、坩型土器、鉢、蓋があり、赤彩されているものが多く、祭祀の一環として自然流路に土器を廃棄する水辺の祭祀に用いられた可能性がある。平成 8 年度調査区でも古府クルビ式期の溝に土器が廃棄されており、水辺の祭祀が行われていたことを示唆している。このことから、南部Ⅰ遺跡の集落周辺では、長期間にわたり水辺の祭祀が行われていたと考えられる。

当遺跡を含む婦負郡は、富山県内でも地域差が大きい外来系土器の受容割合について、従来から定着率が低い地域と考えられ、平成 7 ～ 11 年の試掘調査でもそれを証左している。試掘調査で外来系土器の影響が見受けられるものは、近江系受口甕、東海系広口壺、東海系もしくは畿内系高坏数点のみであり、前 2 者は在地化が進んだものである。また、布留系甕もみられない。今回の調査では、最も多量に遺物が出土したSD103 上層、北側調査区南に位置するSI76、SI82 から白江式期の畿内系器台、山陰系の有稜甕などが出土したほか外来系の土器はほとんどみられず、外来系土器の受容または交流そのものの低調さを確認した。こうしたなか、SD103 から東海系のS字状口縁台付甕が1点出土していることは興味深い出土例といえる。なお、S字状口縁台付甕の詳細については後述する。（朝田）

第3表　編年対応表

型式・様式	婦負（婦中町2003）	遺構
月影Ⅰ	Ⅱ－2	SI20、SK73
月影Ⅱ	Ⅱ－3	SI42、SI57、SK43
	Ⅱ－4	SI53、SI82、SK58
白江	Ⅲ	SI76、SD101、SD102、SD103

2. 噴砂痕について

今回の調査で液状化現象による噴砂痕〔寒川 1992〕を 2 箇所で確認した。1箇所は、北側調査区の2区のSI18の北側で確認した（A地点）。1箇所は、北側調査区の最南端で、広域農道・富山中部スーパー農道と市道島田熊野道線の交差点に設置されたマンホールの掘削坑の壁面で確認した（B地点）。

本遺跡では、過去の調査で噴砂痕を確認しており、今回の調査が 2 度目の確認例となる。平成 11 年度の調査では、高畠式（約 1,700 年前、古墳時代前期）の竪穴建物の床面で噴砂痕を確認し、幅約 2 cm、検出長 4.3mを測る〔婦中町教委 2000〕。

竪穴建物の埋土断面や竪穴壁および建物周囲では、

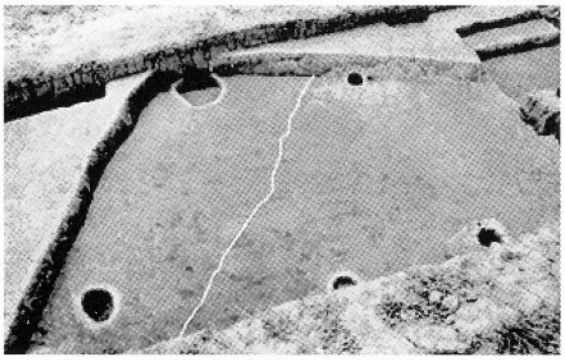


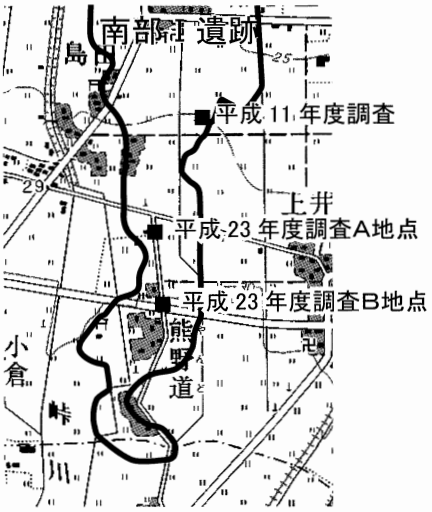
写真１　平成11年度調査の噴砂痕（白塗り）

噴砂痕は確認していない。このことから、噴砂痕の形成年代は、竪穴建物の開削前と考えられ、約 1,700 年前以前の地震によるものと推測する。

平成 11 年度の調査では、高畠式（約 1,700 年前、古墳時代前期）の竪穴建物の床面で噴砂痕を確認し、幅約 2 ㎝、検出長 4.3mを測る〔婦中町教委 2000〕。

竪穴建物の埋土断面や竪穴壁および建物周囲では、噴砂痕は確認していない。このことから、噴砂痕の形成年代は、竪穴建物の開削前と考えられ、約 1,700 年前以前の地震によるものと推測する。

A地点およびB地点で確認した噴砂痕について検討する。



第 32 図　噴砂検出地点位置図

A地点（第5・32 図・写真1）は、平成 11 年度調査地点から南西約 300mに位置し、遺構検出面で確認した。幅約 50 ㎝、検出長 1.3mを測る。断面観察を行っておらず、詳細な噴砂到達面は分かっていないため、A地点の噴砂痕の形成年代は不明である。

B地点（第3・33 図・図版6）は、平成 11 年度調査地点から南南西約 500mに位置する。噴砂は地山面であるにぶい黄褐色粘土質シルト層より下層から延びており、月影Ⅱ式～古府クルビ式（約 1,800 ～ 1,730 年前、弥生時代終末期～古墳時代初頭）の遺物包含層である黒褐色シルト層を突き抜けているが、その上位にある褐灰色粘土層には貫入していない。このことから、B地点の噴砂痕の成年代は、約 1,800 ～ 1,730 年前以降の地震によるものと考えられる。

平成 11 年度と平成 23 年度B地点の噴砂痕は約 500mの近距離であり、またほぼ同時期であることから、同一の地震によるものと考えると、南部Ⅰ遺跡の噴砂痕の形成年代は、約 1,800 ～ 1,700 年前の間であると推定する。

これは、平成 25 年にまとめられた「富山県内における災害遺跡」〔鹿島・三上 2013〕によれば、富山県内で確認されている地震による噴砂痕としては、県内最古の痕跡となる。

石川県では、当遺跡よりやや古い月影式期（弥生時代後期）の噴砂痕が、鶴来町（現：白山市）部入道遺跡〔鶴来町 2003〕、金沢市梅田B遺跡〔石川県教委・(財)石川県埋文 2006〕で確認されている。これは、森本・富樫断層帯の最新の一括活動によるものと考えられており、噴砂痕の形成時期は約 1,800 ～ 1,900 年前の可能性があるとしている〔平松・小阪 2013〕。

当遺跡と石川県の噴砂痕の形成年代では、時期的にはややズレてはいるがかなり近い時期であることから、同一の地震による噴砂痕の可能性がある。ただし、1 遺跡のみの検討であり、富山県内での当該期の噴砂痕の類例増加を持って、再検討する必要がある。（堀内）

3．S 字状口縁台付甕について

当遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての土器が大量に得られた。自然流路 SD103 では 1 ～ 3 層（上中下層）で土器溜を確認し、1 層の土器溜からは、白江式期の土器とともに、小型のS字状口縁台付甕（以下S字甕）が 1 点出土した。

白江式は、いわゆる布留式系土器の受容に先立って、伝統的な土器様式の系譜にある月影式が、外来系土器の波及によって大きく変化をきたす段階として捉えられる。主として東海、山陰の各要素をもつ土器があらわれ、伝統的な月影式の要素との折衷や置換がおこる〔森本 2005〕。

S字甕は、伊勢湾岸地域に起源をもち、形態の変異を伴いながら九州北部から東北まで広範囲に分布する、非常に特徴的な軽量薄甕である。オリジナルは東海地域の廻間Ⅰ式～松河戸Ⅱ式に属し、

口縁部の形態や製作技法などの変化から、赤塚次郎氏により 0 類およびA～D類に分類される〔赤塚 1996〕。0 類は初源期、A類は成立期であり、A類の段階から各地への波及が始まり、B類段階で拡散のピークを迎える。B類は、短く屈曲する口縁部をもち、口縁端部に面取りをする。肩部の横ハケが頸部に接していたものが下降し、体部は球あるいは肩が強く張る形状をなす。C類では口縁部の屈曲が大きくなり外側に拡張し、頸部に調整のための沈線をもつ。C類の段階で分布の傾向が大きく変化し、東日本ではC類古段階以降、出土が稀となる〔原田 1996〕。また、形態の特徴もさることながら、台部と体部を接合する際に台部内面に粘土を補充するという独特の製作技法があり、S 字甕全体を通して普遍的にみられる。この補充される粘土には、出土地に関わらず、三重県雲出川産の砂礫を混和することでも知られる。ただし、B類新段階以降では砂礫の産地は雲出川に限らないようである〔愛知県埋文センター 1990〕。

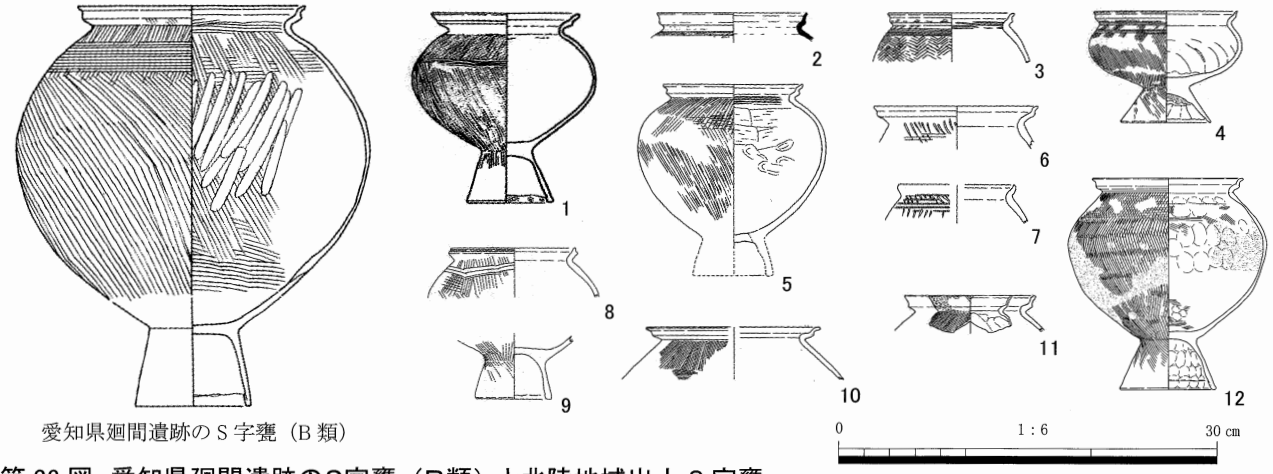
当遺跡 SD103 出土のS字甕は、口縁部が短く屈曲し、口縁端部に明確に面を取る、B類の特徴をもつ。また、B類新段階から出現しC類の指標となる、頸部の沈線が確認できる。これらの特徴から、B類新段階に位置づけられる。また、内面はハケメを用い、台部との接合部には砂礫の多い粘土を補填し、台部下端は折り返す。製作技法・形態ともオリジナルのS字甕に忠実な個体である。

一方で、北陸地域で確認されているS字甕は、在地の土器様式を変容させる重要な要素であった東海系外来土器でありながら、各遺跡での出土点数は、模倣品を含めて 1 ～数点にとどまっている。在来の土器に形式的な影響をほとんど与えず、あくまで客体的な存在である。福井・石川・富山県下におけるS字甕の主な出土遺跡を、表にまとめる。現状では全体的な点数はごくわずかであるが、石川県金沢市を中心に報告例があり、報告数が増加しつつある。

このことを踏まえて、体部および台部内面の補充部分について、胎土分析を実施した。この結果、いずれの胎土も在地産のものを使用しており、搬入品ではなく、現地で製作されたものと判明した。オリジナルのS字甕生産地域の土器製作者が来ていた、あるいは製作技術を忠実に修得した者がいたなど、土器製作者のみの移動があったと考えうる。

表の分類で「他」としたものは、S字甕の特徴をもちながら形態に変容がみられ、分類困難であることを示す。全体の傾向としては、拡散期とされるB類に属するものが多い。また、オリジナルの S 字甕が口径 18 cm前後を標準として容量の分化があるのに対し、北陸地域で出土したS字甕は口径 10 ～ 12 cm程度の小型品が多い。出土点数も非常に少なく、日用の器とは考え難い。

北陸地域におけるS字甕は、出土事例が少なく、論を講ずるには尚早である。しかし、口縁部、体部、底部、脚台部、外面調整、胎土、どこを見ても特徴のある土器であるだけに、資料の蓄積によって、集落間、地域間の様相を語る重要な鍵となることを期待したい。（橋）



愛知県廻間遺跡の S 字甕（B 類）

第 33 図　愛知県廻間遺跡のS字甕（B類）と北陸地域出土 S 字甕

1 曽万布遺跡　2 西谷遺跡　3 近岡ナカシマ遺跡　4 千田遺跡　5 ～ 7 松寺遺跡　8・9 扇谷遺跡　10 上荒屋遺跡　11 八町Ⅱ遺跡　12 南部Ⅰ遺跡

第4表　北陸地域の主なＳ字甕出土遺跡

遺跡名	県	市町村	分類					出土位置	備考
			A	B	C	D	他		
角谷遺跡	福井県	若狭町		○	○				
杉町遺跡	福井県	武生市	○						
西谷遺跡	福井県	福井市		○				不明	小型品。
曽万布遺跡	福井県	福井市		○				大溝内	小型品。
糞置遺跡	福井県	福井市		○				不明	
南吉田葛山遺跡	石川県	宝達志水町				○			
免田一本松遺跡	石川県	宝達志水町		○					
近岡ナカシマ遺跡	石川県	金沢市	○					2号溝上層	搬入か。小型品。
古府クルビ遺跡	石川県	金沢市		○					
松寺遺跡	石川県	金沢市		○				B2号土坑	在地産か。小型品。
上荒屋遺跡	石川県	金沢市			○		○	SD16上層	
千田遺跡	石川県	金沢市		○				不明	搬入品。小型品。
扇台遺跡	石川県	金沢市		○				土器溜	在地産、胴部調整が異なる。小型品。
田中A遺跡	石川県	金沢市		○			○		A類模倣
北安江遺跡	石川県	金沢市	○						
漆町遺跡	石川県	小松市					○	土坑、土器溜	山陰系口縁模倣
八町Ⅱ遺跡	富山県	富山市					○	SD09（大溝）	
南部Ⅰ遺跡	富山県	富山市		○				SD103（自然流路）土器溜	在地産、小型品。

原田1996より抜粋・加筆

引用・参考文献

愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』
赤塚次郎 1996「濃尾平野低地部における古墳時代の甕」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2006『梅田B遺跡Ⅲ』
金沢市教育委員会 1986『金沢市近岡ナカシマ遺跡』
鹿島昌也・三上智丈 2013「富山県内における災害遺跡」『越中史壇』第169・170合併号　越中史壇会
金沢市埋蔵文化財センター 1995『石川県金沢市　上荒屋遺跡Ⅰ』第2分冊　古墳時代編
金沢市埋蔵文化財センター 1997『金沢市松寺遺跡（第2次）』
金沢市埋蔵文化財センター 1999『扇台遺跡・金石本町遺跡・矢木ジワリ遺跡・夕日寺跡遺跡』
金沢市埋蔵文化財センター 2002『千田遺跡』
久保尚文 1996「第3章　婦中の中世　第2節　源平争乱と鎌倉幕府」『婦中町史』通史編　婦中町
寒川旭 1992『地震考古学　遺跡が語る地震の歴史』中公新書
寒川旭 2007『地震の日本史　大地は何を語るのか』中公新書
鶴来町教育委員会 2003『部入道遺跡群』
富山県教育委員会 2006『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』
富山市教育委員会 2008『富山市富崎遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2008『八町Ⅱ遺跡調査報告書』
原田　幹 1996「S字甕の分布と地域型」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム石川県立埋蔵文化財センター 1986『漆町遺跡Ⅰ』
平松良浩・小阪大 2013「石川県部入道遺跡の噴砂痕の形成年代：森本・富樫断層帯の活動との関連」『地震』65巻3号　日本地震学会
福井県編 1996『福井県史資料編 13-1』
福井県編 1996『福井県史資料編 13-2』
福井市編 1990『福井市史資料編 1』
婦中町教育委員会 1986『新町Ⅱ遺跡の調査』
婦中町教育委員会 1993『小倉中稲遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会 1994『小倉中稲遺跡発掘調査報告（2）』
婦中町教育委員会 1996『千坊山遺跡』
婦中町教育委員会 1998『南部Ⅰ遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会 2000『南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ』
婦中町教育委員会 2000『外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会 2000『県営担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書－婦中南部地区・千里地区－』
婦中町教育委員会 2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』
婦中町教育委員会 2003『南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅲ』
婦中町教育委員会 2003『鍛冶町遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会 2004『各願寺前遺跡発掘調査報告Ⅱ』
森本幹彦 2005「古墳出現期における地域間関係―「白江式」の検討を中心として―」『東京大学考古学研究室研究紀要 19』

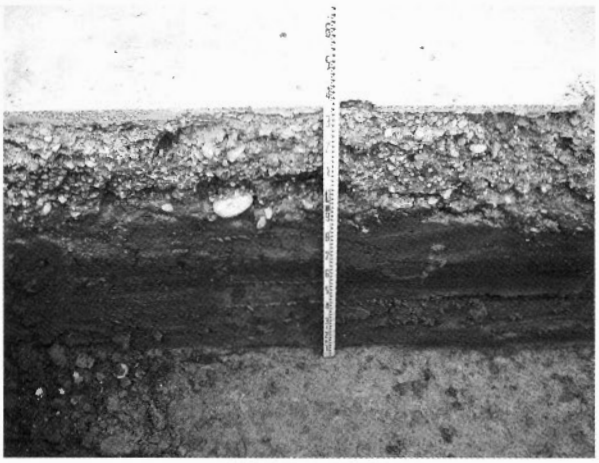
図版1　南部Ⅰ遺跡

SI45・46（北から）

SI57（南から）

SI76（北から）

SI53（南から）



SI53 断面（東から）

SI82（北から）

SI82 断面（東から）

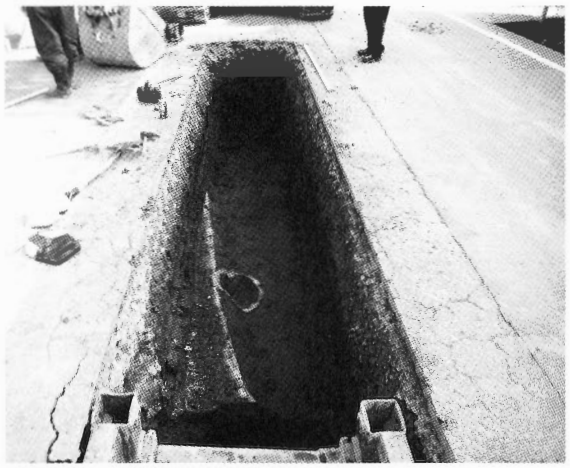
図版3　南部Ⅰ遺跡

SP04 等（北から）

SP11 等（北から）

SP13 等（北から）

SI18　噴砂痕（北から）



SI20（北から）

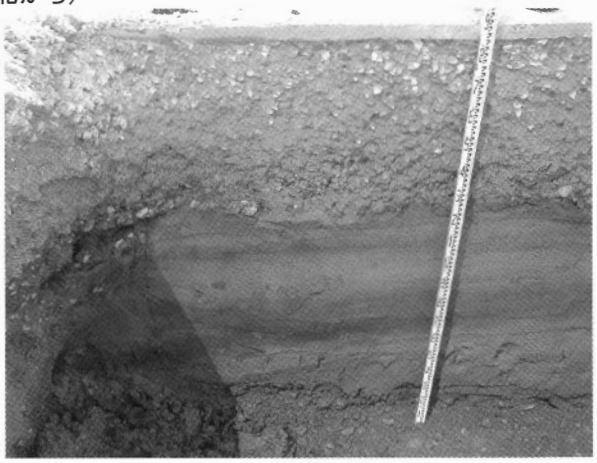
SI20 断面（東から）

SD26（北から）

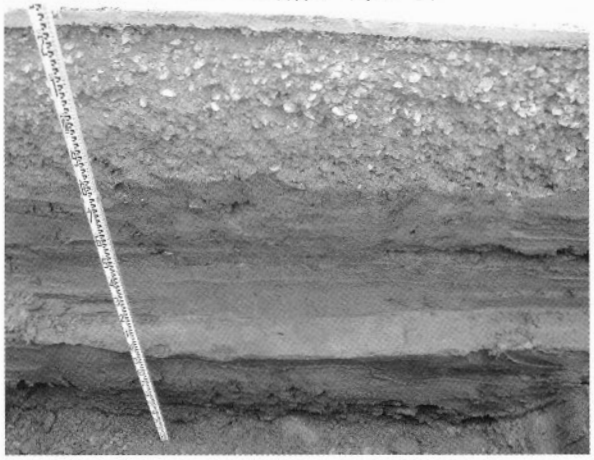
SD26 断面（東から）

SD103（北から）

SD103 断面（東から）

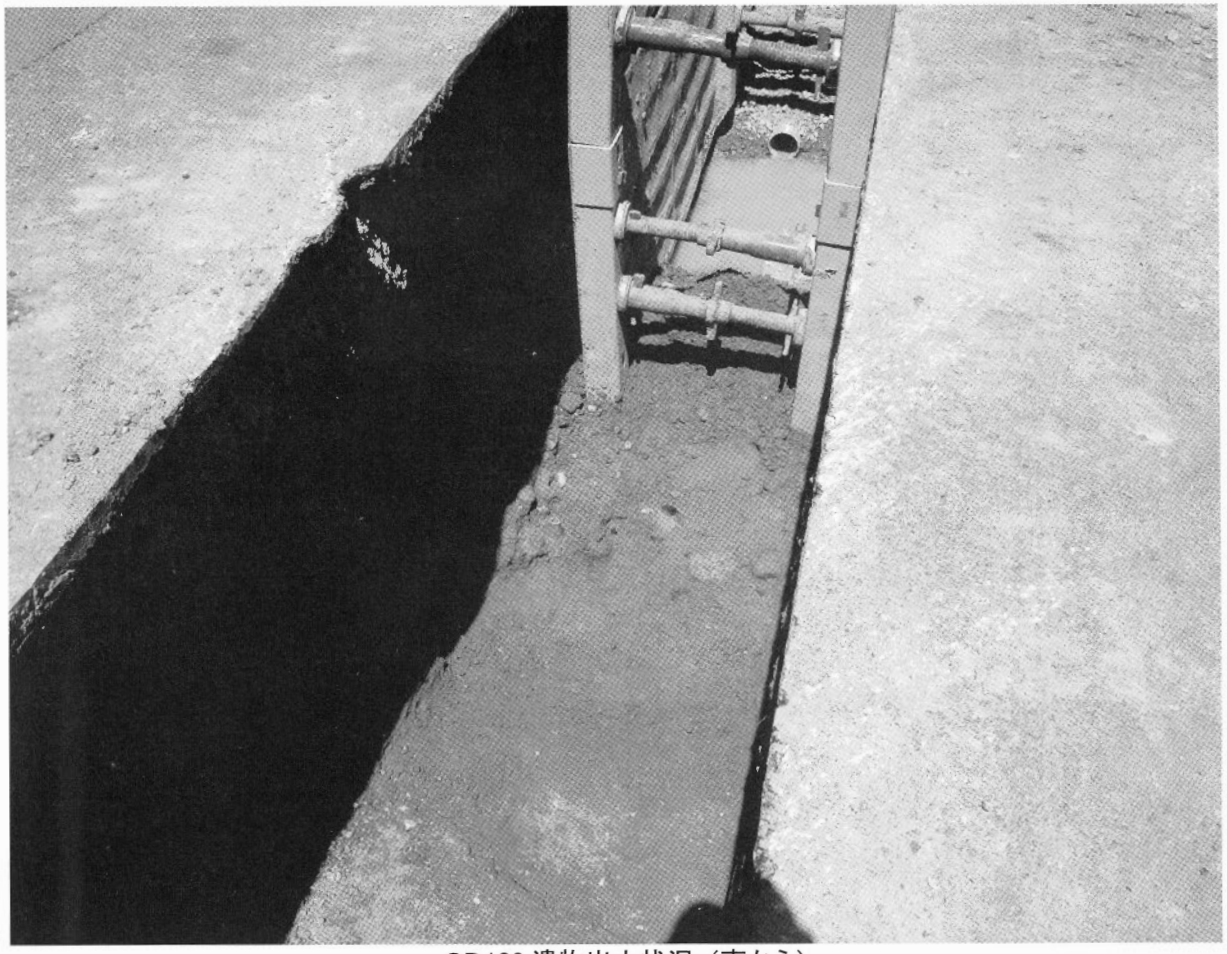


SD103 断面（東から）



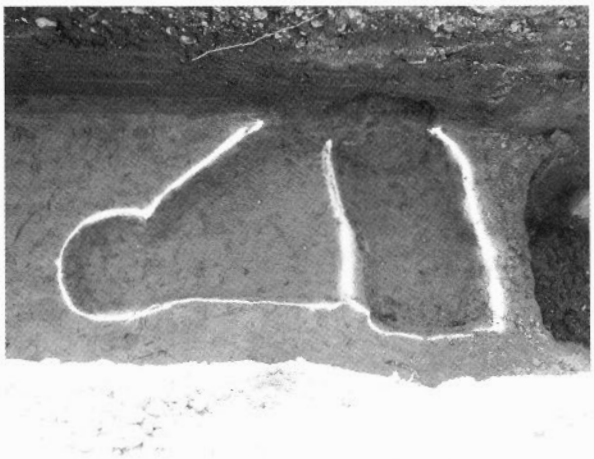
SD103 断面（東から）

SD103 断面



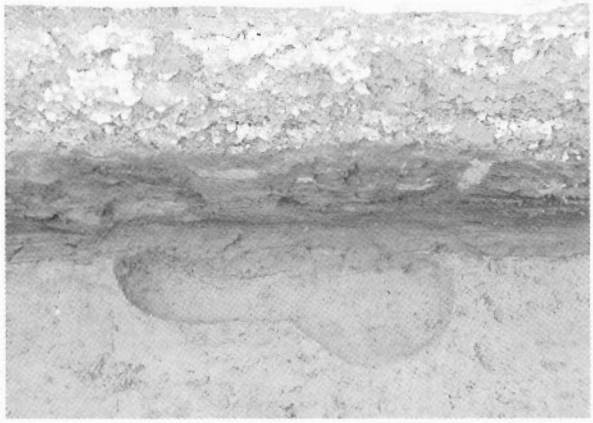
SD103 遺物出土状況（南から）

SD103 遺物出土状況近景（南から）

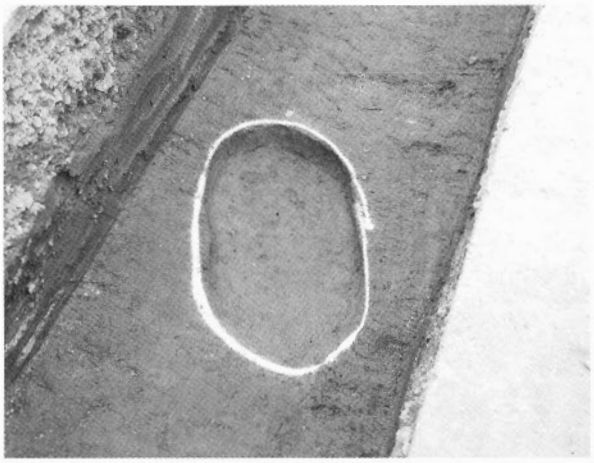


SD101・SK101・SP101（東から）

SD102（北から）

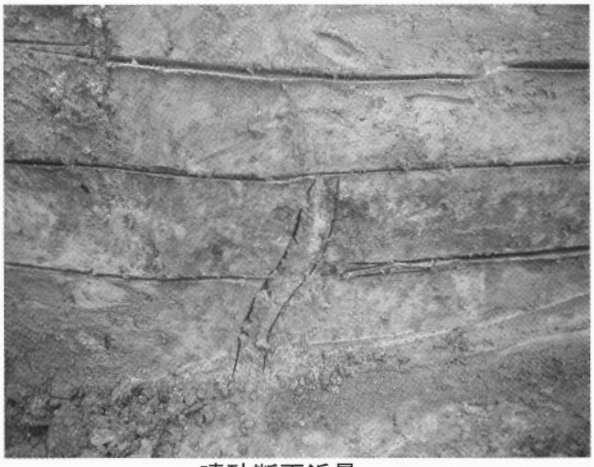


SK102（東から）

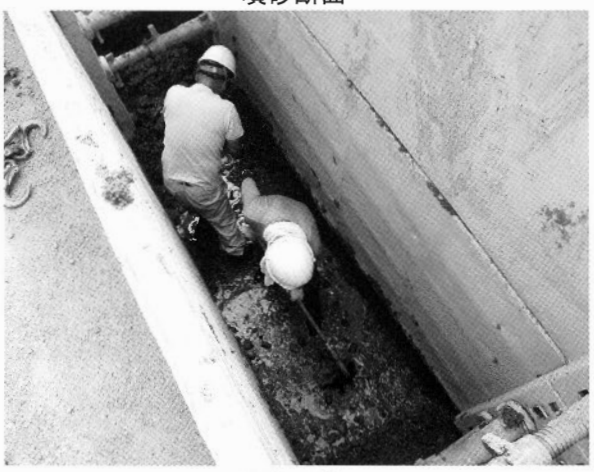


SK103（北から）

噴砂断面



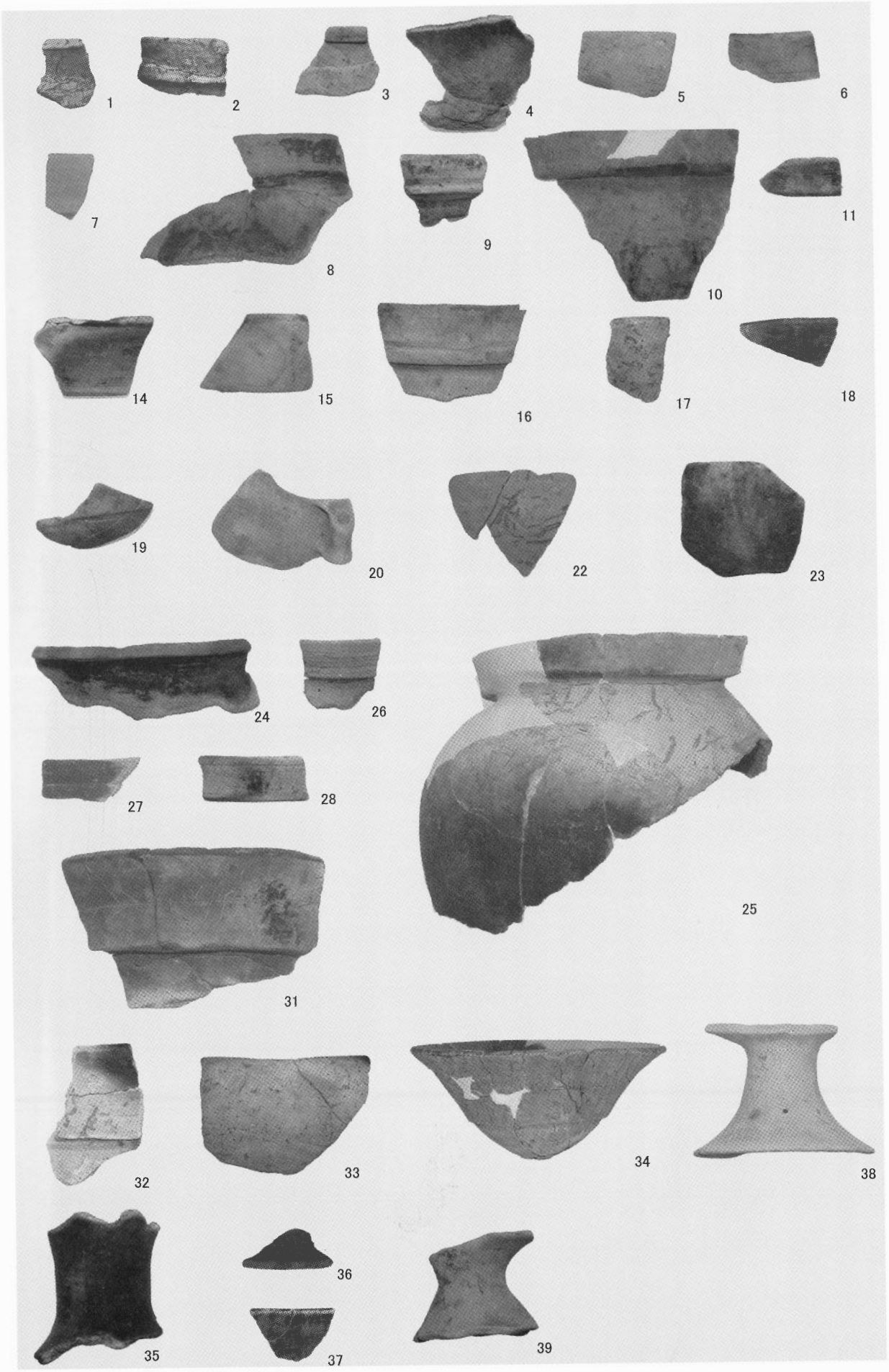
噴砂断面近景



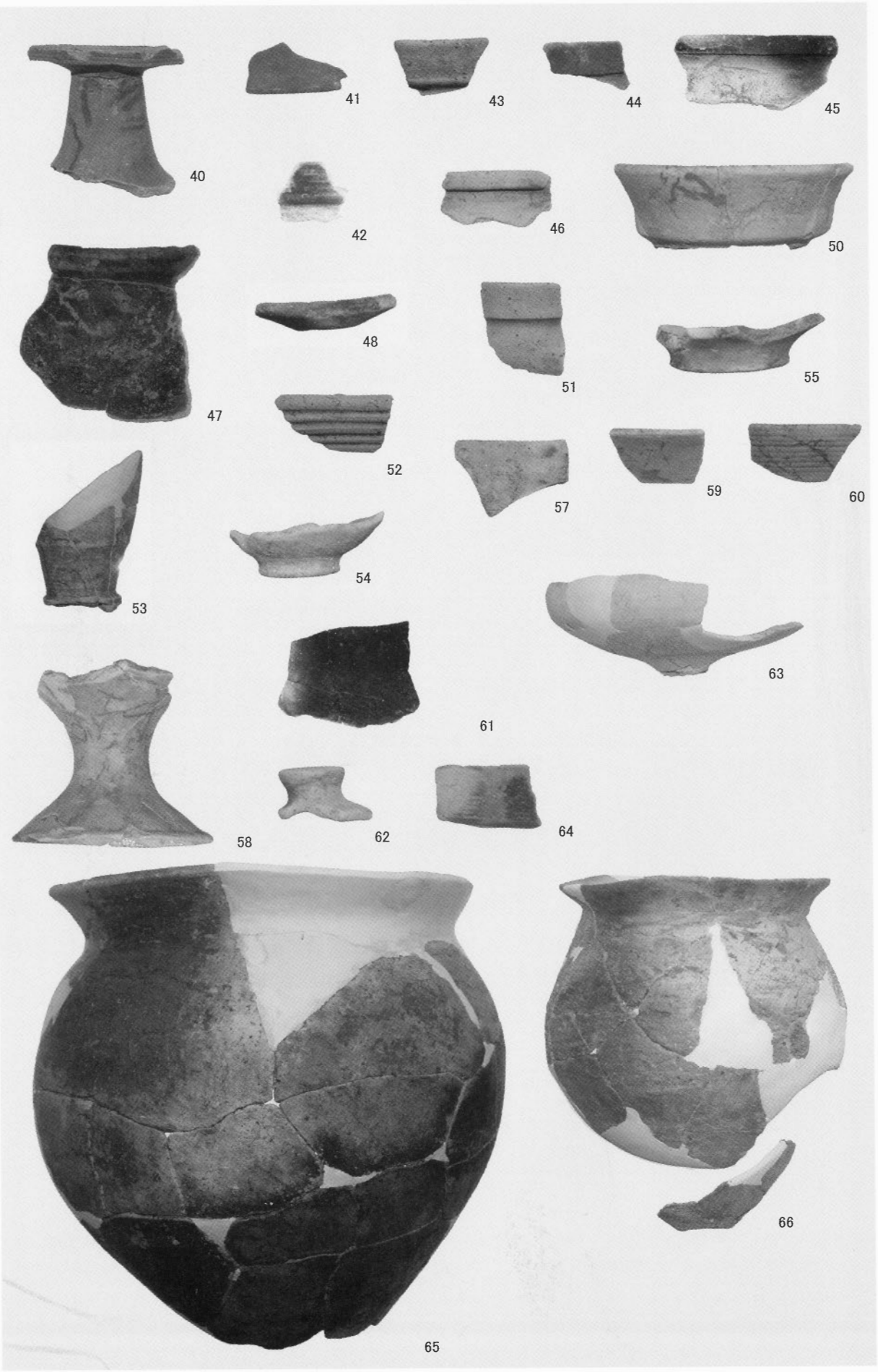
作業風景

作業風景

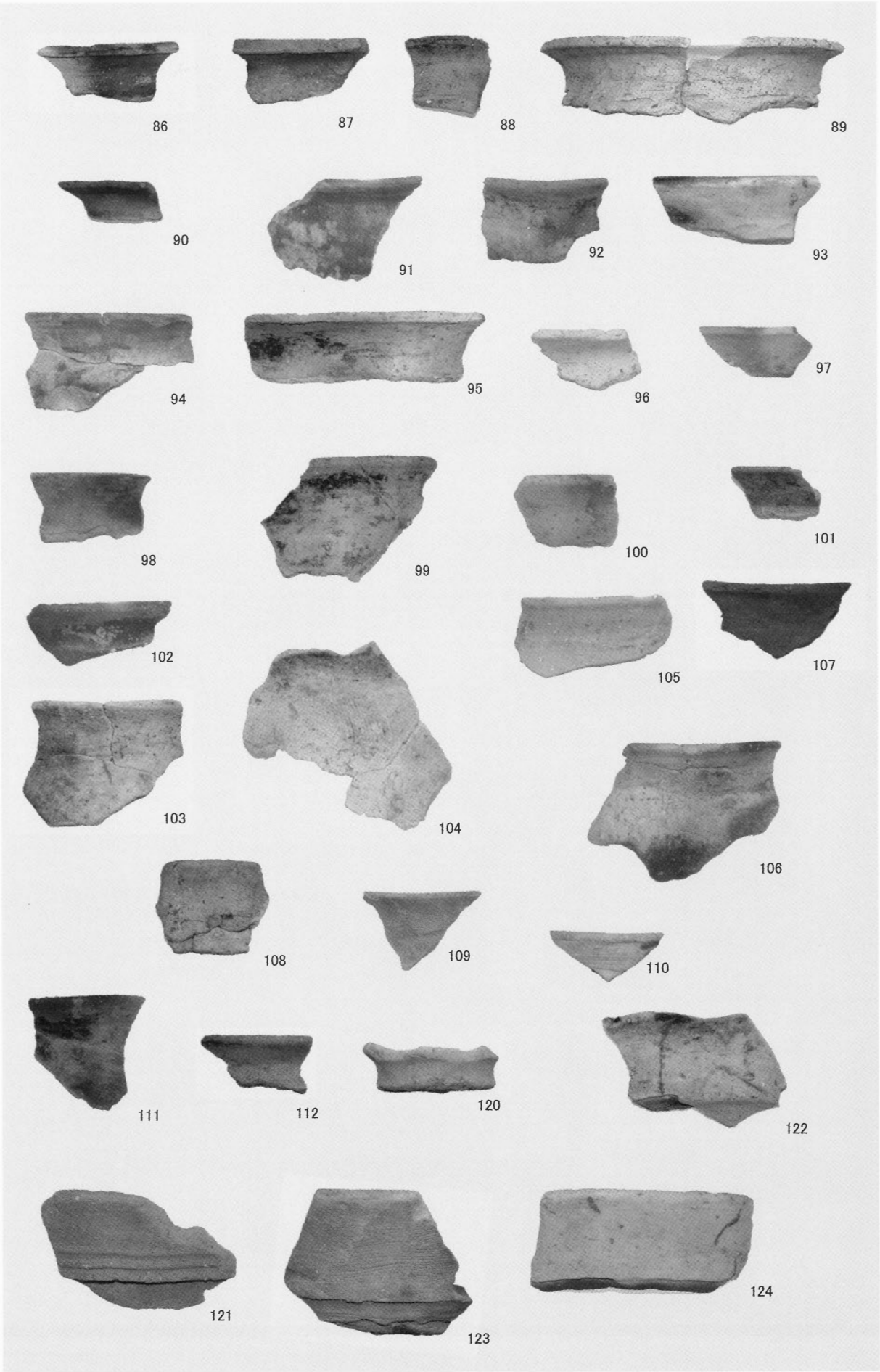
図版7　南部Ⅰ遺跡


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
14
15
16
17
18
19
20
22
23
24
26
25
27
28
31
32
33
34
38
35
36
37
39

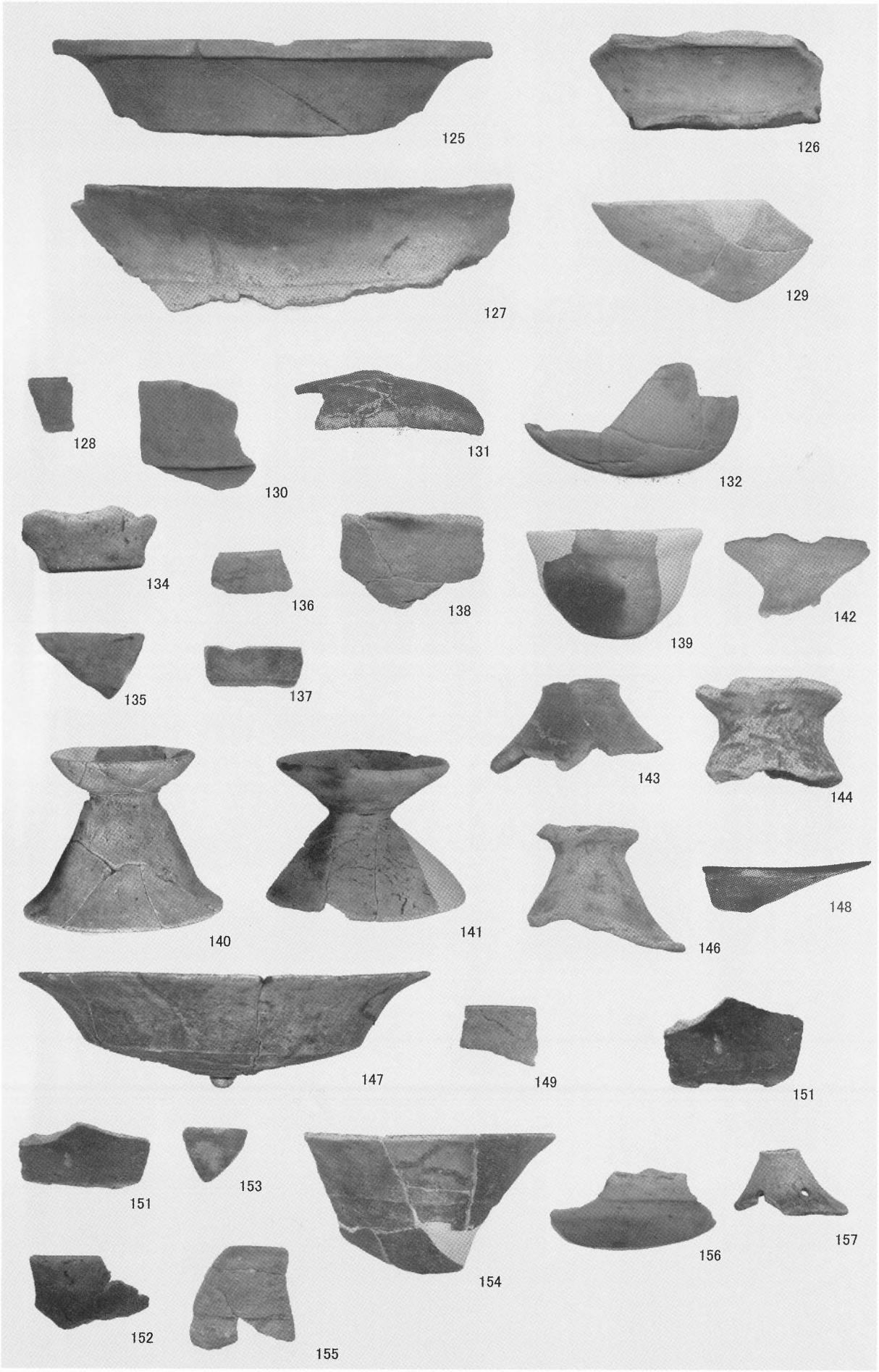
図版8　南部Ⅰ遺跡


40
41
42
43
44
45
46
47
48
50
51
52
53
54
55
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66

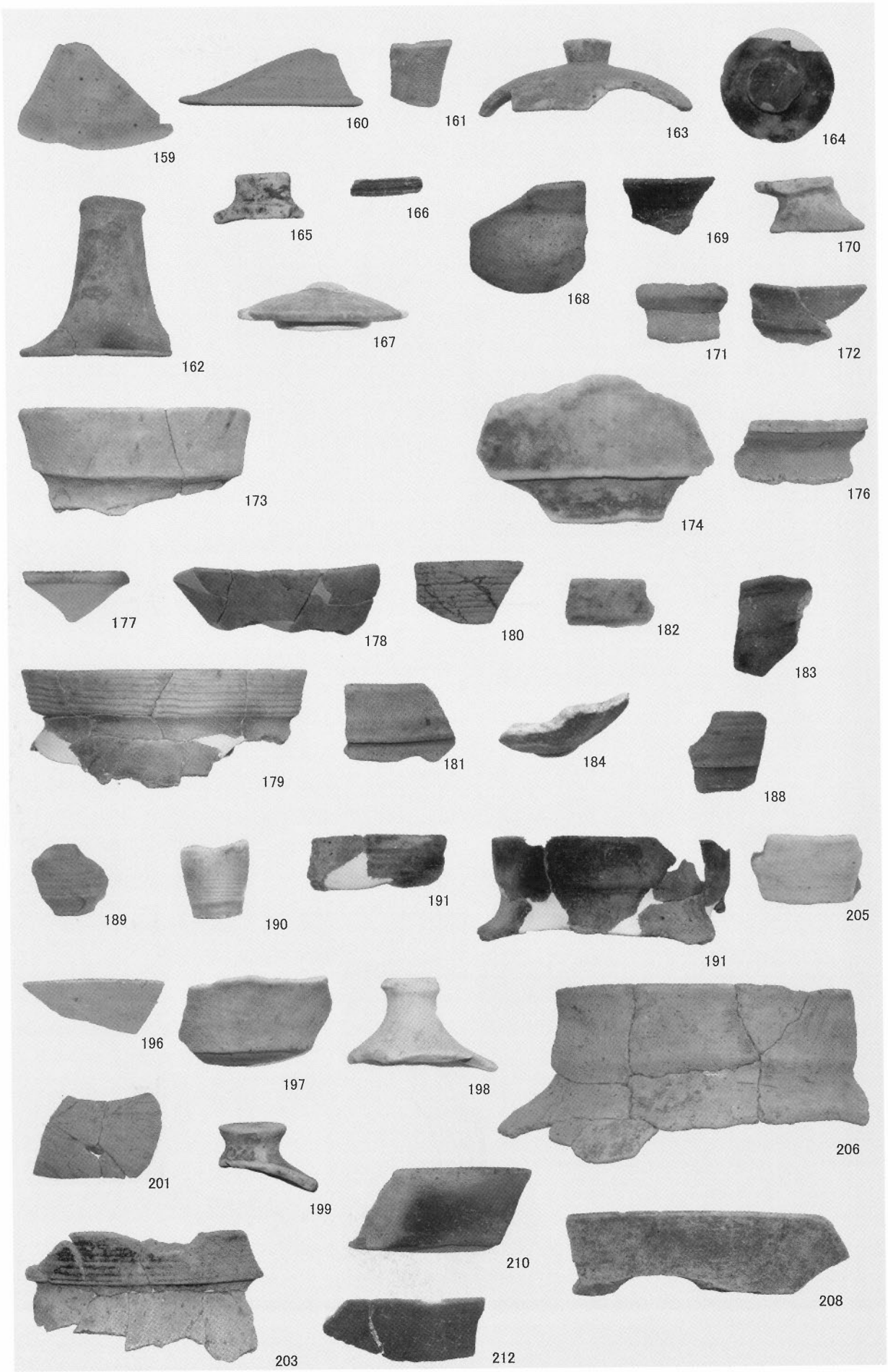
図版9　南部Ⅰ遺跡


86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
120
121
122
123
124

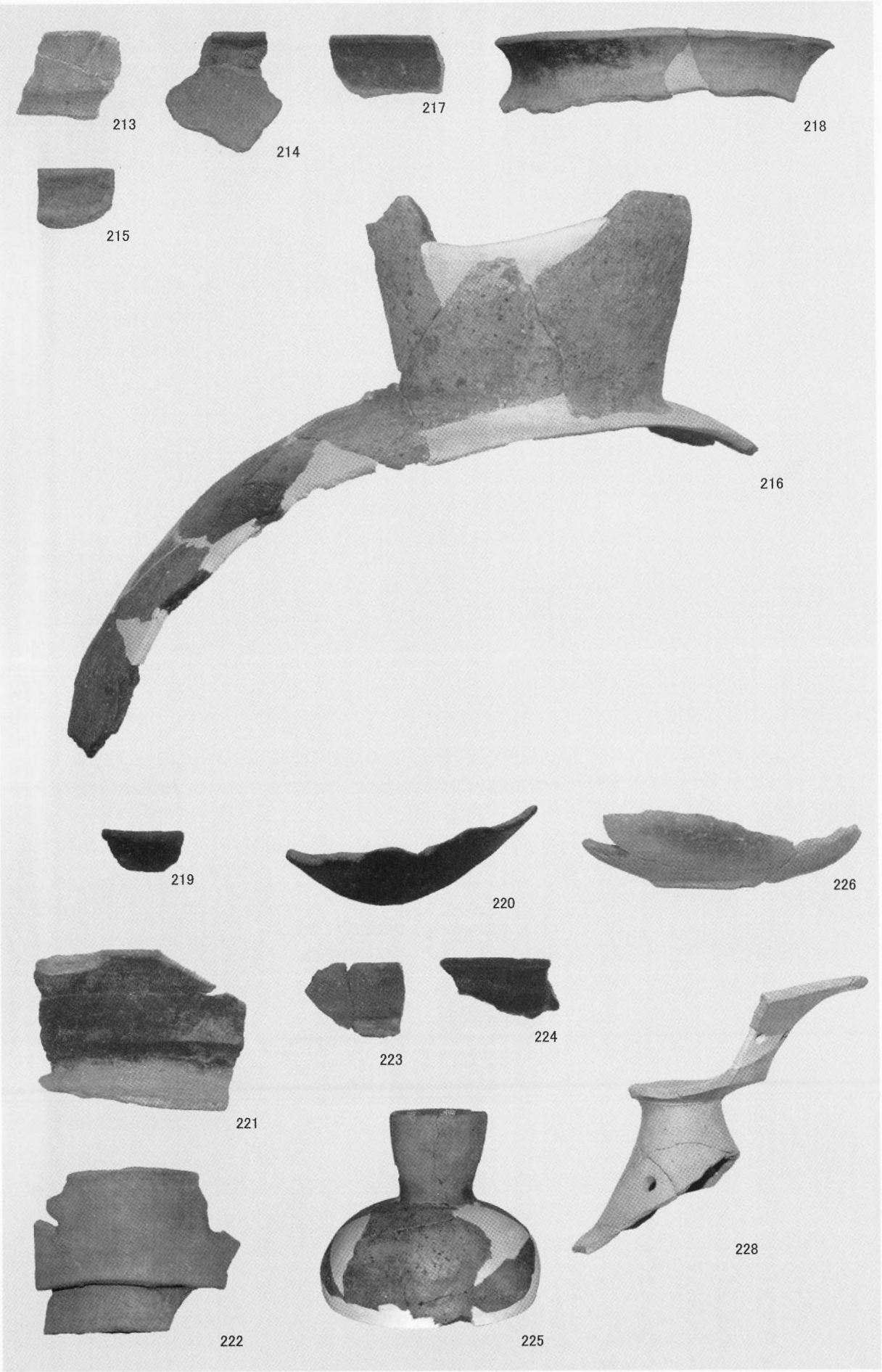
図版11 南部Ⅰ遺跡


125
126
127
129
128
130
131
132
134
136
138
139
142
135
137
143
144
140
141
146
148
147
149
151
151
153
154
156
157
152
155

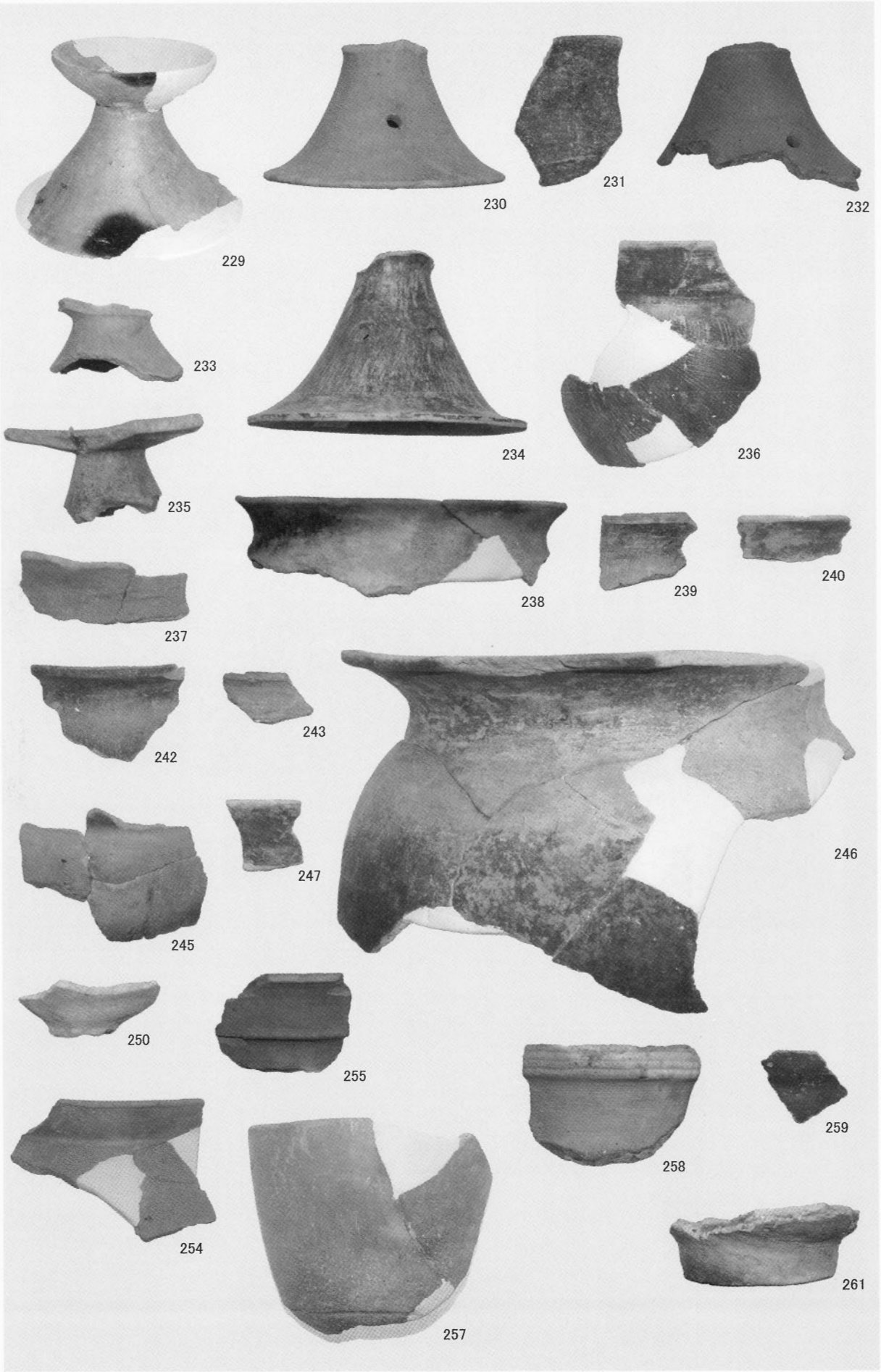
図版12 南部Ⅰ遺跡


159
160
161
163
164
165
166
168
169
170
162
167
171
172
173
174
176
177
178
180
182
183
179
181
184
188
189
190
191
205
191
196
197
198
206
201
199
210
208
203
212

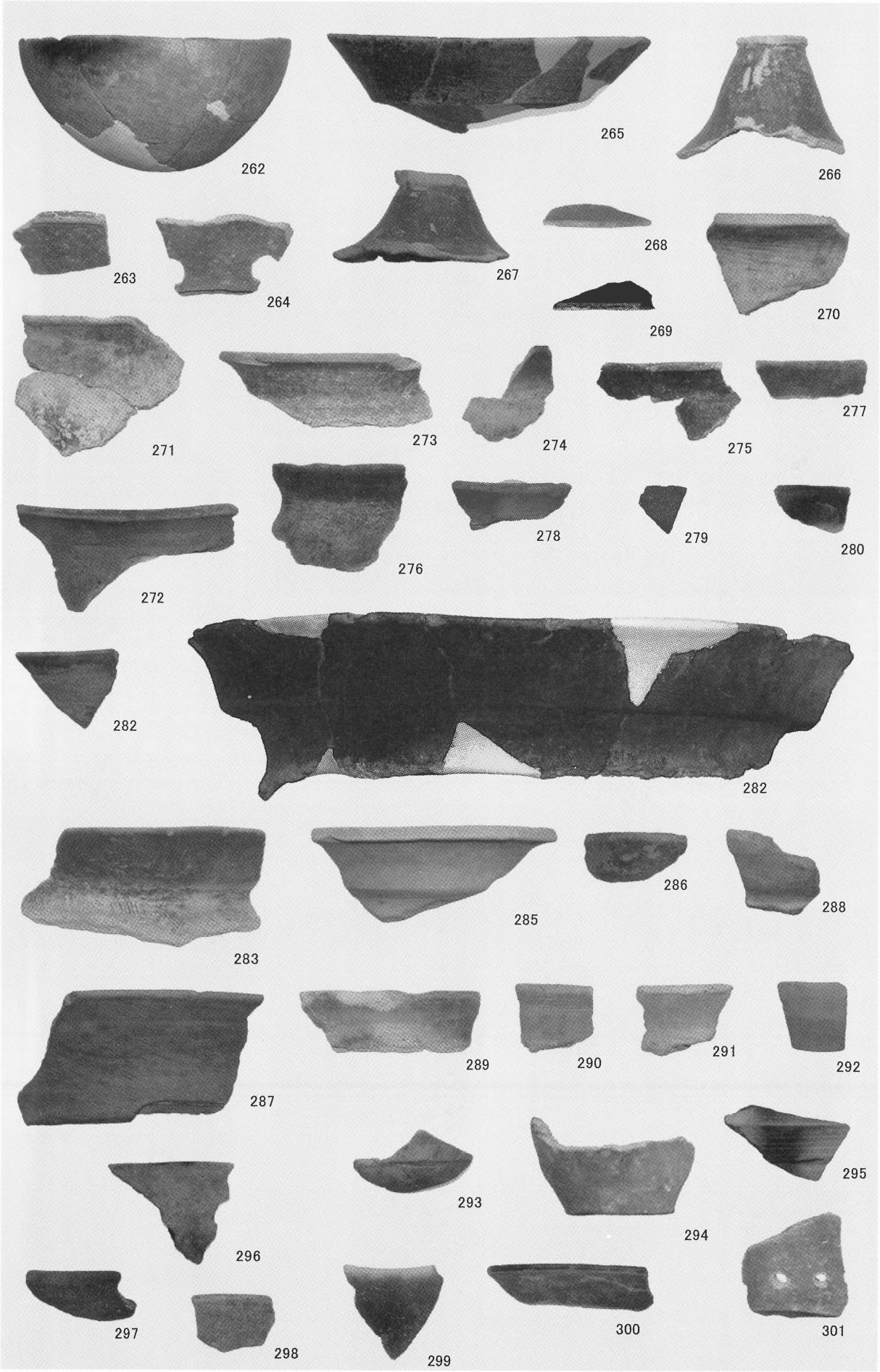
図版13 南部Ⅰ遺跡

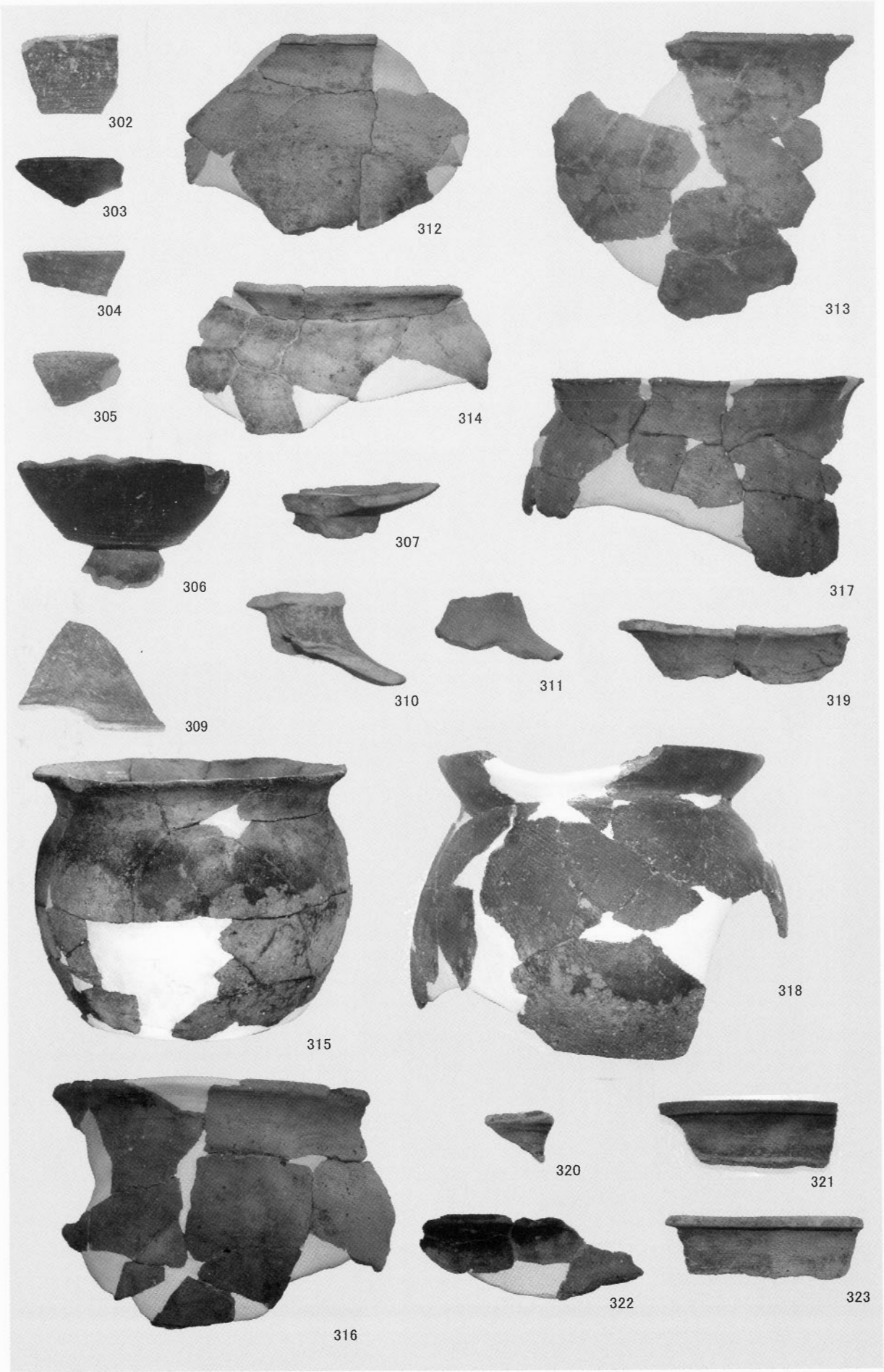


図版14 南部Ⅰ遺跡

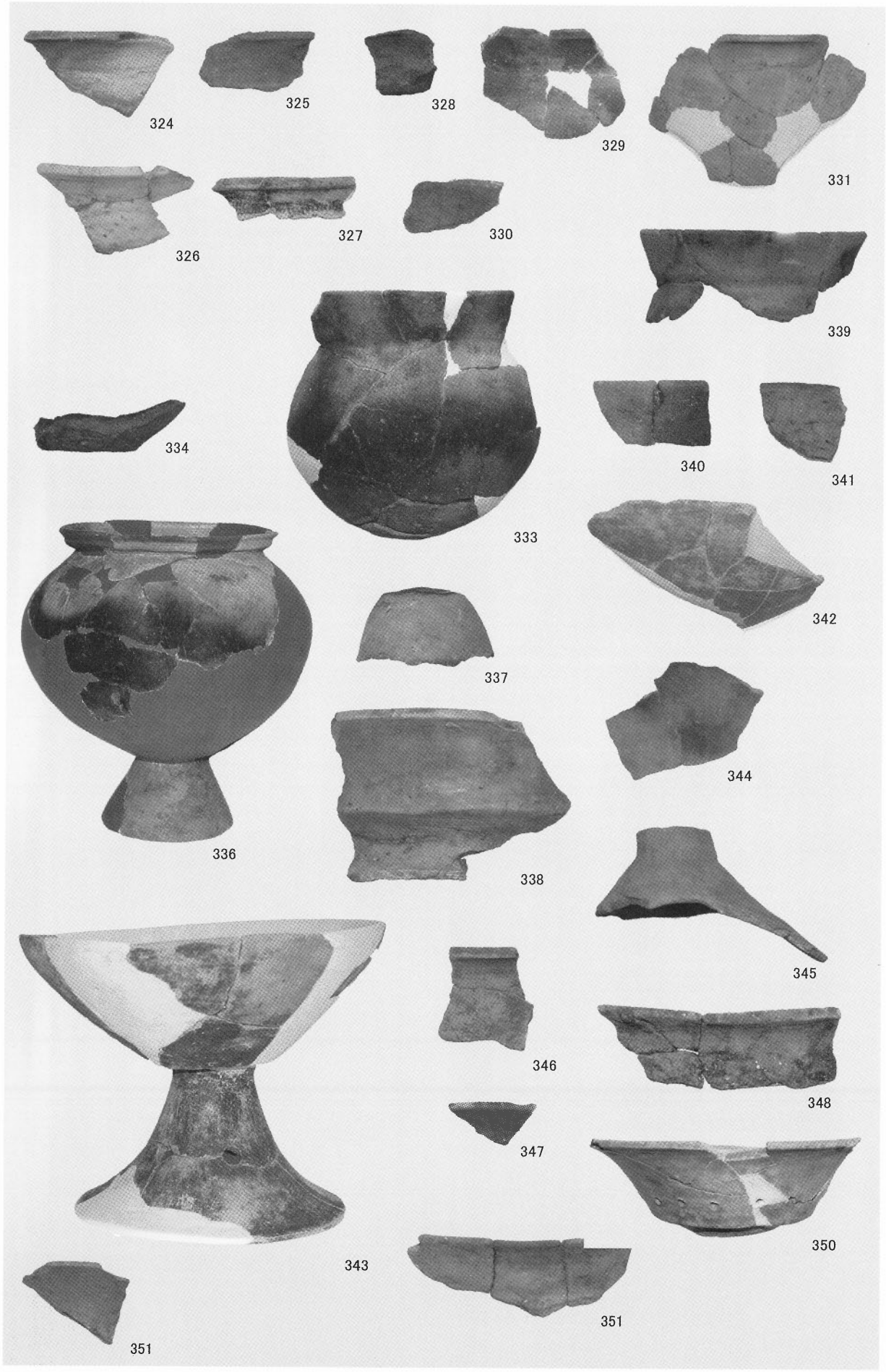

229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
242
243
245
246
247
250
254
255
257
258
259
261

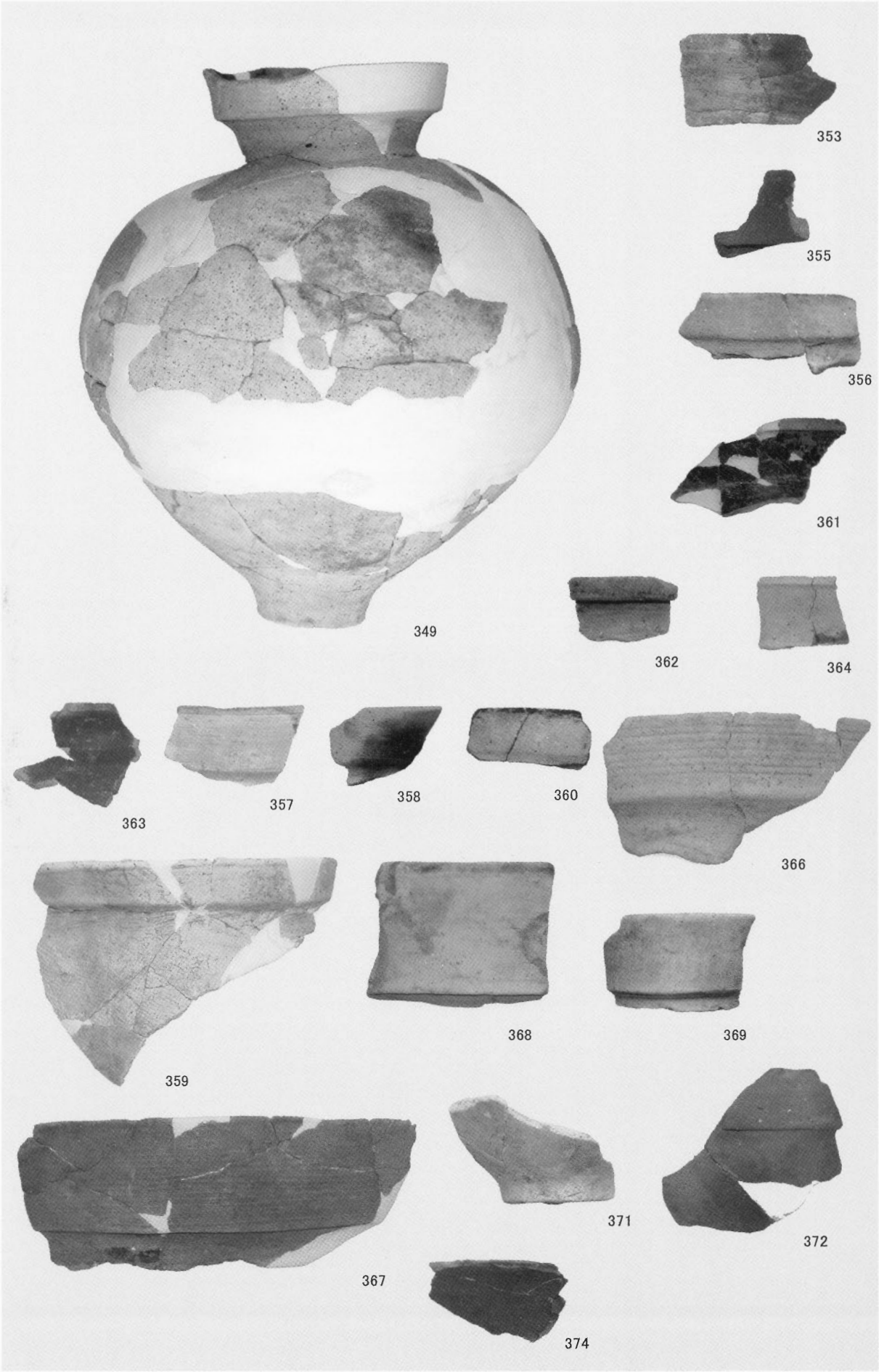
図版15 南部Ⅰ遺跡


262
265
266
263
264
267
268
269
270
271
273
274
275
277
272
276
278
279
280
282
282
283
285
286
288
287
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301

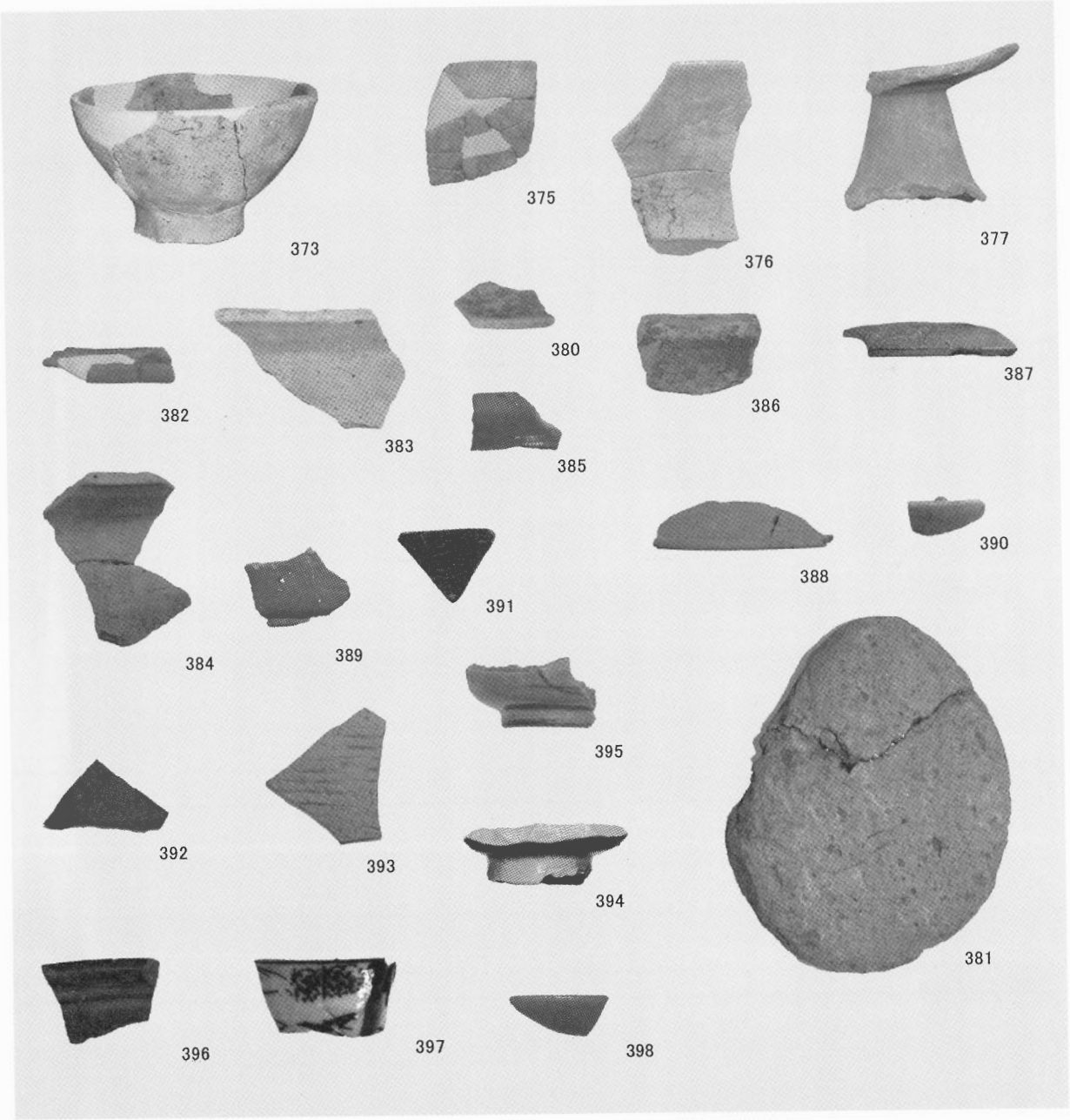

302
303
304
305
306
307
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323

図版17 南部Ⅰ遺跡


324
325
328
329
331
326
327
330
339
334
333
340
341
342
336
337
344
338
345
346
348
347
350
343
351
351


353
355
356
361
349
362
364
363
357
358
360
366
359
368
369
367
371
372
374

図版19 南部Ⅰ遺跡


373
375
376
377
380
382
383
385
386
387
388
389
390
391
384
392
393
394
395
396
397
398
381

Ⅱ 願海寺城跡

ｉ）調査の経過

願海寺城跡は、昭和 63 年～平成 3 年の分布調査の成果に加え、高岡徹氏が調査した字・通称の範囲〔高岡 1975〕を願海寺城及び城下の推定範囲とし、平成 5 年に「願海寺城跡」（市№201066）として『富山市遺跡地図』に登載し、周知の埋蔵文化財包蔵地とした。

これまでの試掘調査や発掘調査の成果は次のとおりである。平成 14 年、個人住宅建築に伴う発掘調査では、戦国時代の堀跡を確認し、上杉謙信方武将寺崎民部左衛門が拠った願海寺城跡の曲輪とその堀の可能性が高いと指摘した〔富山市教委 2003〕。

平成 16 年、自動車整備士専門学校建設事業に先立つ発掘調査では、戦国時代～安土桃山時代のL字状やコの字状に巡る溝などを確認し、願海寺城下町の一部と推定した〔富山市教委 2005〕。

平成 20 ～ 24 年にかけて、本遺跡内で公共下水道工事が計画され、工事による掘削幅が狭隘であることから工事立会調査を実施することとした。工事立会で遺構等が確認された場合は、記録保存のための調査を行うこととした。

調査年度	調査地	主たる調査担当者	調査年月日	遺跡の有無
H20	願海寺	野垣好史（埋蔵文化財センター）	平成21年1月14日～平成21年1月22日	×
H21	願海寺	野垣好史（埋蔵文化財センター）	平成21年4月13日～平成21年4月21日	×
	野々上	堀内大介（埋蔵文化財センター） 澤田雅志（㈱エイ・テック）	平成21年12月4日～平成22年3月4日	○
H22	願海寺	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成22年5月11日～平成22年7月29日	○
	願海寺	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成22年12月23日～平成23年2月8日	×
	願海寺	小松博幸（埋蔵文化財センター）	平成22年12月3日～平成23年2月15日	○
H23	願海寺	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成23年6月30日～平成23年8月23日	○
	願海寺	堀内大介（埋蔵文化財センター） 小川幹太（㈱太陽測地社）	平成23年10月20日～平成23年12月28日	○
	願海寺	新川広久（埋蔵文化財センター）	平成24年2月1日～平成24年2月27日	×
H24	願海寺	三上智丈（埋蔵文化財センター）	平成24年10月10日～平成24年10月12日	×
	願海寺	新川広久（埋蔵文化財センター）	平成24年11月19日～平成25年1月8日	×

平成 21 年 1 月～ 4 月の間、2 回の調査では、遺構は所在しなかった。平成 21 年 12 月～平成 22 年 3 月の調査は、平成 16 年度調査区の中央を横断する道路で行い、中世の遺構を確認した。

平成 22 年 5 月～平成 23 年 12 月の調査は、平成 14 年度調査区の西側の道路等で行い、中世～江戸時代の遺構を確認した。

平成 24 年 2 月～平成 25 年 1 月の間、3 回の調査では、遺構は所在しなかった。

平成 21 年度と平成 23 年度には、緊急雇用創出事業として市内遺跡工事立会業務委託を発注し、埋蔵文化財センターの監理の下、民間発掘会社が調査を実施した。平成 21 年度は、株式会社エイテックが受託し、平成 21 年 12 月 8 日～平成 22 年 3 月 4 日まで現地工事立会調査を行い、平成 22・

年1月4日～平成22年3月12日まで出土品基礎整理調査を行った。平成23年度は、株式会社太陽測地社が受託し、平成23年10月20日～12月16日まで現地工事立会調査を行い、平成23年10月20日～平成24年1月10日まで出土品基礎整理調査を行った。

ⅱ）遺跡の位置と環境

1．地理的環境

願海寺城跡は、富山市街地から西北西約7.5kmに位置し、富山市願海寺地内に所在する。

遺跡の所在する願海寺地内は、射水平野の低地帯に立地し、標高 2～ 4mを測る。射水平野は、縄文海進の際に旧放生津潟は海抜 5mまで海中に水没し、その後の海退の結果、放生津潟周辺に現れた湿原の植物が枯れて泥炭となり、それが堆積したことで形成されたと言われている。

2．歴史的環境

願海寺が所在する射水平野・呉羽丘陵西麓周辺には、縄文時代から中世に至るまで各時代の遺跡が存在する。

縄文時代では、前期から晩期まで継続して集落が営まれた古沢遺跡がある〔富山市教委 1973・1985〕。

弥生時代後期後半～終末期には、砂川カタダ遺跡で集落が営まれた〔富山市教委 2011〕。

古墳時代前期には、呉羽山古墳群が築造された〔富山市教委 1984〕。

古墳時代中期には、古沢A遺跡で集落が営まれた〔富山市教委 1983〕。東老田Ⅰ遺跡で生産活動に伴う粘土採掘坑を確認した〔富山市教委 2005〕。呉羽丘陵には前方後円墳である古沢塚山古墳が築造された〔富山市教委 1976〕。

古墳時代後期には、群集墳である金草陣ノ穴横穴墓群が造られた〔富山市教委 1976〕。

飛鳥・白鳳～平安時代には、呉羽丘陵から射水丘陵にかけて須恵器窯、瓦窯、土師器焼成遺構、炭窯、製鉄炉などが築かれ、一大手工業生産地帯が広がる。呉羽丘陵西麓では、飛鳥・白鳳時代に県史跡金草第一古窯跡で須恵器窯が操業された〔富山市教委 1970〕。奈良時代には古沢・西金屋窯跡群で須恵器窯が操業された〔富山市教委 1988・2000〕。住吉Ⅳ遺跡（旧金草電化農場前遺跡）〔富山市教委 2012〕や西金屋遺跡〔富山市教委 2012〕では、土師器生産を行っていた。栃谷南遺跡では、奈良時代の瓦陶兼業窯・灰原・掘立柱建物・粘土採掘坑・井戸跡などが検出され、粘土採掘から土器・瓦の焼成までの一連の作業を行う生産工房があったことが分かった〔富山市教委 1999〕。

花ノ木C遺跡では、奈良時代の溝跡から人形・斎串が出土し、律令祭祀が行われていた〔富山市教委 2004、堀沢 2008〕。呉羽山を越える直線道路遺構として、呉羽山古道の存在が確認された〔西井・小林 2005〕。

中世では、呉羽本郷遺跡や西二俣遺跡〔富山市教委 2006〕で集落が営まれた。（堀内）

1. 願海寺城跡
2. 古沢遺跡
3. 砂川カタダ遺跡
4. 呉羽山古墳群
5. 古沢A遺跡
6. 東老田Ⅰ遺跡
7. 古沢塚山古墳
8. 金草陣ノ穴横穴墓群
9. 金草第一古窯跡
10. 古沢・西金屋窯跡群
11. 住吉Ⅳ遺跡
12. 西金屋遺跡
13. 栃谷南遺跡
14. 花ノ木C遺跡
15. 呉羽本郷遺跡
16. 西二俣遺跡

第 34 図　願海寺城跡と周辺の遺跡

iii）調査の概要

1. 基本層序

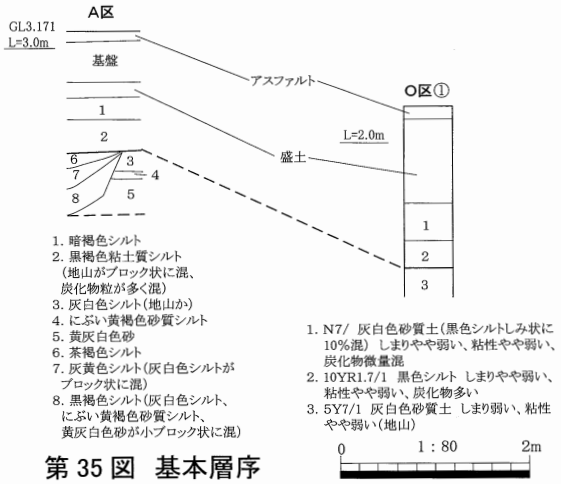
基本層序は調査区が広域にわたるため、第37図の南北中心軸で2分割し、西側と東側の代表的な土層を観察した。なお位置的な連続性からK区は西側に含める。

1. 西側調査区（A区）

路面より約0.3～0.4mが盛土である。盛土下より各々約 0.2～ 0.3m程度の厚さで暗褐色シルト、黒褐色粘土質シルトが堆積し、その下で灰白色シルト（地山）を検出した。検出面のレベルは約 1.9mである。黒褐色粘土質シルト（2層）はK区等の立会い調査で確認された土層と同じ由来の土層（腐食土層）であることから、願海寺周辺に普遍的に堆積するものと考えられる。また、この周辺が当時湿地帯であった根拠となる。

2. 東側調査区（O区）

路面より約 0.7mが盛土である。盛土下より灰白色砂質土、黒色シルトがそれぞれ約 0.2～0.3m堆積し、その下が灰白色砂質土（地山）である。



第35図 基本層序

2. 遺構と遺物

（1）遺構

A. 西側調査区（A～N区）

a. 溝・自然流路・堀

SD2（A区）：検出長 1.20m、幅 7.58m、深さ 0.64mを測る。東西方向に延びる。中世土師器（6・7）、瀬戸美濃（44）、上層から越中瀬戸（31）・唐津（51）、下層から建材（117・123）が出土したほか、南肩部分より漆器が出土した。中世土師器が 16 世紀、越中瀬戸が 17 世紀、123 の放射性炭素年代測定の結果が 15 世紀後半から 16 世紀前半であることから、存続時期は 16 世紀前半から 17 世紀である可能性が高い。

SD4（A区）：検出長 1.20m、幅 0.95m、深さ 0.27mを測る。東西方向に延びる。磚（72～ 75）が出土した。

SD5（A区）：検出長 1.10m、幅 1.72m、深さ 0.69mを測る。東西方向に延びる。唐津（54）が出土した。

SD22（B区）：南西 - 北東方向に延びる溝で、中世土師器（14）、木札（112）が出土した。

SD25（B区）：検出長 1.10m、幅 3.78m、深さ 0.25mを測る。東西方向に延びる。漆器が出土した。

SD27（B区）：検出長 1.10m、検出幅 2.38m、深さ 0.33mを測る。東西方向に延びる。中世土師器が出土した。

SD102（C区）：検出長 1.12m、幅 1.64m、深さ 0.87mを測る。東西方向に延びる。越中瀬戸（24）、漆器（103）が出土した。

SD104（C区）：検出長 1.10m、幅 1.65m、深さ 0.92mを測る。東西方向に延びる。SP105 より古い。砥石（92）、被熱礫（93・94）が出土した。

SD109（C区）：検出長 5.69m、幅 0.57m、深さ 0.40mを測る。南北方向に延びる。瀬戸美濃（42）、板碑（90）が出土した。

SD111（C区）：検出長 1.10m、幅 3.69m、深さ 0.43mを測る。北東 - 南西方向に延びる。中世土師器（9・10）が出土した。

SD113（C区）：検出長 1.10m、幅 3.20m、深さ 0.71mを測る。東西方向に延びる。瀬戸美濃（47）、越中瀬戸（25・33・37）が出土した。

SD121（D区）:SD121 は検出長 1.10m、 検出幅 3.32m、 深さ 1.93mを測る。 薬研堀で、 東西方向に延びる。SD121 はSD122 より古い。SD121 から中世土師器（8）、鉄滓（98）、木札（111）が出土した。

SD128（D区）:検出長 1.10m、幅 1.92m、深さ 0.18mを測る。 西端部分のみである。 越中瀬戸（32）、石臼（79）が出土した。

SD129（D区）: 長軸 7.46m、 検出幅 0.55m、 深さ 0.17mを測る。 東西方向に延びる。 中世土師器（4・5）が出土した。 遺物の時期から16世紀前半の遺構と考えられる。

SD132（D区）: 検出長 1.13m、 幅 1.20m、 深さ 0.33mを測る。 東西方向に延びる。SD133 より新しい。。 中世土師器（11）、 越中瀬戸（35）、 唐津（50・52）が出土した。 遺物の時期から 16 世紀中ごろ以降の遺構と考えられる。

SD133（D区）:検出長 4.50m、 検出幅 1.10m、 深さ 1.07mを測る。SD132 より古い。 薬研堀である。伊万里（59・63）、 取鍋（70・71）、 木札（113）が出土した。

SD134（D区）: 検出幅 7.10m、 深さ 1.06mを測る。 東西方向に延びる。 中世土師器（15）、 伊万里（61）、 漆器（102）等が出土した。

SD301（F区）: 検出長約 28.2m、 幅約 1.39m、 深さ 0.49m を測る。 埋土は黒色土を基調とする。越中瀬戸（29）、 曲物（106・109）が出土した。

SD302（F区）: 検出長約 1.99m、 幅約 1.07m、 深さ 0.49m を測る。 埋土は黒色土を基調とする。越中瀬戸（26）が出土した。

SD303（F区）: 検出長約 18.50m、 幅約 1.20m、 深さ 0.48mを測る。 埋土は黒色土を基調とする。

SD305（G区）: 検出長 1.20m、 検出幅 14.00m以上、 深さ 0.85m を測る。 箱堀と考えられる。

SD308（H区）: 検出長 1.20m、 幅 2.50m、 深さ 0.42m 以上を測る。 薬研堀と考えられる。

SD309（H区）: 検出長 1.20m、 幅 17.0m、 深さ 0.23m を測る。 南北方向に延びる。SD311 との間は土橋SA310 の可能性がある。 中世土師器（17・19・20）、 丸材（130）が出土した。 遺物の時期から16世紀前半の遺構と考えられる。

SD311（H区）: 検出長 1.20m、 検出幅 2.6mを測る。SD309 との間は土橋SA310 の可能性がある。

SD313（I区）: 検出長 1.20m、 幅 9.20m、 深さ 0.74m を測る。 堀と考えられる。

SD315（J区）: 検出長 2.02m、 幅 6.80m、 深さ 0.63m を測る。 薬研堀と考えられる。SD317 との間は土橋SA316 の可能性がある。 板材（120・122）が出土した。

SD317（J区）: 検出長 1.20m、 幅 8.32m、 深さ 0.96m を測る。 堀と考えられる。 埋土は黒色土を基調とする。

SD403（K区）: 長さ 10.42m、 検出幅 1.79m、 深さ 0.83mを測る。 旧堀跡と考えられる。 埋土は黒色土を基調とし、 レンズ状に堆積する。SE404 より古い。

SD405（K区）:検出長 5.62m、検出幅 1.20m、深さ 0.95mを測る。新堀跡の可能性がある。桶側板（107）が出土した。

SD407（K区）: 検出長 15.04m、 検出幅 1.20m、 深さ 0.78mを測る。 北東 - 南北方向に延びる。埋土は黒色土を基調とする。 須恵器（1）、 中世土師器（12・13）、 板材（108・121）が出土した。

SD409（K区）: 検出長約 1.20m、 幅約 2.83m、 深さ約 1.10mを測る堀である。 南北方向へ延び、南北方向の配管埋設用の溝を掘削した際に立ち上がりを確認した。 埋土は盛土下より約 1.2 ～ 1.5m 下まで黒色粘質土が堆積している。

b. 井戸

SE23（A区）: 直径 1.43m、 検出幅 1.10m、 深さ 1.43mを測る素掘井戸である。

SE24（A区）: 直径 1.32m、 検出幅 0.95m、 深さ 1.22mを測る素掘井戸である。

SE404（K区）：検出長約 1.00m、幅約 0.91m、深さ 1.25mを測る石組井戸である。路面から約 0.5m下から検出した。埋土は黒色土を基調とする。この石組井戸は堀SD403 の埋土を切って構築しており、堀が埋没した後の比較的新しい井戸であることがわかる。石組みには五輪塔（火・地輪）や石臼が転用されている（80・82・83）。また、井戸内からは越中瀬戸焼の皿が 2 点（21・22）出土している。この越中瀬戸焼の皿の帰属時期から遺構の時期は、17 世紀代に比定される。

SE408（K区）：直径 2.70m、検出幅 1.17m、深さ 0.44mを測る素掘井戸である。瀬戸美濃の天目茶碗（45）、鍬か鋤（114）、加工木（128・129）が出土した。

c. 土坑

SK106（C区）：直径 1.20m、検出幅 1.12m、深さ 0.55mを測る。瀬戸美濃（40）、磚（76 ～ 78）、石臼（84）、被熱礫（95）、箸（106）が出土した。

SK140（D区）：直径 1.70m、検出幅 0.47m、深さ 0.21mを測る。中世土師器（3）、唐津（49）、木札（110）が出土した。

d. ピット

SP9（A区）：直径 0.38m、深さ 0.42mを測る。平面形は円形である。瀬戸美濃（41）、杭（126）が出土した。

B. 東側調査区（O～Q区）

O・P区：配管埋設用の溝を東西方向に（幅 1.2m）掘削を行った結果、青灰色土（Ⅲ層）地山直上から土坑やピット、溝など（501 ～ 520）を検出した。遺構の埋土は黒褐色土（Ⅱ層）と類似した土層を呈する。東側のマンホール埋設部から検出した遺構から瀬戸美濃焼の短頸壺片、および土師器皿片が出土した。いずれも帰属時期は 16 世紀後半に比定される。その他の遺構からは遺物は出土しなかった。県道 44 号線から葬儀場みどり会館横を南北方向に掘削を行った結果、土坑、溝などの遺構を検出したが遺物は伴わない。黒褐色土（Ⅱ層）からは近世陶磁器（伊万里・越中瀬戸）などが出土した。掘削箇所の中央もしくは両端に水道管が埋設されており、また部分的に用水用管が横断するなど攪乱を受けている箇所が多い。

a. 土坑

SK503：検出長 1.17m、幅 0.49m、深さ 0.1mを測る。平面形は円形である。遺物は伊万里（62）が出土した。

SK518：長径 1.36m、短径 0.78m、深さ 0.2mを測る。平面形は楕円形である。遺物は瀬戸美濃（48）が出土した。

SK519:検出長 1.10m、幅 0.25m、深さ 0.22mを測る。調査区北側に延びる。遺物は中世土師器（2）が出土した。

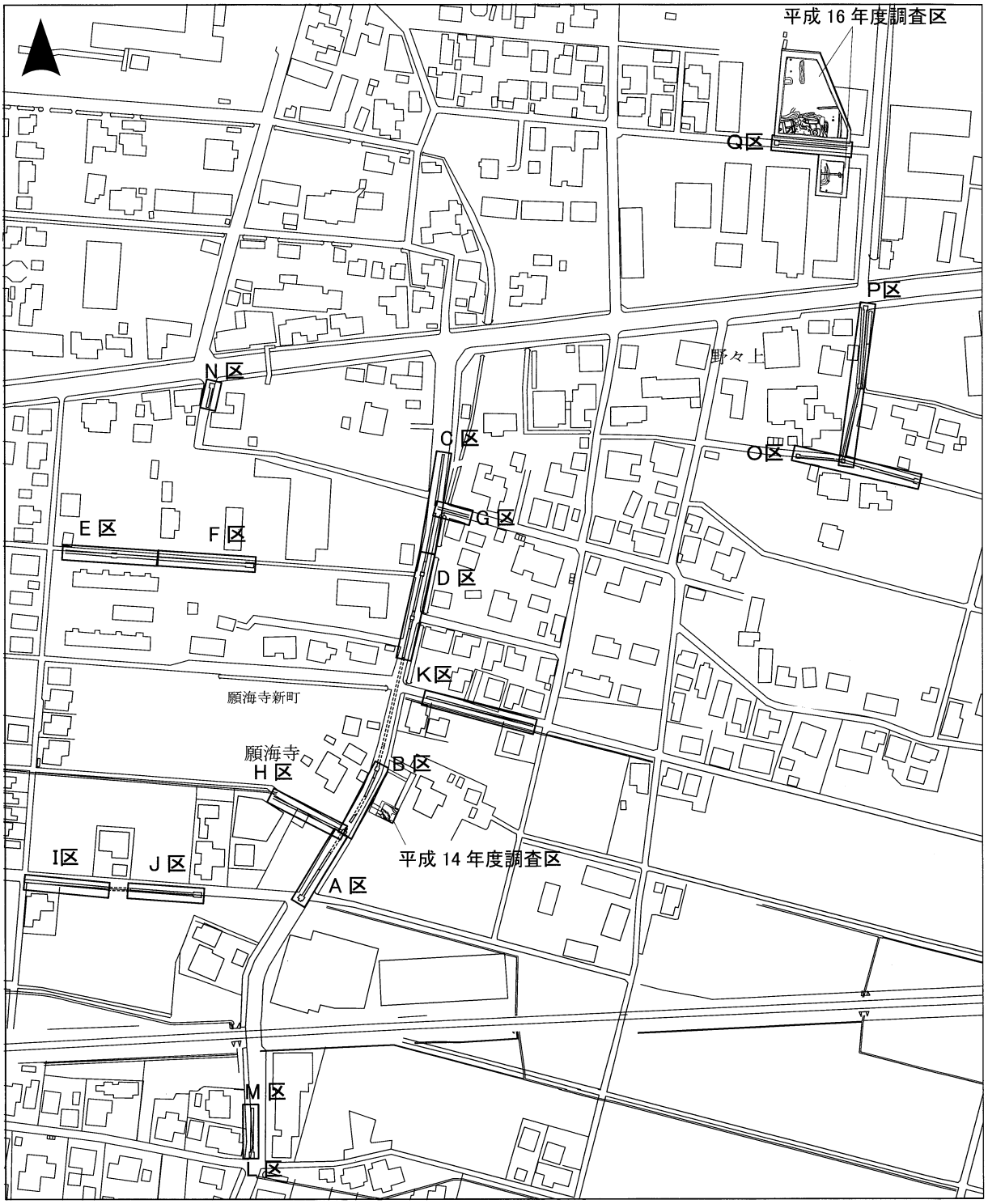
Q区

土坑1基、溝3条、ピット9基を確認した。溝3条（SD601 ～ 603）はいずれも南北方向に延びる。主に珠洲、越中瀬戸など中近世の遺物が出土した。

a. 溝・自然流路・堀

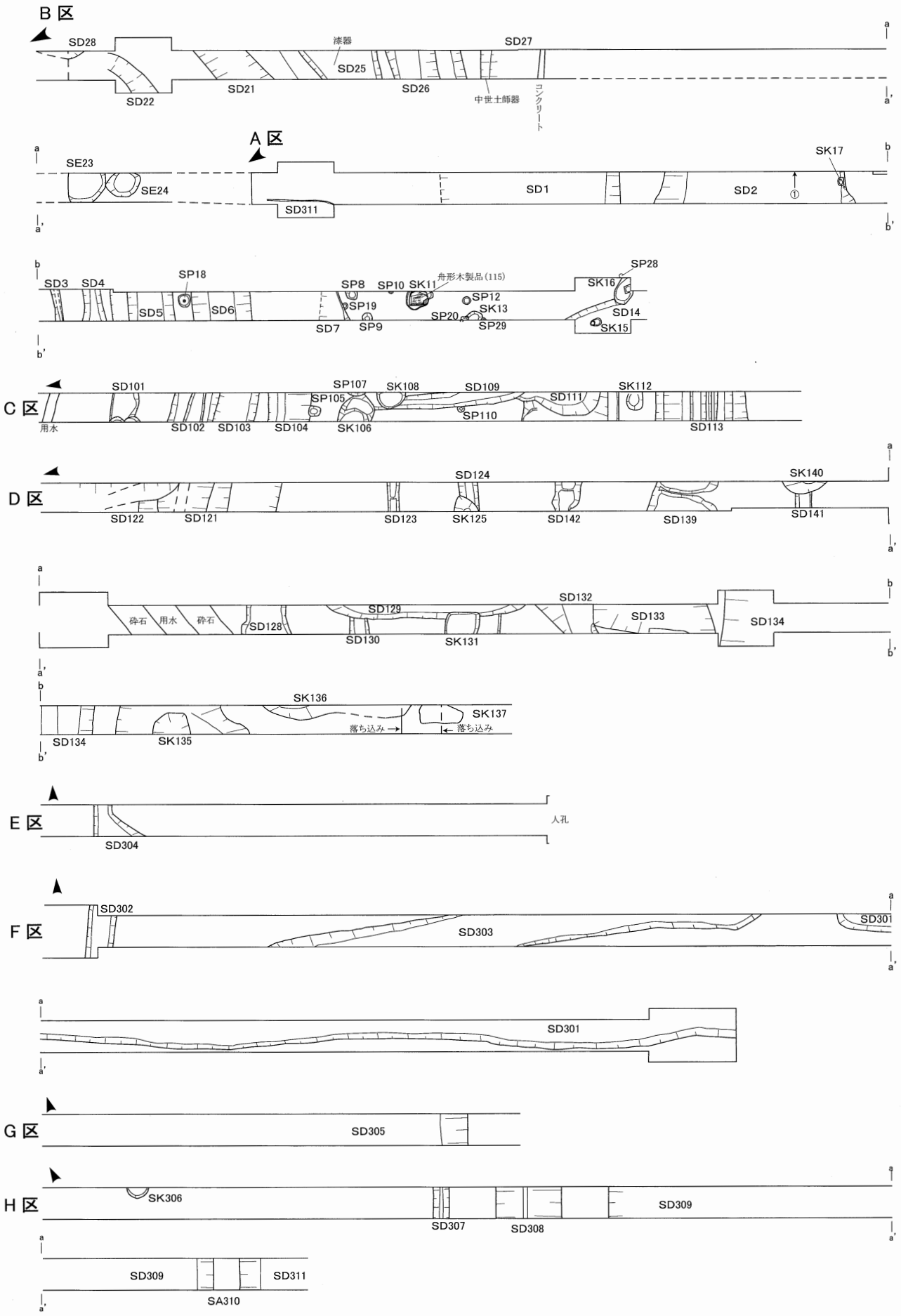
SD601・602:SD601 は検出幅約 1.2m、SD602 が検出幅約 1.3mを測る。約3～ 3.5mの間隔を保ちつつ、南北方向に平行して延び、2005 年度調査区北側で検出した溝と連結する。

SD603：検出幅約 1.8 ～2mを測る。南北方向に延び、2005 年度の南北両調査区で検出した溝と連結する可能性が高い。2005 年度の南北調査区で、いずれも西側に屈曲していることから周溝の一部と考えられる。飾金具（96）が出土した。（朝田）

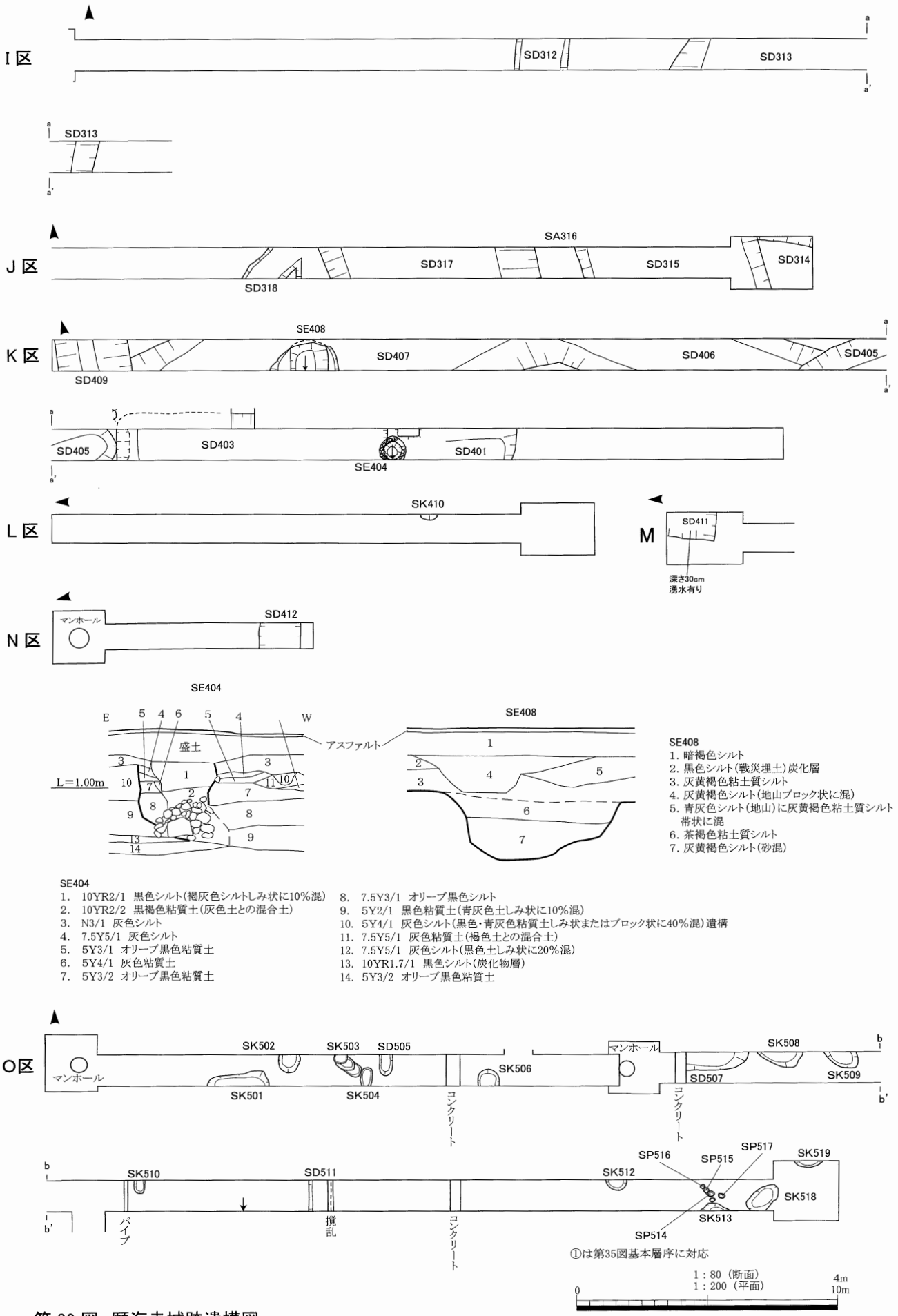


第 37 図　願海寺城跡調査区位置図

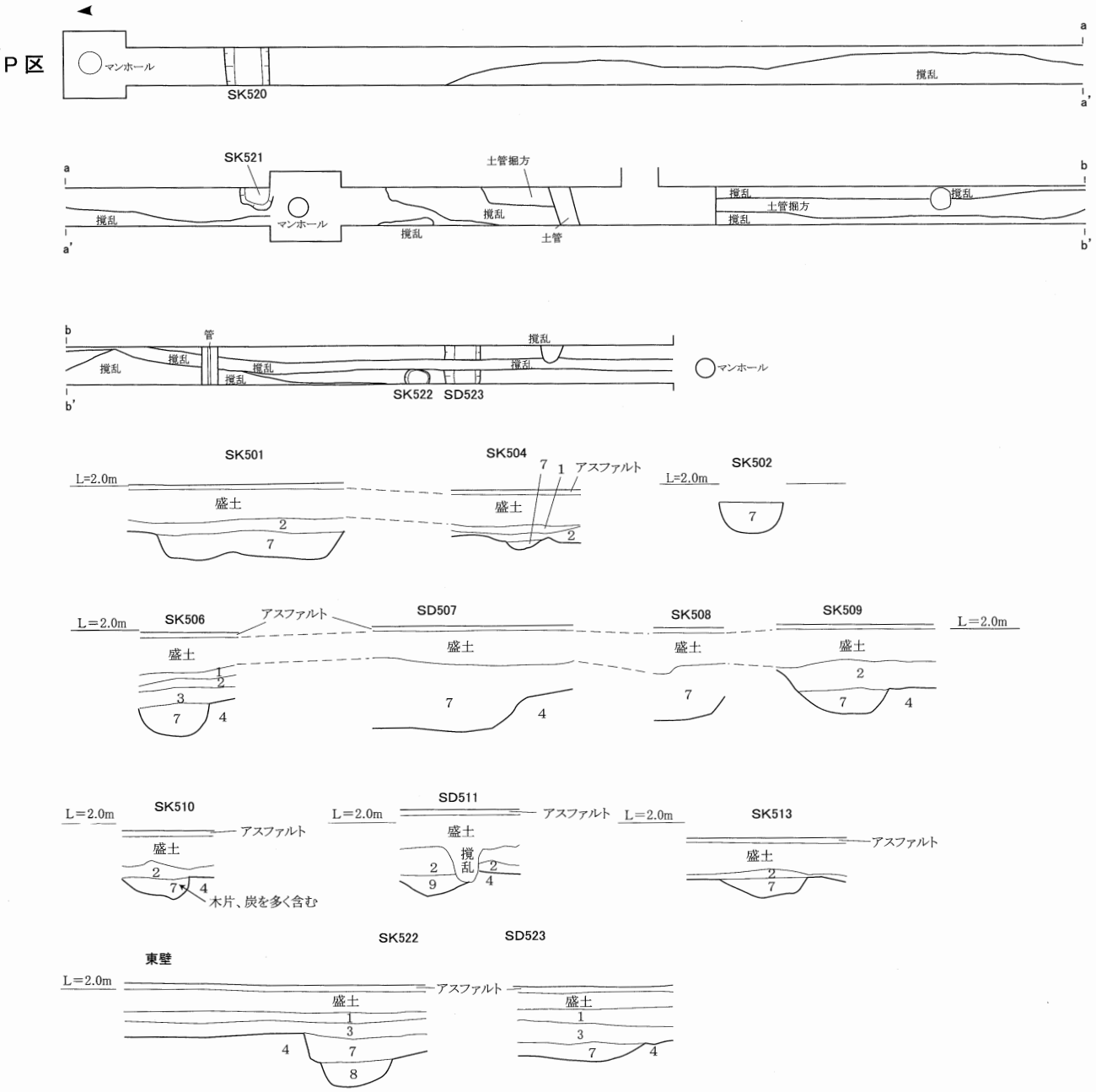
0　1：3,000　150m



第 38 図　願海寺城跡遺構図



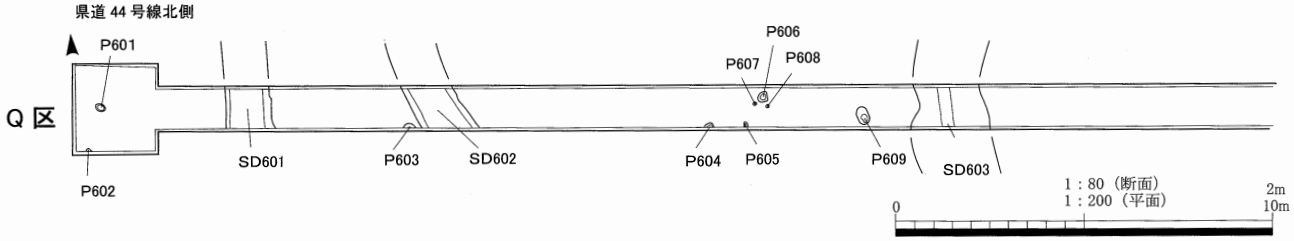
第 39 図　願海寺城跡遺構図



1. 2.5Y2/1 黒色粘質土(青灰色粘質土しみ状に30%混) しまり やや強い 粘性 やや強い 炭化物少量
2. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土(黒色粘質土しみ状に5%混) しまり やや強い 粘性 やや強い 炭化物多量
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土(灰黄色砂質土(地山)しみ状に2%混) しまり やや強い 粘性 やや強い 炭化物多量
4. 2.5Y7/2 灰黄色砂質土 しまり やや弱い 粘性 やや弱い 炭化物無
5. 5Y5/3 灰オリーブ色シルト(黒褐色粘質土しみ状に30%混) しまり やや弱い 粘性 やや弱い 炭化物少量
6. 10YR3/2 黒褐色粘質土(青灰色シルト、灰黄色砂質土しみ状に4%混)しまり やや強い 粘性 やや強い 炭化物少量 混合土
6'. 10YR3/2 黒褐色粘質土(青灰色シルト、灰黄色砂質土しみ状に20%混)しまり やや強い

遺構埋土

7. 2.5Y2/1 黒色シルト(灰白色砂質土しみ状に10%混)
しまりやや弱い 粘性やや弱い 炭化物多い
8. 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト(浅黄色シルト、黄灰色砂質土しみ状40%混)
混合土 しまり やや強い 粘性 やや強い 炭化物 少量
9. 5Y4/3 暗オリーブ色シルト しまりやや強い 粘性やや弱い 炭化物微量



第40図 願海寺城跡遺構図

（2）遺物

A. 土器・陶磁器

a. 須恵器（1）

1は須恵器の坏Aである。口縁部から体部がロクロナデ、底外面が回転ヘラ切りである。9世紀の所産である。

b. 中世土師器（2～20）

2～20は中世土師器の皿である。3のみロクロ成形、ほかはすべて非ロクロ成形で、掲載した18点の内、灯明皿として使用したと確認できるものは4点（3・13・14・19）である。16には被熱による破砕がみられ、油煙痕も厚く付着しており、取鍋（70・71）のような用途に使用した可能性が指摘できる。器型は、口縁形態が丸いもの（3・4・7・8・14～16）、口縁端部を上方に摘み上げるもの（9・13）、口縁上端を摘み上げ、端部内面が浅く窪むもの（5・12・17～19）、口縁端部が薄く尖るもの（6・9～11・20）に分けられる。法量は口径8～10㎝の小型品、11～13㎝の中型品、14～16㎝の大型品に区分できる。16世紀前半を中心とする15世紀後半～16世紀の所産である。

c. 越中瀬戸（21～39）

21～29は皿である。底部が残存しているものは、いずれも内禿皿である。21・22・27・28は見込みに印花を押捺するもので、十六弁菊（21・27）、二重菊（28）がある。27のみ灰釉を、その他は鉄釉を施す。21は釉止めの段が明瞭で宮田編年のⅠ期である。釉は錆釉の可能性がある。見込には重ね焼き痕がある。22、23は釉止めの段がなく、宮田編年のⅡ期である。29は大皿で瀬戸美濃の可能性がある。高台は付高台、削り出し高台、削り出し輪高台である。31～33は壺である。いずれも鉄釉を施す。31は肩部で内湾したのち、口縁部が端部に向かって直立する。口縁端部は丸くおさめる。32は匣鉢の可能性がある。34～36は匣鉢である。いずれも底部のみである。37・38は擂鉢である。34・36～38はいずれも鉄釉を施す。37は口縁を外側に折り返し縁帯を形成する。口縁部のみのため、卸目の単位は不明である。38は底部のみ残存する。卸目は11条1単位である。体部の底部付近に指頭圧痕がある。39は秉燭である。胴部内外面に鉄釉を施す。見込みに幅18㎜の燈身立てがつく。底部回転糸切りである。

d. 瀬戸美濃（40～48）

40～42は皿である。40は体部が口縁端部に向かってやや外反気味に、41は口縁端部が外反して立ちあがる。いずれも灰釉を施す。43～47は碗である。43は底部のみ残存しており、詳細は不明である。44～47は鉄釉の天目茶碗である。44は体部に丸みを持ち、口縁端部を軽く外反させるものである。48は茶入である。

e. 唐津（49～57）

49～51は碗である。49は体部が口縁端部に向かってやや内湾気味に立ち上がり、端部はそのまま丸くおさめる。49・50は灰釉を施す。51は体部が口縁端部に向かって直線的に立ち上がり、そのまま丸く仕上げる。体部外面に厚みのある鉄釉でアミカケする。52は擂鉢である。口縁部がやや肥厚して外反する。内外面に鉄釉を施す。体部の口縁部付近外面に沈線を1条施す。卸目は9条1単位である。53は鉢である。口縁端部に向かってやや内湾気味に体部が立ち上がる。口縁端部は大きく肥厚する。54は甕である。体部中程の一部のみの残存のため、詳細は不明である。55は刷毛目唐津の壺である。褐色の素地に白土を刷毛で塗り、縞状の文様を施す。56は碗である。57は京都系唐津または京焼の碗である。体部が口縁端部に向かってほぼ直線的に立ち上がる。黄色味を帯びた透明釉の上に鉄釉で意匠を施す。

f. 伊万里（58～69）

58～66は碗である。体部は口縁端部に向かって直線的に立ち上がり、そのまま丸くおさめる。66

は小碗である。67 ～ 69 は皿である。意匠が確認できるものは草花文を施すものが多い。69 には裏銘を施す。

B. 土製品

70、71 は取鍋である。70 は口径 4.80 cm、器高 2.25 cm、71 は口径 5.90 cm、器高 2.50 cmを測る。成型は手づくねで胎土に1mm大の砂礫が混じる。いずれも被熱しており、71 には内面に厚く残査物が溶着する。70 の内面には金色に輝く粒子が点在する。これは蛍光X線分析の結果、金であることが判明している。一方、71 の内面には鉛、錫、銅が検出されており、青銅を扱っていた可能性がある。

72 ～ 78 は塼である。長方形に成形される焼成粘土塊だが、出土したものはその一部である。低温度焼成の為、外面が白化、内部は黒化し脆弱である。また残存状態が不良のため確認できなかったが、これら 72 ～ 75、76 ～ 78 は各々で同一個体の可能性が高い。

C. 石製品

79 ～ 84 は石臼である。79 ～ 82 は上臼、83・84 は下臼である。確認できるものの副溝のパターンはいずれも8分画で、1 単位5～ 10 の副溝が施される。81 は遺存状態が悪く、摺面の副溝が残っていない。85 ～ 89 は五輪塔である。5点出土し、4点が火輪 (84 ～ 87)、1点が地輪 (88) である。87 はSE404 の石組に転用されていた。90・91 は板碑である。90 は下部のみ残存する。いずれも摩耗が激しい。92 は砥石である。被熱している。砥面は2面確認できた。93 ～ 96 は被熱礫である。

D. 金属製品

95 は飾金具である。プレスして文様を浮き立たせる意匠を施した厚さ1mm以下の薄い金属板に、長さ 10 cm程度のひも状の金属片が6条延びる。ひも状金属片の端部には穿孔が穿たれており、別の金属片とつながっていた可能性が指摘できる。装身具か。97 ～ 99 は鉄滓である。

E. 木製品

100 ～ 104 は漆器である。100 は高台が2cm前後で、器高が高く大ぶりである。体部は底部からそのまま水平へ伸びたのち、上方へ向かって屈曲し、口縁端部に向かってやや内湾気味に伸びる。101 ～ 104 は高台が1cm前後である。体部は底部かそのまま内湾気味に伸びる。漆器はいずれも黒色漆塗りで、101～ 103 は赤色漆で文様が描かれる。自然科学分析の結果、100 はカエデ属、101 ～ 104 はブナ属であった。100 ～ 103 は木胎の上に炭粉渋下地の上に透明漆を1層施し、その上に漆絵の朱漆を1層重ねる。

105 は箸である。残存部で約 10 cmを測る。通常 20 cm前後以上である箸の一部分のみである。断面は方形を呈する。

106・107・109・115 は容器である。106 は曲物側板で留具が残存する。107 は桶の側板である。109は曲物底板で釘穴が3カ所残る。焦跡が確認できる。115は舟型木製品である。108は板材である。

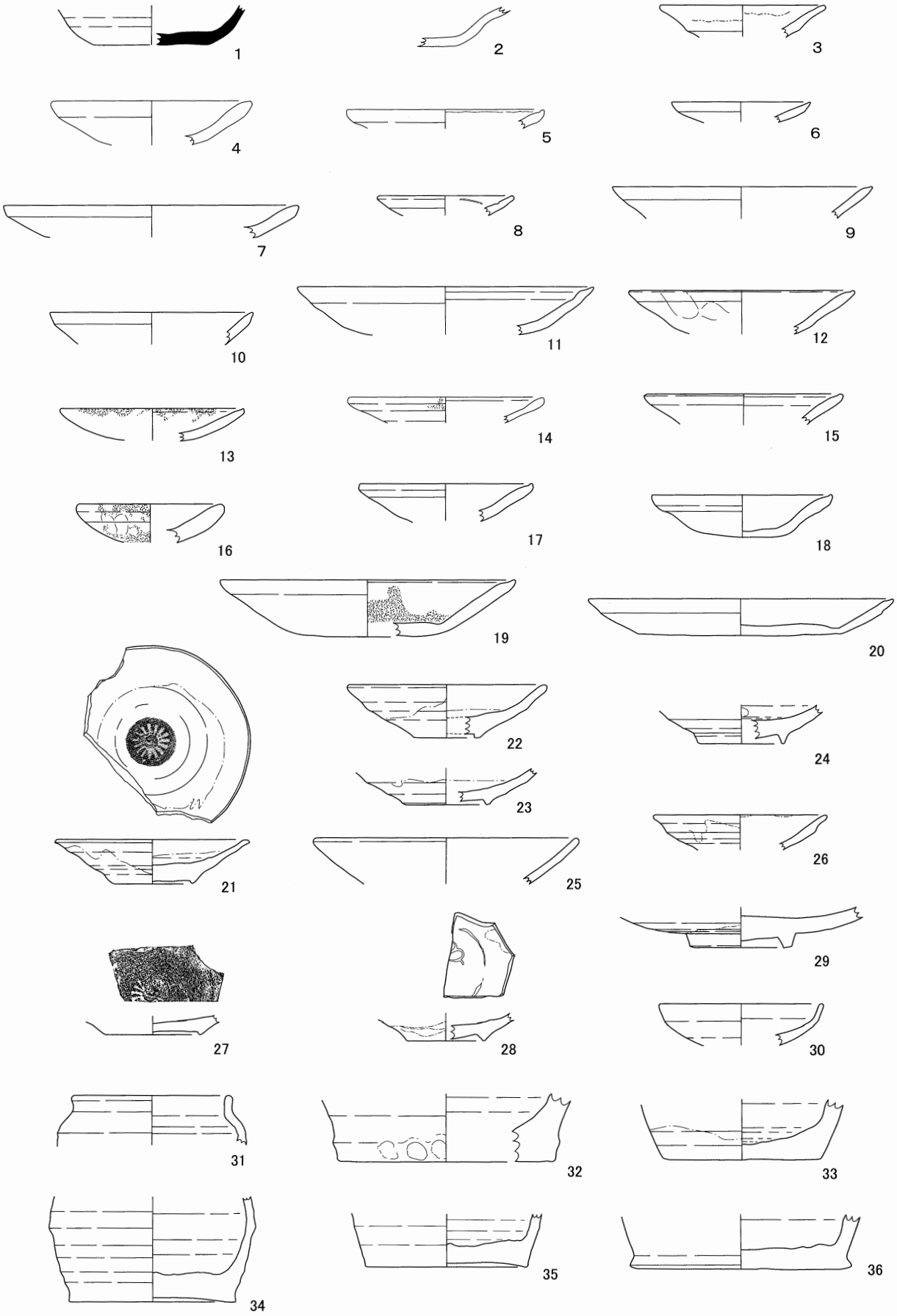
110 ～ 113 は木札である。110 は出土した最も大きな木札で端部に金属片を1箇所施す。111 の木札の残存部には全面に小穴が 12 箇所確認出来る。

114 は農具である。又鋤の一部と考える。先端部分に砂が食い込んでいる。

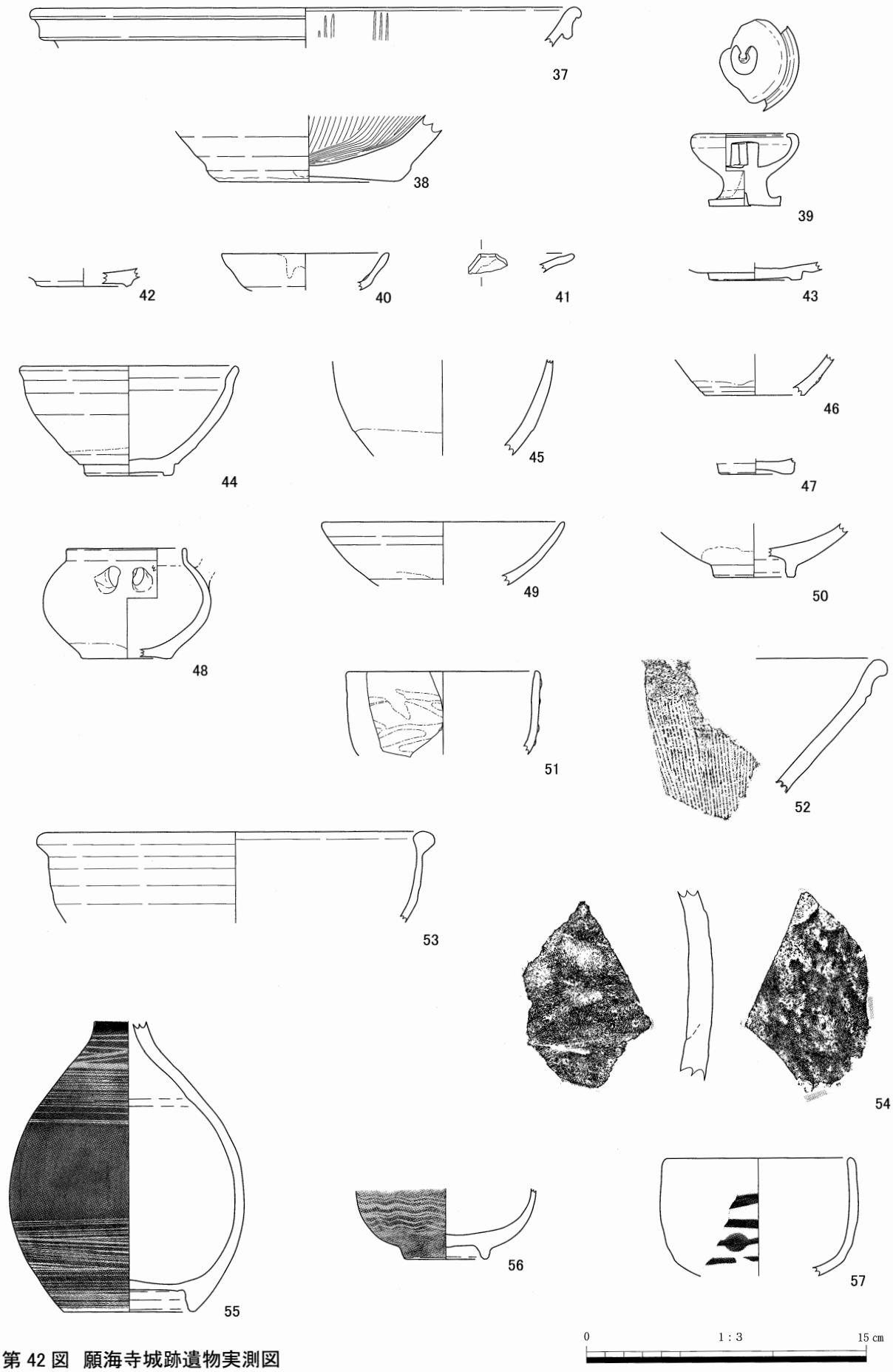
116 は弓状木製品である。網枠である可能性がある。

117 ～ 127 は建築材である。117 ～ 119 は部材、120 ～ 122 は板材、123 は炭化材、124 ～ 126 は杭、127 は柱である。117 は一部炭化する。118 の側面には鋸挽き目痕が多くみられる。120、121 は同一個体の可能性が高い。123 には工具痕が残る。全体に炭化する。124 ～ 126 は芯持ち材である。125 は樹皮部分が炭化する。上方に窪み状の加工痕がみられる。126 の上方には圧迫痕がみられる。127 の一部に焦げ跡が残る。

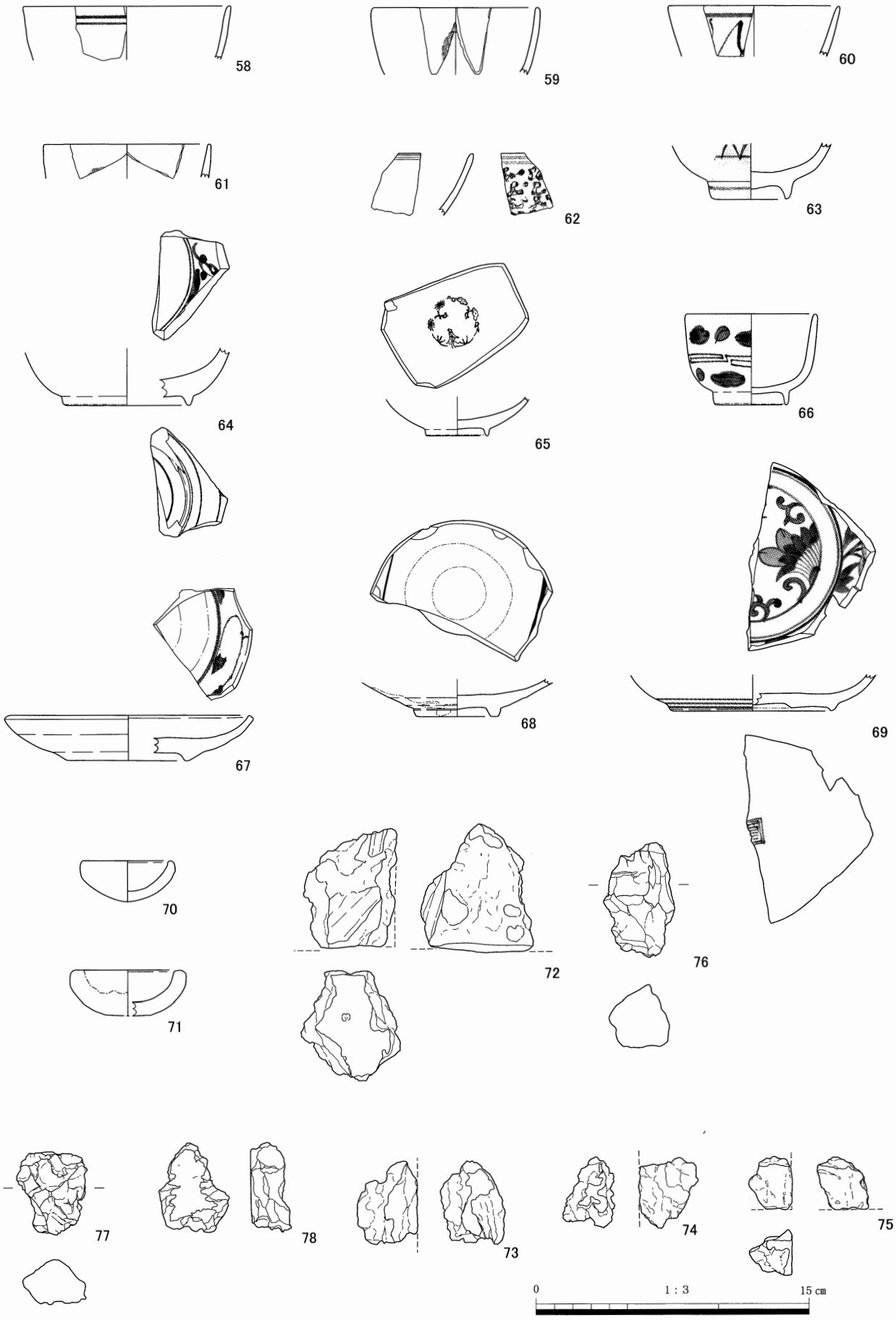
128 ～ 130 は不明加工木である。128・129 は杵の可能性がある。柱の二次利用と考えられる。130 は使途不明木製品である。未成品の可能性がある。（朝田）



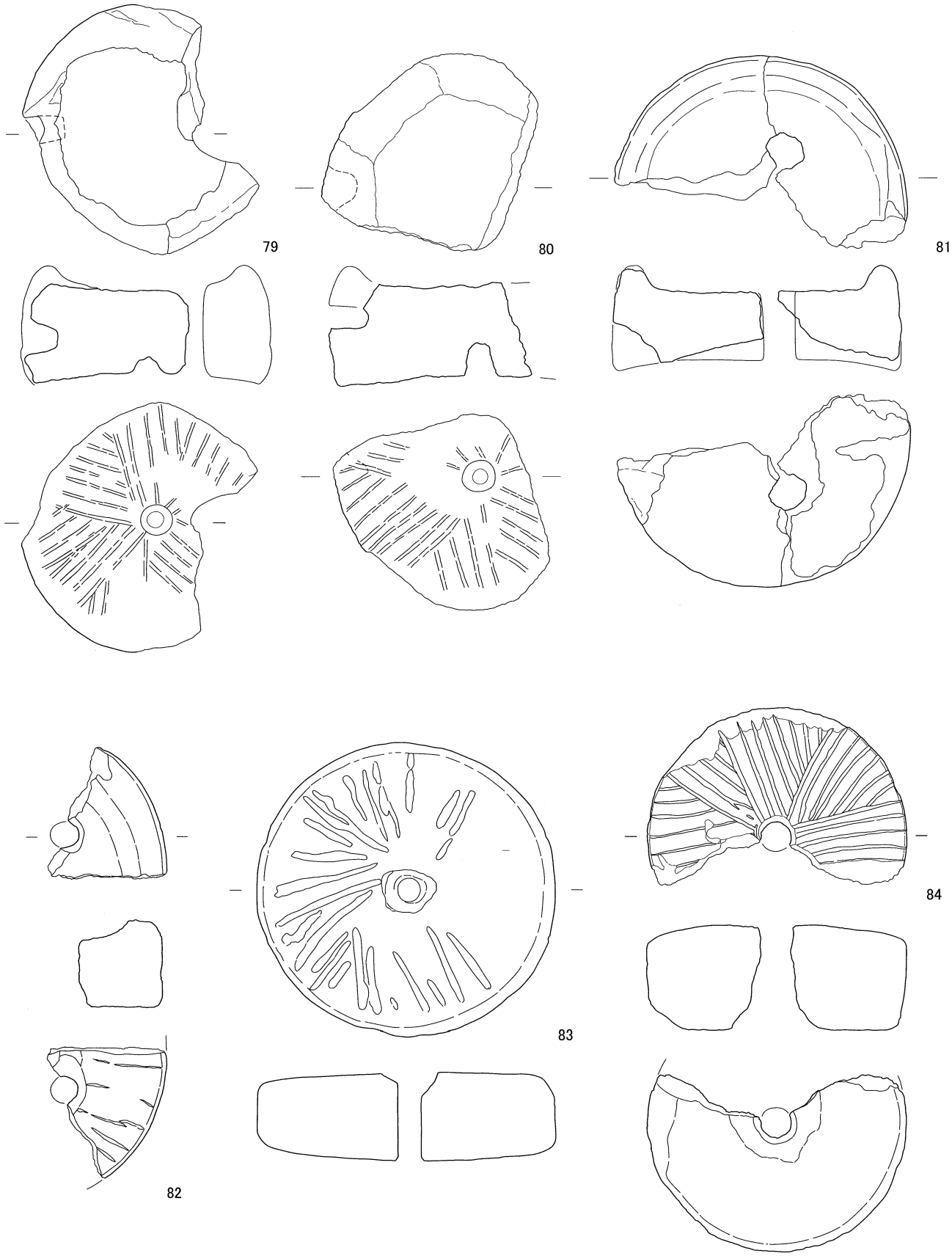
第 41 図　願海寺城跡遺物実測図
須恵器(1)　中世土師器(2～20)　越中瀬戸（21～36）



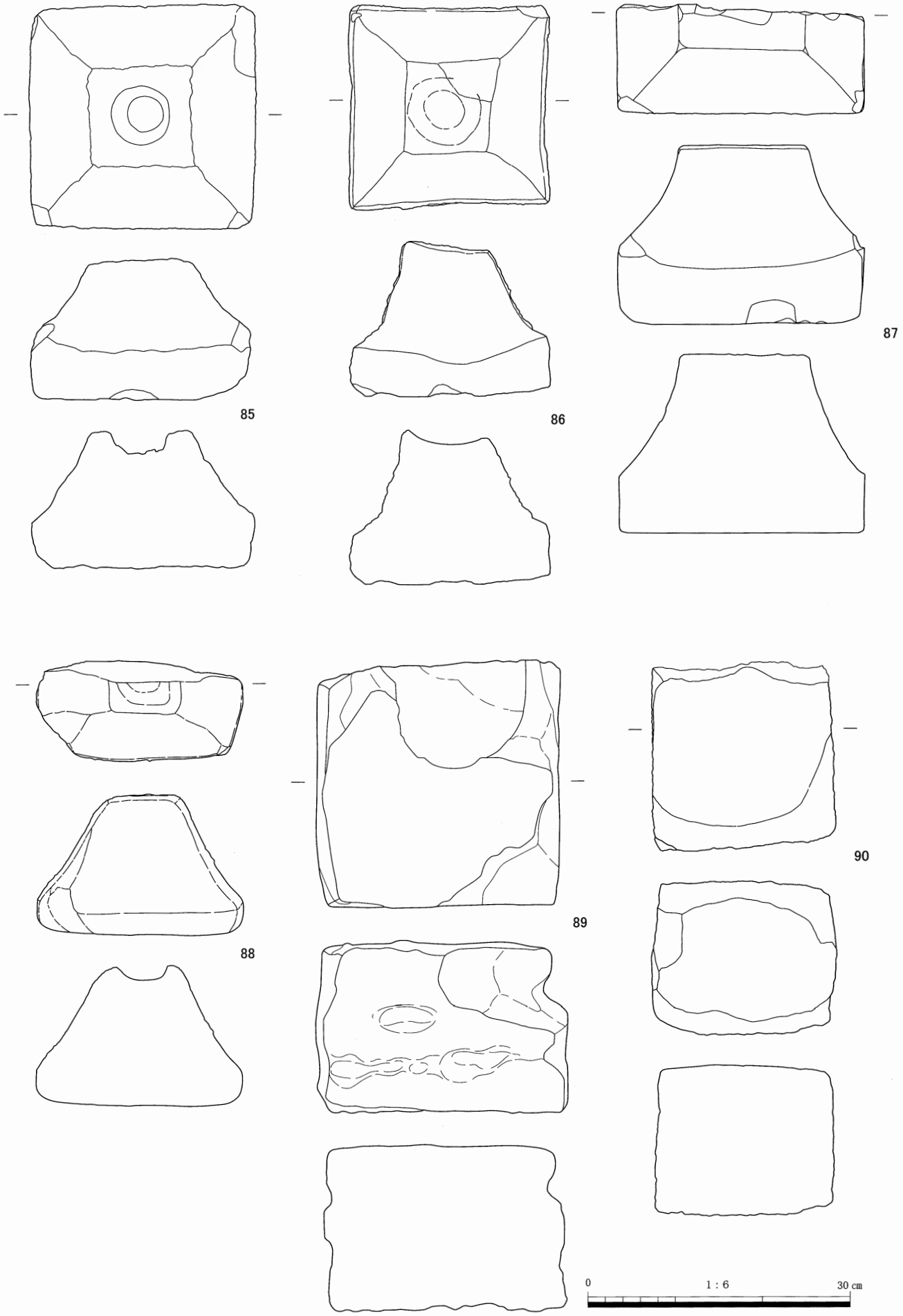
第 42 図　願海寺城跡遺物実測図
越中瀬戸（37 ～ 39）瀬戸美濃（40 ～ 48）唐津（48 ～ 57）



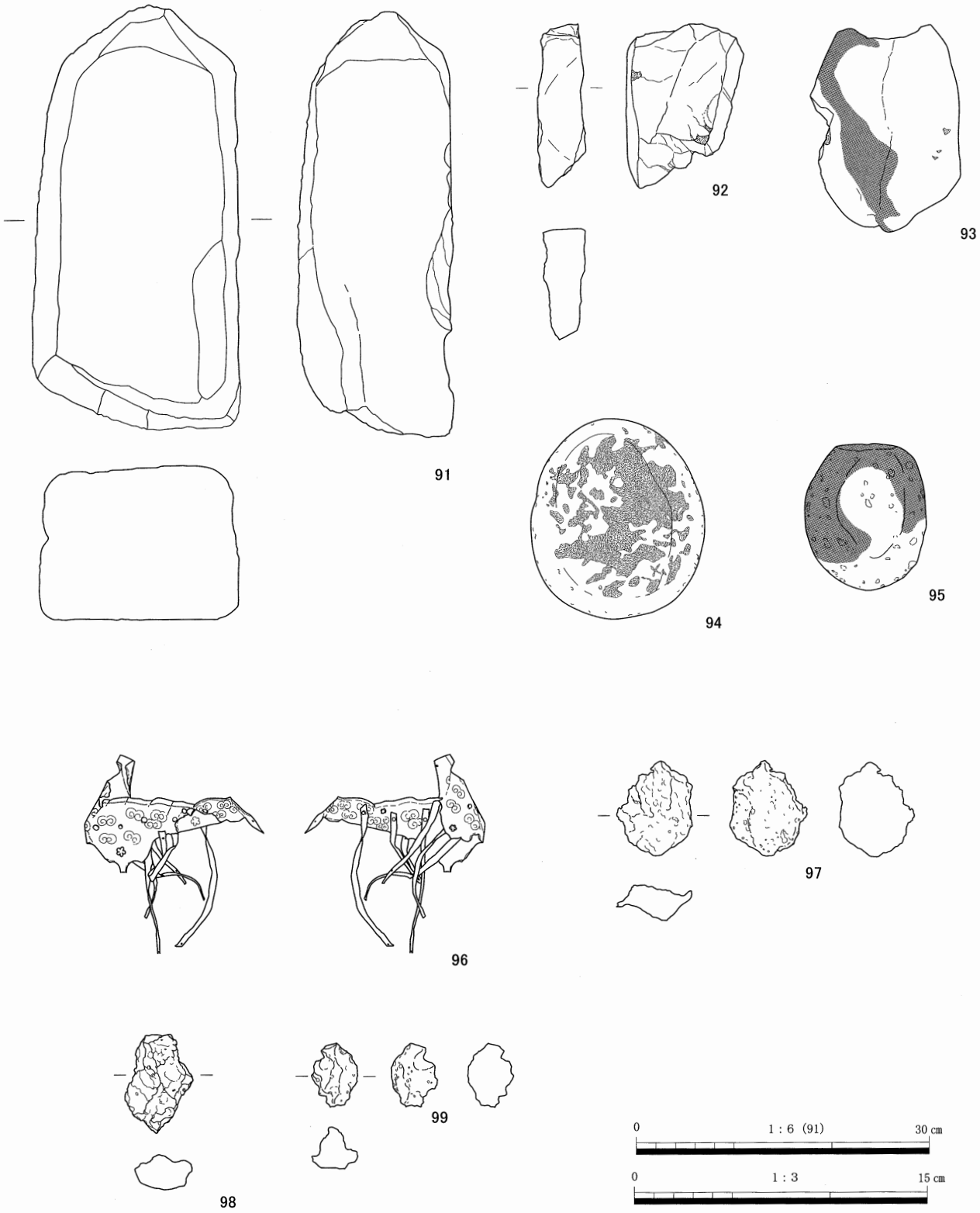
第 43 図　願海寺城跡遺物実測図
伊万里（58 ～ 69）取鍋（70・71）磚(72 ～ 78)



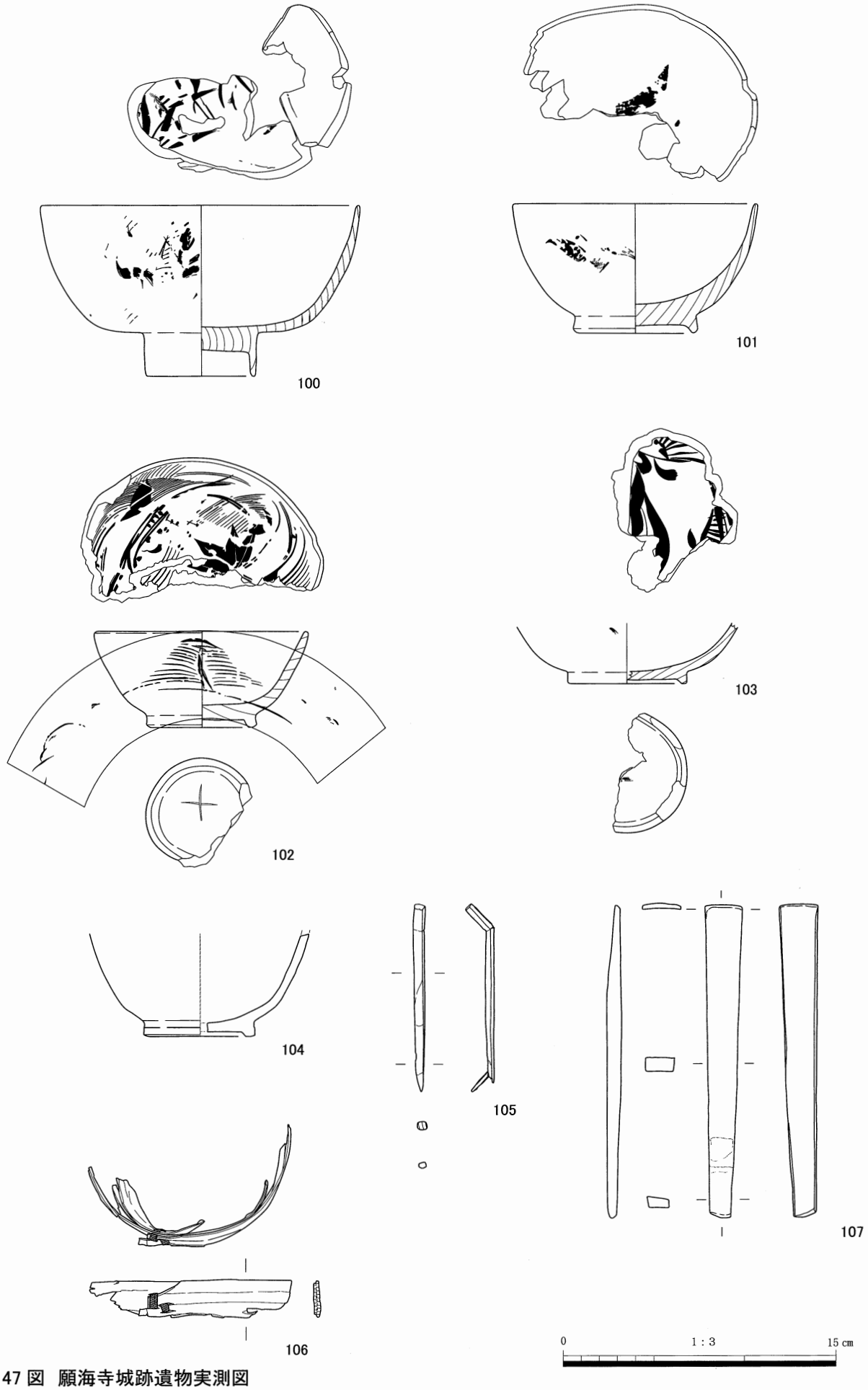
第 44 図　願海寺城跡遺物実測図
石臼（79 ～ 84）



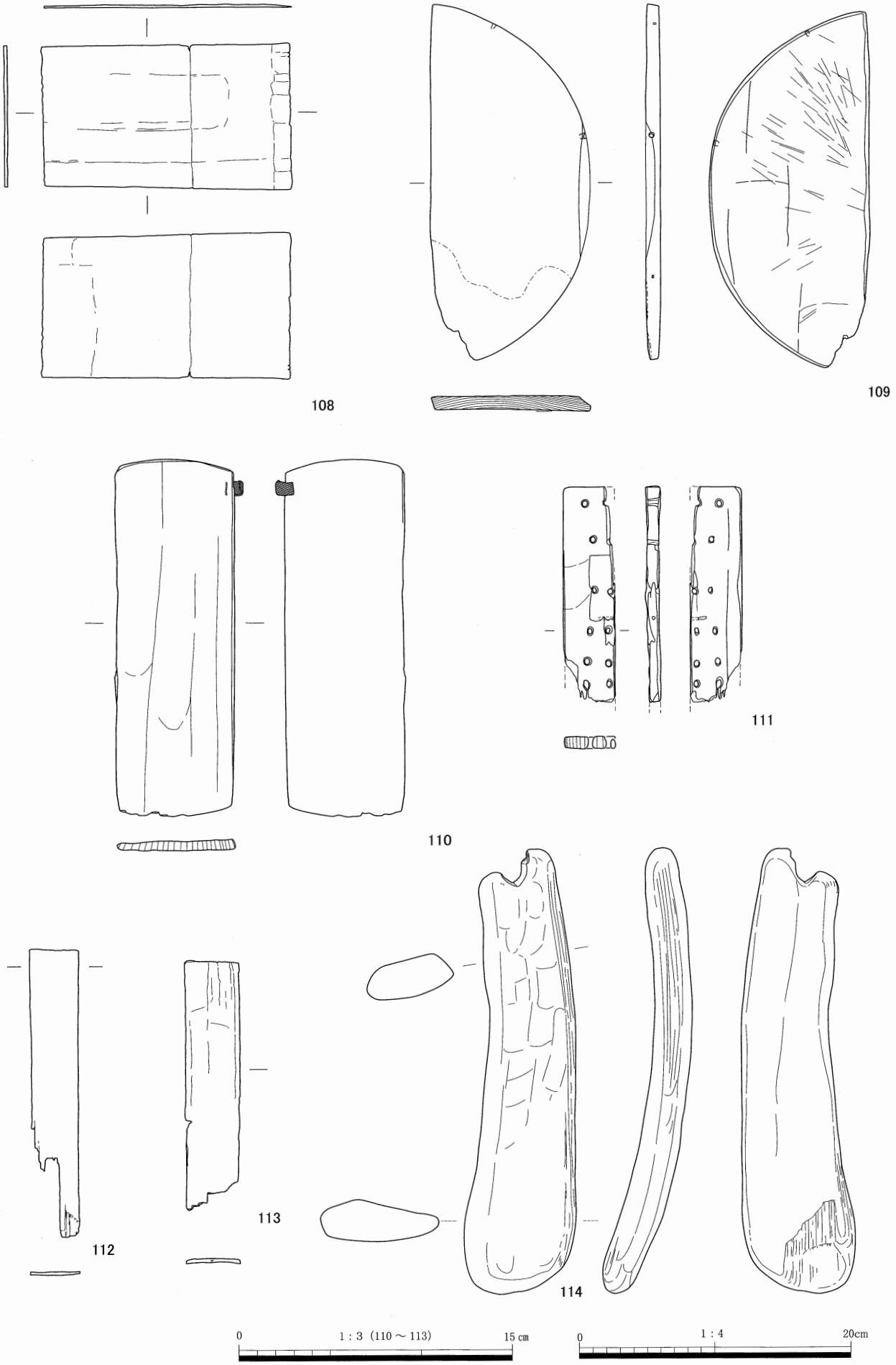
第 45 図　願海寺城跡遺物実測図
五輪塔（85 ～ 89）板碑（90）



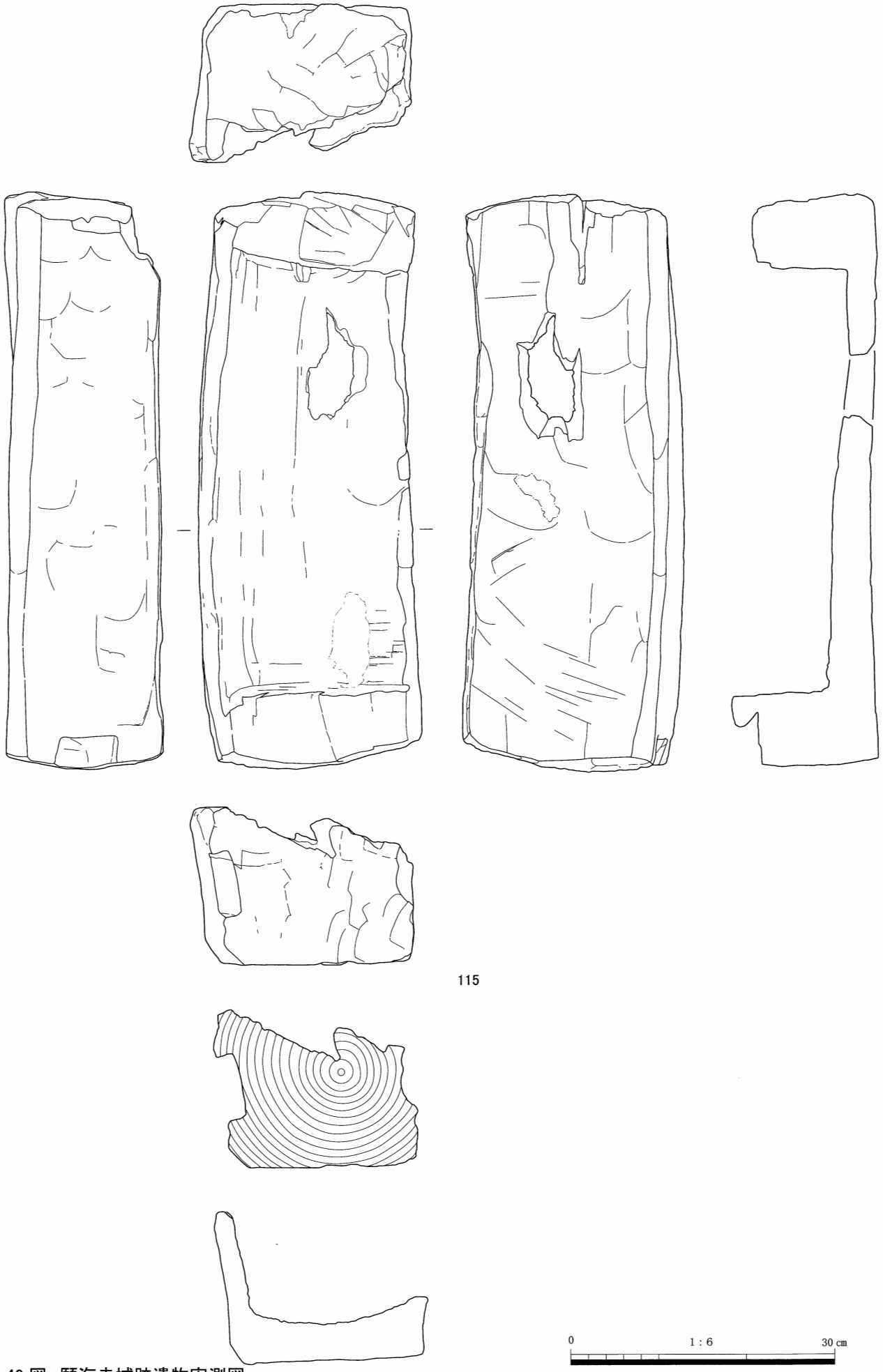
第 46 図　願海寺城跡遺物実測図
板碑 (91)　砥石 (92)　被熱礫 (93 ～ 95)　飾金具 (96)　鉄滓 (97 ～ 99)



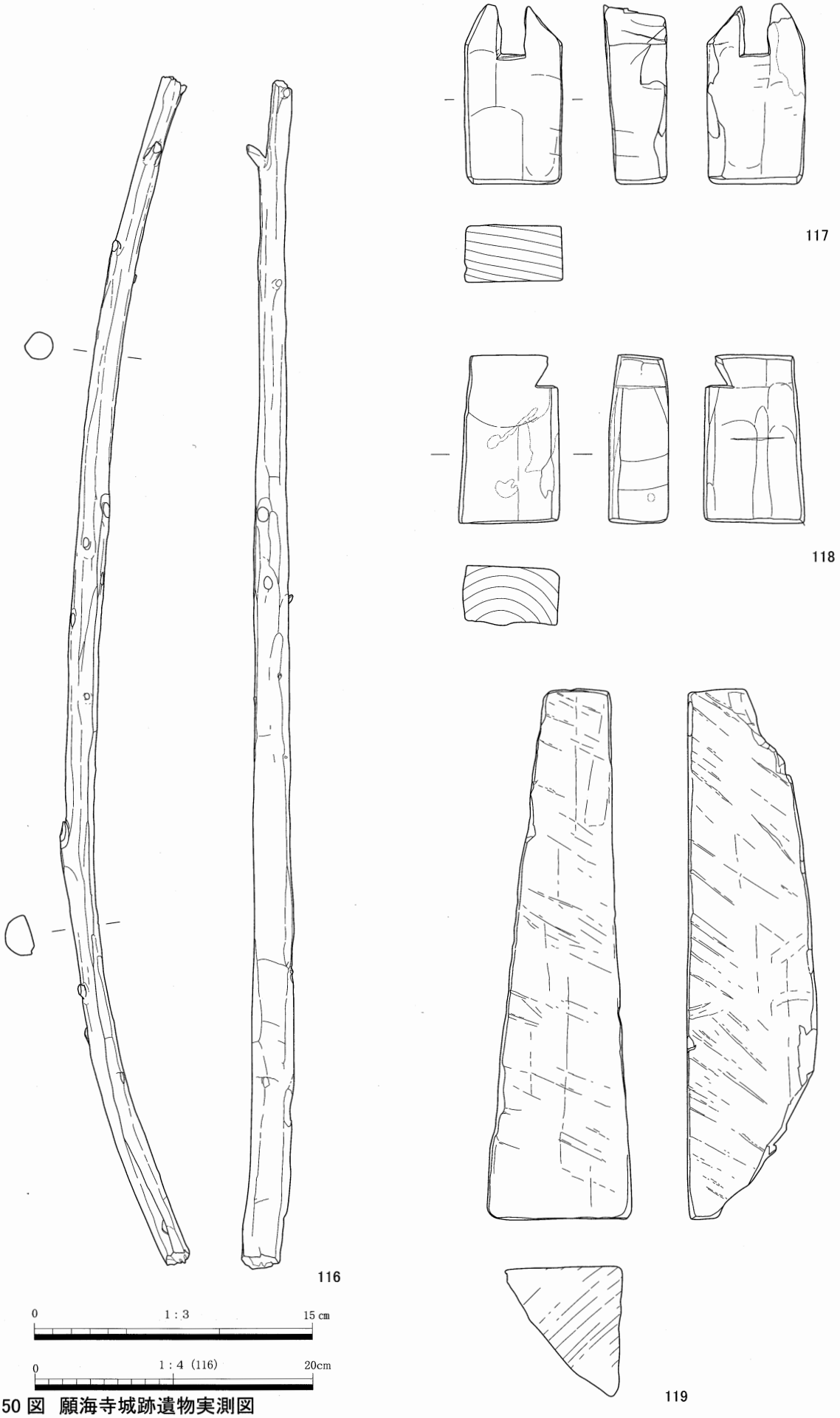
第 47 図　願海寺城跡遺物実測図
漆器 (100 ～ 104)　木製品 (105 ～ 107)



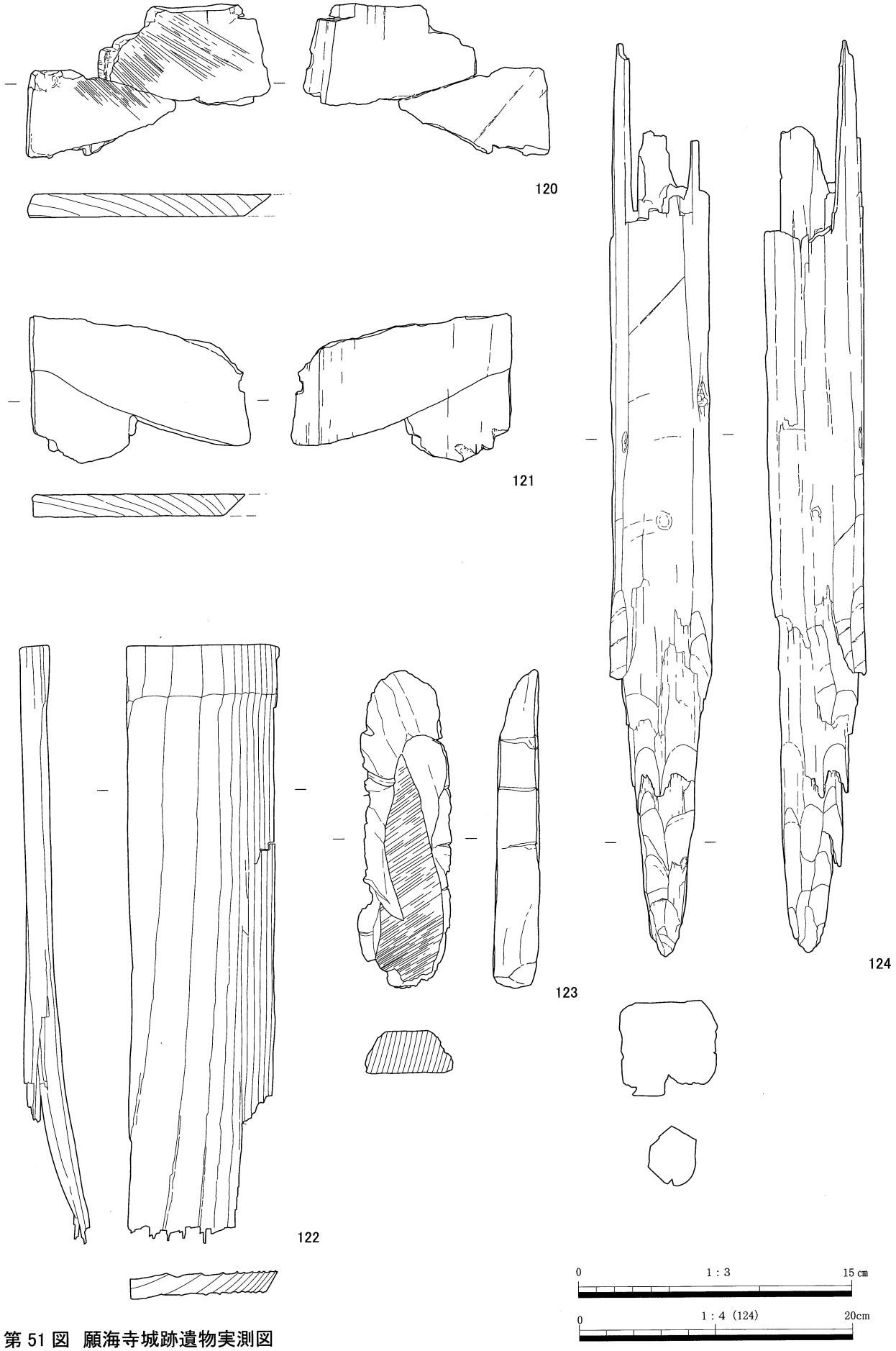
第 48 図　願海寺城跡遺物実測図
木製品（108 ～ 114）



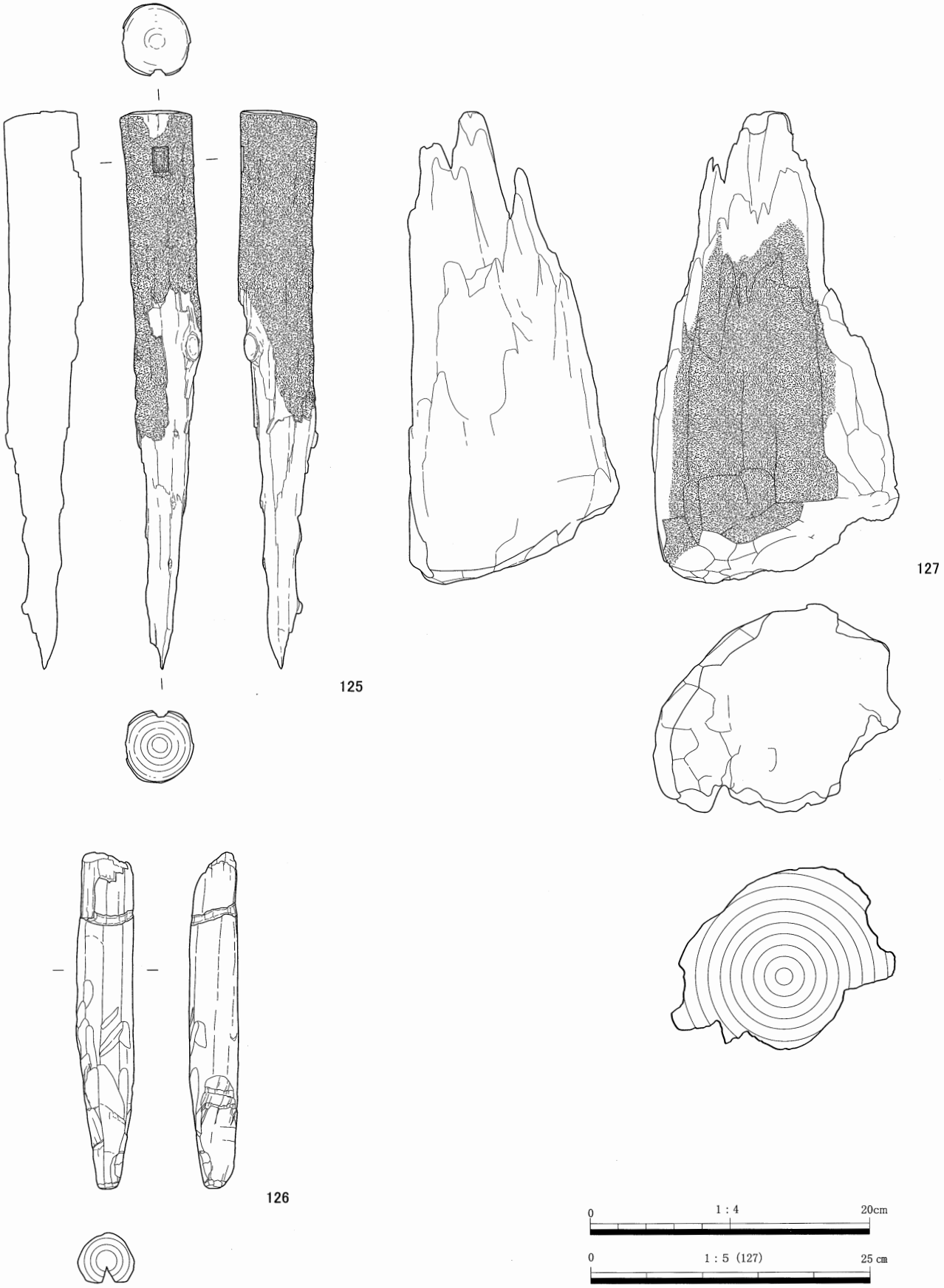
第 49 図　願海寺城跡遺物実測図
木製品（115）



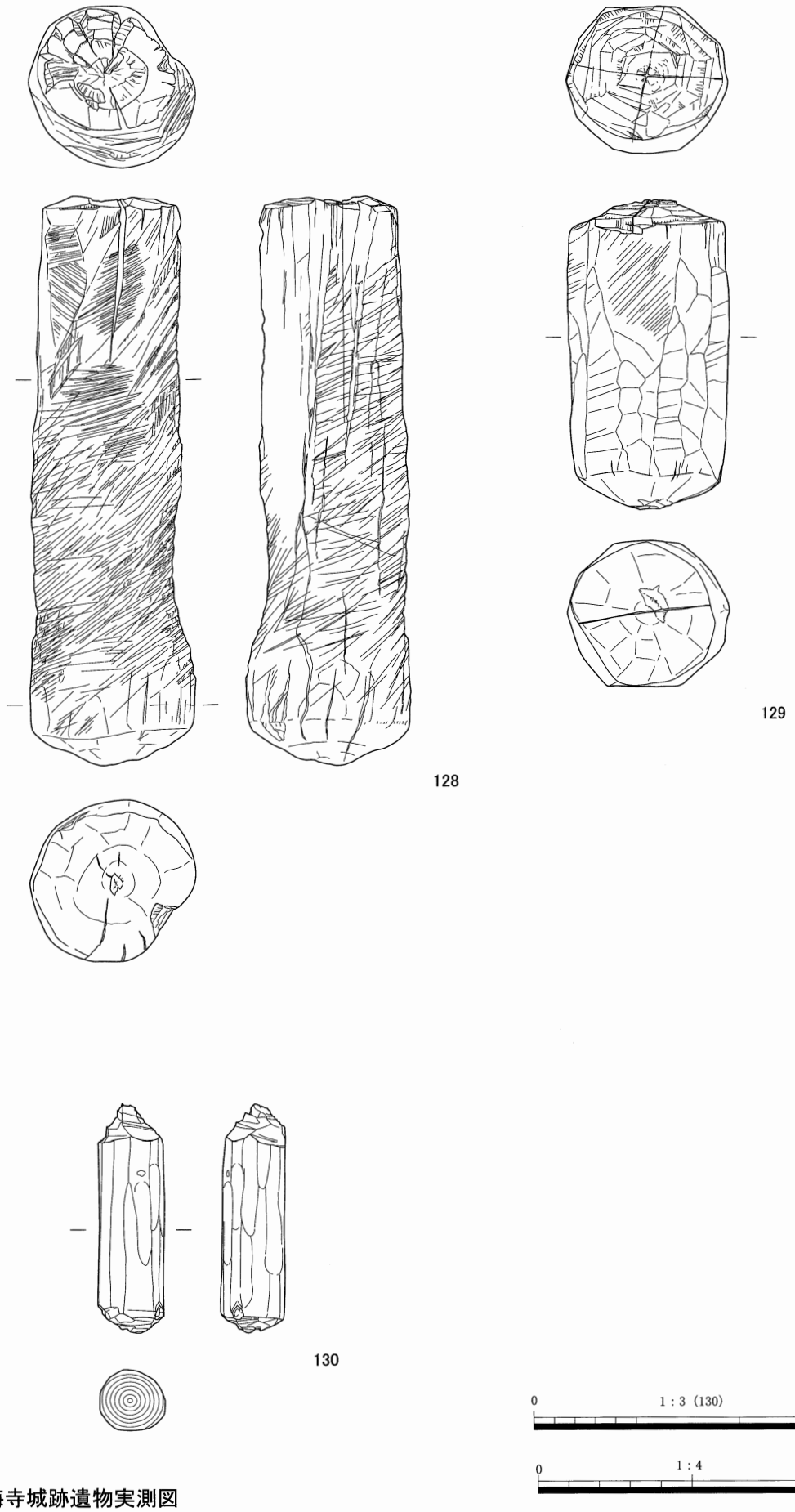
第 50 図　願海寺城跡遺物実測図
木製品（116 ～ 119）



第 51 図　願海寺城跡遺物実測図
木製品（120 ～ 124）



第 52 図　願海寺城跡遺物実測図
木製品（125 ～ 127）



第 53 図　願海寺城跡遺物実測図
木製品（128 ～ 130）

第5表　願海寺城跡遺構一覧（1）

遺構番号		地区	平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
SD	1	A	東西	(1.20)	(6.80)	0.39		0m付近の溝か落ち込み
SD	2	A	東西	(1.20)	7.58	0.64	中世土師器(6・7)・越中瀬戸(31)・瀬戸美濃(44)・唐津(51)・建材(117)・板材(123)	SD2＜SK、南肩部から漆器出土、北肩部に落ち込みがあり、深さ45cm
SD	3	A	東西	(1.20)	0.30	0.58		
SD	4	A	東西	(1.20)	0.95	0.27	塼(72～75)	
SD	5	A	東西	(1.10)	1.72	0.69	唐津(54)	
SD	6	A	東西	(1.10)	2.20	0.64		
SD	7	A	東西	(1.10)	(1.15)	0.24		SD7＞SP19
SP	8	A	円形	0.42	(0.30)	0.17		
SP	9	A	円形	0.38	(0.29)	0.42	瀬戸美濃(41)・杭(126)	
SP	10	A	(円形)	0.20	0.09	0.07		
SK	11	A	(楕円形)	1.00	(0.69)	0.50		礎板遺物あり
SP	12	A	円形	0.30	0.30	0.08		
SK	13	A	(円形)	0.65	(0.34)	0.16	杭(124)	SK13＜SP・SP
SD	14	A	北西-南東	(2.12)	1.34	0.13		SD14＞SK15・SP、SD14＜SK16
SK	15	A	(楕円形)	0.27	(0.24)	0.14		SK15＜SD14・SP
SK	16	A	(楕円形)	(1.05)	0.66	0.23		SK16＞SD14、石(遺物)あり
SK	17	A	楕円形	0.31	0.22	(0.51)		SK17＞SD2
SP	18	A	(円形)	0.49	0.46	0.21		
SP	19	A	円形	0.23	(0.17)	－		SP19＜SD7
SP	20	A	(円形)	0.28	(0.13)	0.22		SP20＞SK13、柱
SD	22	B	北東-南西	(1.30)	(1.00)	0.24	中世土師器(14)、木札(112)	
SE	23	B	円形	1.43	(1.10)	1.43		素掘井戸
SE	24	B	(円形)	1.32	(0.95)	1.22		素掘井戸
SD	25	B	東西	(1.10)	(3.78)	0.25	漆器	4～8m範囲の溝、北肩不明、漆器出土
SD	26	B	東西	(1.10)	1.85	0.77		8.5～11m範囲の溝
SD	27	B	東西	(1.10)	(2.38)	0.33	中世土師器	11.5～14m範囲の溝、南肩不明、検出面-10cmから中世土師器出土
SP	28	A	(円形)	(0.16)	(0.16)	－	柱(127)	調査区外、柱穴・木柱と礎石あり
SP	29	A	(円形)	0.20	(0.08)	－		SP29＞SK13
SD	101	C	東西	1.02	(1.10)	0.34		
SD	102	C	東西	(1.12)	1.64	0.87	越中瀬戸(24)・漆器(103)	SD102・SD103の切り合い不明
SD	103	C	東西	(1.12)	1.53	0.28		SD102・SD103の切り合い不明
SD	104	C	東西	(1.10)	1.65	0.92	砥石(92)、被熱礫(93・94)	SD104＜SP105
SP	105	C	円形	0.43	0.39	0.16		SP105＞SD104
SK	106	C	(楕円形)	1.20	(1.12)	0.55	瀬戸美濃(40)・塼(76～78)・被熱礫(95)・箸(105)	SK106＞SD109、SK106＜SP107
SP	107	C	(楕円形)	0.68	(0.13)	0.13		SP107＞SK106
SK	108	C	(円形)	1.05	(0.63)	0.27		SK108＞SD109
SD	109	C	南北	(5.69)	0.57	0.40	越中瀬戸(42)、板碑(90)	SD109＜SK106・SK108、SD109＞SP110・SD111
SP	110	C	円形	0.25	(0.21)	0.07		SP110＜SD109
SD	111	C	－	(1.10)	3.69	0.43	中世土師器(9・10)・伊万里(58)	SD111＜SD109
SK	112	C	楕円形	0.61	(0.61)	0.11		
SD	113	C	東西	(1.10)	3.20	0.71	越中瀬戸(25・33・37)・瀬戸美濃(47)	
SD	121	D	東西	(1.10)	3.32	1.93	中世土師器(8)・鉄滓(98)・木札(111)	薬研堀、SD121＜SD122
SD	122	D	(北西-南東)	－	(1.10)	0.32		プラン不明、SD122＞SD121
SD	123	D	東西	(1.10)	0.50	0.40		
SD	124	D	東西	(0.72)	0.70	0.25		SD124＜SK125
SK	125	D	(楕円形)	0.87	(0.59)	0.50		SD124＜SK125
SD	141	D	東西	(0.53)	0.60	0.12		SD141＜SK140
SK	140	D	(楕円形)	1.70	(0.47)	0.21	中世土師器(3)・唐津(49)・木札(110)	SD141＜SK140
SD	128	D	東西	(1.10)	1.92	0.18	越中瀬戸(32)、石臼(79)	
SD	129	D	－	7.46	(0.55)	0.17	中世土師器(4・5)	SD130＜SD129
SD	130	D	東西	(0.60)	0.75	0.07		SD130＜SD129
SK	131	D	東西	1.24	(0.82)	0.35		
SD	132	D	(東西)	(1.13)	1.20	0.33	中世土師器(11)・越中瀬戸(35)・唐津(50・52)	SD133＜SD132
SD	133	D	(南北)	4.50	(1.10)	1.07	伊万里(59・63)・取鍋(70・71)・木札(113)	薬研堀、北肩部不明、SD133＜SD132
SD	134	D	(東西)	(1.08)	7.10	1.06	中世土師器(15)・伊万里(61)漆器(102)	南肩部不明
SK	135	D	(楕円形)	1.42	(0.81)	0.14		
SK	136	D	－	5.59	(0.56)	0.29		
SK	137	D	－	1.40	(0.71)	－		
SD	139	D	－	2.51	(1.14)	0.26		
SD	142	D	東西	(1.12)	0.98	0.22		

第5表 願海寺城跡遺構一覧（2）

遺構番号		地区	平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
SD	301	F	東西	(28.20)	1.39	0.49	越中瀬戸(29)・曲物側板(106)・曲物底板(109)	
SD	302	F	南北	(1.99)	1.07	0.49	越中瀬戸(26)	
SD	303	F	東北東-西南西	18.50	(1.20)	0.48		
SD	304	E	南北	(1.20)	0.72～2.00	0.27		
SD	305	G	南北	(1.20)	14.00	0.85		箱堀か
SK	306	H	(円形)	0.82	(0.41)	－		3～4m地点、深さ不明
SD	307	H	南北	(1.20)	0.60	0.27		15m付近の溝
SD	308	H	南北	(1.20)	2.50	0.42～		17～19.5m地点の堀、薬研堀か、深さ0.420mより深い
SD	309	H	南北	(1.20)	17.00	0.23	中世土師器(17・19・20)・丸材(130)	21～38.5m地点の堀、次のSDとの間は土橋か
SD	311	H	南北	(1.20)	(2.60)	－		39.5～42m地点の堀、前のSDとの間は土橋か
SD	312	I	南北	(1.20)	2.00	0.31		17～19m地点の溝
SD	313	I	南北	(1.20)	9.20	0.74		23.5～32m地点の堀
SD	314	J	(南北)	(2.20)	(0.43)	－		0m地点より前の落ち込み
SD	315	J	南北	(2.02)	6.80	0.63	板材(120・122)	基点より-0.5～6m地点の堀、薬研堀か、H94次のSD317との間は土橋か
SD	317	J	南北	(1.20)	8.32	0.96		7.5～16m地点の堀
SD	318	J	北北東-南南西	(1.70)	1.08	0.18		16～18.5m地点の溝
SD	401	K	－	(2.78)	(1.20)	－		
SD	403	K	－	10.42	(1.79)	0.83		旧堀跡か、SD403＜SE404
SE	404	K	円形	1.00	(0.91)	1.25	越中瀬戸(21・22)・石臼(80・82・83)	石組井戸、五輪塔の火輪を転用、SE404＞SD403
SD	405	K	北東-南西	(5.62)	(1.20)	0.95	桶側板(107)	新堀跡か、SD406＜SD405
SD	406	K	北西-南東	(8.68)	(0.20)	0.60		SD406＜SD405、SD407との切り合い不明
SD	407	K	北東-南西	(15.04)	(1.20)	0.78	須恵器(1)・中世土師器(12・13)・板材(108・121)	SD406との切り合い不明、SD407＜SE408・SD409
SE	408	K	(円形)	2.70	(1.17)	0.44	瀬戸美濃(45)・又鋤か又鍬(114)・加工木(128・129)	SD407＜SE408
SD	409	K	南北	(1.20)	2.83	1.10		SD407＜SD409
SK	410	L	(円形)	0.70	(0.22)	0.10		埋土は黒色粘土
SD	411	M	(方形)	(1.90)	(1.10)	0.30		湧き水あり
SK	501	O	(楕円形)	2.35	(0.60)	0.40		
SK	502	O	(楕円形)	0.82	0.70	0.35		
SK	503	O	(楕円形)	1.17	0.49	0.10	伊万里(62)	
SK	504	O	(楕円形)	(0.80)	0.42	0.08		
SD	505	O	(楕円形)	(0.80)	0.50	0.06		
SK	506	O	(楕円形)	0.80	(0.62)	0.42		
SD	507	O	(楕円形)	(2.39)	(0.70)	0.88		
SK	508	O	(楕円形)	1.80	(0.60)	(0.68)		深さは盛土からを計測
SK	509	O	(楕円形)	(1.18)	0.62	(0.32)		深さは盛土からを計測
SK	510	O	(楕円形)	(0.60)	0.40	0.15		
SD	511	O	南北	(1.20)	(0.87)	0.27		
SK	512	O	(楕円形)	(0.83)	(0.40)	0.24		
SK	513	O	(不整形)	1.10	(0.29)	0.27		
SK	514	O	円形	0.24	0.22	0.18		
SP	515	O	円形	0.20	(0.20)	0.08		
SP	516	O	円形	0.18	0.18	0.22		
SP	517	O	円形	0.26	0.18	0.24		
SK	518	O	楕円形	1.36	0.78	0.20	瀬戸美濃(48)	
SK	519	O	(楕円形)	1.10	(0.25)	0.22	中世土師器(2)	
SD	520	P	東西	1.30	(0.70)	0.24		
SK	521	P	(楕円形)	1.03	0.70	0.13		
SK	522	P	円形	(1.00)	(0.60)	(0.30)		深さは4層までを計測
SD	523	P	東西	(1.42)	(1.20)	0.36		
SP	524	O	円形	0.20	0.16	0.17		
P	601	Q	円形	0.30	0.20			
P	602	Q	(円形)	0.1	(0.15)			
P	603	Q	(円形)	(0.15)	(0.3)			
P	604	Q	(円形)	(0.15)	0.3			
P	605	Q	(円形)	(0.15)	0.15			
P	606	Q	円形	0.25	0.25			
P	607	Q	円形	0.1	0.1			
P	608	Q	円形	0.1	0.1			
P	609	Q	楕円形	0.5	0.3			
SD	601	Q	南北	(1.20)	1.2			2005年度調査区検出の溝と連結する。SD602と平行して延びる。
SD	602	Q	南北	(1.20)	1.3			2005年度調査区検出の溝と連結する。SD603と平行して延びる。
SD	603	Q	南北	1.20	2.0		飾金具(96)	2005年度調査区検出の溝と連結する。

第6表　願海寺城跡遺物観察表（1）

遺物No.	出土地点 遺構／層位	種別	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	色調 外面(主色)	色調 外面(主色)	色調 内面または副色	色調 内面または副色	成形・調整 外面	成形・調整 内面	備考
1	SD407	須恵器	坏	—	6.20	—	5Y6/2	灰オリーブ色	5Y6/1	灰色			
2	SK519	中世土師器	皿	—	—	—	2.5Y7/3	浅黄色	2.5Y7/2	灰黄色		ロクロナデ	焼成不良
3	SK140	中世土師器	皿	8.80	—	—					ロクロナデ	ロクロナデ	灯明皿。口縁部に油煙痕。
4	SD129	中世土師器	皿	10.80	—	—	2.5Y4/1	黄灰色			オサエ、ヨコナデ		
5	SD129	中世土師器	皿	10.60	—	—	2.5Y8/2	灰白色			ナデ		
6	SD2	中世土師器	皿	7.60	—	—					ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	
7	SD2	中世土師器	皿	16.00	—	—			10YR7/2	にぶい黄橙色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	
8	SD121	中世土師器	皿	7.20	—	—	10YR7/3	にぶい黄橙色					
9	SD111	中世土師器	皿	14.00	—	—					ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	
10	SD111	中世土師器	皿	11.00	—	—							
11	SD132	中世土師器	皿	16.00	—	—					ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、オサエ	
12	SD407	中世土師器	皿	12.20	—	—	10YR7/3	にぶい黄橙色			ヨコナデ、ナデ	ナデ	
13	SD407	中世土師器	皿	9.80	—	(1.80)	10Y5/4	にぶい黄褐色	10YR4/3	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	灯明皿
14	SD22	中世土師器	皿	10.30	—	—	10YR7/3	にぶい黄橙色			ヨコナデ		
15	SD134	中世土師器	皿	(10.50)	—	—	10YR7/2	にぶい黄橙色					
16		中世土師器	皿	7.80	—	—					ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	全体に付着物あり
17	SD309	中世土師器	皿	9.20	—	—					ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	
18		中世土師器	皿	9.80	—	2.30					ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	100%残存
19	SD309	中世土師器	皿	16.40	—	3.10					ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	内面に油煙痕
20	SD309	中世土師器	皿	16.40	11.00	2.00					ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	68と接合
21	SE404	越中瀬戸	皿	10.30	4.20	2.40	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	ロクロナデ・ロクロケズリ	ロクロナデ、印花文	見込みに重焼痕、鉄釉蛇の目釉掛け
22	SE404	越中瀬戸	皿	10.50	2.90	3.60	5YR6/4	にぶい橙色			ロクロナデ・ロクロケズリ	ロクロナデ、印花文	鉄釉蛇の目釉掛け
23	包含層	越中瀬戸	皿	—	4.4※	—	10YR7/3	にぶい黄橙色			ロクロナデ、ケズリ		鉄釉内禿、釉の発色不良　SD129付近
24	SD102	越中瀬戸	皿	—	4.6※	—	2.5Y7/2	灰黄色			ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	鉄釉内禿。ただし施釉部分は残存せず、内禿部分のボタリで釉を確認。
25	SD113	越中瀬戸	皿	(14.00)	—	—	10YR8/4	浅黄橙色			ロクロナデ		鉄釉
26	SD302	越中瀬戸	皿	9.20	—	—					ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ	灰釉
27	2層	越中瀬戸	皿	—	5.10	—	2.5Y7/2	灰黄色	2.5Y7/3	浅黄色	ロクロケズリ	ロクロナデ、印花文	内外に鉄釉釉とびあり
28	包含層	越中瀬戸	皿	—	4.20	—					ロクロケズリ	ロクロナデ	鉄釉、印花あり
29	SD301	越中瀬戸	皿	—	5.6※	—					ロクロケズリ		鉄釉
30		越中瀬戸	不明(皿か)	8.80	—	—	10YR7/4	にぶい黄橙色			ロクロナデ		全体に鉄釉だが口唇部に灰釉(自然釉か)、内面マメツ(使用痕か)
31	SD2上層	越中瀬戸	壺	8.40	—	—					ロクロナデ	ロクロナデ	鉄釉
32	SD128	越中瀬戸	壺	—	11.80	—	2.5Y7/3	浅黄色			ロクロナデ	ロクロナデ	鉄釉、割れ口にスス付着
33	SD113	越中瀬戸	壺	8.55	—	—	10YR7/2	にぶい黄橙色			ロクロナデ、ケズリ		鉄釉、釉の発色不良
34	包含層	越中瀬戸	匣鉢	—	9.00	—					ロクロナデ	ロクロナデ	鉄釉
35	SD132	越中瀬戸	匣鉢	—	8.80	—							鉄釉
36	2層	越中瀬戸	鉢	—	12.00	—	10YR3/4	暗褐色	10YR4/3	にぶい黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	鉄釉
37	SD113	越中瀬戸	擂鉢	28.80	—	—	2.5Y8/2	灰白色					鉄釉
38	包含層	越中瀬戸	擂鉢	—	9.60	—	10YR8/4	浅黄橙色			ロクロナデ、底部糸切		鉄釉　SK137付近
39	包含層	越中瀬戸	燭台	4.9※	3.85	3.90					ロクロナデ、鉄釉	ロクロナデ、鉄釉	※内径4.6、外径5.8
40	SK106	瀬戸美濃(陶)	皿	(9.00)	—	—					ロクロナデ、ロクロケズリ、灰釉	ロクロナデ、ロクロケズリ、灰釉	
41	SP9	瀬戸美濃(陶)	皿	—	—	—					ロクロナデ	ロクロナデ	灰釉
42	SD109	瀬戸美濃(陶)	碗	—	4.5※	—	7.5Y8/1	灰白色			ロクロナデ、ケズリか		灰釉
43		瀬戸美濃(陶)	皿	—	5.0※	—	2.5Y7/2	灰黄色	10Y7/2	灰白色			灰釉
44	SD2	瀬戸美濃(陶)	天目茶碗	11.40	4.50	5.90					ロクロケズリ		鉄釉
45	SE408	瀬戸美濃(陶)	天目茶碗	—	—	—	10YR2/2	黒褐色					黒釉
46		瀬戸美濃(陶)	天目茶碗	—	—	—	10YR8/3	浅黄橙色					黒釉
47	SD113	瀬戸美濃(陶)	天目茶碗	—	3.8※	—	10YR7/1	灰白色			ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	黒釉
48	SK518	瀬戸美濃(陶)	茶入	6.20	5.95	4.60	7.5YR4/3	褐色	7.5YR4/4	褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	耳は欠損
49	SK140	唐津(陶)	碗	12.80	—	—					ロクロナデ・ロクロケズリ、灰釉	ロクロナデ	灰釉
50	SD132	唐津(陶)	碗	—	4.2※	—					ロクロケズリ、灰釉	灰釉	
51	SD2上層	唐津(陶)	碗	9.80	—	—					ロクロナデ、鉄釉網掛け	ロクロナデ、鉄釉	
52	SD132	唐津(陶)	擂鉢	—	—	—					ロクロナデ	卸目	
53	包含層	唐津(陶)	鉢か	20.30	—	—	5Y5/3	灰オリーブ色					灰釉か
54	SD5	唐津(陶)	甕	—	—	—	5Y4/1	灰色					降灰厚く、外面調整不明
55		唐津(陶)	壺	—	7.0※	—	10YR7/3	にぶい黄橙色					2色の釉を使用したカキメ状の縞をもつ。
56	包含層	唐津(陶)	碗	—	4.4※	—	5Y5/4～5/1	にぶい赤褐～褐灰色			ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	2色の釉を使用し波状文を施す。内面はマーブル状。
57		唐津(陶)	碗	9.80	—	—	2.5Y7/2～6/3	灰黄色～にぶい黄色					鉄絵、灰釉
58	SD111	伊万里(磁)	碗	11.20	—	—					ロクロナデ	ロクロナデ	染付、透明釉
59	SD133	伊万里(磁)	碗か	9.00	—	—	N8/1	灰白色					染付、透明釉
60	—	伊万里(磁)	碗	9.30	—	—					ロクロナデ	ロクロナデ	染付透明釉、鉄絵
61	SD134	伊万里(磁)	碗か	9.00	—	—	N8/1	灰白色					染付、透明釉
62	SK503	伊万里(磁)	碗	—	—	—	N8	灰白色	2.5GY8/1	灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	小片、染付透明釉
63	SD133	伊万里(磁)	碗	—	3.80	—	N8/1	灰白色					染付、透明釉
64	包含層	伊万里(磁)	碗	—	6.8※	—	5GY8/1	灰白色					染付、透明釉、高台に砂付着
65		伊万里(磁)	碗	—	3.3※	—	5Y8/1	灰白色	7.5Y8/1	灰白色(内)			染付、透明釉

※高台径

第6表　願海寺城跡遺物観察表（2）

遺物No.	出土地点 遺構／層位	種別	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	色調 外面(主色)	色調 外面(主色)	色調 内面または副色	色調 内面または副色	成形・調整 外面	成形・調整 内面	備考
66	包含層	伊万里(磁)	小碗	7.00	3.90	5.00	5GY8/1	灰白色					染付、透明釉
67	3層	伊万里(磁)	皿	13.10	6.80	2.50	5GY8/1	灰白色			ロクロナデ	ロクロナデ	染付透明釉
68		伊万里(磁)	皿	—	4.6※	—	10YR7/2～7.5Y8/1	にぶい黄橙色～灰白色					見込み蛇の目釉剥ぎ、染付、透明釉
69	包含層	伊万里(磁)	皿	—	8.7※	—	2.5GY8/1	灰白色					染付、透明釉、蛇の目凹形高台
70	SD133	土製品	取鍋	4.80		2.25							内面に金が付着
71	SD133	土製品	取鍋	5.90		2.50							付着物多い。
72	SD4	土製品	塼	長6.5	厚12.5	幅6.2							
76	SK106	土製品	塼	長6.3	厚3.6	幅3.9	N2/0	黒色	2.5Y8/2	灰白色			重37.0g
78	SK106	土製品	塼	長4.9	厚2.25	幅3.85	N2/1	黒色	2.5Y8/1	灰白色	ナデか		
73	SD4	土製品	塼	長4.6	厚3.25	幅3.55							
77	SK106	土製品	塼	長4.6	厚2.5	幅3.8	N1.5/0	黒色	2.5Y8/2	灰白色			重16.0g
74	SD4	土製品	塼	長4.0	厚3.25	幅2.85							
75	SD4	土製品	塼	長2.85	厚2.4	幅2.75							
79	SD128	石製品	石臼(上臼)	長(27.0)	—	厚(13.0)							
80	SE404	石製品	石臼(上臼)	長(21.7)	—	(11.2)							組石に転用。凝灰岩
81		石製品	石臼(上臼)	径30.8	—	(11.50)							
82	SE404	石製品	石臼(上臼)	径(14.3)	幅(12.8)	9.50							
83	SE404	石製品	石臼(下臼)	径32.0	—	9.40							
84		石製品	石臼(下臼)	径28.15	—	11.40							
85		石製品	五輪塔(火輪)	長25.9	幅25.9	16.20							
86		石製品	五輪塔(火輪)	長23.5	幅23.1	17.80							
87		石製品	五輪塔(火輪)	長(12.7)	幅28.3	20.50							
88		石製品	五輪塔(火輪)	長(11.6)	幅23.8	16.10							
89		石製品	五輪塔(地輪)	長14.1	幅14.0	9.90							
90	SD109	石製品	板碑	長26.2	幅21.0	厚17.5							
91		石製品	板碑	長16	幅21.2	43.60							
92	SD134	石製品	砥石	長8.55	厚5.9	幅2.75							2面使用。割れ口にスス付着。秤量140.5g
93	SD134	自然石	被熱礫	長10.55	厚4.6	幅7.7							砂岩。秤量417.5g
94	SD134	自然石	被熱礫	長10.2	厚4.1	幅8.85							スス付着。秤量581.5g
95		自然石	被熱礫	長7.5	厚4.2	幅6.2							表面は軽石様を呈す。秤量279.0g
96	SD603	金属製品	飾金具	—	—	—	—						銅製品か
97		鉄滓	鉄滓	長4.9	厚1.8	幅3.85							
98	SD121	鉄滓	鉄滓	長5.1	厚2.0	幅3.2	2.5Y6/3	にぶい黄色					重20.7g
99		鉄滓	鉄滓	長3.3	厚2.0	幅2.35							
100	—	漆器	椀	17.40	6.00	9.40	—				黒漆、絵付けは赤漆	黒漆、絵付けは赤漆	樹種同定No.4:カエデ科カエデ属
101	—	漆器	椀	(13.40)	6.30	7.10	—				黒漆、絵付けは赤漆	黒漆、絵付けは赤漆	胴部から口縁ゆがみ大 樹種同定No.3:ブナ科ブナ属
102	SD134	漆器	椀	(11.50)	5.30	(5.30)	—				黒漆、絵付けは赤漆	黒漆	口縁から体部ゆがみ大 樹種同定No.1:ブナ科ブナ属
103	SD102	漆器	椀	—	6.60	—	—				黒漆、絵付けは赤漆	黒漆	樹種同定No.3:ブナ科ブナ属
104	—	漆器	椀	—	※6.1	(5.60)	—						黒漆
105	SK106	木製品	箸	長10.4	幅0.5	幅0.6	—						樹種同定No.14:ヒノキ科アスナロ属
106	SD301？	木製品	曲物側板	長11.1	幅0.6	幅2.1	—						樹種同定No.19:ヒノキ科ヒノキ属
107	SD405	木製品	桶側板	長17.2	幅2.1	厚0.8	—						断面ヘラ状
108	SD407	木製品	板材	長13.8	幅8.05	厚0.15	—						
109	SD301	木製品	曲物底板	長25.5	厚1.1	幅11.7	—						釘穴3か所。焦げ跡あり 樹種同定No.18:スギ科スギ属スギ
110	SK140	木製品	木札	長19.7	厚0.6	幅6.6	—						桜皮　樹種同定No.16:ヒノキ科アスナロ属
111	SD121	木製品	木札	長7.8	幅0.7	幅2.8	—						小孔12ヶ所 樹種同定No.15:スギ科スギ属スギ
112	SD22	木製品	木札	長15.9	幅2.85	厚0.2	—						
113	SD133	木製品	木札	長13.8	厚0.3	幅3.0	—						樹種同定No.21:ヒノキ科アスナロ属
114	SE408	木製品	又鋤か又鍬	長32.7	幅9.4	厚3.1	—						先端部分に砂が食い込んでいる
115		木製品	舟形	長65.2	厚17.9	幅24.5	—						正面・裏面に焦げ跡 マツ科マツ属(二葉松類)
116		木製品	弓状	長85.2	厚3.0	幅2.4	—						樹種同定No.13:ヒノキ科アスナロ属
117	SD2下層	木製品	建材	長9.7	幅3.1	幅5.3	—						樹種同定No.7:ブナ科クリ属クリ
118		木製品	部材か	長9.1	幅3.2	幅5.4	—						焦げ跡あり 樹種同定No.6:カバノキ科ハンノキ属
119		木製品	建材(辺材)	長28.5	厚7.0	幅7.7	—						側面に鋸挽き目痕多い 樹種同定No.8:カバノキ科ハンノキ属
120	SD315	木製品	板材	長8.4	幅13.5	厚1.3	—						156と同一の可能性あり
121	SD407	木製品	板材	長8.1	幅12.2	厚1.25	—						157と同一の可能性あり
122	SD315	木製品	板材(辺材)	長33.0	厚1.65	幅8.5	—						樹種同定No.22:スギ科スギ属スギ
123	SD2下層	木製品	炭化材	長17.6	厚2.3	幅5.1	—						全体に炭化。裏表ともに工具痕 樹種同定No.9:マツ科マツ属(二葉松類) AMS:15世紀後半～16世紀前半
124	SK13	木製品	杭	長67.2	厚7.2	幅7.3	—						芯持ち材　樹種同定No.12:マキ科マキ属イヌマキ
125	SD5	木製品	杭	長40.0	厚5.4	幅5.05	—						芯持ち材、樹皮部分炭化　樹種同定No.10:ブナ科クリ属クリ　AMS:18世紀
126	SP9	木製品	杭	長24.1	厚3.5	幅4.1	—						芯持ち材、上方に圧迫痕　樹種同定No.11:カバノキ科ハンノキ属
127	SP28	木製品	柱根	長42.25	厚18.6	幅21.7	—						正面焦げ 樹種同定No.5:ブナ科クリ属クリ
128	SE408	木製品	加工木	長36.9	幅10.7	厚10.45	—						柱材の二次利用か
129	SE408	木製品	加工木	長20.0	幅10.5	厚9.5	—						柱材の二次利用か
130	SD309	木製品	丸材	長11.1	厚3.15	幅3.2	—						使途不明木製品 樹種同定No.20:ヒノキ科アスナロ属

ⅳ）自然科学分析

1．出土漆製品の漆塗膜構造分析①

㈱吉田生物研究所

（1）はじめに

出土した漆製品（100 ～ 103）について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造分析を行ったので、以下にその結果を報告する。なお分析結果写真についてはカラー図版3・4に掲載している。

（2）分析試料

分析した試料は、表1に示す中・近世の漆製品4点である。

保存処理No.	遺物No.	品名	樹種 ＊	写真No.	概　　要
1	102	漆椀	ブナ属	1, 3	内外両面とも、黒色地に赤色漆で文様が施された椀。
2	103	漆椀	ブナ属	5, 7	内外両面とも、黒色地に赤色漆で文様が施された椀。
3	101	漆椀	ブナ属	9,11	内外両面とも、黒色地に赤色漆で文様が施された椀。
4	100	漆椀	カエデ属	13,15	内外両面とも、黒色地に赤色漆で文様が施された椀。 2個体以上が混ざっている可能性があるので、サンプリングは内側のみに施文された高台を含む破片で行った。

表1　分析試料　　＊：樹種については、次項の樹種同定報告を参照。

（3）調査方法

表 1 の試料本体の内外面から数㎜四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

（4）断面観察結果

塗膜断面の観察結果を表 2、そして以下の文章に示す。

遺物No.	器種	部位	写真No.	塗膜構造（下層から）			
				下地		漆層構造	顔料
				膠着剤	混和材		
102	椀	内面	2	柿渋	木炭粉	透明漆　1層／赤色漆1層	朱
		外面	4	柿渋	木炭粉	透明漆　1層／赤色漆1層	朱
103	椀	内面	6	柿渋	木炭粉	透明漆　1層／赤色漆1層	朱
		外面	8	柿渋	木炭粉	透明漆　1層／赤色漆1層	朱
101	椀	内面	10	柿渋	木炭粉	透明漆　1層／赤色漆1層	朱
		外面	12	柿渋	木炭粉	透明漆　1層／赤色漆1層	朱
100	椀	内面	14	柿渋	木炭粉	透明漆　1層／赤色漆1層	朱
		外面	16	柿渋	木炭粉	透明漆　1層	―

表2　漆器の断面観察結果表

塗膜構造：木胎の上に下地、漆層と重なる様子が観察された。

下地：全点とも、褐色を呈する柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地であった。

漆層：下地の上に、黒色の地色を形成する透明漆層が1層のみ見られた。加飾の施されたものには、その上に加飾の漆絵を形成する赤色漆が1層認められた。

顔料：加飾の漆絵に使用された赤色漆には、透明度が高く明確な粒子形状が確認できる朱が使用されていた。透明度が低く、微粒子のベンガラは使用されていなかった。

（5）まとめ

出土した中・近世の漆製品4点について、塗膜構造分析を行った。

4点とも黒色地の上に赤色漆で漆絵が施された椀である。

4点とも木胎の上に柿渋に木炭粉を混和した、炭粉渋下地の上に透明漆1層、その上に漆絵の朱漆が1層重なっている。朱漆層の中には、透明度が高く明確な朱粒子が多数観察できる。

今回分析した漆椀の樹種は、ブナ属3点とカエデ属1点であった。ブナ属は、近世以降の普及品の漆器の木胎として頻繁に使用された樹種で、炭粉渋下地が施されることが多い。この点は、今回の調査結果と合致する。

2. 出土漆製品の漆塗膜構造分析②

（株）古環境研究所

（1）はじめに

出土した漆器（104）について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

（2）試料と方法

分析対象は、黒色の木胎漆器1点である。塗膜を含む小破片を分析試料とした。

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびＸ線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて塗膜の表面から薄く削り取った試料を押しつぶして、厚さ 1 mm 程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光株式会社製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 FT/IR-410、IRT-30-16 を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム（#1000、#4000、#8000）を用いて厚さ約 50μm 前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV）による反射電子像観察を行った。さらに、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型Ｘ線分析装置（同 JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム（#1000、#4000、#8000）を用いて厚さ約 20μm 前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

（3）結果

表面部分の赤外吸収スペクトルを図1に、生物顕微鏡写真および走査型電子顕微鏡反射電子像を図版1に示す。なお、赤外吸収スペクトル（図1）では、縦軸が透過率（%R）、横軸が波数（Wave-number (cm-1)；カイザー）を示す。スペクトル図はノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は生漆の赤外吸収位置（表1）を示す。また、各層のＸ線分析による簡易定量値を表2に示す。

塗膜は、光沢のある黒色を呈する。表面塗膜の赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収が一部（吸収№7）に認められた。また、生漆に見られる CH 基に由来する 2927 (cm-1)、2858 (cm-1) の吸収が明瞭に見られた（図1）。赤外分光分析の結果から、この黒色塗膜は漆と同定される。塗膜構造の観察では、木胎ａ層、炭粉からなる下地ｂ層、塗膜層ｃ層で構成されており（図版1）、いずれの層も主に炭素からなる化学組成であった（表2）。

吸収№	生漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ｳﾙｼｵｰﾙ
7	1270.86	46.3336	ｳﾙｼｵｰﾙ
8	1218.79	47.5362	ｳﾙｼｵｰﾙ
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

表1 生漆の赤外吸収位置とその強度

塗膜層	C	Al_2O_3	SiO_2	SO_3	Cl	CaO	$Fe_{2\ 3}$	total
c層	67.57	2.97	1.53	4.13	±	9.40	14.42	100.0
b層	78.75	0.97	0.94	3.65	0.70	2.43	12.56	100.0
a層	78.75	1.20	0.55	2.59	±	4.17	12.74	100.0

表2 塗膜層のX線分析結果（mass%）

（4）おわりに

願海寺城跡から出土した漆器について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、炭粉下地層および漆塗膜１層からなる塗膜構造が確認された。

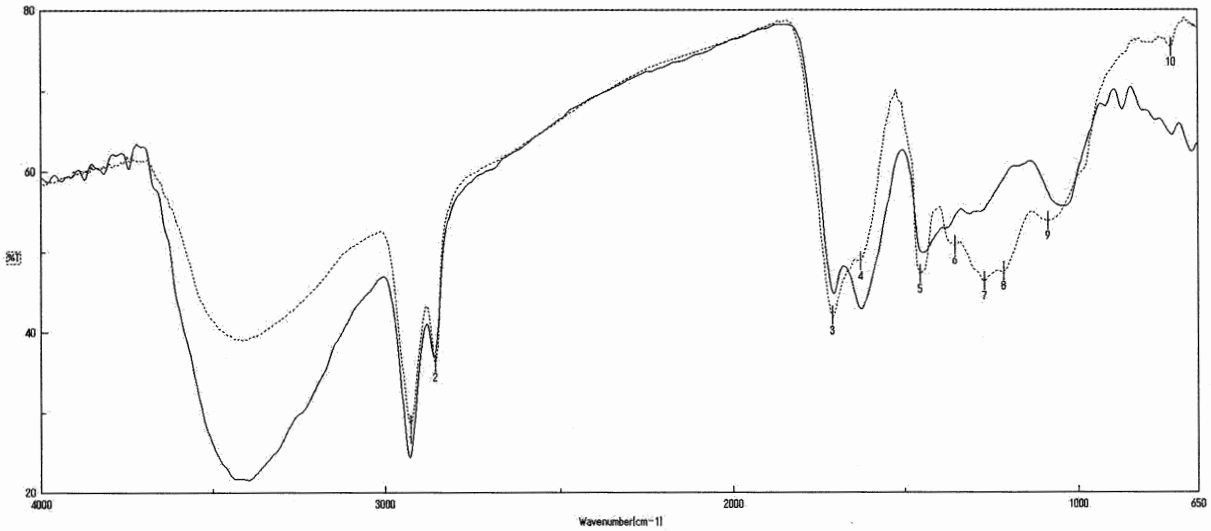


図1　赤外分光スペクトル　実線、点線：生漆（No.は主な吸収位置）

3.　出土木製品の樹種同定①

（株）吉田生物研究所

（1）試料

試料は出土した容器 7 点、食事具 1 点、文房具 2 点、祭祀具 1 点、建築部材 4 点、土木具 3 点、用途不明品 4 点の合計 22 点である。

分析No.	遺物No.	種類	結果	分析No.	遺物No.	種類	結果
1	102	漆器椀	ブナ科ブナ属	11	126	杭	カバノキ科ハンノキ属
2	103	漆器椀	ブナ科ブナ属	12	124	杭	マキ科マキ属イヌマキ
3	101	漆器椀	ブナ科ブナ属	13	116	弓状木製品	ヒノキ科アスナロ属
4	100	漆器椀	カエデ科カエデ属	14	105	箸	ヒノキ科アスナロ属
5	127	柱	ブナ科クリ属クリ	15	111	木札	スギ科スギ属スギ
6	119	建材	カバノキ科ハンノキ属	16	110	木札	ヒノキ科アスナロ属
7	－	A　建材(漆器)	ブナ科ブナ属	17	115	舟形木製品	マツ科マツ属(二葉松類)
	117	B　建材(建材)	ブナ科クリ属クリ	18	109	曲物底板	スギ科スギ属スギ
8	118	A　建材	カバノキ科ハンノキ属	19	106	曲物側板	ヒノキ科ヒノキ属
	－	B　建材	マツ科マツ属(二葉松類)	20	130	不明木製品	ヒノキ科アスナロ属
9	123	炭化材	マツ科マツ属(二葉松類)	21	113	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
10	125	炭化杭	ブナ科クリ属クリ	22	122	板材	スギ科スギ属スギ

表1　出土木製品の樹種同定結果一覧

（2）観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡（Nikon DS-Fi1）で観察して同定した。

（3）結果

樹種同定結果（針葉樹 5 種、広葉樹 4 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

マキ科マキ属イヌマキ（Podocarpus macropyllus Sweet）：（遺物 No.12）（写真 No.12）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1 ～ 2 個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）をなして存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。イヌマキは本州（中・南部）、四国、九州、琉球に分布する。

マツ科マツ属［二葉松類］（Pinus sp.）：（遺物 No.8A,9,17）（写真 No.8A,9,17）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が　細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で 1 ～ 15 細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属［二葉松類］はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

スギ科スギ属スギ（Cryptomeria japonica D.Don）：（遺物 No.15,18,22）（写真 No.15,18,22）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で 1 分野に 1 ～ 3 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

ヒノキ科ヒノキ属（Chamaecyparis sp.）：（遺物 No.19）（写真 No.19）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に 1 ～ 2 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

ヒノキ科アスナロ属（Thujopsis sp.）：（遺物 No.13,14,16,20,21）（写真 No.13,14,16,20,21）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で 1 分野に 2 ～ 4 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

カバノキ科ハンノキ属（Alnus sp.）：（遺物 No.6,8A,11）（写真 No.6,8A,11）

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管（～ 90μm）が 2 ～数個半径方向に放射複合管孔をなして平等に分布する。軸方向柔組織は単接線状柔組織を形成している。放射組織は多数の単列放射組織と幅の広い放射組織がある。柾目では道管は階段穿孔と小型で円形の対列壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなるが、ときに上下縁辺に方形細胞が現れる。板目では多数の単列放射組織（1 ～ 30 細胞高）と単列放射組織が集まってできた集合型の広放射組織がある。ハンノキ属はハンノキ、ミヤマハンノキ、ケヤマハンノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

ブナ科ブナ属（Fagus sp.）：（遺物 No.1 ～ 3,7A）（写真 No.1 ～ 3,7A）

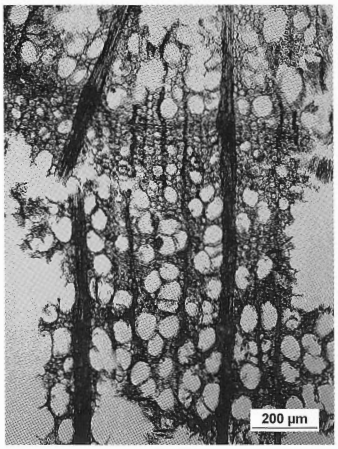
散孔材である。木口ではやや小さい道管（～ 110μm）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2 ～ 3 列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2 ～ 3 列、広放射組織の 3 種類がある。広放射組織は肉眼でも 1 ～ 3mm の高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

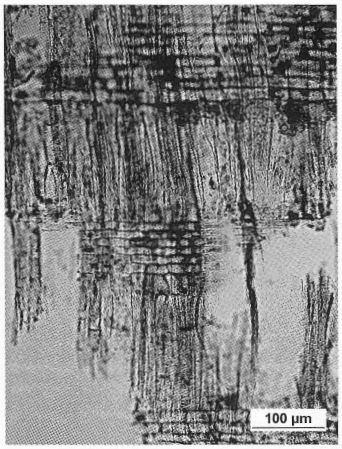
ブナ科クリ属クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）：（遺物 No.5,7B,10）（写真 No.5,7B,10）

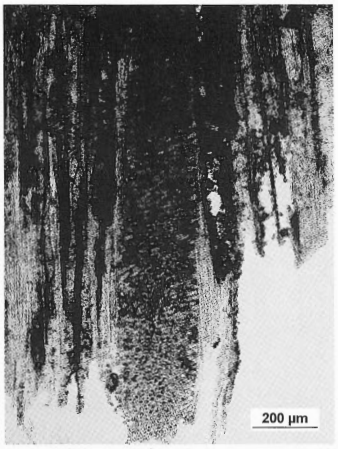
環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～ 500μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは 2 ～ 3 個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

カエデ科カエデ属（Acer sp.）：（遺物 No.4）（写真 No.4）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～ 100μm）が単独ないし数個複合して分布する。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。木繊維の壁に厚薄があり木口面で濃淡模様が出る。柾目では道管は単穿孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は 1 ～ 6 細胞列、高さ～ 1mm からなる。カエデ属はウリカエデ、イタヤカエデ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

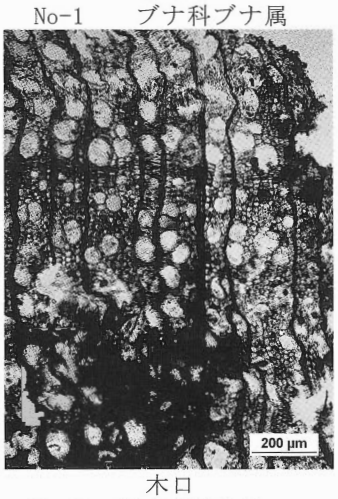


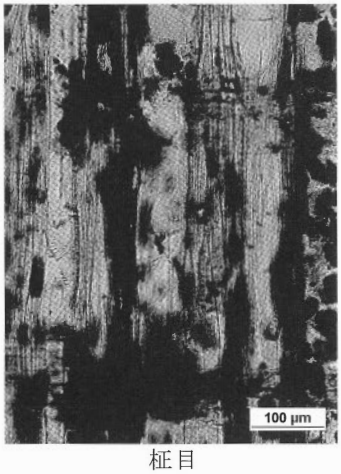




木口　　柾目　　板目

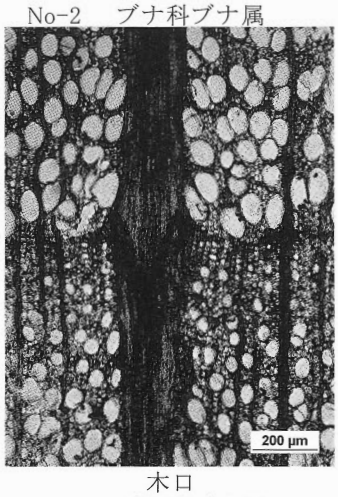
No-1　ブナ科ブナ属

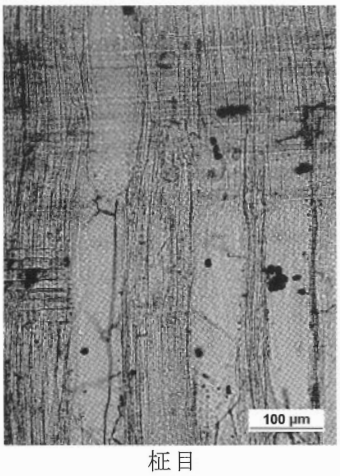


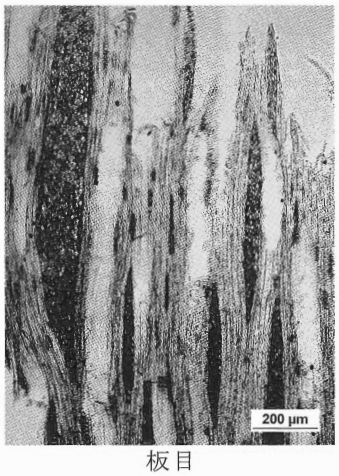


木口　　柾目　　板目

No-2　ブナ科ブナ属

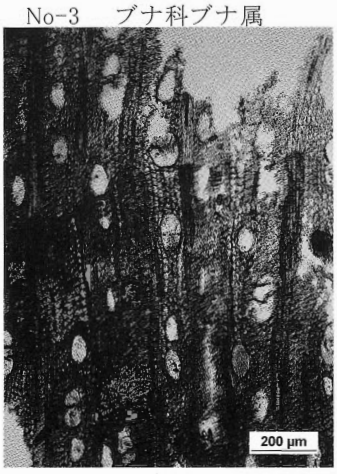


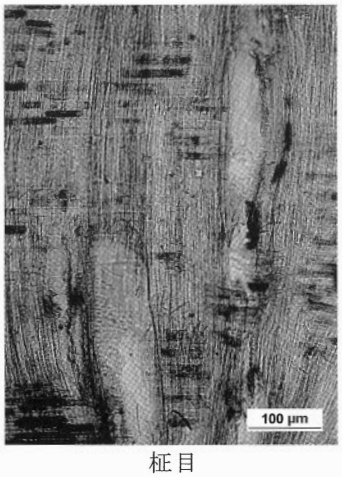


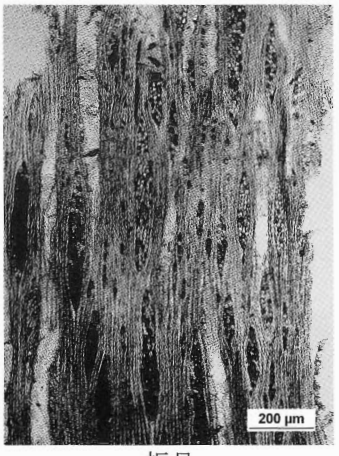


木口　　柾目　　板目

No-3　ブナ科ブナ属

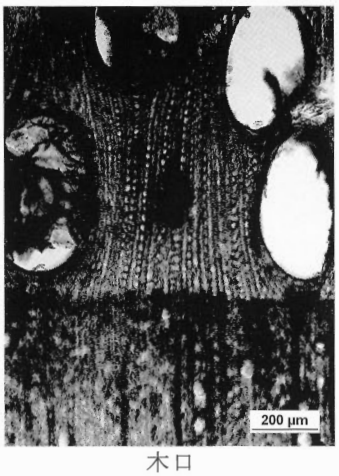


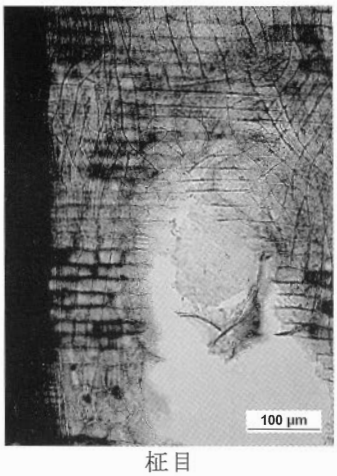


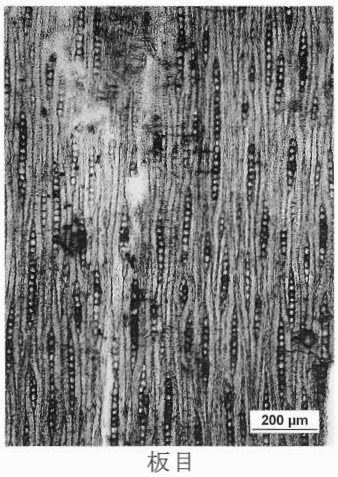


木口　　柾目　　板目

No-4　カエデ科カエデ属

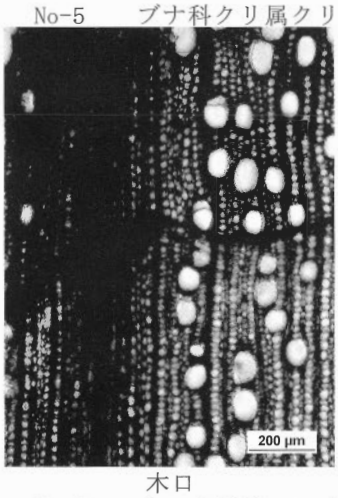


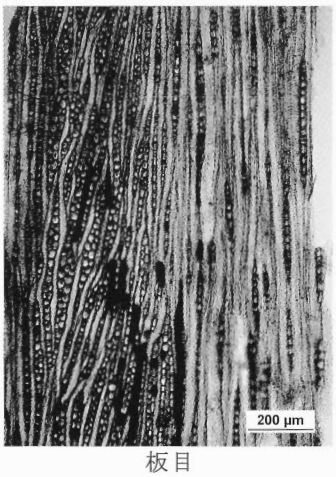




木口　　柾目　　板目

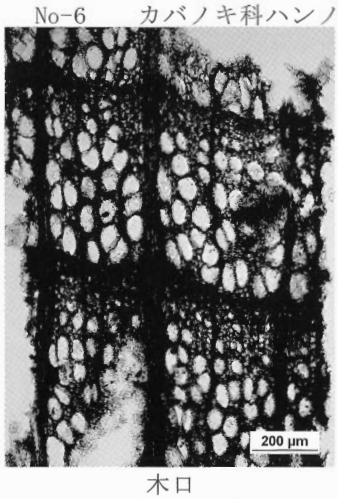
No-5　ブナ科クリ属クリ

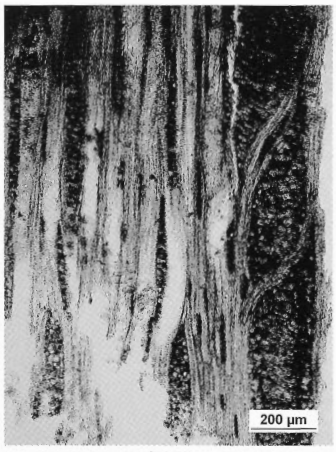




木口　　柾目　　板目

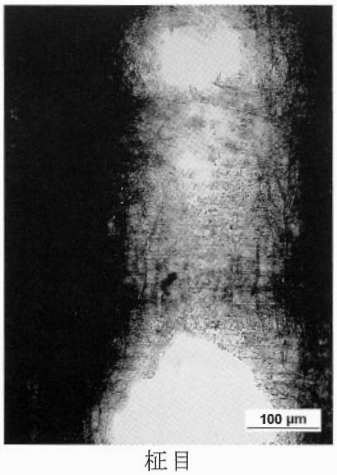
No-6　カバノキ科ハンノキ属

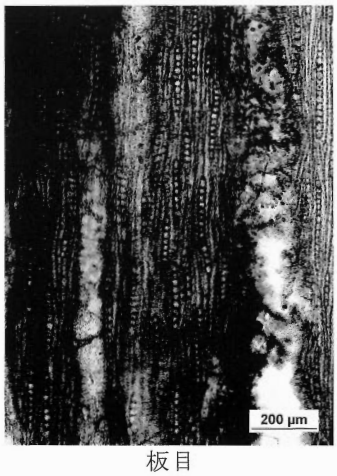




木口　　柾目　　板目

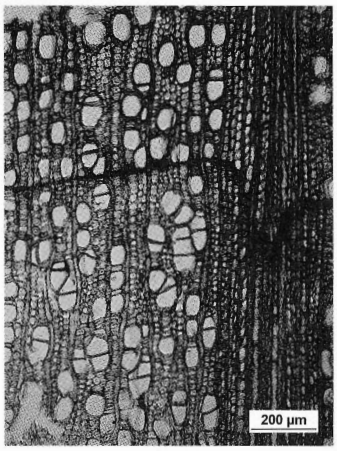
No-7A　ブナ科ブナ属

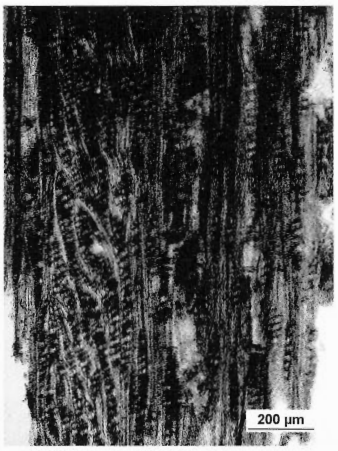




木口　　柾目　　板目

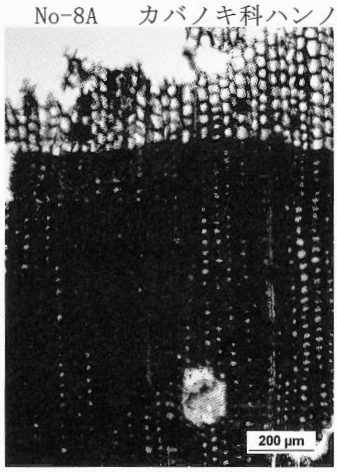
No-7B　ブナ科クリ属クリ

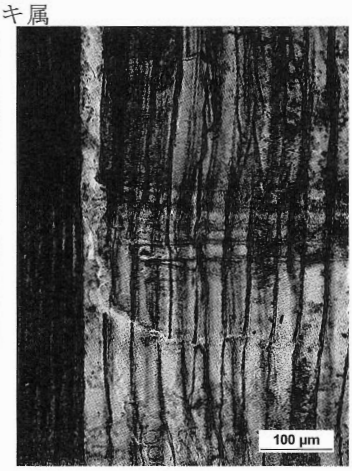


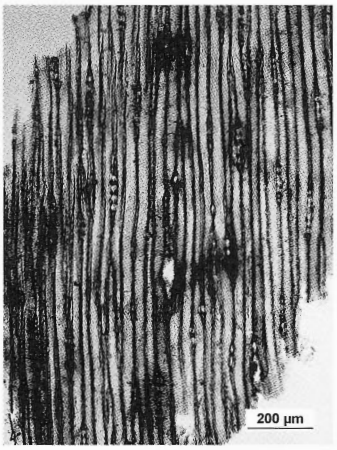


木口　　柾目　　板目

No-8A　カバノキ科ハンノキ属





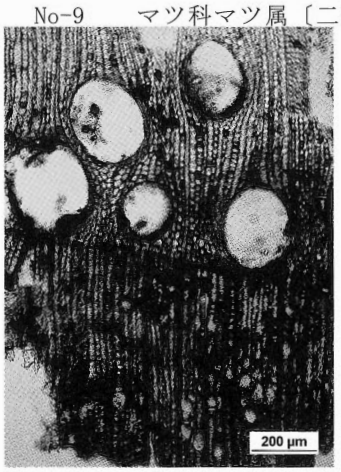


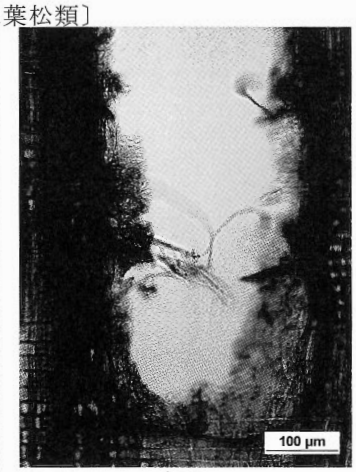
木口　　柾目　　板目

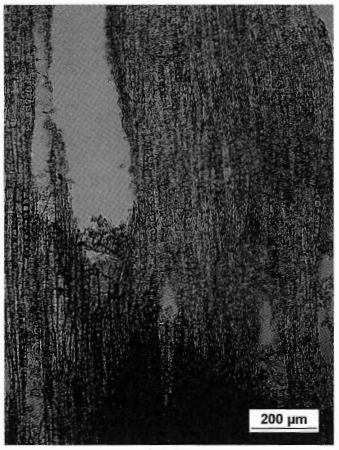
No-8B　マツ科マツ属〔二葉松類〕

柾目

No-9　マツ科マツ属〔二葉松類〕

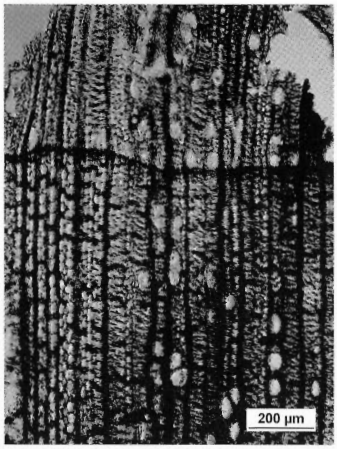


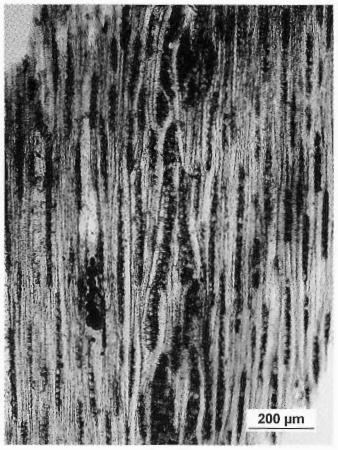




木口　　柾目　　板目

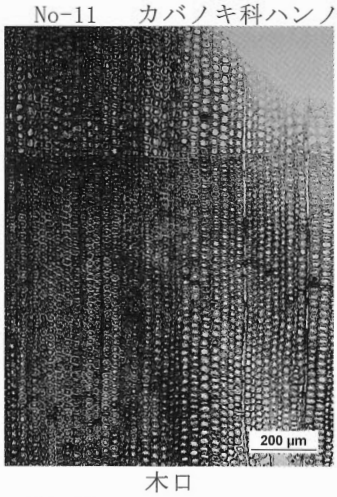
No-10　ブナ科クリ属クリ

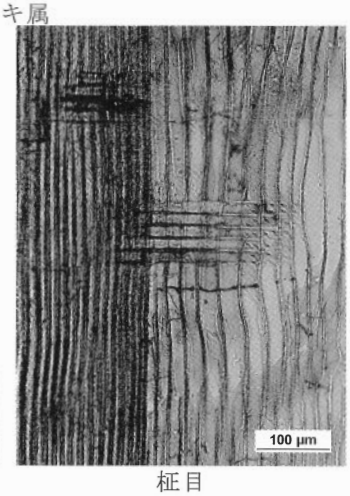




木口　　柾目　　板目

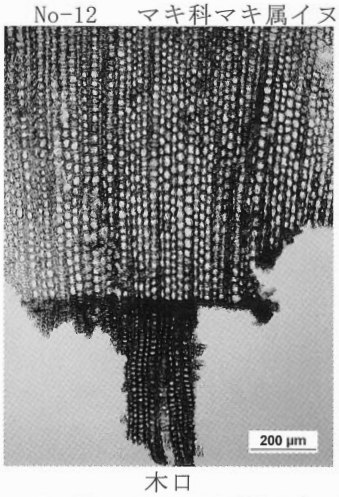
No-11　カバノキ科ハンノキ属

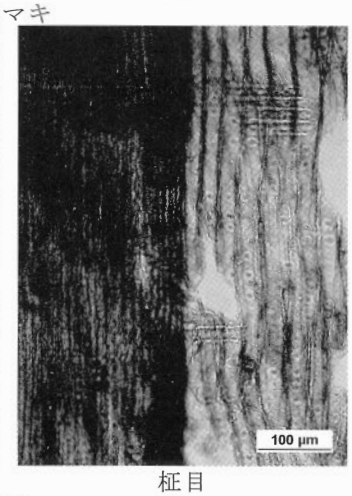


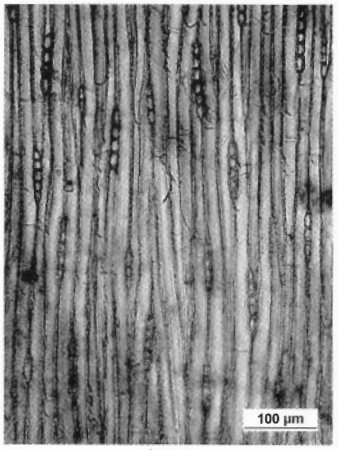


木口　　柾目　　板目

No-12　マキ科マキ属イヌマキ

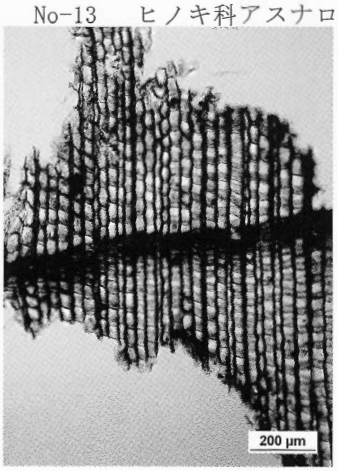


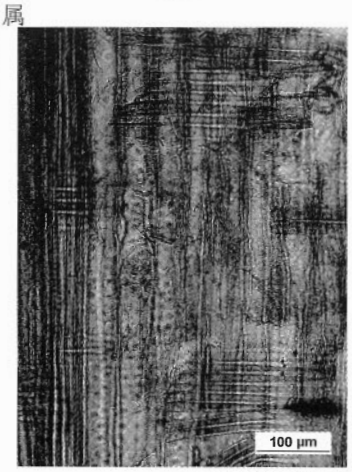


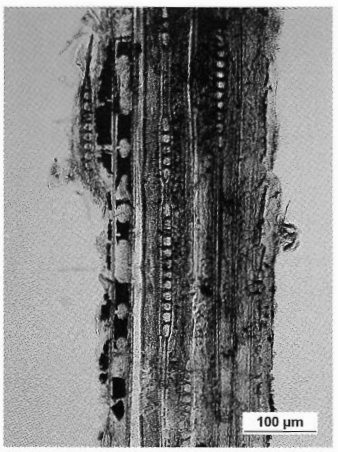


木口　　柾目　　板目

No-13　ヒノキ科アスナロ属

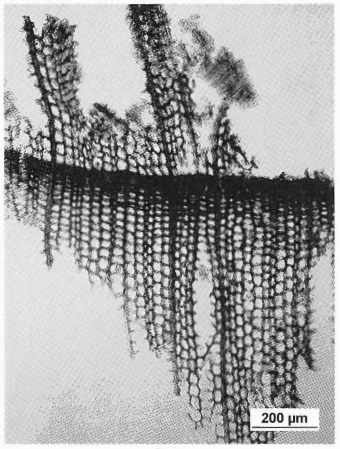


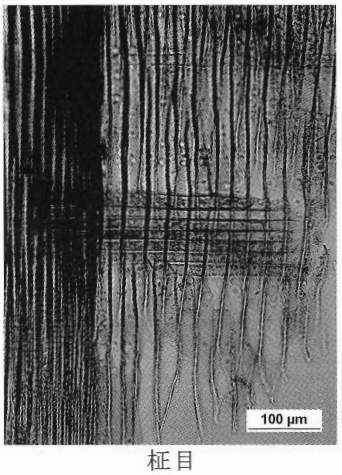


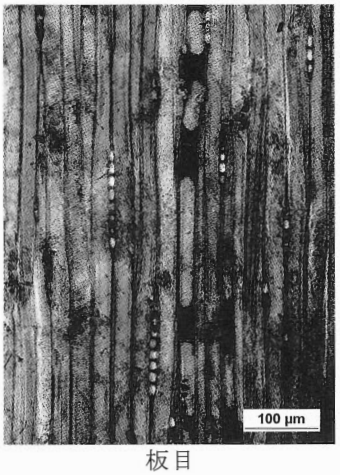


木口　　柾目　　板目

No-14　ヒノキ科アスナロ属

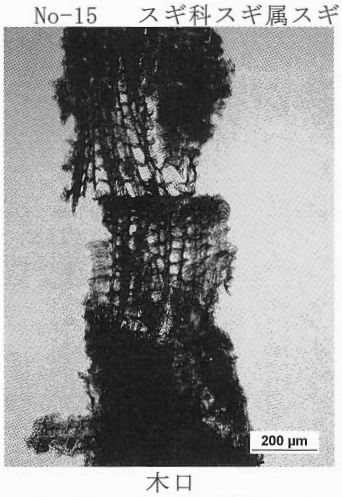


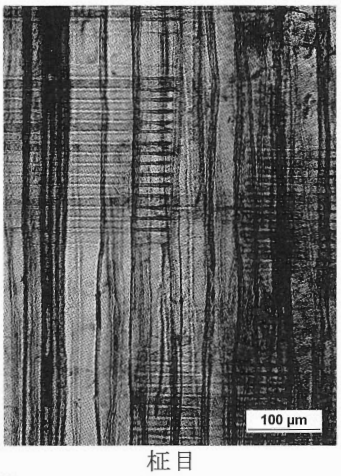


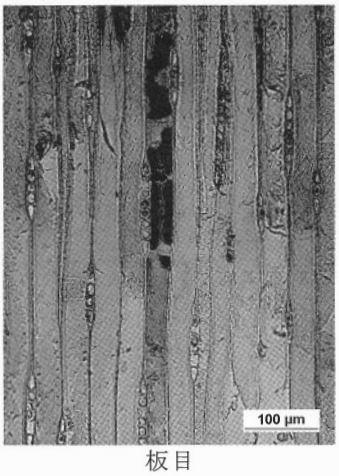


木口　　柾目　　板目

No-15　スギ科スギ属スギ

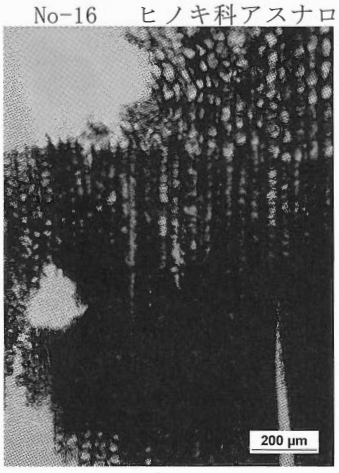


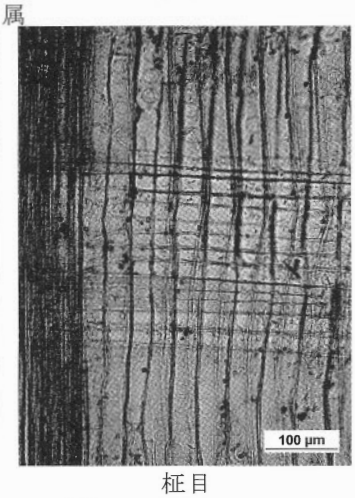


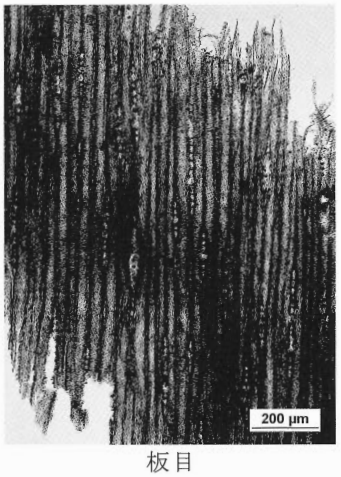


木口　　柾目　　板目

No-16　ヒノキ科アスナロ属

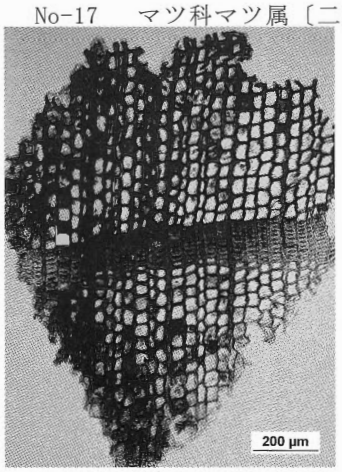


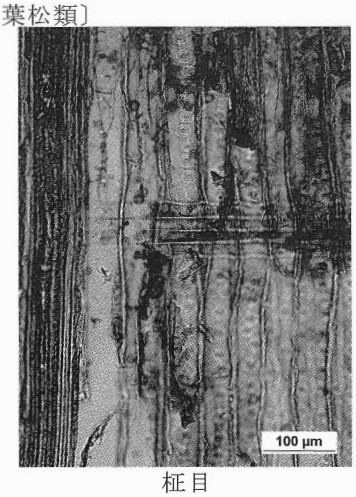


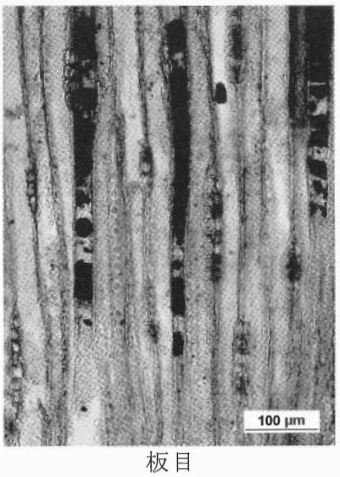


木口　　柾目　　板目

No-17　マツ科マツ属〔二葉松類〕

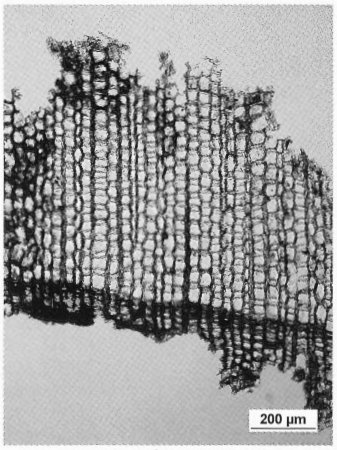


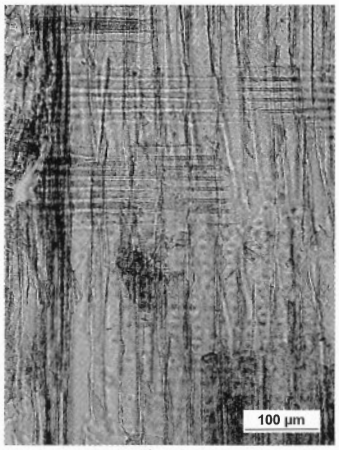


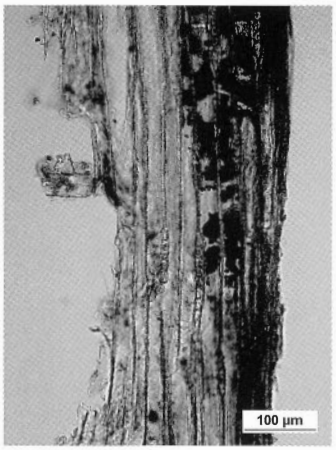


木口　　柾目　　板目

写真①　木材⑤

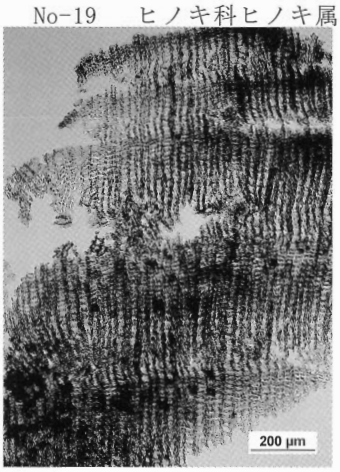


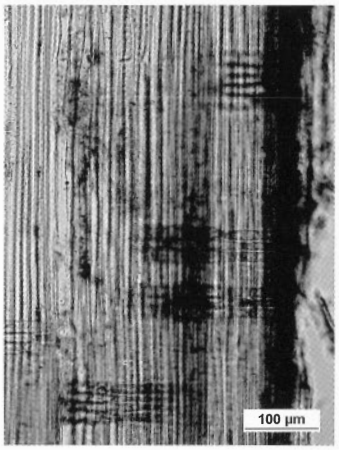


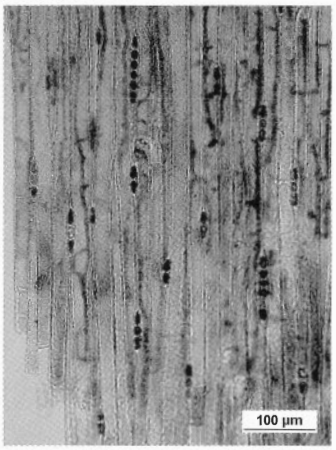


木口　　柾目　　板目

No-19　ヒノキ科ヒノキ属

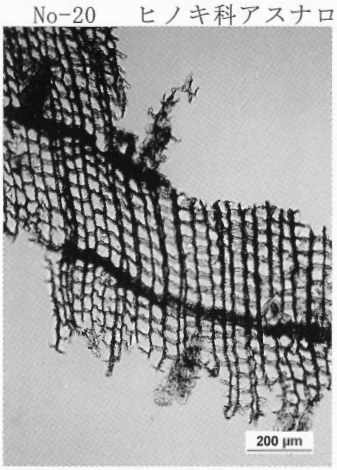


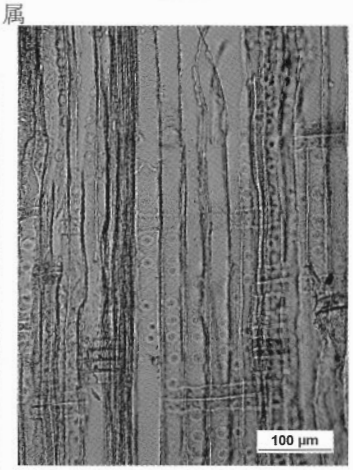




木口　　柾目　　板目

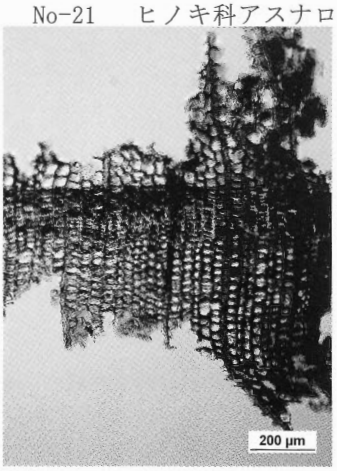
No-20　ヒノキ科アスナロ属

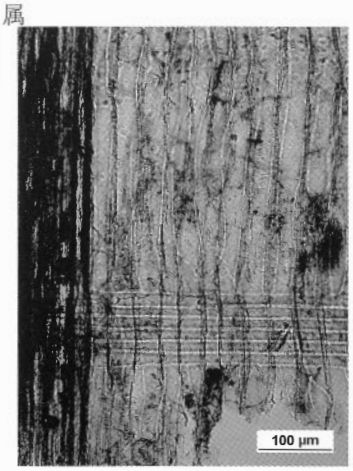


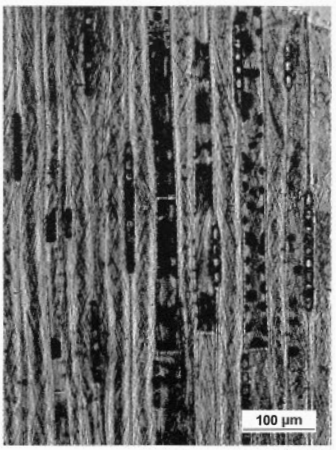


木口　　柾目　　板目

No-21　ヒノキ科アスナロ属







木口　　柾目　　板目

No-22　スギ科スギ属スギ

写真①　木材⑥

4. 出土木製品の樹種同定②

株式会社古環境研究所

(1) 試料

試料は、願海寺城跡より出土した柱、桶側板、板材、底板、漆器、曲物側板などの木製品 12 点である。試料の詳細を結果とともに表1に記す。

(2) 方法

試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

No.	種類	結果(学名／和名)		No.	種類	結果(学名／和名)	
116①	鍬？	*Pinus subgen Haploxylon*	マツ属単維管束亜属	108⑤	板材	*Chamaecyparis pisifera* Endl.	サワラ
128②	柱	*Alnus sect Gymnothrsus*	ハンノキ属ハンノキ節	109⑥	底板	*Pinus subgen Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
129③	柱	*Alnus sect Gymnothrsus*	ハンノキ属ハンノキ節	110⑦	底板	*Pinus subgen Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
107④	桶側板	*Chamaecyparis obusa* Endl.	ヒノキ	104⑧	漆器	*Fagus*	ブナ属

表1 樹種同定結果

マツ属複維管束亜属 Pinus subgen. Diploxylon マツ科 写真2－1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

マツ属単維管束亜属 Pinus subgen. Haploxylon マツ科 写真2－2

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁は平滑である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属単維管束亜属に同定される。マツ属単維管束亜属にはヒメコマツ、チョウセンゴヨウ、ハイマツなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。常緑高木および低木である。材は建築、器具、土木、彫刻などに用いられる。

ヒノキ Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ科 写真2－3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～ 15 細胞高である。

以上の形質より、ヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40m、径 1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

サワラ Chamaecyparis pisifera Endl. ヒノキ科　写真2－4

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型からスギ型の傾向を示し、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、サワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直、肌目緻密である。ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

ハンノキ属ハンノキ節 Alnus sect. Gymnothyrsus カバノキ科　写真2－5

横断面：小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で単列のものと大型の集合状のものからなる。

以上の形質より、ハンノキ属ハンノキ節に同定される。ハンノキ属ハンノキ節は落葉の低木から高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

ブナ属 Fagus ブナ科　写真6

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものが存在する。

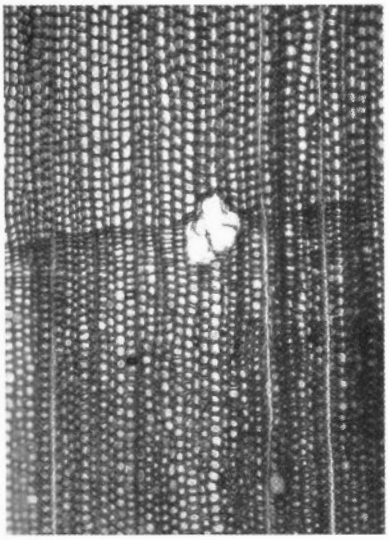
以上の形質より、ブナ属に同定される。ブナ属にはブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密、靭性あり、保存性は低い。容器などに用いられる。

（4）考察

同定の結果、願海寺城跡の木製品は、ハンノキ属ハンノキ節2点、マツ属複維管束亜属2点、ヒノキ1点、サワラ1点、マツ属単維管束亜属1点、ブナ属1点であった。

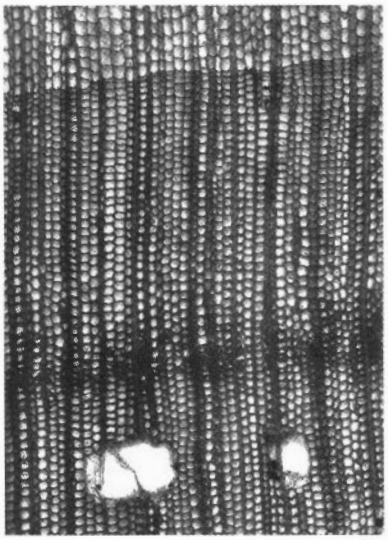
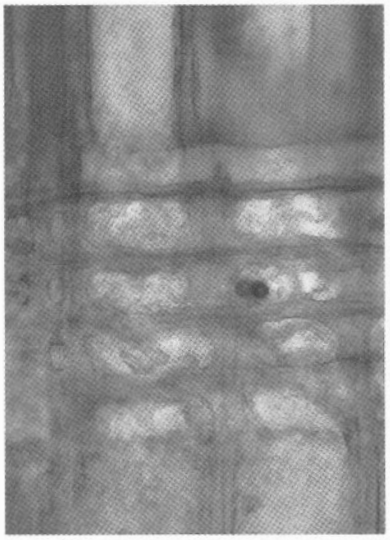
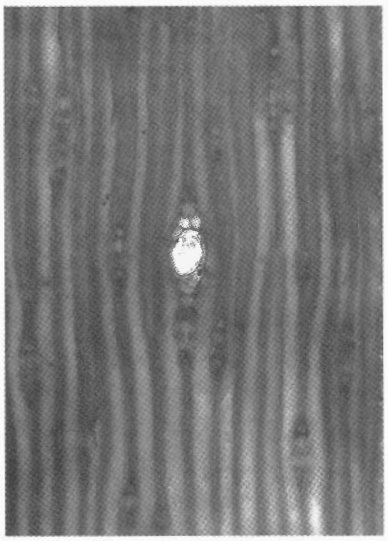
ハンノキ属ハンノキ節は柱に使用されている。ハンノキ属ハンノキ節には多くの種があるが、ハンノキ、ケヤマハンノキなど高木となる樹種が多く、木材は概ね強さ中庸の材である。マツ属複維管束亜属は底板に使用されている。マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがあり、木理概ね通直で肌目は粗く、どちらの材も水湿に良く耐える材である。ヒノキは桶側板、炭化板材に使用されている。ヒノキは木理通直で肌目緻密、大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。サワラは板材、曲物側板に使用されており、ヒノキには劣るが木理通直、肌目緻密であり、水質によく耐える材である。マツ属単維管束亜属は鍬？に使用されており、木材は木理通直で比較的加工容易な材である。ブナ属は漆器に使用されており、強さ中庸、切削、加工も中庸で、保存性は低いが、弾性と従曲性に富む材である。

マツ属複維管束亜属、ヒノキ、サワラは温帯に広く分布する針葉樹、マツ属単維管束亜属は温帯から亜高山帯に分布する針葉樹、ハンノキ属ハンノキ節、ブナ属は温帯に広く分布する広葉樹である。当時、流通によってもたらされたとみなされよう。



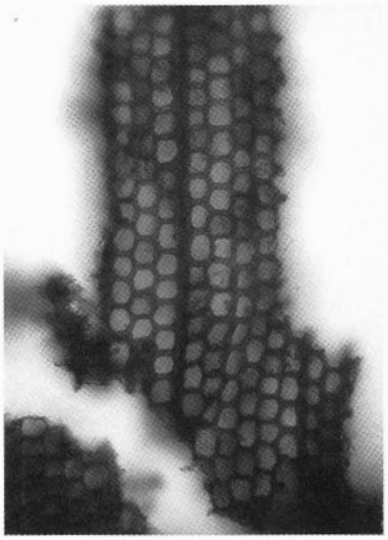
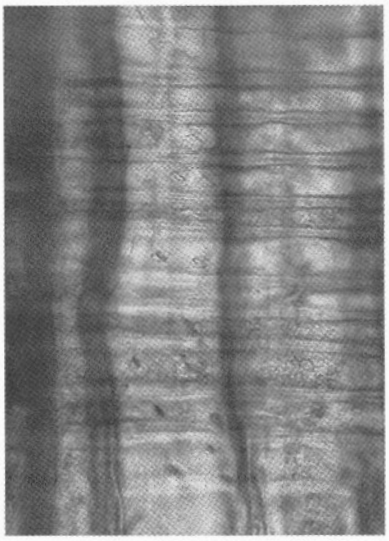
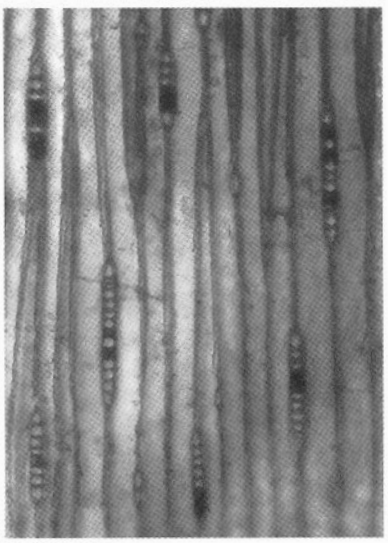
横断面 ▬▬▬▬▬▬ ： 0.5㎜　放射断面▬▬▬▬▬▬ ： 0.05㎜　接線断面▬▬▬▬▬▬ ： 0.2㎜

1．⑥　底板　マツ属複維管束亜属

横断面 ▬▬▬▬▬▬ ： 0.5㎜　放射断面▬▬▬▬▬▬ ： 0.05㎜　接線断面▬▬▬▬▬▬ ： 0.2㎜

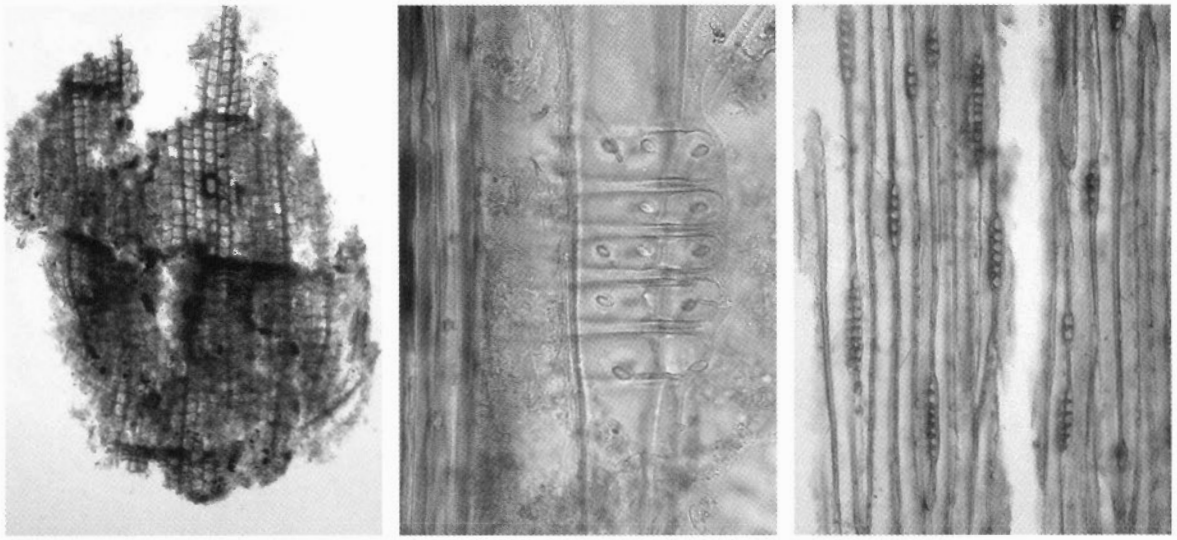
2．①　鍬？　マツ属単維管束亜属

横断面 ▬▬▬▬▬▬ ： 0.2㎜　放射断面▬▬▬▬▬▬ ： 0.05㎜　接線断面▬▬▬▬▬▬ ： 0.2㎜

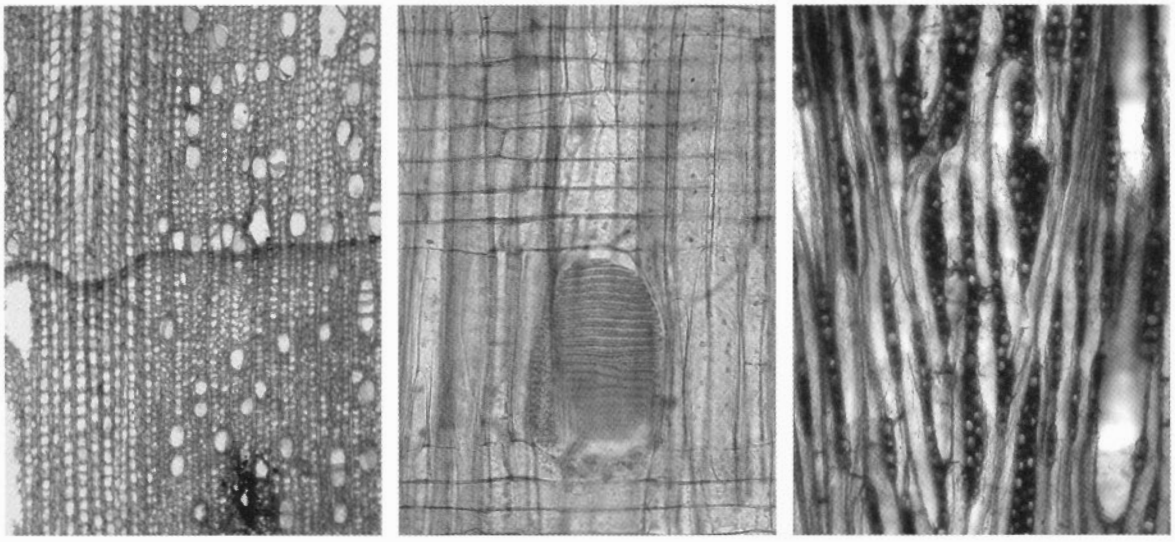
3．④　桶　側板　ヒノキ

写真2　木材⑦



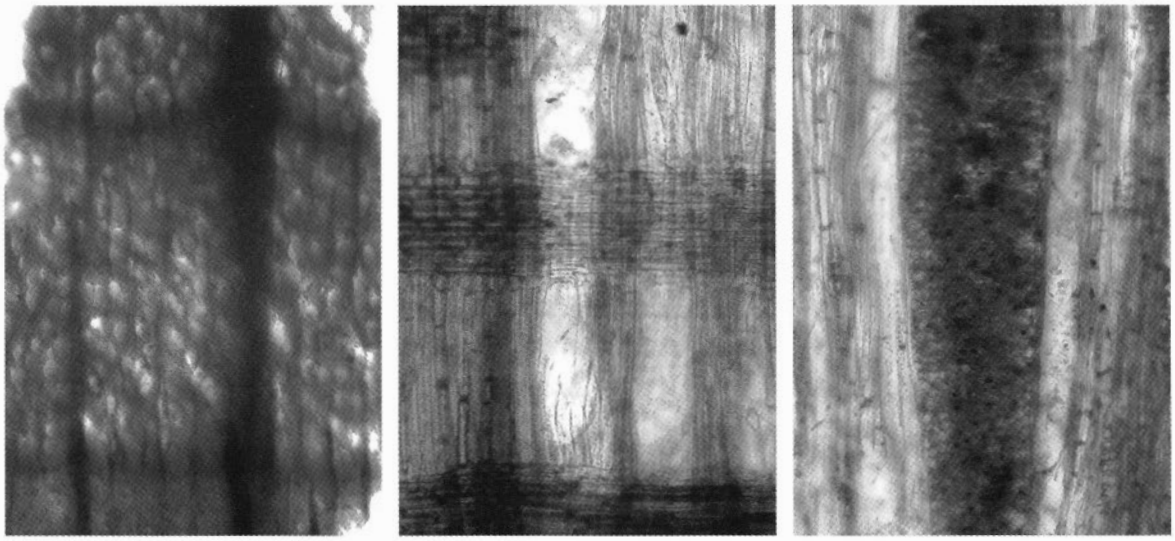
横断面 ━━━━━━ : 0.5mm　放射断面 ━━━━━━ : 0.05mm　接線断面 ━━━━━━ : 0.2mm

4．⑤　板材　サワラ



横断面 ━━━━━━ : 0.5mm　放射断面 ━━━━━━ : 0.1mm　接線断面 ━━━━━━ : 0.2mm

5．⑨　柱　ハンノキ属ハンノキ節



横断面 ━━━━━━ : 0.5mm　放射断面 ━━━━━━ : 0.2mm　接線断面 ━━━━━━ : 0.2mm

6．⑧　漆器　ブナ属

写真2　木材⑧

5. 放射性炭素年代測定

㈱吉田生物研究所

(1) はじめに

土木具1点、用途不明品1点の合計2点について加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

No.	試料データ	前処理
123	種類：炭化材 試料の性状:部位不明 状態：wet 備考：炭化材	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸1.2N)
125	種類：木材 試料の性状:部位不明 状態：wet 備考：炭化杭	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸1.2N)

表1 測定試料および処理

(3) 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代（yrBP）の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い（14Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ:IntCal09)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

No.	$\delta^{13}C$	暦年較正用年代	^{14}C年代	C年代を暦年代に較正した年代範囲	
	(‰)	(yrBP±1σ)	(yrBP±1σ)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
123	−28.67±0.19	343±18	345±20	1492AD(26.2%)1523AD	1470AD(36.1%)1530AD
				1572AD(26.4%)1603AD	1541AD(59.3%)1635AD
				1611AD(15.7%)1630AD	
125	−29.54±0.16	151±17	150±15	1679AD(9.8%)1691AD	1667AD(15.5%)1697AD
				1729AD(32.7%)1765AD	1725AD(39.8%)1782AD
				1773AD(2.1%)1776AD	1796AD(11.5%)1815AD
				1800AD(9.3%)1810AD	1835AD(9.5%)1878AD
				1925AD(14.3%)1940AD	1916AD(19.1%)1946AD

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

参考文献

林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242.
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編
「日本先史時代の14C年代」：3-20，日本第四紀学会.
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C.,
Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I.,
Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W.,
Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon,
J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and
Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

6. 取鍋の蛍光X線分析

中村晋也（金沢学院大学文学部）

（1）はじめに

本遺跡は、富山市願海寺に所在する。平成20年度から下水道工事に伴う立会調査を行っている。本稿では、平成22年度の立会調査で堀跡から出土した取鍋の付着物の材質に関して、蛍光X線定性分析によって含有元素を同定し、用途に関する考察を行った。

（2）蛍光X線分析

取鍋に付着する金属について、エネルギー分散型微小部蛍光X線分析装置（SII Nano Technology（株）製:金沢学院大学所有）を使用し、蛍光X線分析（定性分析）を実施した。X線発生部の管球ターゲットはMo（モリブデン）である。測定条件は、管電圧45kV、測定時間300秒とし、試料室内の雰囲気は真空、照射径は0.1㎜、1.8㎜を切り替えて、複数個所を測定した。

3-1.【取鍋1（遺物№71）】分析結果（カラー図版5・6）

肉眼観察により様相の異なる5箇所（①～⑤）の金属付着物と、胎土の含有元素情報を得る目的で、金属付着物の無い裏面胎土1箇所を測定した。

裏面胎土で検出した主たる元素は、Al、Si、K、Ca、Ti、Fe、Rb、Sr、Zrであり、Mn、Cuも僅かに検出された（図1）。この結果をもとに、各金属付着部の測定結果から、金属付着物由来の成分のみを以下に推定することとする。

① 取鍋外面金色部（照射径：0.1㎜）

検出した主たる元素はCu、Feであり、Asも僅かに検出された（図2）。

② 取鍋内面金色部Ⅰ（照射径：0.1㎜）

検出した主たる元素はCu、Feであり、Pb、Asも僅かに検出された（図3）。

③ 取鍋内面金色部Ⅱ（照射径：0.1㎜）

検出した主たる元素はCu、Fe、Pbであり、Zn、As、Snも僅かに検出された（図4）。

④ 取鍋内面黒色部（照射径：1.8㎜）

検出した主たる元素はCu、Fe、Pb、Snであり、Zn、Asも僅かに検出された（図5）。

⑤ 取鍋内面赤色部（照射径：1.8㎜）

検出した主たる元素はCu、Fe、Pb、であり、Zn、As、Snも僅かに検出された（図6）。

3-2.【取鍋2（遺物№70）】分析結果（カラー図版7・8）

肉眼観察と実態顕微鏡による観察において、取鍋内部に金色を呈する粒状の付着物を複数確認した（図群1）。分析はそのうち粒子径が比較的大きいものを3個選択し、照射径0.1㎜で測定した。また、胎土の含有元素情報を得る目的で、金属付着物の無い裏面1箇所を測定した。

裏面胎土で検出した主たる元素は、Al、Si、K、Ti、Fe、Rb、Sr、Zrであり、Cu、Agも僅かに検出された（図7）。この結果をもとに、金色粒子由来の成分のみを以下で推定することとする。

測定した3個の金色粒子で検出された元素は、全てに共通してAuとAgの2種であった（図8、9、10）。

4. 分析結果の考察

取鍋1で測定した前述の5箇所において、共通して銅（Cu）の顕著な検出が認められた。同様に、そこではヒ素（As）が僅かながら検出されたことも共通している。日本古代からの青銅製品においては、しばしばヒ素が含有していることが指摘されており、長登銅山をはじめ国内の銅鉱山でも、銅鉱石中のヒ素の含有がよく知られている（斉藤他2002）。つまり、ここでのヒ素の検出は、銅鉱石中に含有していた不純物が、精錬の段階で十分に取り除かれずに残存した可能性が考えられる。

また、取鍋内面の金色部Ⅰでは鉛（Pb）が、金色部Ⅱ、黒色部、赤色部では鉛（Pb）とスズ（Sn）が銅と共に検出されている。定量分析を実施していないので、それらの組成比は不明であるが、スペクト

ル強度から推察するに、これは銅の合金である青銅を扱っていたことに由来する可能性が考えられる。

まとめると、取鍋1では、銅もしくは青銅を取り扱っていたことが推測されるが、詳細については明確な結論には至らなかった。

一方、取鍋2では、内面に付着した金色粒子からは、顕著な金(Au)の検出が認められ、それらは金粒子であると考えられる。

また、ここでは共通して銀(Ag)が検出している他、鉄(Fe)と銅(Cu)も不顕著ながら検出された。これは裏面胎土部分からも僅かに検出された成分であり、金粒子に直接由来するのか、あるいは、分析範囲が胎土部分にも及んだせいなのか、解釈が難しいところである。

沓名貴彦氏は、山梨県内の金山遺跡や、武田氏ゆかりの中世城館、城下町遺跡から出土した金属生産関係資料の科学的分析において、金鉱石から生産した金の特徴として、不純物としてビスマス(Bi)、亜鉛(Zn)、鉛(Pb)、ヒ素(As)、テルル(Te)の検出を指摘している(沓名 2011)。また、それら不純物が検出されない金については、砂金由来の金の熔融を指摘している。今回分析した金粒子については、前述の鉄、銅、銀以外には特徴的な元素は検出されておらず、沓名氏の見解と照合すると、坩堝2においては、砂金由来の金を取り扱っていた可能性が示唆される。

(5) おわりに

佐々木満氏は、甲府出土の金粒付着の熔融物付着土器の用途の多くは、建物の装飾を施すための金箔などの金の加工に用いられていたのではないか〔佐々木 2011〕と考えており、今回見つかった取鍋の蛍光X線分析の結果から、願海寺城の郭内において、銅・鉄を使った鋳造とともに金の加工を行っていたと考えられる。

参考文献

斉藤努・高橋照彦・西川裕一 2002『古代銭貨に関する理化学的研究 - 皇朝十二銭の鉛同位体比分析および金属組成分析 -』日本銀行金融研究所ディスカッションペーパー

佐々木満 2011:「金付着土器の考古学的所見」『甲斐金山における金生産に関する自然科学的研究』山梨県立博物館調査・研究報告5

沓名貴彦 2011:「出土資料の科学調査からみた中世甲斐における金生産」『甲斐金山における金生産に関する自然科学的研究』山梨県立博物館調査・研究

v）総括

1．願海寺城の復元

（1）これまでの調査・研究

願海寺城は、寺崎民部左衛門盛永とその子喜六が城主として居城した戦国時代の平城である。願海寺城の規模や構造については記載がなく、詳細は不明である。ただし、天正9（1581）年田中尚賢等連署状〔富山県1980〕によれば、「実城」（本丸に相当）と「二之廻輪」（二の丸に相当）の存在が知られ、少なくとも2郭以上の郭からなる複郭式の平城であったことがわかる。

呉羽山を横断して東西に延びる北陸道は、願海寺付近で著しい屈折を繰り返し、「願海寺の七曲り」と呼ばれていた。高岡徹氏は、「願海寺の七曲り」は、軍勢の急進撃を阻むための防御目的で構築されたものであり、ほぼ同時期に存在した石黒氏の木舟城の「大曲り」「小曲り」と共通する性格であると指摘した〔高岡2002〕。

また、高岡氏は、地名・通称を手がかりに願海寺城下町の範囲を復元する研究を行った〔高岡1975・1980・2002〕。城の推定地は小字「舘本」地内にあたり、「舘」は居館を示す。その周辺には、家臣団にちなむ地名の「蔵地」や「ダイカク」「チゴデラ」がある。城の東方には、町屋を示す「ナカマチ」「アラマチ」「コオリマチ」がある。「舘本」の東には、「オモテ」という屋号の家があり、城の正面を示すとされる。また、湿地帯を示す「深田」「ドブゲ」等がある。

石川旭丸氏は、記録や伝承から願海寺城史を検討した〔石川1975・1976〕。石川氏の研究では、寺崎氏が願海寺（射水郡開発村）へ移住した時期は天文6～8（1537～1539）年頃と推定され、その30年度、願海坊巧空が寺崎氏の居館の南に隣接して堀と城壁を巡らした願海寺を建立したが、寺崎氏はこれを焼き討ちし、その跡に城を築城したとされる。

平成14年度調査では二重に巡る堀などを確認し、中から多量の遺物が出土した。これらの遺物は火災に伴って廃棄されたものである〔富山市教委2003〕。火災は16世紀第3四半期前後とみられ、天正9年頃の落城記録に一致すると推測した。

平成16年度調査で願海寺城下町の遺構を確認した〔富山市教委2005〕。古川知明氏は、その調査結果から願海寺城下町の復元を試みた。東側は、野口集落南方から野口集落内を結ぶライン、西側は鍛冶川支流砂川のライン、北側は野口集落と願海寺集落を結ぶライン、南側は舘集落の南側のラインである。このラインを囲んだ範囲、東西約1㎞、南北約600mを城下町エリアと推定した。願海寺城は願海寺集落の南で、推定城下町エリア東西中軸線上に存在するとした〔古川2005〕。

（2）遺構・遺物について

今回の調査では、これまでの研究で願海寺城と推定する地区（A～N区）で中世～近世の堀、井戸、土坑などを確認した。城下町と推定する地区（O～Q区）で、中世～近世の区画溝、土坑などを確認した。

願海寺城と推定する地区で東西方向に走る堀は、C・D・A・K区で確認した。C区では幅約3m（2間）の2条の薬研堀SD113・SD121を、D区では幅約8.5m（4間半）のやや幅広な箱堀SD134を、A区では幅約7m前後（4間）の箱堀SD1・2を確認した。K区では箱堀SD403・405・407を確認した。

南北方向に走る堀は、H・G・K・I・J区で確認した。H区では幅約17m（9間半）とかなり幅広の箱堀SD309や、箱堀SD311、薬研堀SD308を、G区では西の肩が確認できなかったが、幅約14m以上を測る箱堀SD305を確認した。D区とB区の間は、幅約50mの落ち込みがあり、箱堀SD22と考えられる。K区では、箱堀SD406・409を確認した。

井戸は、B・K区で確認した。B区SE23・24、K区SE408は素掘り井戸である。K区SE404は、石組井戸で、堀SD403が埋没した後に構築している。石組の石には、転用石として五輪塔や板碑、石臼などを利用している。

城下町と推定する地区では、Q区で平成16年度調査区の区画溝と繋がる溝を3条確認した。O・P区で土坑やピットを確認し、願海寺城下町が平成16年度調査区の南にも広がることが分かった。

出土遺物は、土師器の皿、瀬戸美濃、越中瀬戸、唐津、取鍋、石製品、木製品などが出土た。土師器の年代は、16世紀前半を中心とする15世紀後半～16世紀中頃に帰属する。SD2出土炭化板材の放射性炭素年代測定の結果、15世紀後半～16世紀前半の年代が得られ、土師器の年代との齟齬はない。平成14年度調査では、土師器の年代を16世紀第2四半期に前後する時期としており、今回の調査と同時期である。土師器は、A区～D区、H区、K区で確認しており、「舘本」地内に集中する。

（3）範囲の復元

これまでの研究では、城跡は「舘本」地内に所在すると推定しているが、具体的な範囲までは明示されていない。ここでは、今回の調査成果を基に、願海寺城の範囲の復元を試みたい。

北堀は、C区薬研堀SD121である。SD121は平成17年度にC区西側で行った試掘調査でも確認しており、堀の長さが約50m以上あることが分かっている。SD121の北約6mには、薬研堀のSD113があり、北側には2重の薬研堀が巡っていたと考える。東堀は、堀幅からH区箱堀SD309とG区箱堀SD305が繋がる最大幅約17m（9間半）の大型の堀と推測する。D区とB区の間にあるSD22を通るものと考えられる。南堀は、A区箱堀SD1・2で、幅7m前後（4間）の堀が2重に巡っていると考える。西堀は、今回の調査では確認できていない。E・F区では堀を確認しておらず、F区東に西堀が存在すると推測する。中央には、箱堀SD134があり、郭を北と南に分ける堀と考える。

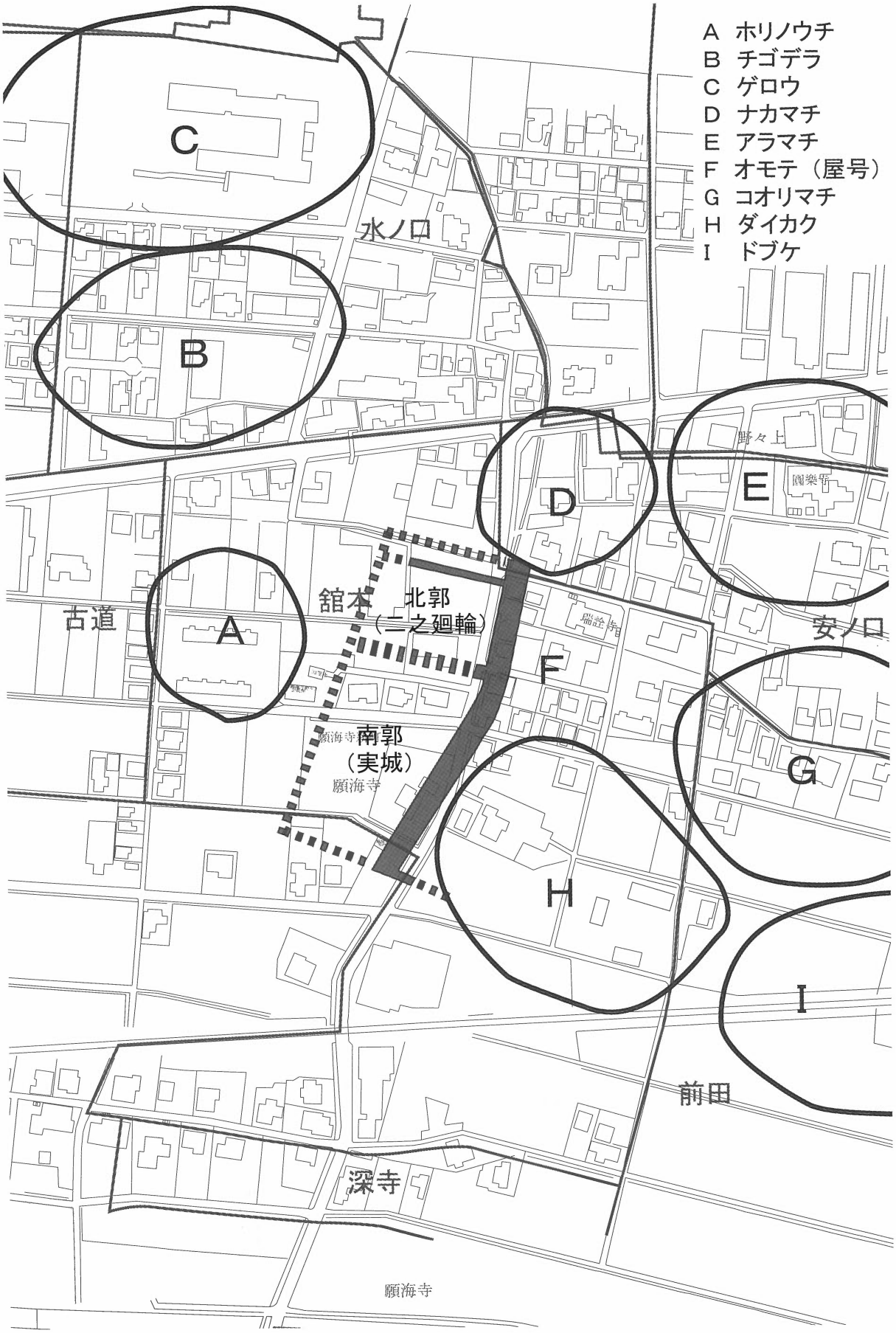
これらの堀に囲まれた範囲が郭の推定範囲であり、北郭と南郭が存在する。北郭が東西約80m、南北約50m、南郭が東西約80m、南北約120mの規模と推定する。郭の推定規模から南郭が「実城」で、北郭が「二之廻輪」と考えられる。

平成14年度調査区では、郭とそれを取り巻く堀を確認しており、郭の存在を示唆している〔富山市教委2003〕。今回調査のB・K区では、堀や井戸を確認しており、平成14年度調査区を含む東堀の東にも願海寺城の郭の存在が考えられるが、この場所は高岡氏の研究では「ダイガク」の地名を残る場所であり、寺崎氏の家老と伝える草野大学の屋敷地の可能性がある。南堀の南にも遺構が広がっており、別の郭が存在する可能性がある。

今回の調査で、大型の堀や薬研堀に囲まれた郭が、「舘本」地内に存在することが確認できたことにより、願海寺城の範囲復元を試みたが、狭隘な工事範囲の調査での検討であり、今後の調査により再検討する必要はある。（堀内）

引用・参考文献

石川旭丸1975「願海寺城攷　上」『越中史壇　第61号』越中史壇会
石川旭丸1975「願海寺城攷　下」『越中史壇　第62・63合併号』越中史壇会高岡徹1975「国人寺崎氏の本拠地－願海寺－」『越中史壇　第61号』越中史壇会
高岡徹1980「願海寺城」『日本城郭大系7　新潟・富山・石川』新人物往来社
高岡徹2002「戦国末期における木舟城とその城下町の復元研究－国人石黒氏の盛衰と城下町の様相－」『富山県福岡町木舟城跡発掘調査報告書－範囲確認調査報告－』福岡町教育委員会
富山市教育委員会1970『富山市金草第1号窯址発掘中間報告書』
富山市教育委員会1973『呉羽丘陵城山南部の自然科学および文化史跡調査報告書』
富山市教育委員会1976『富山市古沢・金屋地内古墳概要調査報告書』
富山市教育委員会1983『富山市古沢A遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会1984『富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』
富山市教育委員会1988『昭和62年度　富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
富山市教育委員会1999『栃谷南遺跡』
富山市教育委員会2003『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ　－水橋二杉遺跡・願海寺城跡・北代遺跡－』
富山市教育委員会2004『富山市の遺跡物語所報№5』
富山市教育委員会2005『富山市願海寺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会2006『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅰ　－砂川カタダ遺跡・西二俣遺跡－』
富山市教育委員会2011『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ　－砂川カタダ遺跡・今市遺跡－』
富山市教育委員会2012『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ　－西金屋・西金屋窯跡　米田大覚遺跡－』
富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会2000『富山市西金屋窯跡発掘調査概要』
富山県1980『富山県史　史料編Ⅲ近世上』
西井龍儀・小林高範2005「呉羽山古道の調査」『大境』第25号　富山考古学会
古川知明2005「付編　願海寺城下町の推定」『富山市願海寺城跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
堀沢祐一2008「富山市花ノ木C遺跡の祭祀具について」『富山市考古資料館報　№45』富山市考古資料館



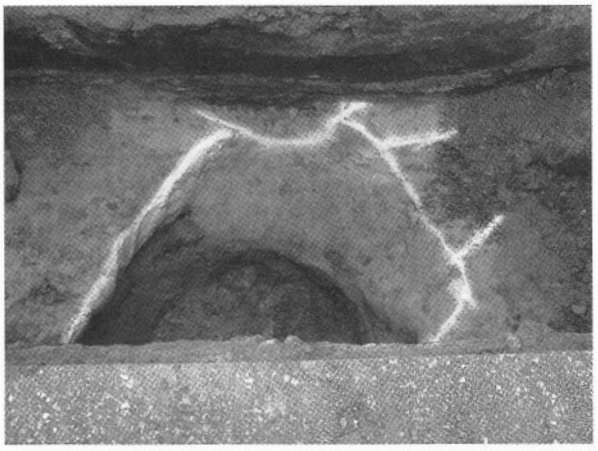
第 54 図　願海寺城推定範囲図

＊高岡徹 2002「戦国末期における木舟城とその城下町の復元研究－国人石黒氏の盛衰と城下町の様相－」『富山県福岡町木舟城跡発掘調査報告書－範囲確認調査報告－』の“第 52 図　願海寺城の小字・呼称分布図”を加工・加筆

SD101（北から）

SD103・104、SK106（南から）

SD104 断面（東から）



SK106（西から）

SK108、SD109（南から）

SD109・111（南から）

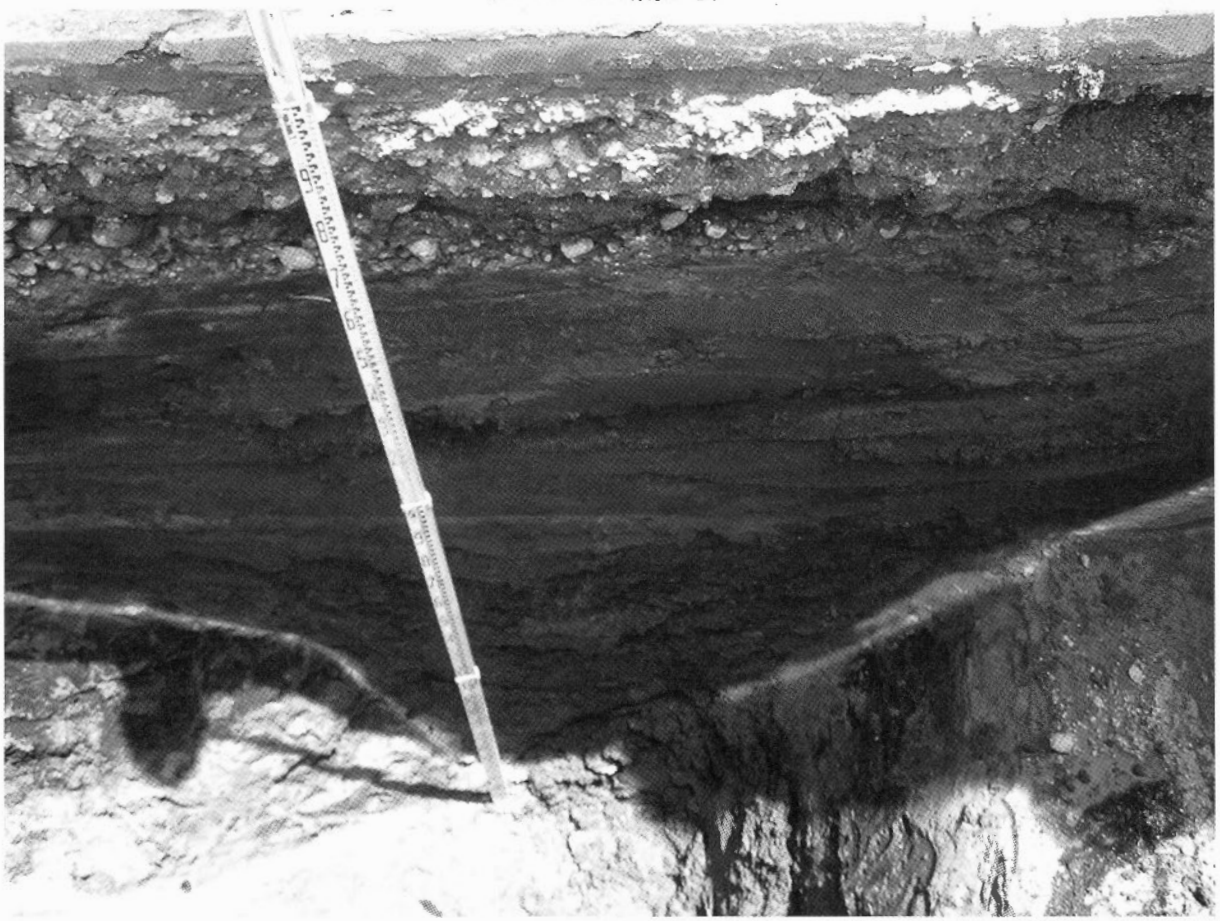
SD111、SK112（南から）

SD111 断面（南西から）

SD113（南から）

SD113断面（南西から）

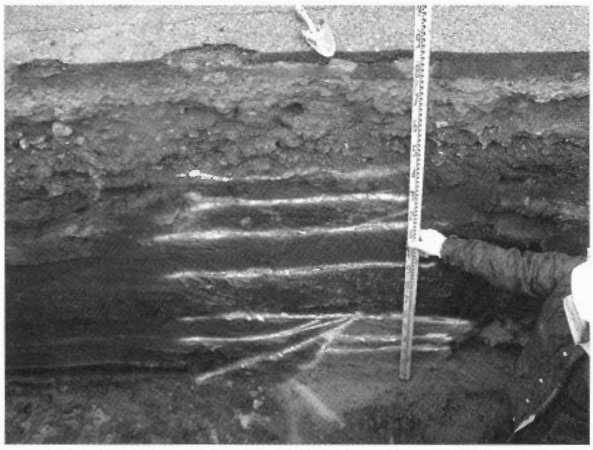
SD121・122（南から）



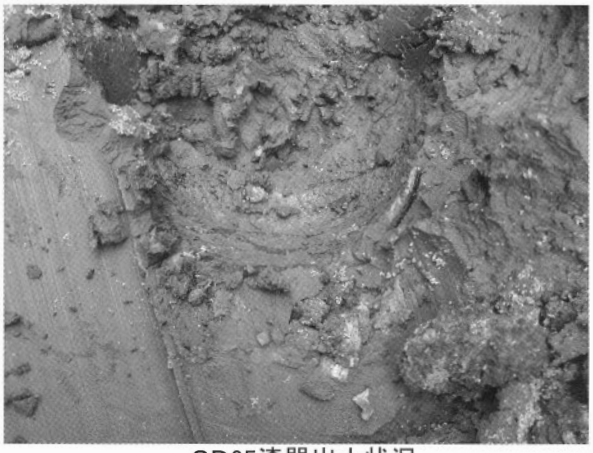
SD121断面（東から）

SD22（南東から）

SD21（北から）


SD21断面（南東から）

SD25・26（北から）

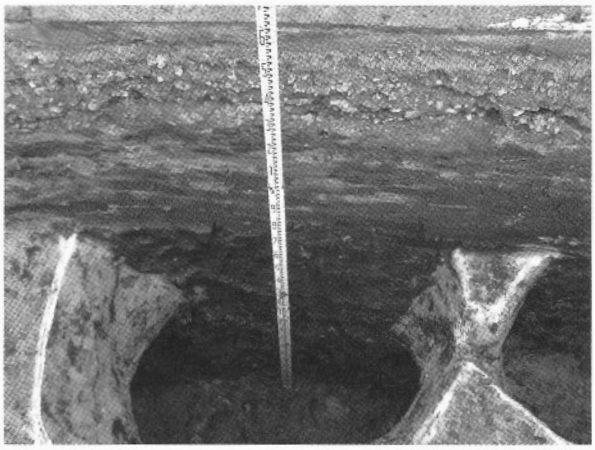

SD25漆器出土状況

SD27（北東から）

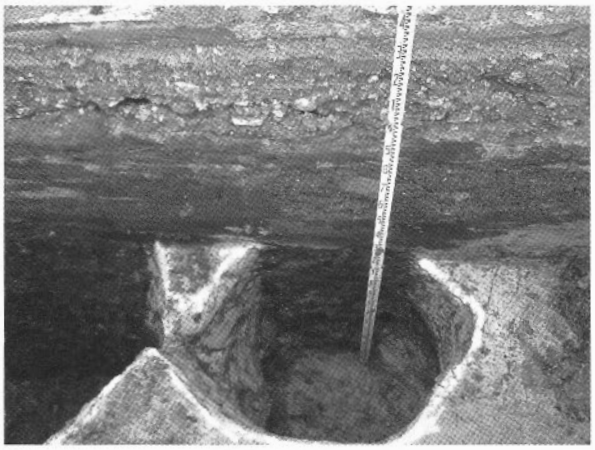
SD27断面（南東から）

SD27弓状木製品出土状況

SE23・24（北東から）



SE23（北西から）

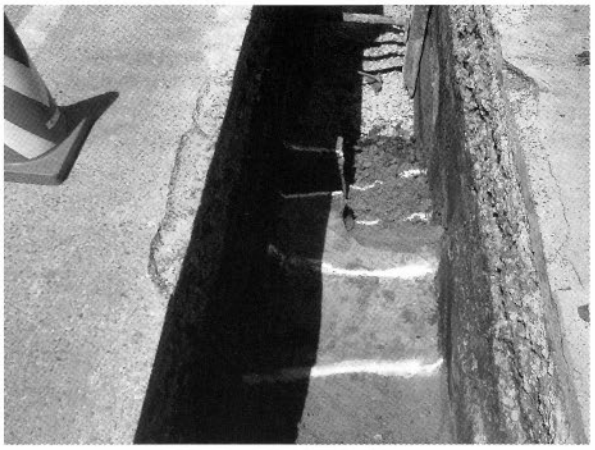


SE24（北西から）

SD311（南東から）

SD311断面（北東から）

SD01断面（西から）


SD03・04（南西から）

SD02（北東から）

SD02断面（南東から）

SD05・06（北東から）

SK11・13、ピット群検出状況（南西から）

SD14、SK18等（南西から）

SK18（南西から）

SK11舟形木製品出土状況（南から）

SK16柱根・礎石出土状況（北西から）

SD301（西から）

SD301曲物底板出土状況

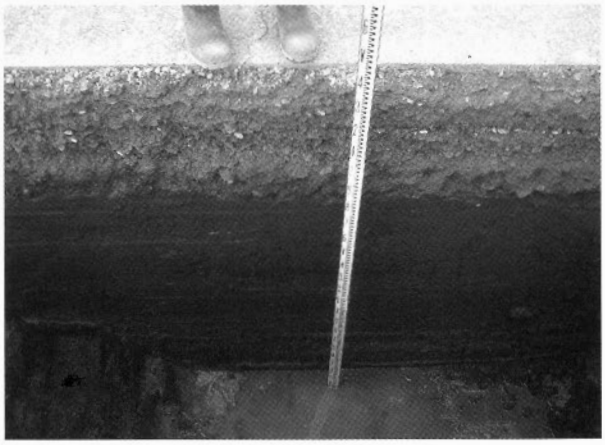
SD302（東から）

SD303（西から）

SD308（南から）

SD309検出（西から）

SD317（西から）



SD317断面（南から）

図版28　願海寺城跡

SE404（北から）

SE404断面（北から）

SE404断割（北から）

SD403断面（西から）

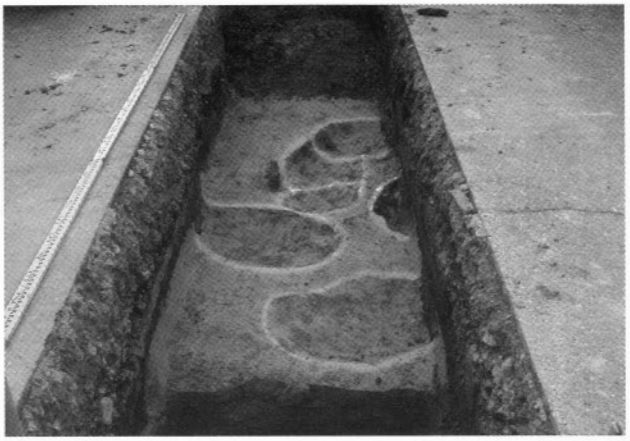
SE408検出状況（東から）

SE408（北東から）

SD407（北東から）

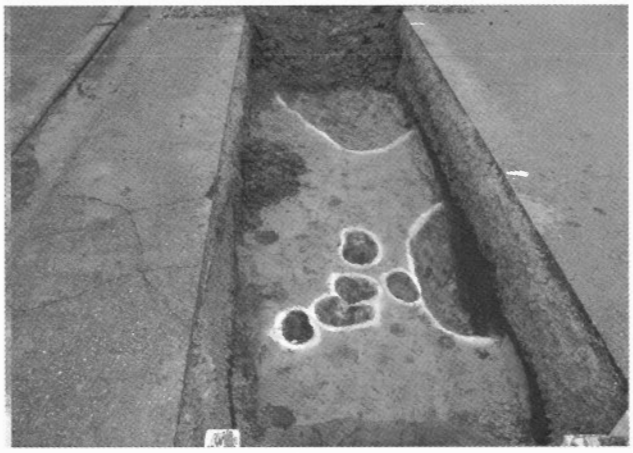
SD409断面（東から）

SK501・502（東から）



SK503・504・505（東から）

SK506（北から）

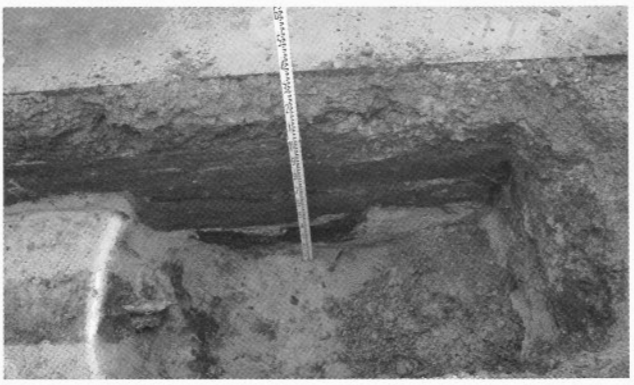


SK513・518、ピット群（西から）

SK518・519（南東から）

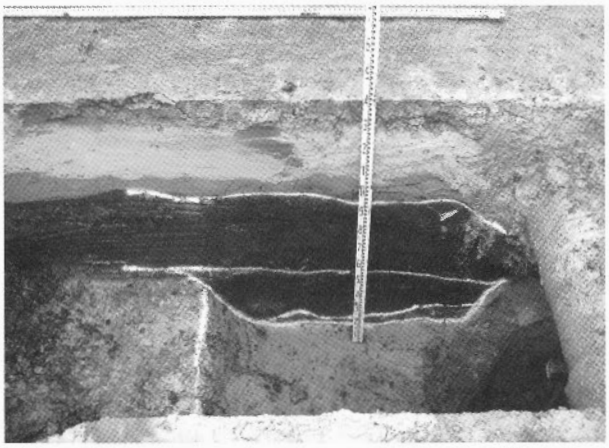
SK518遺物出土状況（東から）

SK520（西から）

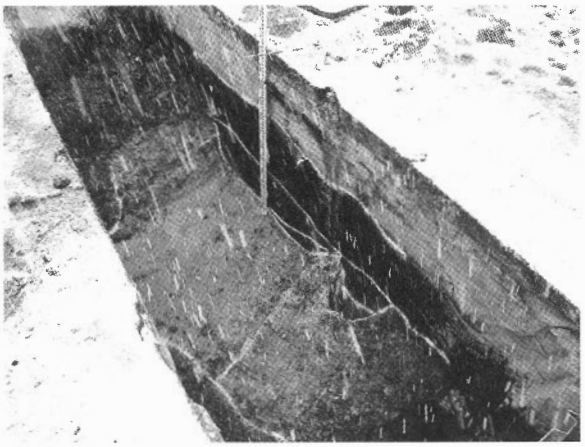


SK520（北から）

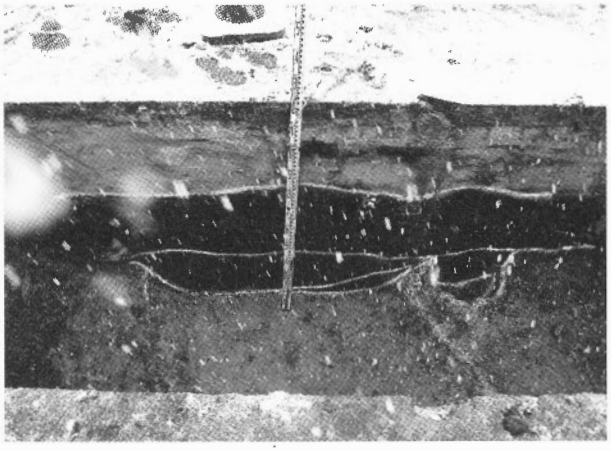
SD601（東から）



SD601断面（北から）

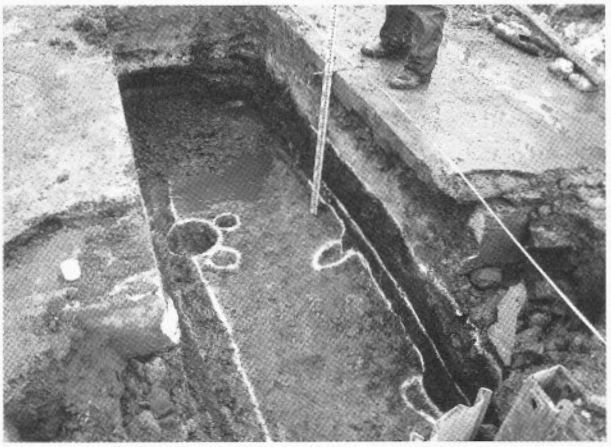


SD602（北西から）

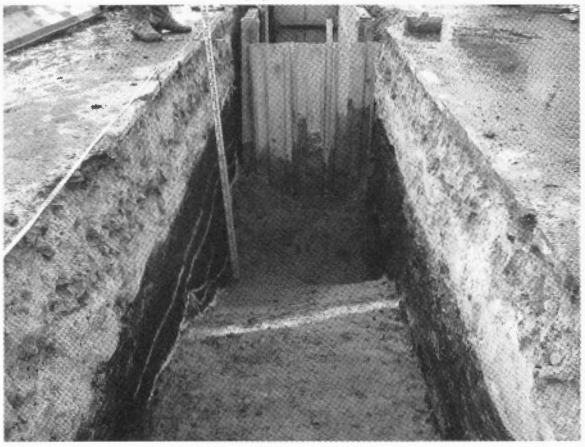


SD602断面（北から）

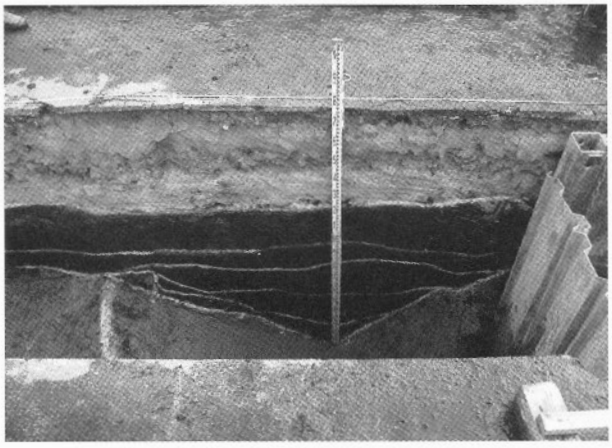
SP604等検出状況（西から）



SP604等（西から）

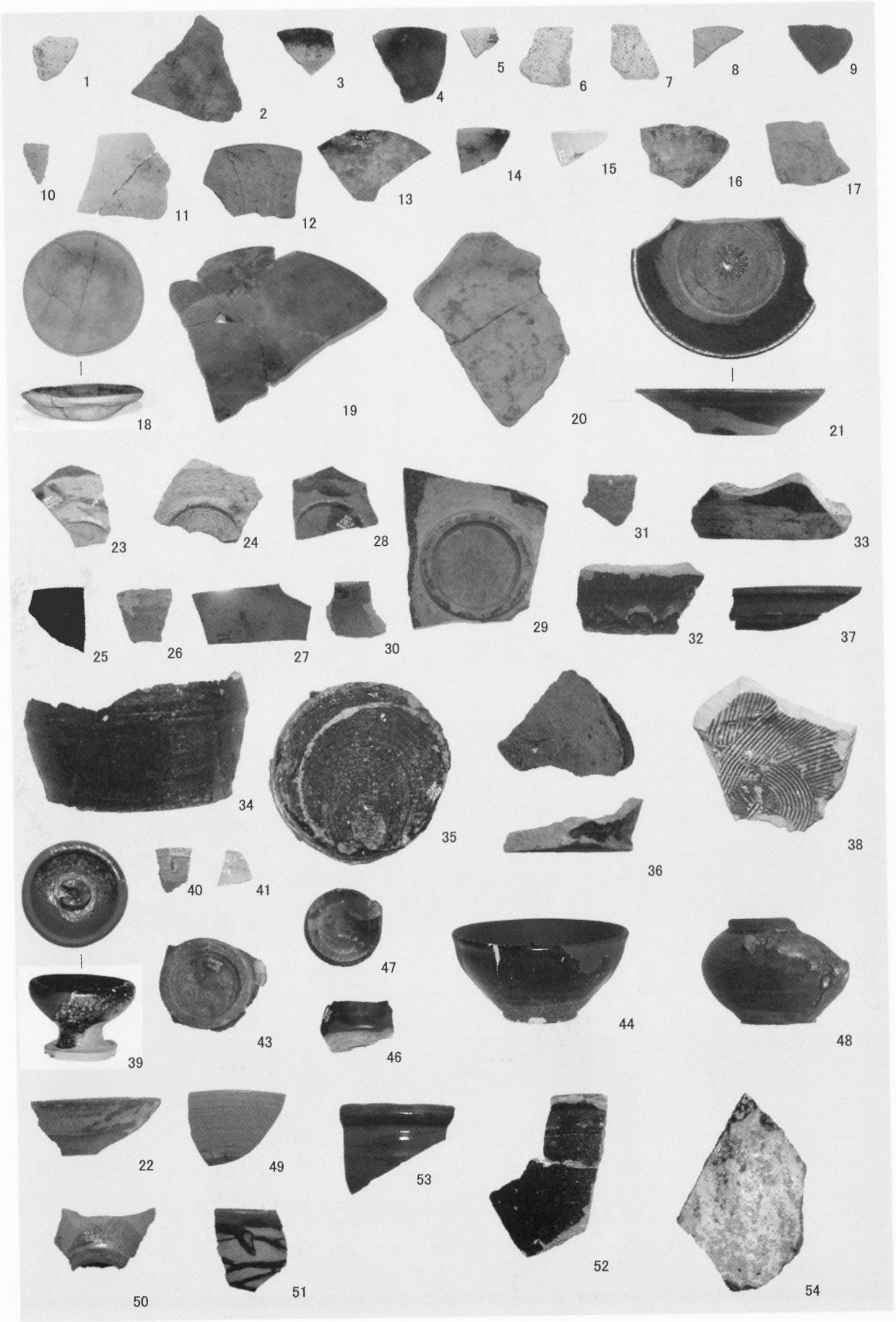


SD603（東から）

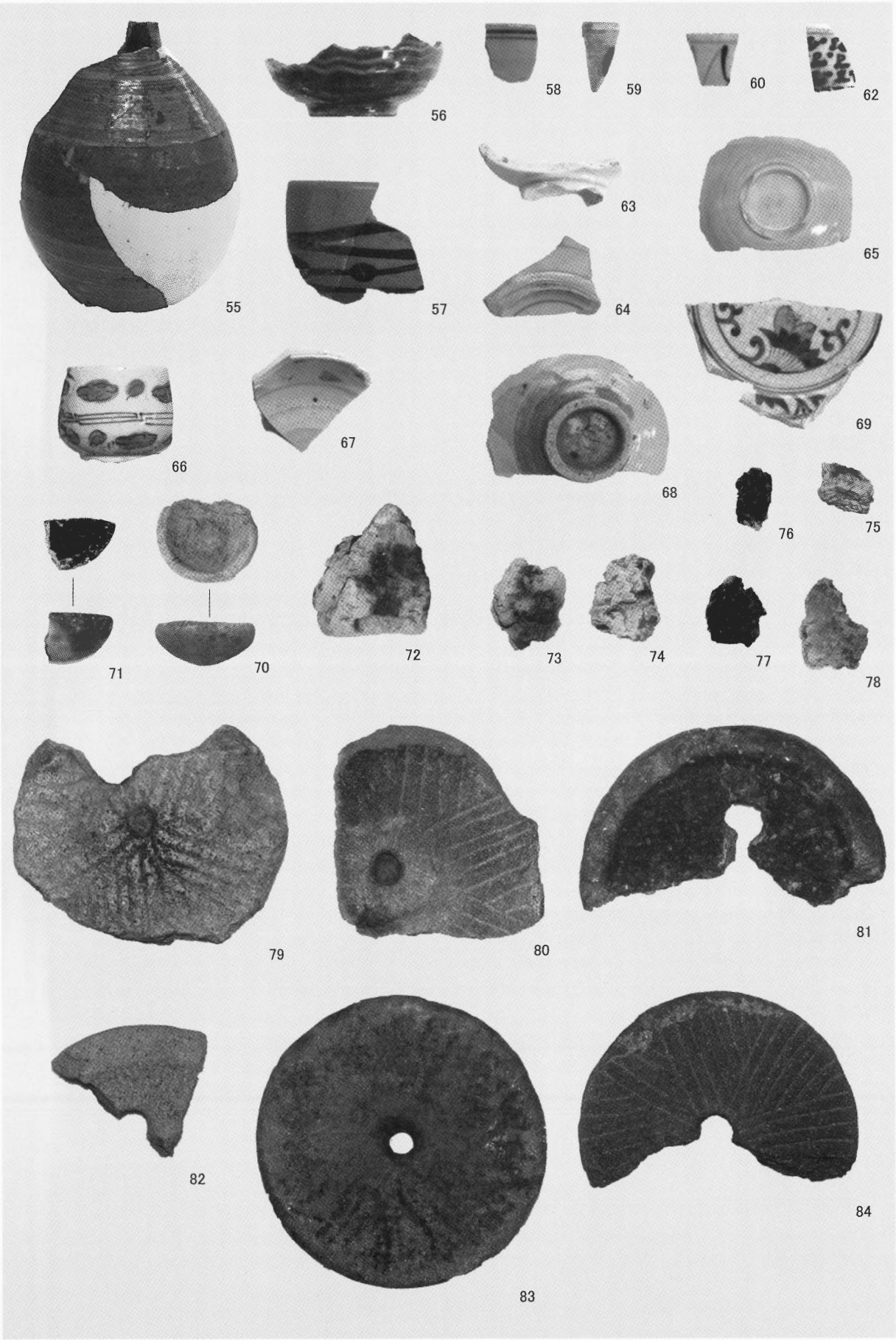


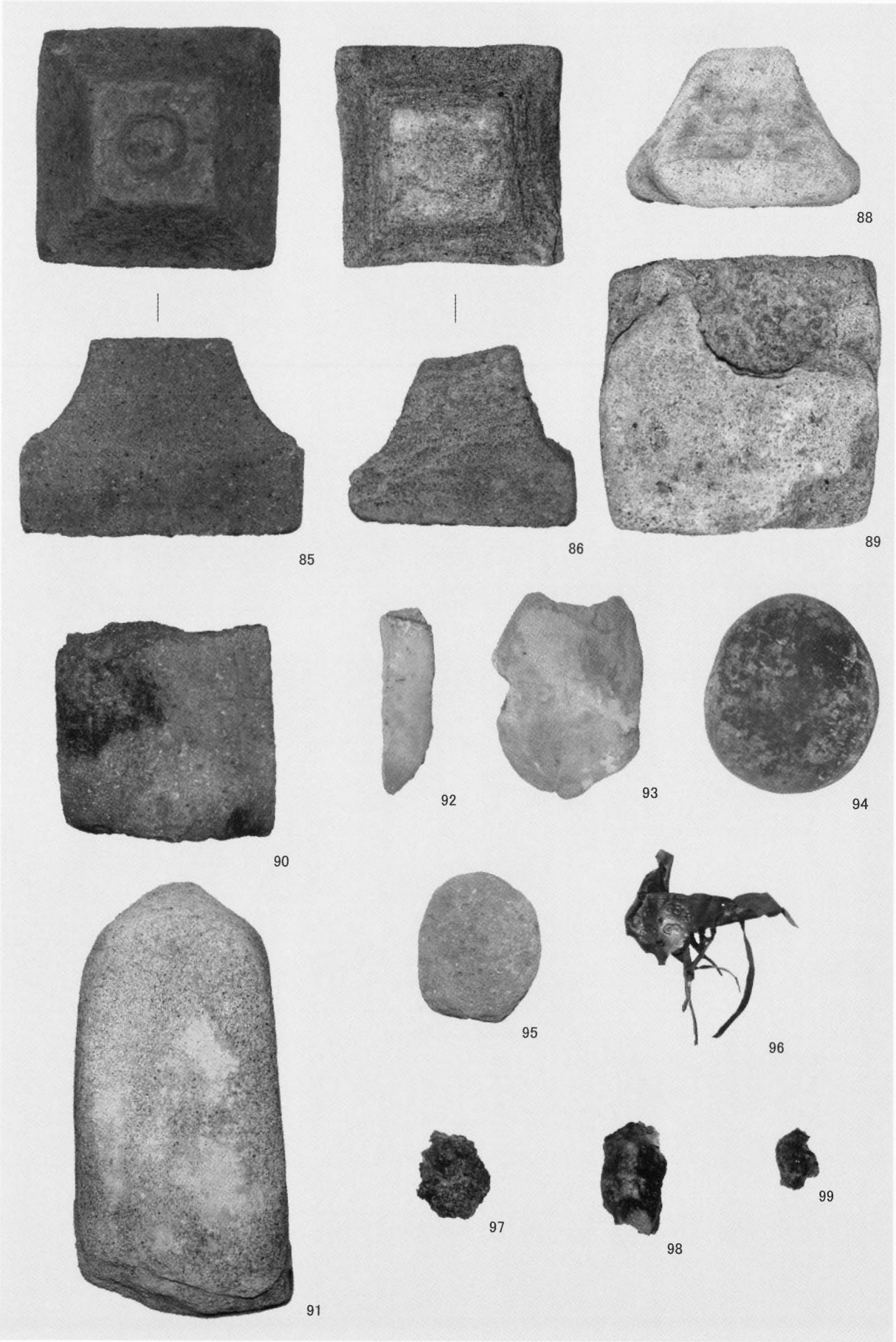
SD603断面（北から）

図版31 願海寺城跡

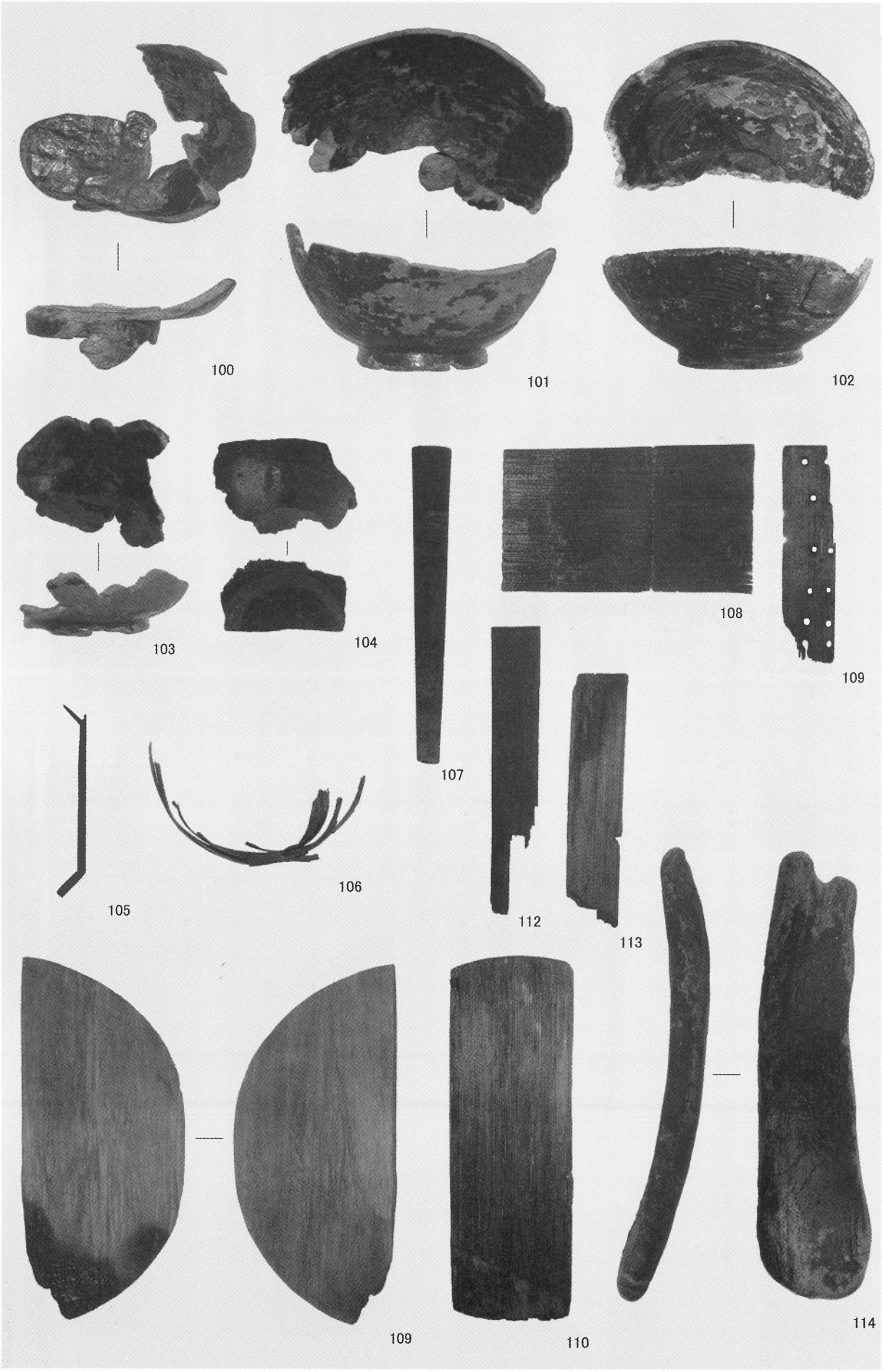

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
43
44
46
47
48
49
50
51
52
53
54

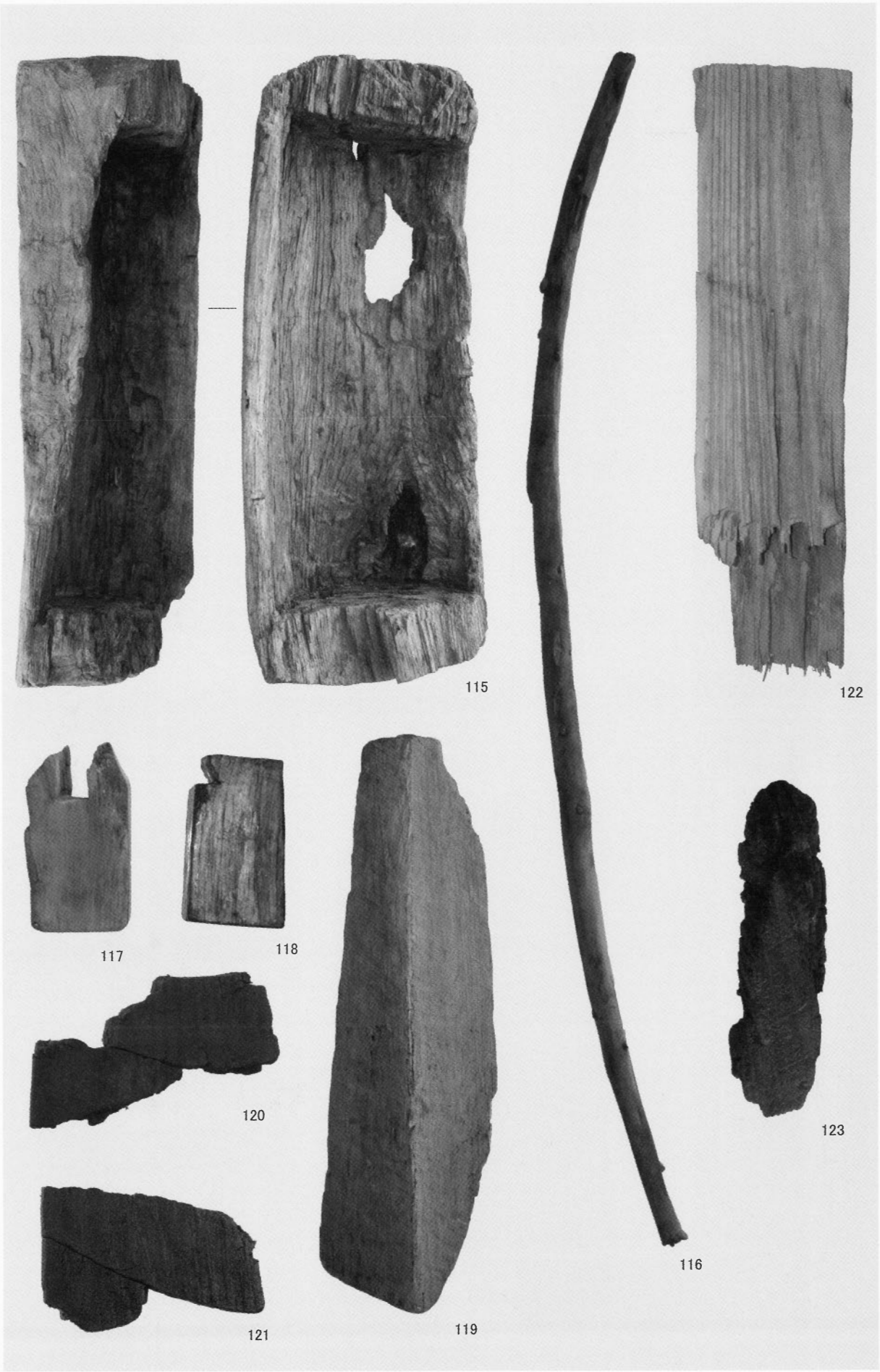
図版32　願海寺城跡

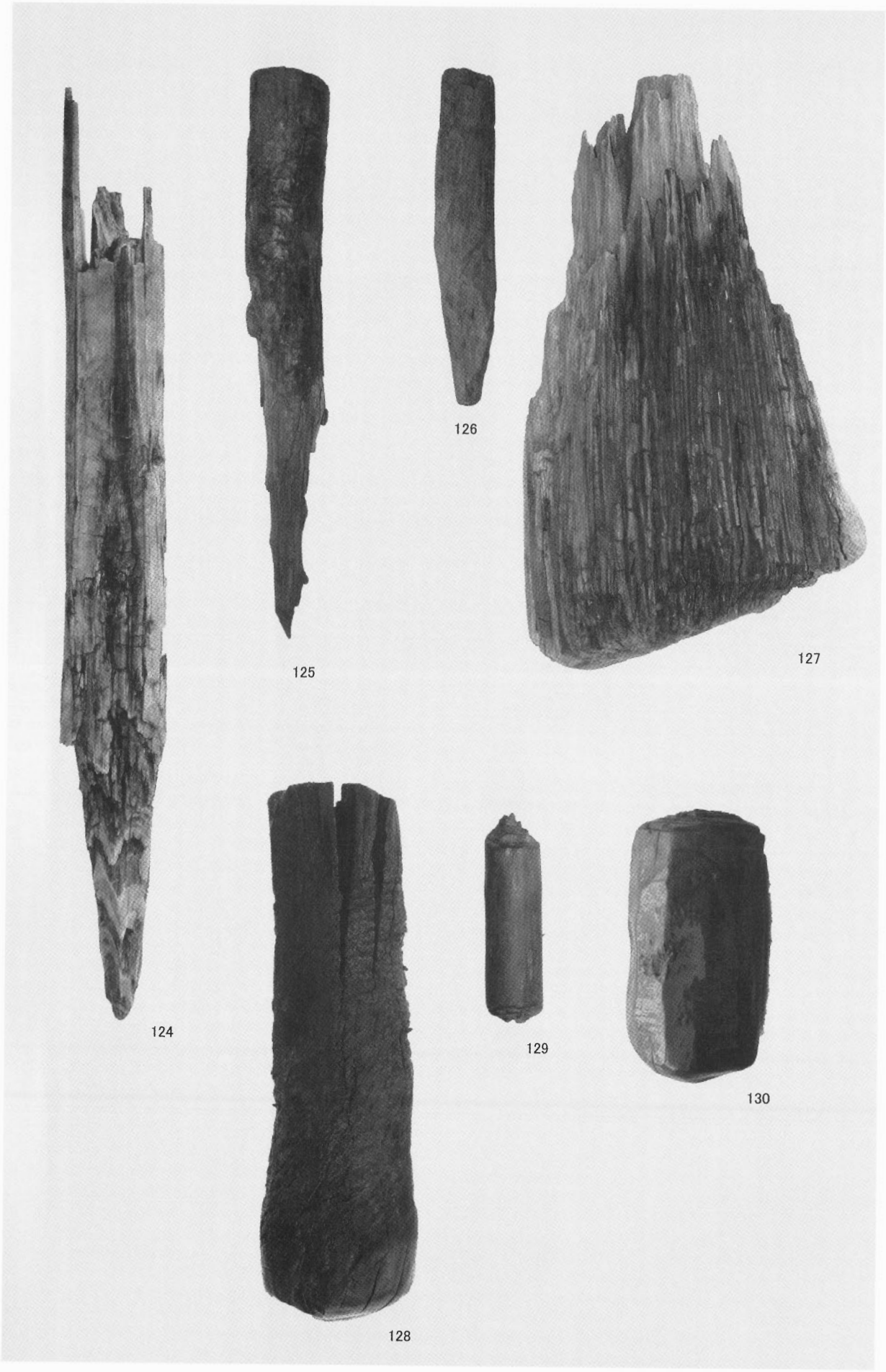

55
56
57
58
59
60
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84


85
86
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99

図版34 願海寺城跡




115
122
117
118
116
123
120
121
119


124
125
126
127
128
129
130

Ⅲ　今市遺跡

ⅰ）調査の経過

今市遺跡は、昭和 51 年に富山市教育委員会刊行の『富山市遺跡地図』に「今市遺跡」（市№5）として登載し、それ以後埋蔵文化財包蔵地となった。昭和 63 年～平成 3 年の分布調査で、遺跡範囲を大幅に見直し、平成 5 年に「今市遺跡」（市№201010）として『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載した。埋蔵文化財包蔵地の面積は約 300ha である。

これまでの試掘調査・発掘調査の成果は次のとおりである。平成 22 年、個人住宅建築に伴う発掘調査では、平安時代の竪穴建物、鎌倉時代の堀や土橋など城館に伴う遺構を確認した。この城館を「寺島館跡」と呼称することとした〔富山市教委 2011〕。

平成 24 年、富山市立八幡小学校体育館改築工事に先立つ発掘調査では、平安時代前期、江戸時代後期、昭和時代中期の 3 時期の遺構を確認した。平安時代前期には集落が営まれ、その集落は「射水郡寒江郷」の一集落の可能性がある。道路跡は呉羽丘陵上の集落へ延びると推定される道路で、海岸沿いを通る古代北陸道と内陸部を結ぶ道路跡と考えられる。江戸時代後期には、近世北陸道沿いに屋敷があり、その屋敷の一部や区画溝を確認した。「呉羽」銘や前田家家紋・参勤交代を連想させる絵の書かれた九谷焼湯呑が出土した。その他、昭和時代中期に建てられた八幡国民学校の基礎を確認し、昭和 17 ～ 20 年限定生産の「統制陶磁器」が出土した〔富山市教委 2013〕。

平成 20 年、本遺跡内で公共下水道工事が計画され、工事による掘削幅が狭隘であることから工事立会調査を実施することとした。工事立会で遺構等が確認された場合は、記録保存のための調査を行うこととした。

平成 20 年 7 月～ 8 月、布目地区の調査では、遺構は所在しなかった。同年 12 月、八幡地区の調査では、弥生時代～平安時代の遺構を確認した。

調査年度	調査地	主たる調査担当者	調査年月日	遺跡の有　無
H20	布目	小黒智久（埋蔵文化財センター）	平成20年7月30日～ 平成20年8月6日	×
	八幡	鹿島昌也（埋蔵文化財センター） 野垣好史（埋蔵文化財センター）	平成20年12月17日～ 平成20年12月24日	○

ⅱ）遺跡の位置と環境

1．地理的環境

今市遺跡は、富山市街地から北西約 6km に位置し、富山市今市、八幡、寺島、布目、四方荒屋、八町北、八町南、八町東、八町中地内に所在する。

遺跡の東 2kmの位置を北流する神通川は、洪水による変遷が繰り返し生じ、万治元（1658）年～寛文 9（1669）年の洪水以降本流は東岩瀬側となり、現在に近い位置となった。西岩瀬側の川は神通古川と呼ばれ、規模が次第に縮小し現在は細い流れとなっている。遺跡の北側から西側は縄文海進の後、砂州が発達して古放生津潟が出来、そこへ川が流れ込むことで、次第に潟を埋め低湿地帯が形成された。

本遺跡は神通古川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は 5 ～ 6mを測る。

2．歴史的環境

本遺跡の周辺には、旧石器時代から江戸時代に至るまで連綿とした人の営みが確認できる数多くの遺跡が存在する。

旧石器時代は、小竹貝塚でナイフ形石器、国史跡北代遺跡でナイフ形石器と斧形石器が出土した。

縄文時代前期には、縄文海進で広がった旧放生津潟の湖畔に集落が営まれ、前期後葉の「蜆ヶ森式土器」の標識遺跡である蜆ヶ森貝塚、縄文時代前期では全国最多となる 71 体の人骨を発見した小竹貝塚〔県財団 2011〕が知られている。中期に入ると、長岡台地上に集落が形成された。代表的な

遺跡として、国史跡北代遺跡がある。高床建物を中心に約 70 棟以上の竪穴建物が取り巻く環状集落形態と推定している〔富山市教委 1998〕。北代加茂下Ⅲ遺跡では、柱列が二重に巡る 14 本以上の柱を持つ掘立柱建物を確認した〔堀沢 1996・1997〕。

縄文時代後・晩期には、北代遺跡や長岡杉林遺跡で集落が営まれた。長岡八町遺跡〔富山市教委 2006〕や百塚遺跡〔富山市教委 2012〕では、大型の土偶、石刀、石棒など祭祀関係遺物が出土した。弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、遺跡数が増加し、神通古川流域や呉羽丘陵上に集落や古墳などが築かれた。神通古川流域では、右岸に四方荒屋遺跡（戸水B式～古府クルビ式）、四方背戸割遺跡（戸水B式～法仏式）、永代割遺跡（猫橋式～古府クルビ式）など、左岸に打出遺跡（法仏式～高畠式）、今市遺跡（月影式）、八町Ⅱ遺跡（高畠式）などの集落遺跡が営まれた。打出遺跡では、畿内との関係の深い三連壺や県内最多の鉄器が出土し、神通古川下流域の拠点的集落であったと推測した〔富山市教委 2006〕。呉羽丘陵北端部には、百塚遺跡・百塚住吉遺跡があり、方形周溝墓や前方後方墳、前方後円墳等 28 基を検出し、「百塚古墳群」の存在を確認した〔富山市教委 2009・2012〕。百塚古墳群の南東約 1 ㎞には、古墳時代初期の造営とされる杉坂古墳群がある。

古墳時代後期には、群集墳である番神山横穴墓群が築かれた。百塚遺跡ではこの時期にも円墳が築かれた。円墳の周溝内埋葬施設に馬のハミが副葬され、他地域に先んじて馬を所有した有力者がいたと考えられる〔富山市教委 2013〕。

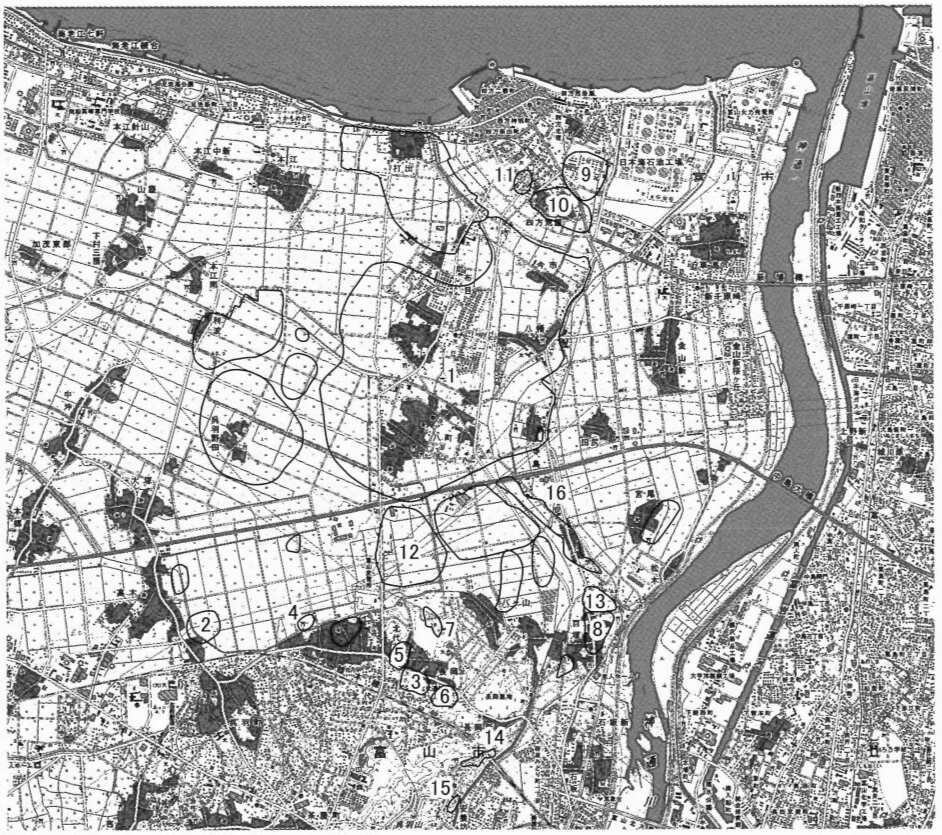
奈良～平安時代には、呉羽丘陵北西部に、古代射水郡「寒江郷」が比定されている。「寒江郷」は、天平宝字 4(752)年 10 月 18 日の越中国牒(正倉院文書)に「射水郡寒江郷戸主三宅黒人戸牒」とあり、8 世紀中頃には存在していた。その時期の遺構が確認されている北代遺跡、百塚住吉D遺跡などが、その開墾集落と考えられる。長岡杉林遺跡では、緑釉陶器、灰釉陶器に加え、瓦塔などの仏教遺物も出土し、「寒江郷」の中心的な集落とみられる〔富山市教委 1987〕。打出遺跡では、平安時代の直線道を確認している〔富山市教委 2006〕。

中世になると、神通川左岸には中世の遺跡が集中する。この辺りは、室町時代頃に成立した『廻船式目』にみえる十大港（三津七湊）の一つである「越中岩瀬湊」の有力候補地とされる。四方荒屋遺跡や打出遺跡などでは中国製陶磁器の出土や屋敷跡などを確認し、港湾都市的な性格が考えられている〔中世岩瀬湊調査研究グループ 2004〕。八町Ⅱ遺跡では、鎌倉時代～室町時代の集落を確認し、区画溝や多数の井戸を検出した。千鳥紋を施した漆器なども出土することから京都下鴨神社領「寒江荘」の中核的な集落と考えられている〔富山市教委 2008〕。

江戸時代には、八ヶ山地内に富山藩主前田家墓所長岡御廟所が造営される。加賀藩より富山藩 10 万石を与えられた前田利次は、立藩の際に百塚の地に新城を造ることを願い出て許可をされ、「百塚侍従」と呼ばれた。しかし、百塚築城は財政的に叶わず、二代正甫が亡父の念願であった百塚城予定地近くに利次を葬り、以後この場所が富山藩歴代藩主の墓所になった〔古川ほか 2010〕。　（堀内）

引用・参考文献

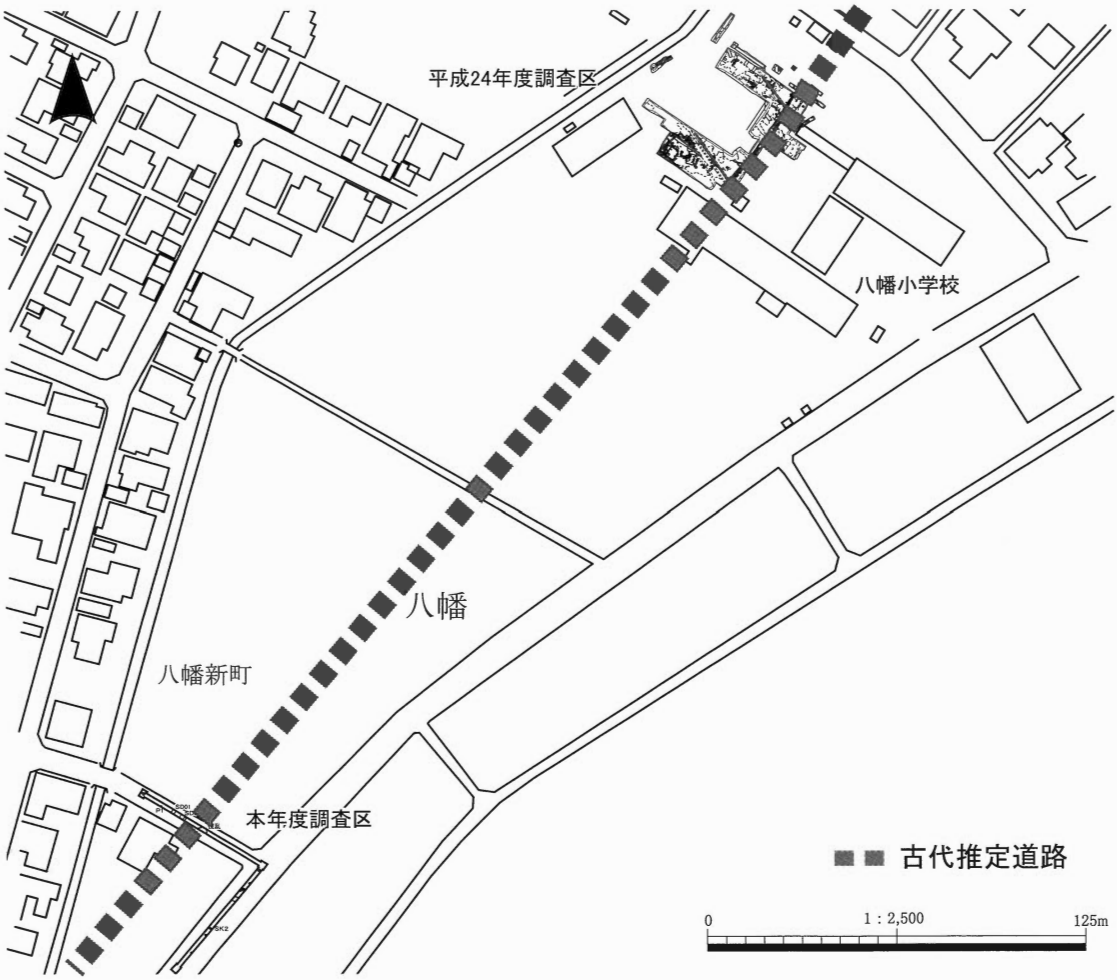
中世岩瀬湊調査研究グループ 2004「「海中から中世岩瀬湊を探る」15 年度海底探査報告」『富山市日本海文化研究所報』第 33 号　富山市日本海文化研究所
富山県富山農林振興センター・富山市教育委員会 2012『富山市百塚住吉D遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2010『平成 22 年度埋蔵文化財年報』
富山市教育委員会 1987『長岡杉林遺跡』
富山市教育委員会 1998『史跡北代遺跡発掘調査概要Ⅱ　－ふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査－』
富山市教育委員会 2003『長岡八町遺跡』
富山市教育委員会 2006『富山市打出遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2008『富山市八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2009『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2011『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ　－砂川カタダ遺跡・今市遺跡－』
富山市教育委員会 2012『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2013『富山市今市遺跡発掘調査報告書』
古川知明・野垣好史・小林高太・蓮沼優介 2010「富山藩主前田家墓所長岡御廟所基礎調査報告」『富山市考古資料館紀要』第 29 号　富山市考古資料館
堀沢祐一 1996「北代加茂下Ⅲ遺跡の縄文時代の掘立柱建物について」『富山市考古資料館報　№30』富山市考古資料館
堀沢祐一 1997「縄文時代中期掘立柱建物の一考察　－北代加茂下Ⅲ遺跡掘立柱建物の検討－」『富山市考古資料館紀要』第 16 号　富山市考古資料館



1. 今市遺跡
2. 小竹貝塚
3. 北代遺跡
4. 蜆ヶ森貝塚
5. 北代加茂下Ⅲ遺跡
6. 長岡杉林遺跡
7. 長岡八町遺跡
8. 百塚遺跡
9. 四方荒屋遺跡
10. 四方背戸割遺跡
11. 江代割遺跡
12. 八町Ⅱ遺跡
13. 百塚住吉遺跡
14. 杉坂古墳群
15. 番神山横穴墓群
16. 百塚住吉D遺跡

第 54 図　今市遺跡と周辺の遺跡

0　1：50,000（全体図）　2,500m

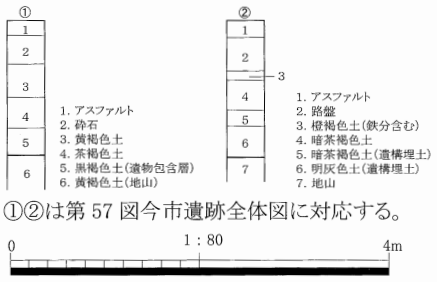


第 55 図　今市遺跡の調査区位置図

iii）調査の概要

1. 基本層序

基本層序は1～4層の構造が共通しており、上層からアスファルト、砕石／路盤、近現代盛土である。①の5層が黒褐色土で遺物包含層、②の5・6が遺構埋土、①の6層および②の7層が黄褐色土で地山（遺構検出面）である。



第56図 基本層序

2. 遺構と遺物

（1）遺構

今回の調査では弥生時代および古代の遺構である溝4条、土坑3基、ピット2基を検出した。

A. 溝・自然流路

SD1：調査区北側に位置し、北東‐南西方向に延びる溝である。検出長1.20m、幅0.90m、深さ0.27mを測る。弥生土器（8・10）が出土した。

SD2：調査区北側に位置する。SD1と平行し北東‐南西方向に延びる溝である。検出長1.20m、幅1.90m、深さ0.50mを測る。須恵器（13）が出土した。

SD3：調査区南側に位置する。検出長1.10m、幅0.40m、深さ0.10mを測る溝である。

SD4：調査区南側に位置し、東西方向に延びる溝である。検出長1.40m、幅1.40m、深さ0.25mを測る。弥生土器（1・4・11）が出土した。

B. 土坑

SK1：調査区南側に位置する。長さ0.40m、幅0.40m、深さ0.22mを測る。

SK2：調査区南側に位置する。長さ0.60m、幅0.50m、深さ0.27mを測る。

SK3：調査区南側に位置する。長さ0.42m、幅0.42m、深さ0.28mを測る。

C. ピット

P1：調査区北側に位置する。長さ0.40m、幅0.30mを測る。

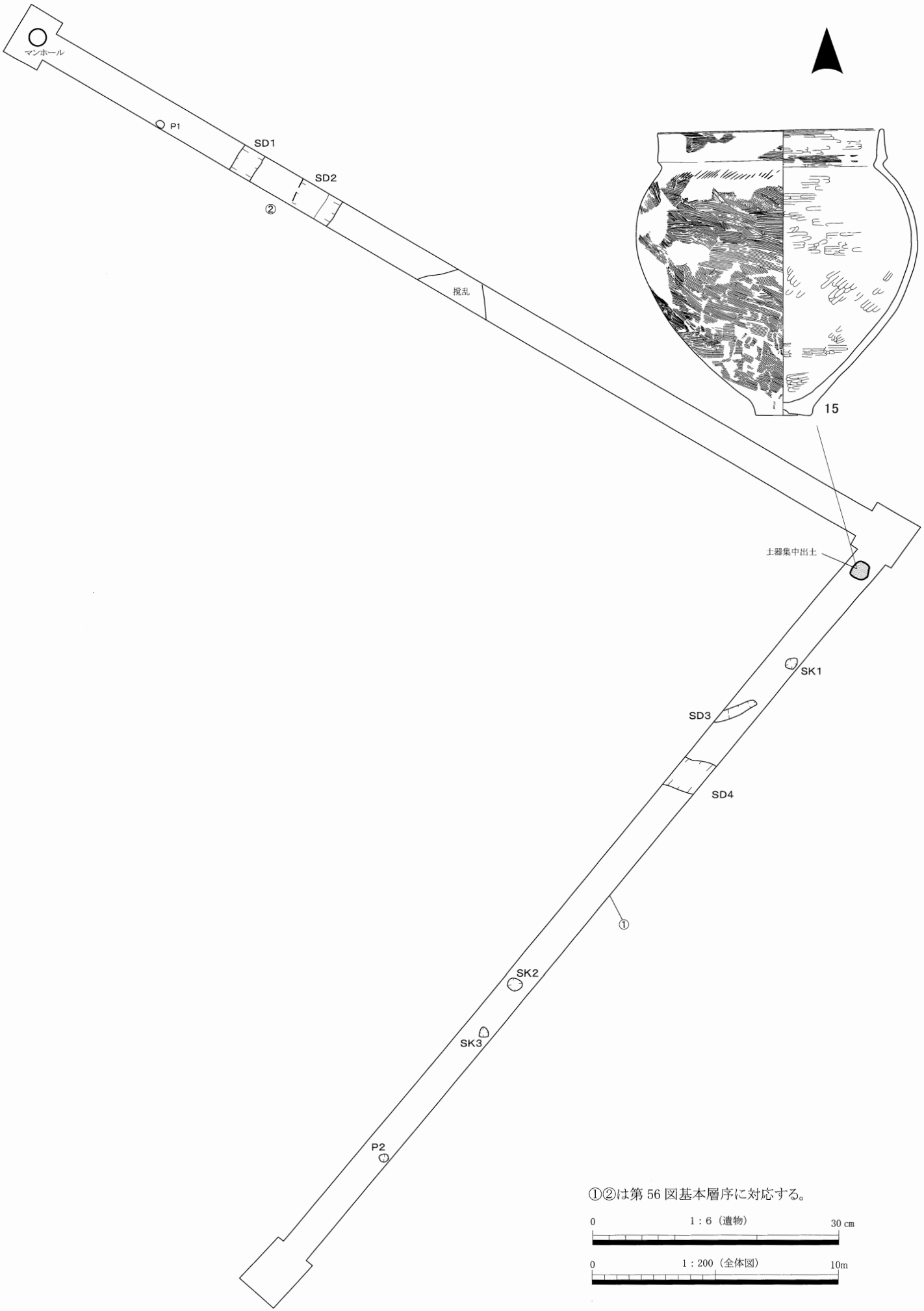
P2：調査区南側に位置する。長さ0.30m、幅0.30m、深さ0.35mを測る。

第7表 今市遺跡遺構一覧

遺構No.		長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
SD	1	(1.20)	0.90	0.27	弥生土器	SD2と平行して延びる。古代道路か。
SD	2	(1.20)	1.90	0.50	弥生土器・須恵器(13)	SD1と平行して延びる。古代道路か。
SD	3	(1.10)	0.40	0.10		
SD	4	(1.40)	1.40	0.25	弥生土器	
SK	1	0.40	0.40	0.22		
SK	2	0.60	0.50	0.07		
SK	3	0.42	0.42	0.28		
P	1	0.40	0.30	－		
P	2	0.30	0.30	0.35		

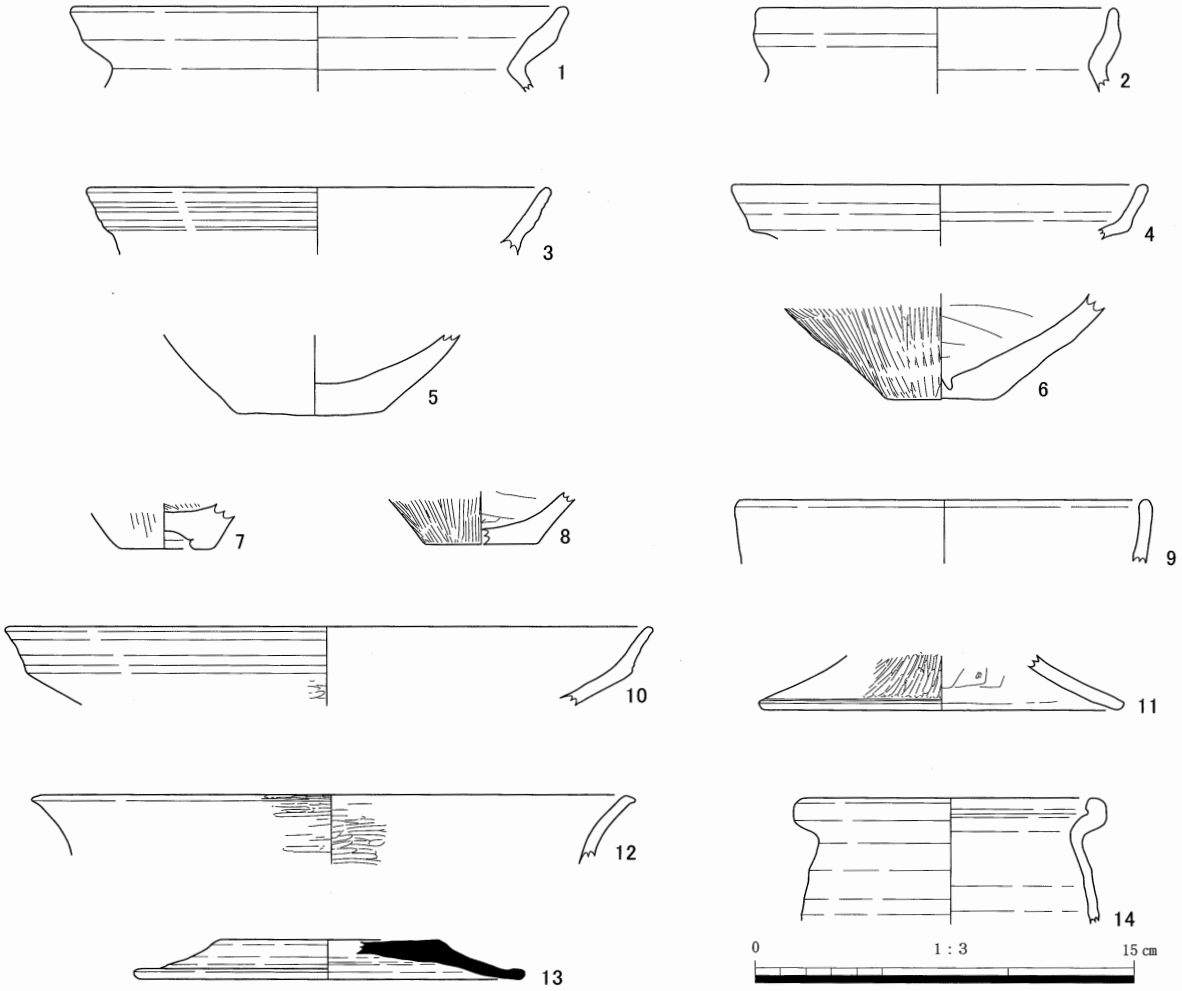
（2）遺物

出土した遺物は、主として弥生後期後半～終末期の土器である。1・2・15は有段甕である。1は口縁部が端部に向かって外傾し、2は直立気味に立ち上がる。いずれも端部は丸くおさめている。15は逆くの字状を呈する調査区の屈曲部分、南側調査区最北端の土器集中地点で一括出土した。口縁部がやや内傾する弥生時代後期後半（法仏期）の甕で、高さ34.5㎝、口径28㎝を測る。外面は全体にハケメ調整を施す。肩部にキザミ状の線刻をめぐらせ、土器の正面と考えられる面では3段の羽状をなす。その直下に曲線で構成する絵画状線刻文を施す。いわゆる絵画土器で、絵画とみられる



第 57 図　今市遺跡全体図

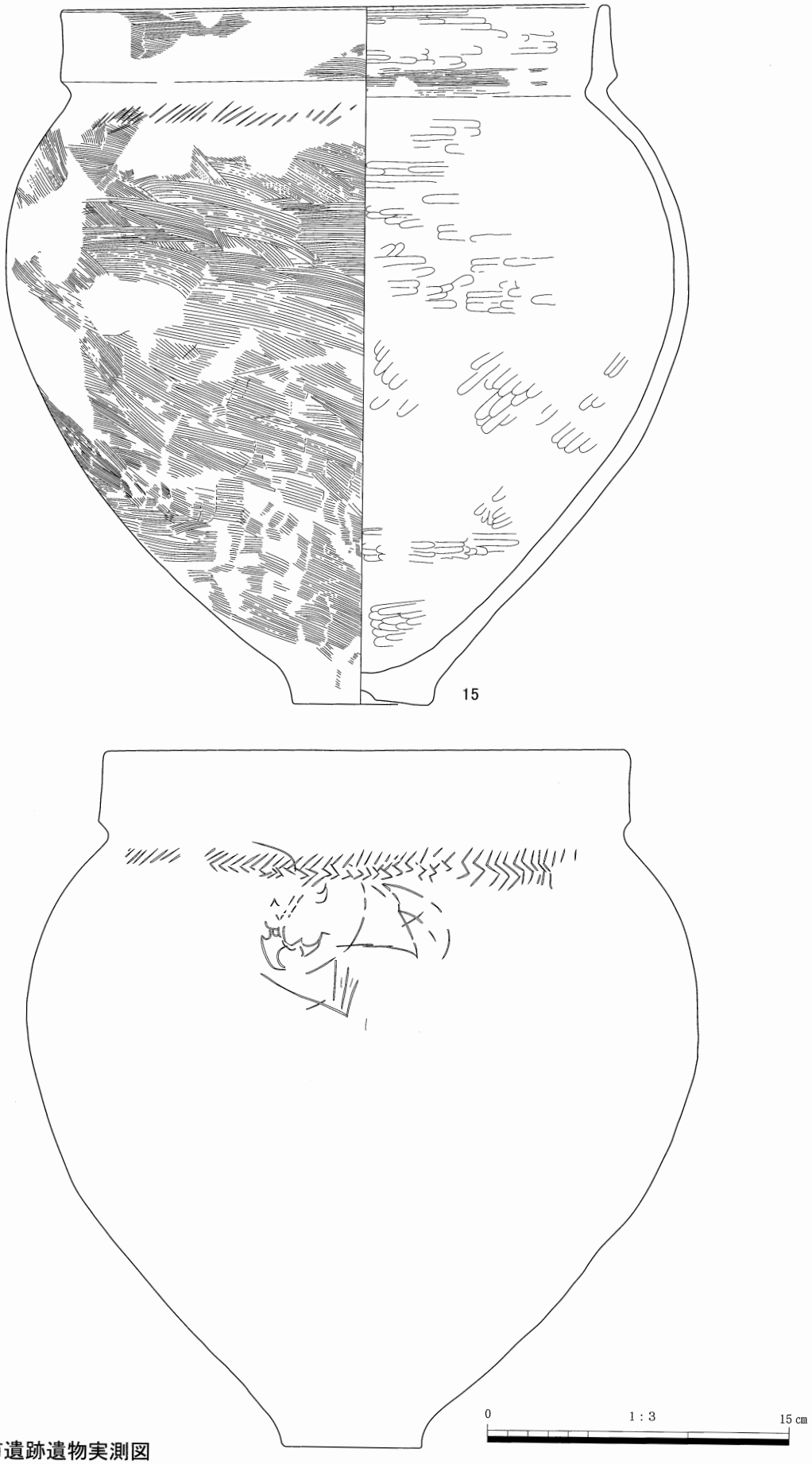
図案は退化がかなり進み、意匠は不明である。3・4は擬凹線甕である。5～8は壺の底部、9は鉢の口縁部である。10～12は高坏で、12には擬凹線を施す。このほか須恵器坏蓋（13）、土師器小型甕（14）など、古代の遺物も確認した。13の体部は低平で、口縁端部を丸くおさめる。14は体部から口縁が強く外反したのち肥厚し、端部を内湾気味に丸くおさめる。13、14は10世紀の所産である。



第58図　今市遺跡遺物実測図

第8表　今市遺跡遺物一覧

遺物No.	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調				成形・調整		備考
	遺構／層位			口径	底径	器高					外面	内面	
1	SD4	弥生土器	甕	19.20	—	—	10YR8/4	浅黄橙色			ヨコナデ		
2		弥生土器	甕	14.00	—	—	7.5Y7/6	橙色			ヨコナデ		
3		弥生土器	甕	(18.00)	—	—					ヨコナデ		擬凹線口縁か
4	SD4	弥生土器	甕	16.20	—	—	5YR6/6	橙色			ヨコナデ		擬凹線口縁か
5	地山直上	土師器	壺	—	5.80	—	7.5YR7/6	橙色	10YR5/4				
6	包含層	弥生土器	壺	—	4.40	—	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR4/1	褐灰色	ハケメ	ナデ	
7	SD4	弥生土器	甕	—	3.55	—	10YR4/1	褐灰色	10YR6/4	にぶい黄橙色	ハケメ		
8	SD1	弥生土器	壺	—	4.40	—	10YR6/3	にぶい黄橙色			ハケメ、板ナデ	板ナデ	
9		弥生土器	鉢か	16.00	—	—	10YR7/4	にぶい黄橙色			ヨコナデ		
10	SD1	弥生土器	高坏	25.20	—	—	5YR6/8	橙色	5YR4/6	赤褐色	ミガキ		擬凹線
11	SD4	弥生土器	高坏	—	脚径14.5	—	10YR7/4	にぶい黄橙色			ミガキ	ヨコナデ、ケズリ	
12	包含層	弥生土器	高坏	23.10	—	—	5Y7/4	にぶい橙色			ミガキ		
13	SD2	須恵器	坏蓋	15.50	—	—	2.5Y7/1	灰白色			ロクロナデ、ケズリのちナデ	ロクロナデ	
14		土師器	甕	11.60	—	—	10YR8/3	浅黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	ロクロナデ	ロクロナデ	
15	土器集中区	弥生土器	甕	27.10	6.75	35.10					ハケメ、線刻	ハケメ・ミガキ	肩部に退化した絵画状線刻文



第 59 図　今市遺跡遺物実測図
絵画土器

ⅳ）総括

1．古代道路

今回の調査で特筆すべき遺構は、南南西 - 北北東に延びる古代道路側溝の可能性が高い SD1、SD2 である。溝の規模は、SD1 は幅 0.9m、深さ 0.27mで、SD2 は幅が不明であるが、深さ 0.50mを測る。当調査区の北東側、約 300m離れた八幡小学校において平成 24 年度に実施した発掘調査では、平安時代前期の竪穴建物・掘立柱建物を伴う集落と、南北方向に延びる道路状遺構を検出した。この道路状遺構は、海岸沿いに打出遺跡（東西方向に延びる古代道路を検出）と米田大覚遺跡（新川郡衙比定地）を東西方向に結ぶ古代北陸道に接続し、内陸部への道路であり、呉羽丘陵上の北代遺跡、呉羽富田町遺跡、長岡杉林遺跡などの集落、小竹源平山窯跡から射水丘陵にかけての須恵器窯などの生産地と接続していた可能性がある。道路状遺構の規模は、確認長約 41m、幅約 5.0 ～ 8.0mを測る。道路状遺構には、東西の側溝があり、西側の溝は連続した溝で、東側の溝は断続的な溝である。西側の溝の規模は SD01 が幅約 0.32 ～ 0.85m、深さ約 0.13 ～ 0.28mで、SD02 が幅 0.70 ～ 1.20m、深さ 0.40 ～ 0.57mを測る。東側の溝の規模は、SD03 が幅約 0.70 ～ 0.75m、深さ約 0.23mで、SD02 が幅 0.86m、深さ 0.28mを測る。〔富山市教委 2013〕。

今回の調査で確認した溝は、規模から SD1 が平成 24 年度調査 SD01、SD2 が平成 24 年度調査 SD02 と同一で、繋がる可能性が高い。SD1・2 が西側の溝とすると、SD2 から約 5.0 ～ 8.0mに東側の溝があると考えるが、その位置に後世の撹乱を確認した。平成 24 年度調査では東側の溝は断続的な溝としており、狭隘な今回の調査では確認できなかった可能性がある。

2．絵画土器

今回の調査では弥生時代の絵画土器（15）が出土した。口径 27.1 ㎝、器高 35.1 ㎝を測る有段甕である。時期は弥生時代後期後半（法仏期）で外面全体に煤が付着する。

絵画・線刻土器全般については佐原眞、藤田三郎、橋本裕行諸氏による研究により、以下①～③の傾向が指摘されている〔橋本 1988〕。また石川県では久田正弘氏により集成が行われた〔久田 1997〕。

富山県内の弥生時代の線刻・絵画土器の出土事例とその意味についての考察は、愛宕遺跡出土土器を中心に丸川・青山裕子両氏が行っており、吉備地方の特殊器台に由来する文様原体の影響と井戸祭祀用の供献品の可能性を指摘している〔丸川・青山 2005〕。また青山晃氏は蔵野町東遺跡出土土器について、装飾器台やスタンプ文との関連性をふくめて考察している〔青山 2005〕。

弥生時代の絵画・線刻土器の特徴をみると以下のことが分かっている。

①絵画はⅣ期に盛行し、記号はⅤ期に盛行する。絵画の意匠には鹿・魚・鳥・スッポン・竜・人物・建物・舟、記号には直線・曲線・点描がある。

②器種は壺が約 97%を占め、そのほとんどが肩部を中心に施される。施文技法は櫛・箆・竹管・添付・塗彩等があり箆描が約 75%を占める。

③出土地点は溝または流路が約 40%を占めることから、水辺の祭祀や農耕祭祀に関連する可能性が高い。

以上のことから 15 をみてみると、

1）表現したものの意匠は不明瞭であり、抽象化または劣化・省略が進行している。

2）器種は甕であり、絵画土器としては極めて例外的な甕に施したものである。

3）出土地点は包含層ではあるものの、破片ではなく 1 個体がまとまって出土した。

ことが特徴として挙げられる。

富山県内で出土し、報告されている絵画・線刻土器をみてみると、規則性のある単純な直線・曲線

描では９～14（図示していない4・5・7・8含む）、複数の線種の組み合わせや不規則性がみられるものに1～3、６等があり、絵画的なものとしては後者のものの可能性が高い。いずれにせよ絵画・線刻土器は水辺の祭祀や農耕祭祀との関連が指摘されているものであり、祭祀との関連が認められる遺構は今回の調査では検出しなかったものの、周辺地域にそれらに関連する遺構がある集落が存在する可能性がある。

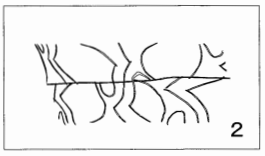
以上、1．古代道路では検出した道路状遺構、2．絵画土器では出土した絵画土器の紹介となったが、これからの周辺地域の調査や絵画・線刻土器の出土事例の増加による研究の進展の一助となれば幸いである。（朝田）

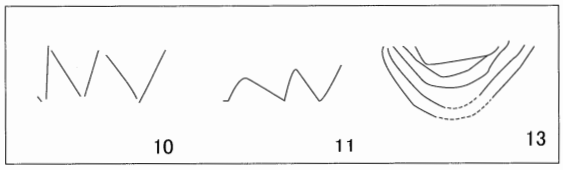
参考・引用文献

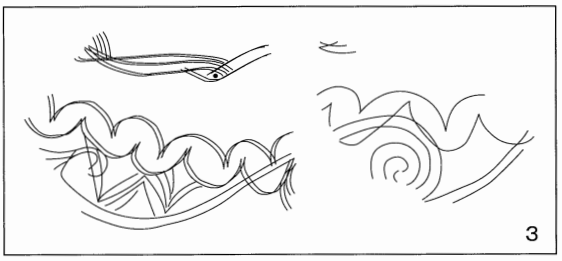
青山晃 2005「蔵野町東遺跡出土の土器 - 装飾器台・スタンプ文・線刻土器の紹介 - 」・丸川義弘・青山裕子 2005「愛宕遺跡出土の線刻文様をもつ土器」『富山考古学研究』紀要第8号（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

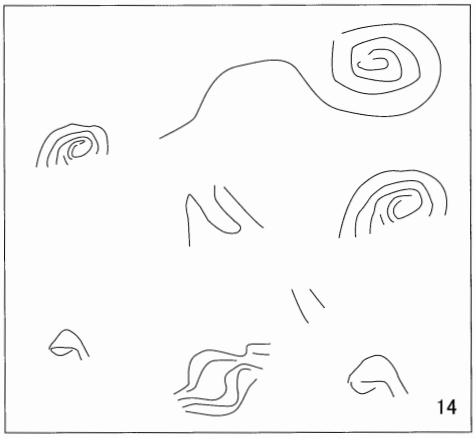
久田正弘 1997「石川県内の絵画・記号文集成」『石川県埋蔵文化財保存協会年報』8 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会

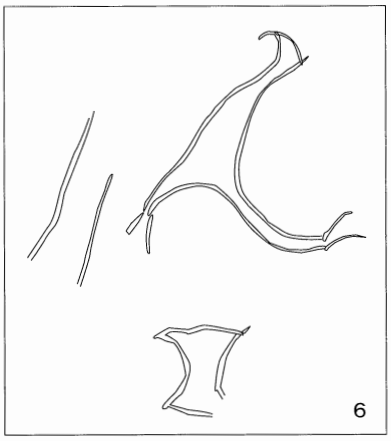
橋本裕行 1988「東日本弥生土器絵画・記号総論」『橿原考古学研究所論集第八』橿原考古学研究所編

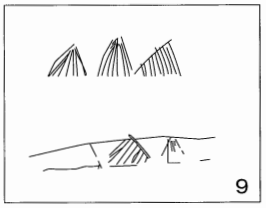


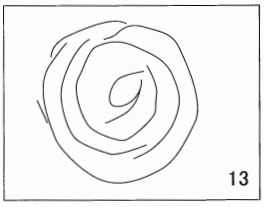












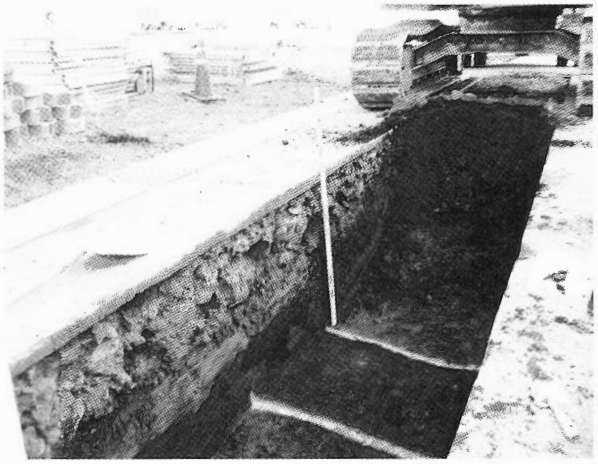
第 60 図　富山県出土の絵画・線刻土器部分図

＊青山晃 2005「蔵野町東遺跡出土の土器 - 装飾器台・スタンプ文・線刻土器の紹介 - 」・丸川義弘・青山裕子 2005「愛宕遺跡出土の線刻文様をもつ土器」『富山考古学研究』紀要第8号（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所の掲載図を引用・加工

No.	遺跡名	器種	時期	施文内容1	施文内容2	施文場所及び単位数量	備考
1	今市	有段口縁壺	弥生後期後半（法仏）				
2	南部Ⅰ	有段口縁壺	弥生終末期（月影Ⅱ）	鋸歯文	直線単文		
3	愛宕	壺		渦文・線刻・波状・弧状文	直線充填＋曲線複文	肩	孔があり、装飾器台の線刻と共通性
4		長頸壺		鋸歯文	直線	口縁	
5		壺		同心円状	曲線充填	底部外面x1	渦文
6	新堀西	長頸壺				口縁	3点出土
7	下老子笹川	擬凹線小型壺		鋸歯文	直線単文		外面赤彩煤付着
8	江上A	小型有段壺		鋸歯文	直線充填文		
9	蔵野町東	有段口縁壺	弥生後期後半（法仏）	鋸歯文	直線充填文	口縁x3・肩x2	外面煤付着
10		有段口縁壺		鋸歯文	直線単文	口縁	三角形斜辺のみ
11		有段口縁壺		鋸歯文	直線単文	口縁	退化／省略形態か
12		短頸壺		重弧文	曲線充填	口縁	五本の線
13		台付鉢か		同心円状	曲線充填	底部外面x1	渦文か
14		広口壺		渦文・線刻・波状・弧状文	曲線充填	胴部（上）x3・（中）x1・（下）x2	

第9表　富山県出土の絵画・線刻土器

絵画（線刻）土器出土状況（東から）

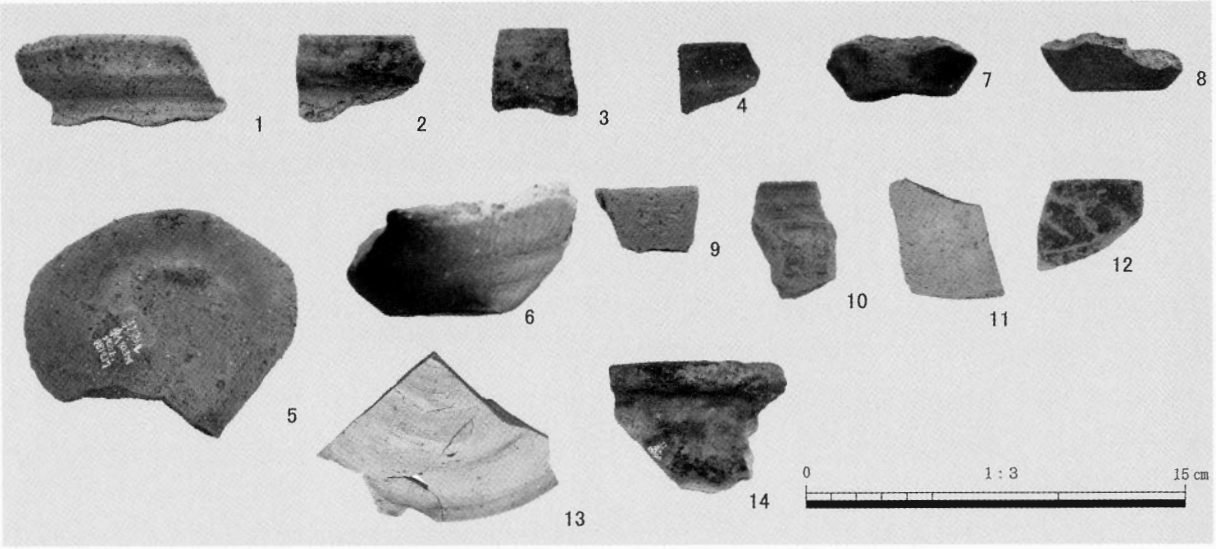


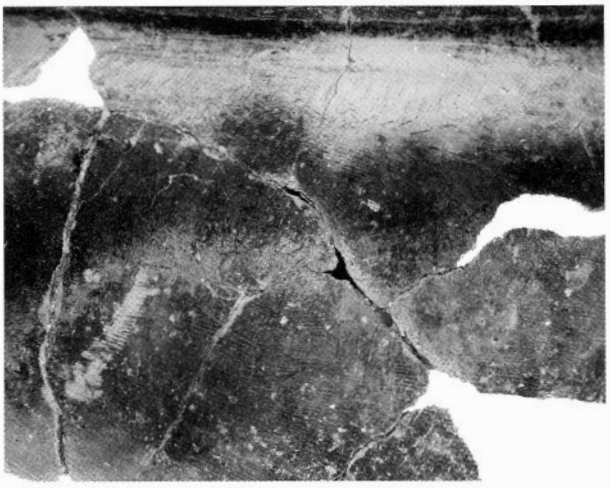
SD1検出状況（南西から）

SD1（東から）

SD2（南東から）

P2断面（北西から）





遺物15 絵画部分拡大写真（左：白線有 右：土器のみ）

Ⅳ　西二俣遺跡・花ノ木C遺跡・砂川カタダ遺跡・東老田Ⅰ遺跡

ⅰ）調査の経過

1．西二俣遺跡

西二俣遺跡は、昭和 63 年～平成 3 年の富山市教育委員会が実施した分布調査で確認し、平成 5 年に「西二俣遺跡」（市№201067）として『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載し、それ以後埋蔵文化財包蔵地となった。

遺跡内では、これまで数度にわたり試掘調査や発掘調査を実施している。平成 17 年、個人住宅建築に伴う発掘調査では、中世後期～近世前期の集落の縁辺部と推察した〔富山市教委 2006〕。

平成 21 ～ 25 年にかけて、本遺跡内で公共下水道工事が計画され、工事による掘削幅が狭隘であることから工事立会調査を実施することとした。工事立会で遺構等が確認された場合は、記録保存のための調査を行うこととした。

平成 21 年 12 月～平成 23 年 10 月の間、4 回の調査を行ったが、遺構は所在しなかった。平成 24 年 11 月～ 12 月の調査は、平成 17 年度調査区の南側に隣接する道路で行われ、中世の遺構を確認した。平成 24 年 10 月～平成 25 年 6 月の間、3 回の調査を行ったが、遺構は所在しなかった。

調査年度	調査地	主たる調査担当者	調査年月日	遺跡の有無
H21	西二俣	堀内大介（埋蔵文化財センター） 澤田雅志（㈱エイ・テック）	平成21年12月9日～ 平成22年2月8日	×
H22	西二俣	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成22年4月7日～ 平成22年4月12日	×
H23	西二俣	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成23年8月9日～ 平成23年10月7日	×
	西二俣	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成23年8月17日～ 平成23年10月20日	×
H24	西二俣	三上智丈（埋蔵文化財センター）	平成24年11月27日～ 平成24年12月28日	○
	西二俣	三上智丈（埋蔵文化財センター）	平成24年10月30日～ 平成25年1月7日	×
H25	西二俣	三上智丈（埋蔵文化財センター）	平成25年4月24日～ 平成25年5月23日	×
	西二俣	三上智丈（埋蔵文化財センター）	平成25年6月3日～ 平成25年6月5日	×

2．花ノ木C遺跡

花ノ木C遺跡は、昭和 63 年～平成 3 年の富山市教育委員会が実施した分布調査で確認し、平成 5 年に「花ノ木C遺跡」（市№201291）として『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載し、それ以後埋蔵文化財包蔵地となった。

これまでの試掘調査・発掘調査の成果は次のとおりである。平成 15 年、農道整備工事に伴う工事立会調査で、奈良時代後半の溝から人形や斎串が出土し、律令祭祀が行われていたことが明らかとなった〔富山市教委 2004、堀沢 2008〕。

平成 20 ～ 24 年にかけて、本遺跡内で公共下水道工事が計画され、工事による掘削幅が狭隘であることから工事立会調査を実施することとした。工事立会で遺構等が確認された場合は、記録保存のための調査を行うこととした。

平成20年6月～平成21年5月の調査では、遺構は所在しなかった。平成24年5月～7月の調査は、平成15年度の調査地と同一道路で行い、縄文時代～中世の遺構を確認した。

調査年度	調査地	主たる調査担当者	調査年月日	遺跡の有　無
H20	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成20年6月11日～平成20年6月13日	×
H21	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成21年5月7日～平成21年5月9日	×
H24	東老田	細辻嘉門（埋蔵文化財センター）	平成24年9月24日～平成24年11月12日	○

3. 砂川カタダ遺跡

砂川カタダ遺跡は、昭和63年～平成3年の富山市教育委員会が実施した分布調査で確認し、平成5年に「砂川カタダ遺跡」（市№201284）として『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載し、それ以後埋蔵文化財包蔵地となった。

これまでの試掘調査・発掘調査の成果は次のとおりである。個人住宅建築に伴う発掘調査が3回行った。平成17年度の調査では、平安時代の溝を確認した〔富山市教委 2006〕。平成18・22年度の調査では、弥生時代後期～終末期、平安時代、中世の3時期の遺構を確認し、当該期の集落が存在することが分かった〔富山市教委 2011〕。

平成20～23年にかけて、本遺跡内で公共下水道工事が計画され、工事による掘削幅が狭隘であることから工事立会調査を実施することとした。工事立会で遺構等が確認された場合は、記録保存のための調査を行うこととした。

平成20年1月の調査は、平成18・22年度調査区の東側に隣接する道路で行い、弥生時代～中世の遺構を確認した。平成20年6月～平成23年9月の間、4回の調査を行い、遺構は所在しなかった。

調査年度	調査地	主たる調査担当者	調査年月日	遺跡の有　無
H19	東老田	古川知明（埋蔵文化財センター）	平成20年1月8日～平成20年1月23日	○
H20	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成20年6月23日～平成20年7月18日	×
H22	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成22年12月14日～平成23年1月13日	×
H23	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成23年4月6日～平成23年4月14日	×
	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成23年9月14日～平成23年9月14日	×

4. 東老田Ⅰ遺跡

東老田Ⅰ遺跡は、昭和63年～平成3年の富山市教育委員会が実施した分布調査で確認し、平成5年に「東老田Ⅰ遺跡」（市№201072）として『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載し、それ以後埋蔵文化財包蔵地となった。

これまでの試掘調査・発掘調査の成果は次のとおりである。平成17年、店舗建設工事に伴う発掘調査では、古墳時代中期の粘土採掘坑が多数見つかり、当該期の生産関連遺跡と推察した〔富山市教委 2006〕。

平成19～24年にかけて、本遺跡内で公共下水道工事が計画され、工事による掘削幅が狭隘であることから工事立会調査を実施することとした。工事立会で遺構等が確認された場合は、記録保存のための調査を行うこととした。

平成19年12月～平成22年3月の間、6回の調査を行い、遺構は所在しなかった。平成24年5月～7月の調査では、弥生時代～中世の遺構を確認した。

調査年度	調査地	主たる調査担当者	調査年月日	遺跡の有無
H19	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成19年12月11日～平成20年2月26日	×
H20	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成20年5月26日～平成20年9月5日	×
H21	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成21年5月7日～平成21年5月15日	×
	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成21年5月7日～平成21年5月15日	×
	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成21年11月9日～平成21年11月9日	×
	東老田	堀内大介（埋蔵文化財センター）	平成21年12月8日～平成22年3月1日	×
H24	東老田	細辻嘉門（埋蔵文化財センター）	平成24年5月7日～平成24年6月25日	○

ii）遺跡の位置と環境

1．地理的環境

砂川カタダ遺跡、東老田Ⅰ遺跡、花ノ木C遺跡は、富山市街地から西約7kmに位置し、富山市東老田地内に所在する。西二俣遺跡は、富山市街地から西北西約8kmに位置し、富山市西二俣地内に所在する。

遺跡の所在する東老田・西二俣地内は、射水平野の低地帯に立地し、標高2～4mを測る。射水平野は、縄文海進の際に旧放生津潟は海抜5mまで海中に水没し、その後の海退の結果、放生津潟周辺に現れた湿原の植物が枯れて泥炭となり、それが堆積したことで形成されたと言われている。

2．歴史的環境

東老田・西二俣が所在する射水平野・呉羽丘陵西麓周辺には、旧石器時代から中世に至るまで各時代の遺跡が存在する。

旧石器時代は、境野新遺跡で東山系石刃技法と瀬戸内系横長剥片剥離技法の両方の技法のナイフ型石器が出土した〔富山市教委1973・西井1987〕。杉谷H遺跡、杉谷遺跡でナイフ型石器が出土した〔富山市教委1975・1976〕。向野池遺跡では、ナイフ形石器や掻器が出土した〔富山市教委2002〕。

縄文時代では、前期から晩期まで継続して集落が営まれた古沢遺跡がある〔富山市教委1973・1985〕。中期には、馬蹄形集落である杉谷遺跡〔富山市教委1976〕や竪穴建物1棟を確認した上堤池遺跡〔富山市教委1973〕などがある。

弥生時代終末期から古墳時代前期には、呉羽丘陵南部に墓や古墳が集中的に築造された。杉谷A遺跡では、弥生時代終末期の方形周溝墓16基、円形周溝墓1基を確認した〔富山市教委1975〕。杉谷古墳群では、山陰地方との関係性の強い四隅突出型墳丘墓である杉谷4号墳、前方後方墳である杉谷1番塚古墳のほか円墳や方墳が築造された〔富山市教委1974〕。杉谷古墳群の北東には、呉羽山古墳群がある〔富山市教委1984〕。

古墳時代中期には、境野新遺跡〔富山市教委1974〕・古沢A遺跡〔富山市教委1983〕で集落が営まれ、呉羽丘陵には前方後円墳である古沢塚山古墳が築造された〔富山市教委1976〕。

古墳時代後期には、群集墳である金草陣ノ穴横穴墓群が造られた〔富山市教委1976〕。

飛鳥白鳳～平安時代には、呉羽丘陵から射水丘陵にかけて須恵器窯、瓦窯、土師器焼成遺構、

炭窯、製鉄炉などが築かれ一大手工業生産地帯が広がる。須恵器窯は、飛鳥白鳳時代に操業された県史跡金草第一古窯跡〔富山市教委 1970〕、奈良時代に操業された古沢・西金屋窯跡群〔富山市教委 1988・2000〕などが知られている。土師器焼成遺構は、向野池遺跡〔富山市教委 2002・2006〕、西金屋遺跡〔富山市教委 2012〕などで確認した。栃谷南遺跡では、奈良時代の瓦陶兼業窯・灰原・掘立柱建物・粘土採掘坑・井戸跡などが検出され、粘土採掘から土器・瓦の焼成までの一連の作業を行う生産工房があったことが分かった〔富山市教委 1999〕。向野池遺跡では、平安時代の土師器焼成遺構や大型掘立柱建物を含む 15 棟以上の掘立柱建物、製炭土坑などを検出し、日常容器とともに仏具（瓦塔）も製作されていたことが分かった。群が経営する雑器所として婦負郡域の手工業生産の中核を成していたと推測した〔富山市教委 2002・2006〕。呉羽山を越える直線道路遺構として、呉羽山古道の存在が確認された〔西井・小林 2005〕。

中世では、願海寺城跡がある。上杉謙信方武将寺崎民部左衛門の拠った城として、『上杉家文書』や『越登賀三州志』などに伝わる城である。発掘調査では、二重以上の水堀などを確認し、願海寺城跡の可能性が高いとした〔富山市教委 2003〕。周辺では区画溝を持つ屋敷跡などがあり、願海寺城下町の一部と推測した〔富山市教委 2005〕。

iii）調査の概要・写真図版

1．西二俣遺跡

（1）基本層序

基本層序は、砕石・盛土直下に黒褐色土（遺物包含層）・白灰色砂土／粘土が約 10 ～ 20 ㎝堆積するが、調査区の東西で堆積土の種類及び厚さが異なる。その下に暗褐色／褐色砂が薄く堆積し、その下に青灰色粘土（東側）／茶褐色粘土（中央～西側）である地山が拡がる。

（2）遺構と遺物

遺構は溝 19 条、土坑 15 基、ピット 43 基を検出した。

A．遺構

a．溝・自然流路

SD02：検出長 0.70m、幅 1.24mを測る。南北方向に延びる溝で調査区外に拡がる。

SD04：検出長 0.70m、幅 1.10mを測る。南北方向に延びる溝で調査区外に拡がる。遺物は須恵器（4）、珠洲（6）が出土した。

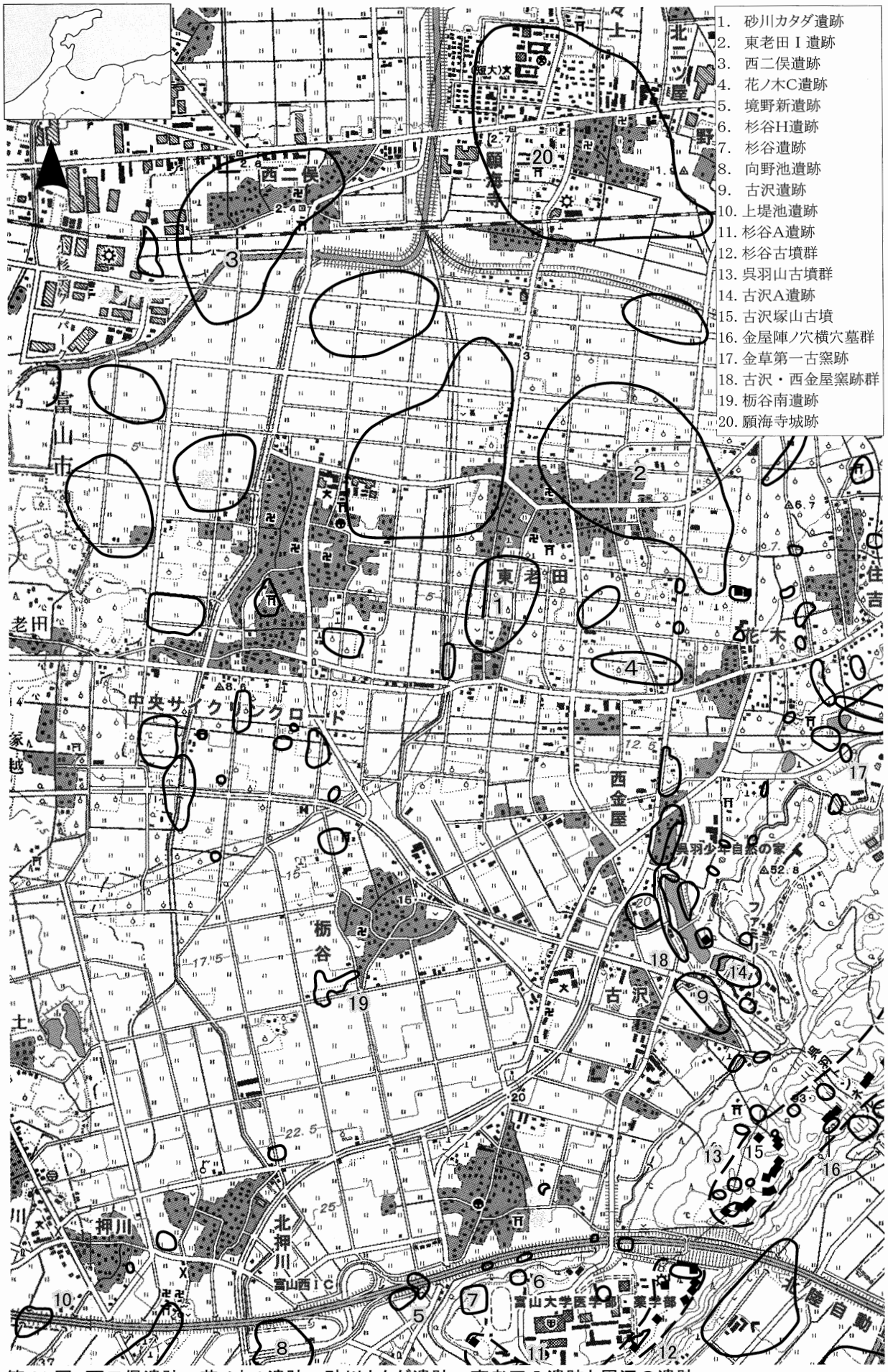
SD05：検出長 0.70m、幅 1.39m、深さ 0.26mを測る。南北方向に延びる溝で調査区外に拡がる。

SD06：検出長 0.70m、幅 1.40mを測る。南北方向に延びる溝で調査区外に拡がる。自然流路である。

SD07：検出長 0.70m、検出幅 6.11mを測る。南北方向に延びる溝で調査区外に拡がる。自然流路である。

b．井戸

SE01：平面形は楕円形で、長径 0.80m、短径 0.70mを測る。遺物は中世土師器（5）・曲物（10）・板材（11）・柱（12・13）が出土した。



第 61 図　西二俣遺跡・花ノ木C遺跡・砂川カタダ遺跡・東老田Ⅰ遺跡と周辺の遺跡

1：20,000　0　100m

第 10 表　西二俣遺跡　遺構一覧

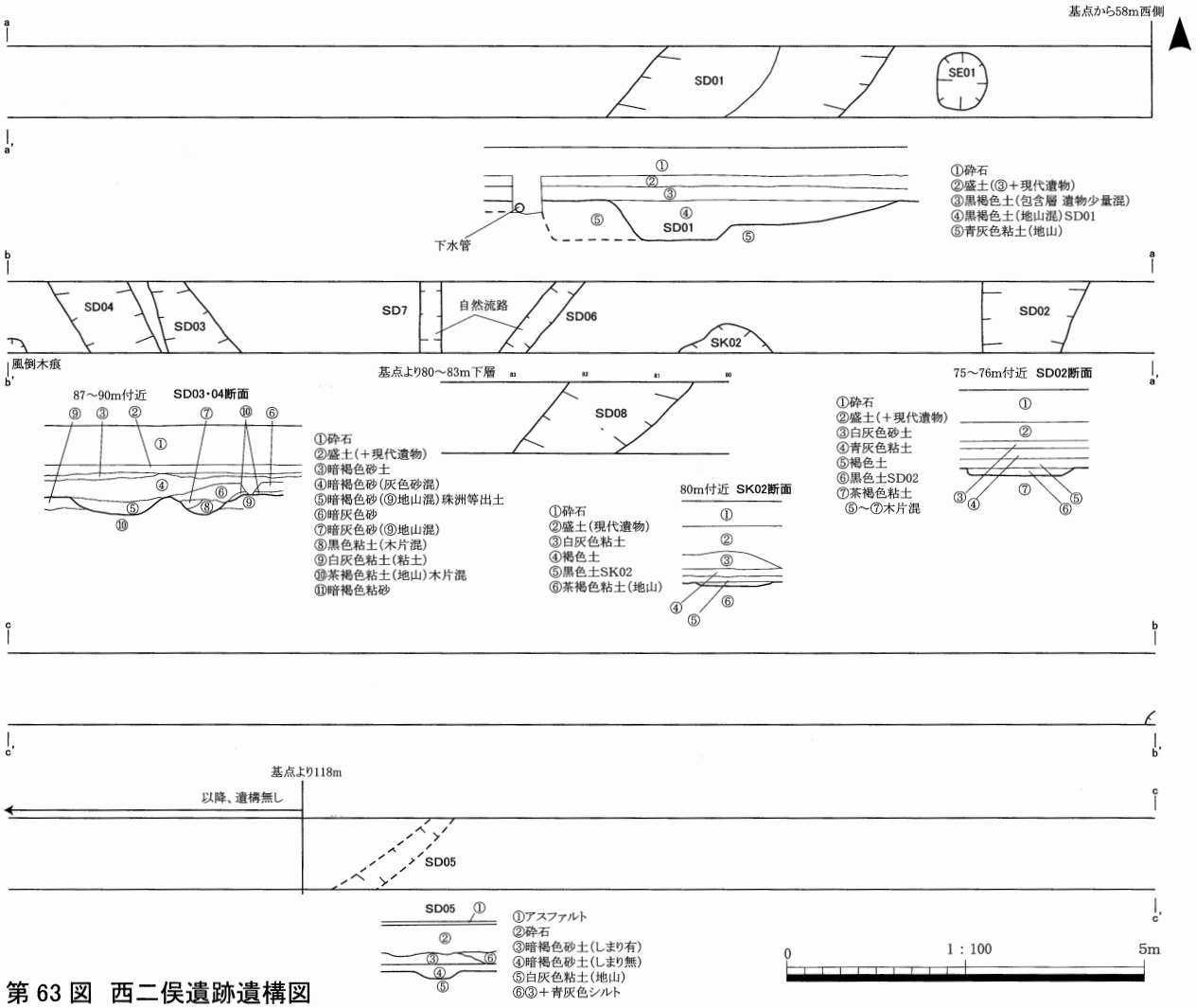
遺構No.	平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備　考
SD01	北東－南西	(1.00)	3.24	0.56		埋土は地山の混じる黒褐色土
SD 02	南北	(1.00)	1.50			
SD 03	北西－南東	(1.00)	1.00	0.38		埋土上層は暗灰色砂、下層は黒色粘土
SD 04	北西－南東	(1.00)	1.10	0.18	須恵器(4)、珠洲(6)	埋土は地山の混じる暗褐色砂、珠洲等出土、中世
SD 05	北東－南西	(1.00)	(0.33)	0.10		埋土はしまりのない暗褐色砂土
SD 06	南北	(1.00)	0.50	0.10		埋土は木片の混じる黒色土　自然流路
SD 07	南北	(1.00)	0.40			自然流路
SD 08	北東－南西	(1.00)	1.70			基点から 80m付近、下層遺構
SE 01	楕円形	0.80	0.70		中世土師器(5)、曲物側板(10)、板材(11)、柱(12・13)、炭化材	板材(11)：AMS西暦1410－1445年
SK 02	(不整形)	1.32	(0.40)			埋土は黒色土
風倒木	(不整形)	0.40	(0.20)			

B. 遺物

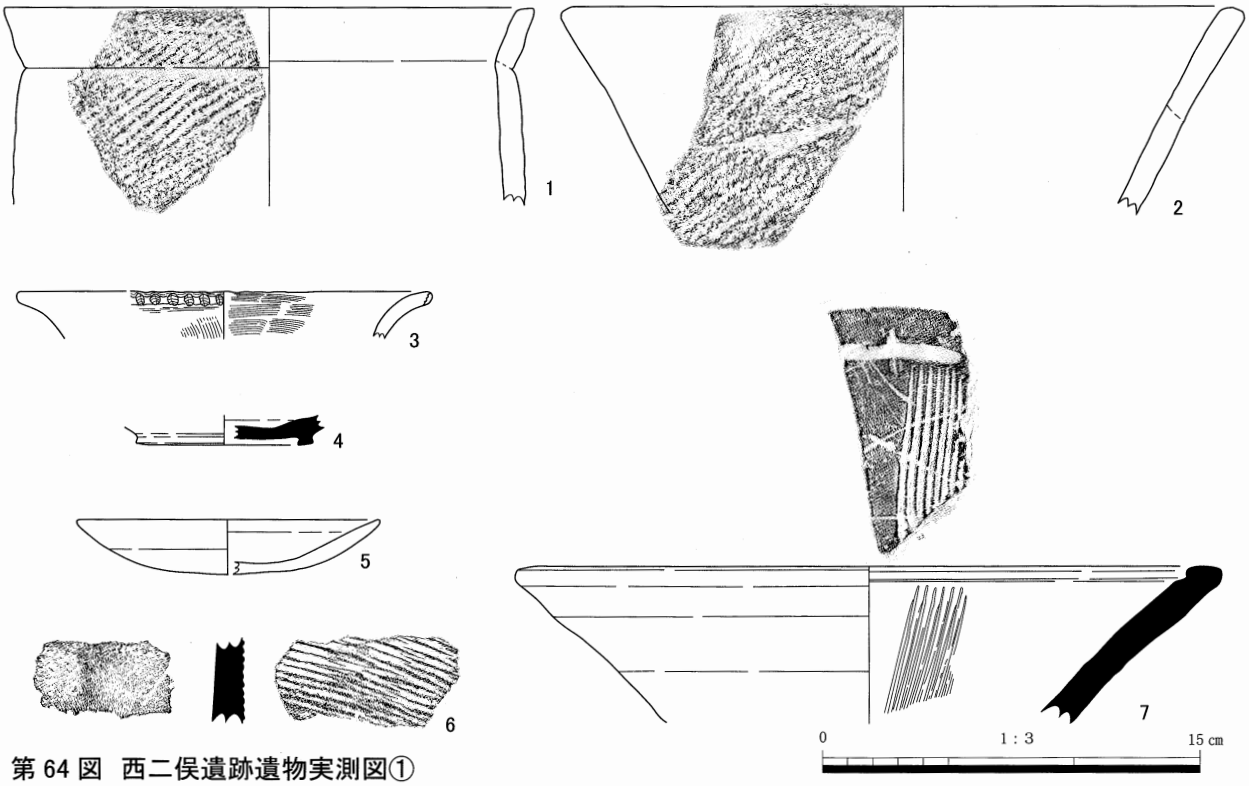
1・2 は縄文土器である。いずれも粗製の深鉢で、1 は口縁部に無文帯をもつ。中期中葉～後期に属する。

3 は弥生土器の甕口縁部である。口唇部にキザミを施す。4は須恵器の坏Bである。5 は中世土師器の皿である。口径 12 ㎝、器高 2.2 ㎝を測る。底部は丸底で体部が口縁端部に向かって緩やかに立ち上がり、端部をそのまま薄く仕上げる。越前器種分類NCⅢ類で 13 ～ 14 世紀に比定できる。6・7 は珠洲である。6 は甕の体部片、7 は擂鉢である。吉岡編年Ⅴ期で 15 世紀に比定できる。8 は越中瀬戸の皿である。鉄釉を蛇の目に施し、見込みには重ね焼きの痕を残す。釉止めの段がない。宮田編年のⅡ期。9 は伊万里の染付皿である。1640 ～ 50 年に盛行する。10 ～ 13 は、SE01 から出土した木製品である。10 はごく薄い板材で、曲物の側板と考えられる。11 は板材で、6 か所に穿孔されている。放射性炭素年代測定の結果、西暦 1410 - 1445 年であった。12・13 は角柱根である。

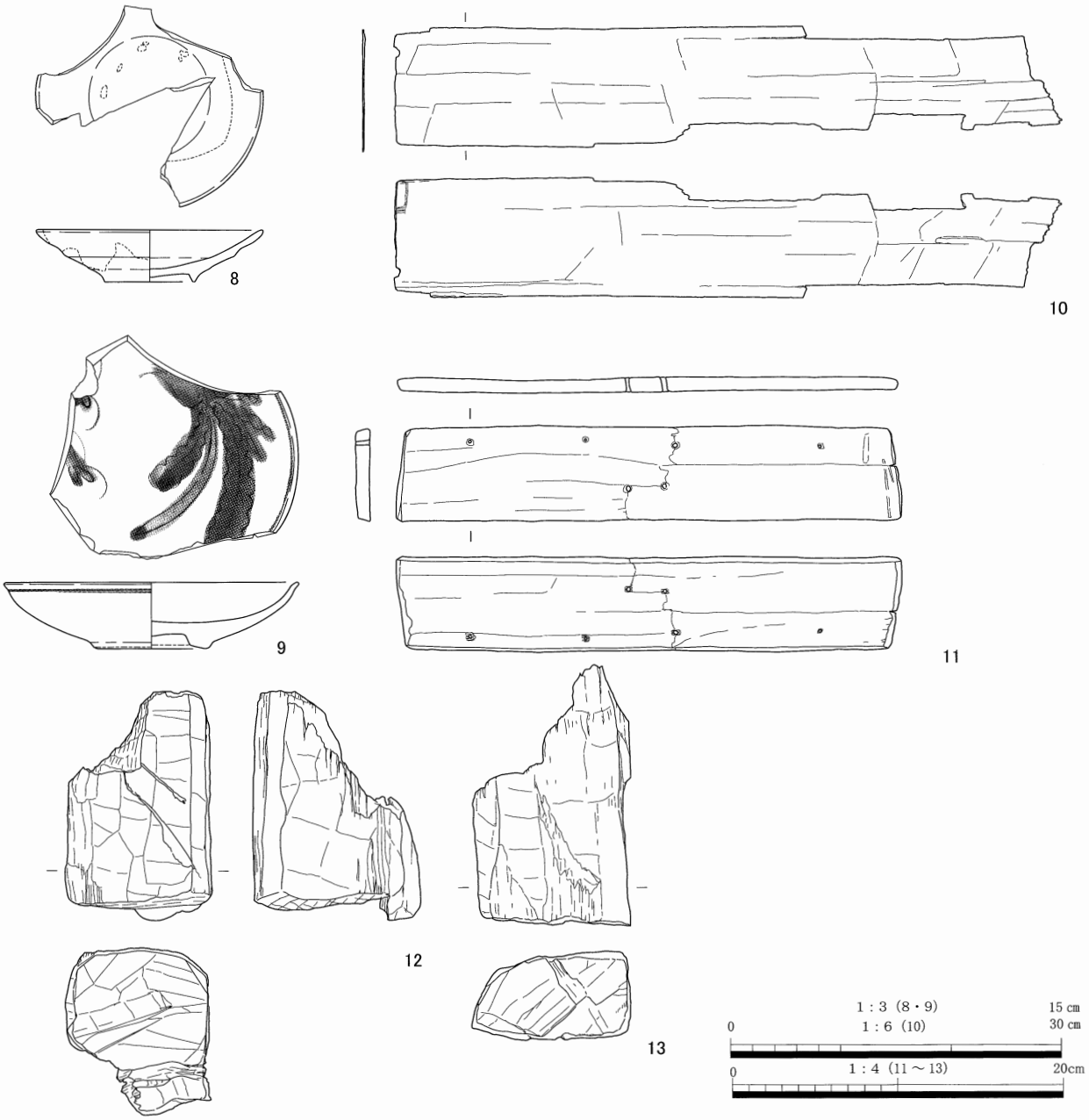
第 62 図　西二俣遺跡調査区位置図



第 63 図　西二俣遺跡遺構図



第 64 図　西二俣遺跡遺物実測図①



第 65 図　西二俣遺跡遺物実測図②

第 11 表　西二俣遺跡遺物観察表

遺物No.	出土地点 遺構／層位	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調			成形・調整 外面	内面	備考
1	黒色土・2層目	縄文土器	深鉢	21.00	—	—				LR縄文	ミガキ	外面には炭化物が厚く付着
2	黒色土・2層目	縄文土器	深鉢	26.00	—	—				LR縄文	粗いミガキ	
3		弥生土器	甕	16.20	—	—				ハケメ	ハケメ	口唇部キザミ、内外に薄く煤付着
4	SD04	須恵器	坏B	—	7.0※	—	N6/0～5/0	灰色		ロクロナデ		
5	SE01（試掘T）	中世土師器	皿	12.00	—	2.20	10YR6/2	灰黄褐色		ヨコナデ	ヨコナデ	
6	SD04	珠洲焼	甕	—	—	—	7.5Y4/1	灰色		平行タタキ	当具痕	
7	盛土層	珠洲焼	擂鉢	—	—	—	2.5Y6/2	灰黄色		ロクロナデ	ロクロナデ	
8	包含層	越中瀬戸	皿	10.20	4.10	2.35	10YR8/3～8/4	浅黄橙色	※鉄釉	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	鉄釉内禿、重ね焼き痕に釉付着あり
9		伊万里（磁）	皿	13.10	4.8※	3.00	5Y7/1	灰白色		ロクロナデ		染付、透明釉
10	SE01	木製品	曲物側板	長(8.1)	幅(45.2)	厚0.2						未製品か
11	SE01	木製品	板材	長30.5	幅5.8	厚0.95						3点接合。全体に煤けている。
12	SE01	木製品	柱	長13.8	幅8.9	厚10.1						
13	SE01	木製品	柱	長15.7	幅9.6	厚5.3						

ⅳ）自然科学分析

株式会社古環境研究所

1．西二俣遺跡出土木製品の樹種同定

（1）はじめに

本報告では、西二俣遺跡より出土した木製品に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

（2）試料

試料は、西二俣遺跡SE01・SD04より出土した柱、曲物側板などの木製品4点である。試料の詳細を結果とともに表1に記す。

（3）方法

試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（4）結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

遺物No.	種類	遺構	結果（学名／和名）	
12	柱	SE01	Alnus sect.Gymnothyrsus	ハンノキ属ハンノキ節
13	柱	SE01	Alnus sect.Gymnothyrsus	ハンノキ属ハンノキ節
10	曲物 側板	SE01・SD04	Chamaecyparis pisifera Endl.	サワラ
11	板材	SE01	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ

表1　樹種同定結果

ヒノキ Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ科　写真1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質より、ヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

サワラ Chamaecyparis pisifera Endl. ヒノキ科　写真4

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型からスギ型の傾向を示し、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、サワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直、肌目緻密である。ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

ハンノキ属ハンノキ節 Alnus sect. Gymnothyrsus　カバノキ科　写真3

横断面：小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で単列のものと大型の集合状のものからなる。

以上の形質より、ハンノキ属ハンノキ節に同定される。ハンノキ属ハンノキ節は落葉の低木から高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

(5) 考察

同定の結果、願海寺城跡の木製品は、ハンノキ属ハンノキ節2点、ヒノキ1点、サワラ1点であった。

ハンノキ属ハンノキ節は柱に使用されている。ハンノキ属ハンノキ節には多くの種があるが、ハンノキ、ケヤマハンノキなど高木となる樹種が多く、木材は概ね強さ中庸の材である。ヒノキは炭化板材に使用されている。ヒノキは木理通直で肌目緻密、大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。サワラは曲物側板に使用されており、ヒノキには劣るが木理通直、肌目緻密であり、水質によく耐える材である。ヒノキ、サワラは温帯に広く分布する針葉樹、ハンノキ属ハンノキ節は温帯に広く分布する広葉樹である。当時、流通によってもたらされたとみなされよう。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242.

2. 西二俣遺跡出土木製品の放射性炭素年代測定

(1) はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（14C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した測定法である。過去の大気中の 14C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により 14C年代から暦年代に較正する必要がある。ここでは、西二俣遺跡で出土した木製品を対象として放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代に関する資料を得る。

(2) 試料と方法

測定試料は、SE01 より出土した木製品（板材）1点である。試料は超音波洗浄、酸－アルカリ－酸洗浄（AAA 処理）で調製後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。試料の詳細、調製データを表1に示す。

遺物No.	対象物	前処理・調整	測定法
11	木材(ヒノキ)	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS

表1 測定試料及び処理 ※ AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

(3) 測定結果

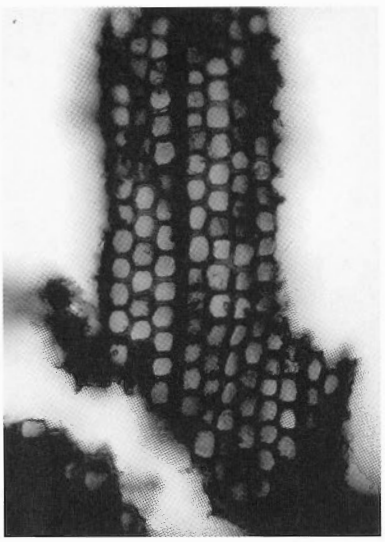
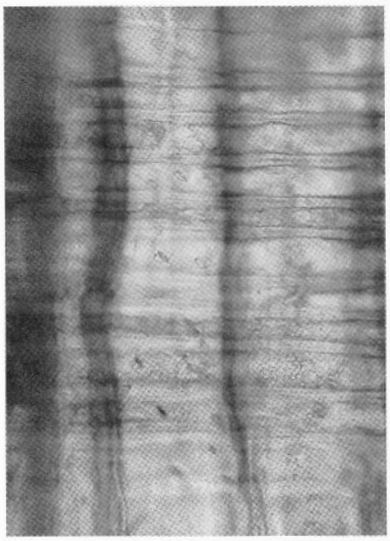
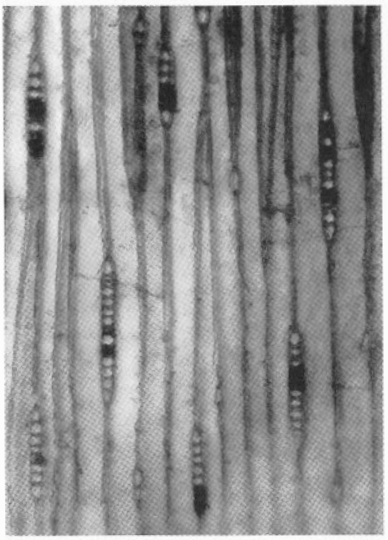
表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した年代値、誤差を丸めて表示した 14C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

遺物No.	測定No. PED	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (年 BP	^{14}C年代 (年 BP	暦年代(西暦)	
					1σ (68.2%確率)	2σ (95.4%確率)
11	24891	-23.89±0.20	484±18	485±20	AD1420-1440(68.2%)	AD1410-1445(95.4%)

表2 測定結果 BP:Before Physics(Present), AD:紀元

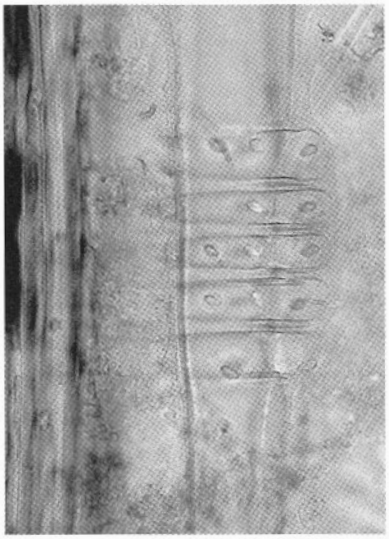
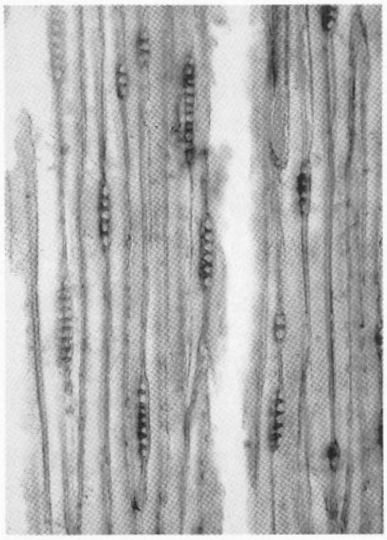
(4) 所見

SE01 で出土した板材（ヒノキ）1点について、加速器質量分析法（AMS 法）により放射性炭素年代測定を行った。その結果、485±20 年 BP（2σ の暦年代で AD1410 ～ 1445 年）の年代値が得られた。

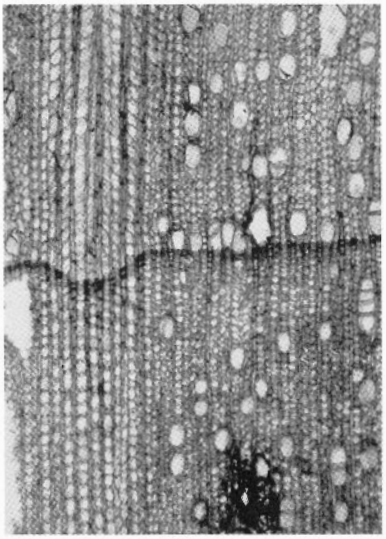
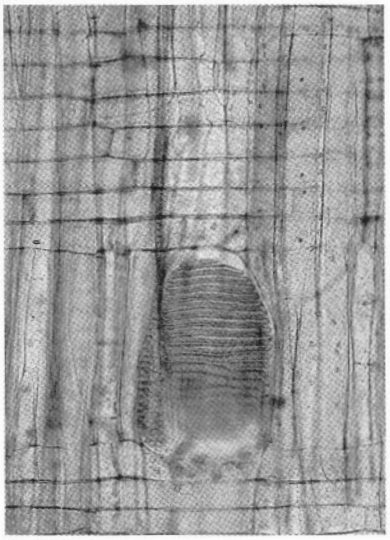
横断面 ―――― ： 0.2mm　放射断面 ―――― ： 0.05mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

写真１．試料④　桶　側板　ヒノキ

横断面 ―――― ： 0.5mm　放射断面 ―――― ： 0.05mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

写真２．試料③　板材　サワラ

横断面 ―――― ： 0.5mm　放射断面 ―――― ： 0.1mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

写真３．試料①②　柱　ハンノキ属ハンノキ節

参考文献
Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代：3-20, 日本第四紀学会．
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.
Bronk Ramsey C. (1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

2 花ノ木C遺跡

(1) 基本層序

基本層序は、盛土直下に暗褐色土が約20㎝堆積する。その下が地山:灰白色砂質シルト／砂である。調査区の東西で堆積状況に大きな違いはみられない。

(2) 遺構と遺物

今回の調査では遺構は溝4条、土坑1基を検出した。

A. 遺構

a. 溝・自然流路

SD2：検出長 1.16m、幅 1.21mを測る。北西－南東方向に延びる。

SD3:検出長1.16m、検出幅1.37mを測る中世の溝である。SD2と平行して北西－南東方向に延びる。埋土の堆積状況から、時期は2期に分かれる。埋土は黒褐色／暗褐色土を基調とする。下層埋土を切る形で上層埋土が堆積する。

SD4：検出長 1.20m、幅 2.52 ～ 3.46m、深さ 0.61mを測る。南北方向に延びる。

SD5：検出長 1.16m、幅 0。48mを測る。南北方向に延びる。

b. 土坑

SK1：長さ 0.93m、幅 0.72mを測る。

第 12 表 花ノ木C遺跡遺構一覧

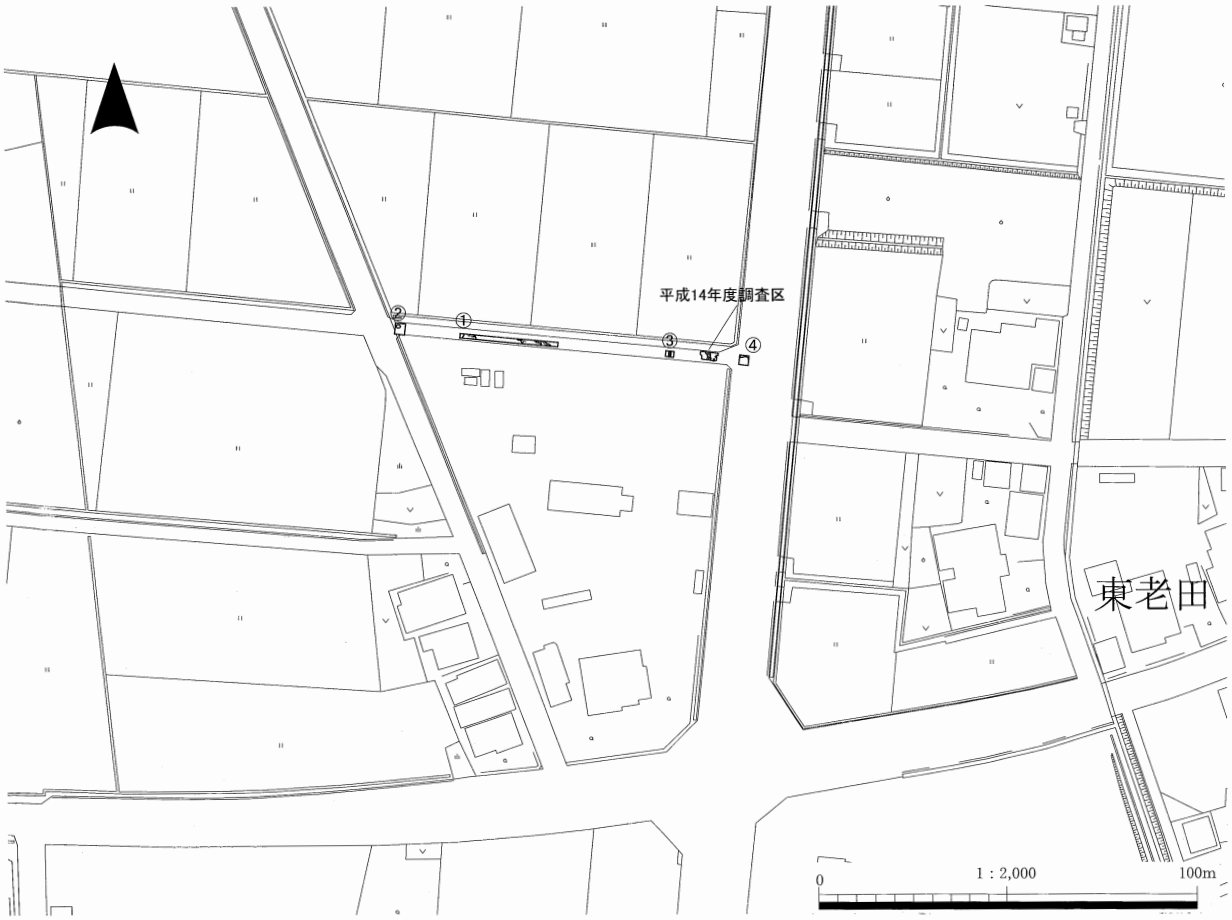
遺構No.	平面形／軸方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備 考
SD2	北西－南東	(1.16)	1.21	－	
SD3	北西－南東	(1.16)	(1.37)	－	
SD4	南北	(1.20)	(2.52～3.46)	0.61	№1マンホールから23～26mの溝、北側は＜攪乱 西肩は工事区間の継ぎ目で分明ならず
SD5	南北	(1.16)	0.48	－	県道側№2マンホールから19.3mの溝
SD6	不整形		(0.49)	－	
SK1	楕円形	0.93	0.72	－	

B. 遺物

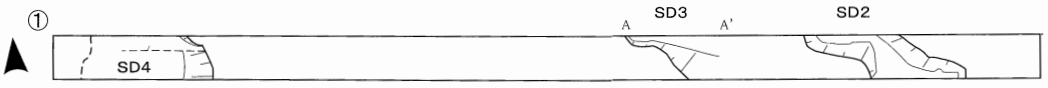
遺物は遺物包含層からのみ出土した。1は古代土師器の甕である。口縁端部に向かって外傾して立ち上がり、面を取る。端部は丸くおさめる。2、3は須恵器である。2は有鈕の坏蓋である。鈕は宝珠型でそり・くびれが明瞭である。3は坏身で、体部が口縁に向かって緩やかに立ち上がる。口縁部は厚くやや内湾気味である。

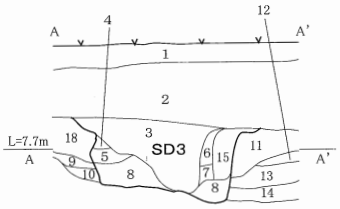
第 13 表 花ノ木C遺跡遺物観察表

遺物No.	層 位	種 別	器 種	法 量(cm)			色 調		成形・調整
				口 径	底 径	器 高			外 面
1	包含層	土師器	甕	18.6	—	—	2.5Y6/3	にぶい黄	ロクロナデ
2	包含層	須恵器	坏蓋	鈕径2.7	—	—	N6/0	灰	ロクロナデ、ナデ
3	包含層	須恵器	坏身	13.0	—	—	5Y7/1	灰白	ロクロナデ

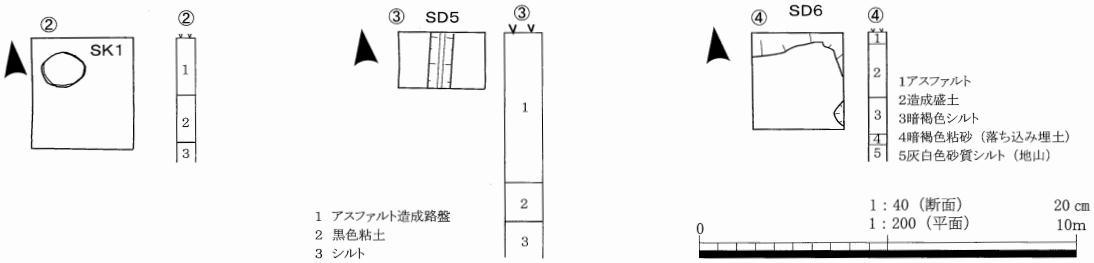


第 66 図　花ノ木C遺跡調査区位置図





A-A' 断面
1. 造成盛土
2. 暗褐色土
3. 黒褐色土＋灰白色ブロック混
4. 黒褐色土
5. 黄褐色シルト
6. 暗褐色砂質土
7. 暗褐色粘砂
8. にぶい褐灰色土＋暗褐色土ブロック状混
9. 褐灰色砂質土
10.褐灰色粘砂
11.灰白色砂
12.灰白色砂(11より粒荒い)
13.灰白色砂＋暗褐色土ラミナ状混
14.灰褐色砂＋暗褐色土粒状混
15.黒褐色土
16.灰褐色砂
17.灰白色シルト(地山)
18.灰白色シルト＋暗褐色土少量混

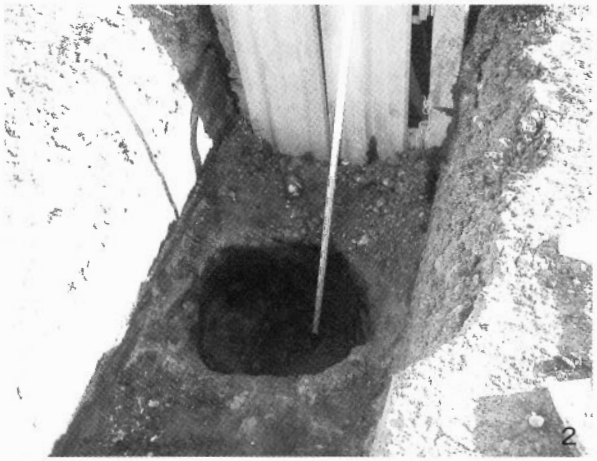


第 67 図　花ノ木C遺跡遺構図・断面図

第 68 図　花ノ木C遺跡遺物実測図

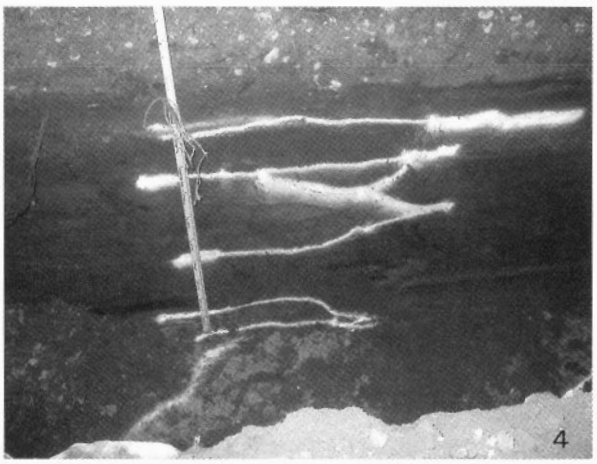
図版39 西二俣遺跡（1～6）・花ノ木C遺跡（7・8）

SD01・SE01（西から）



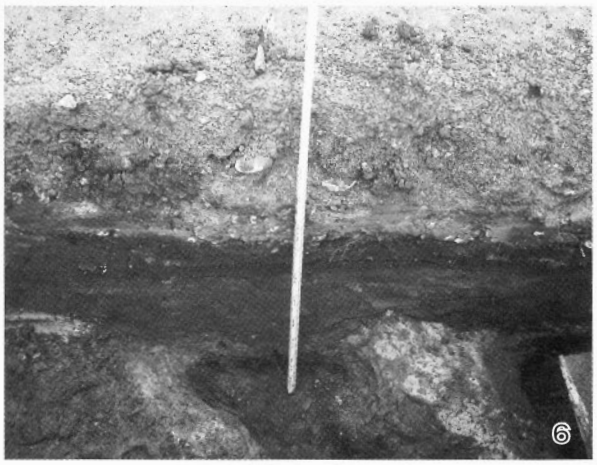
SE01（西から）

SK02、SD06・07（東から）



SD01 断面（南から）

SD03・04 検出（西から）

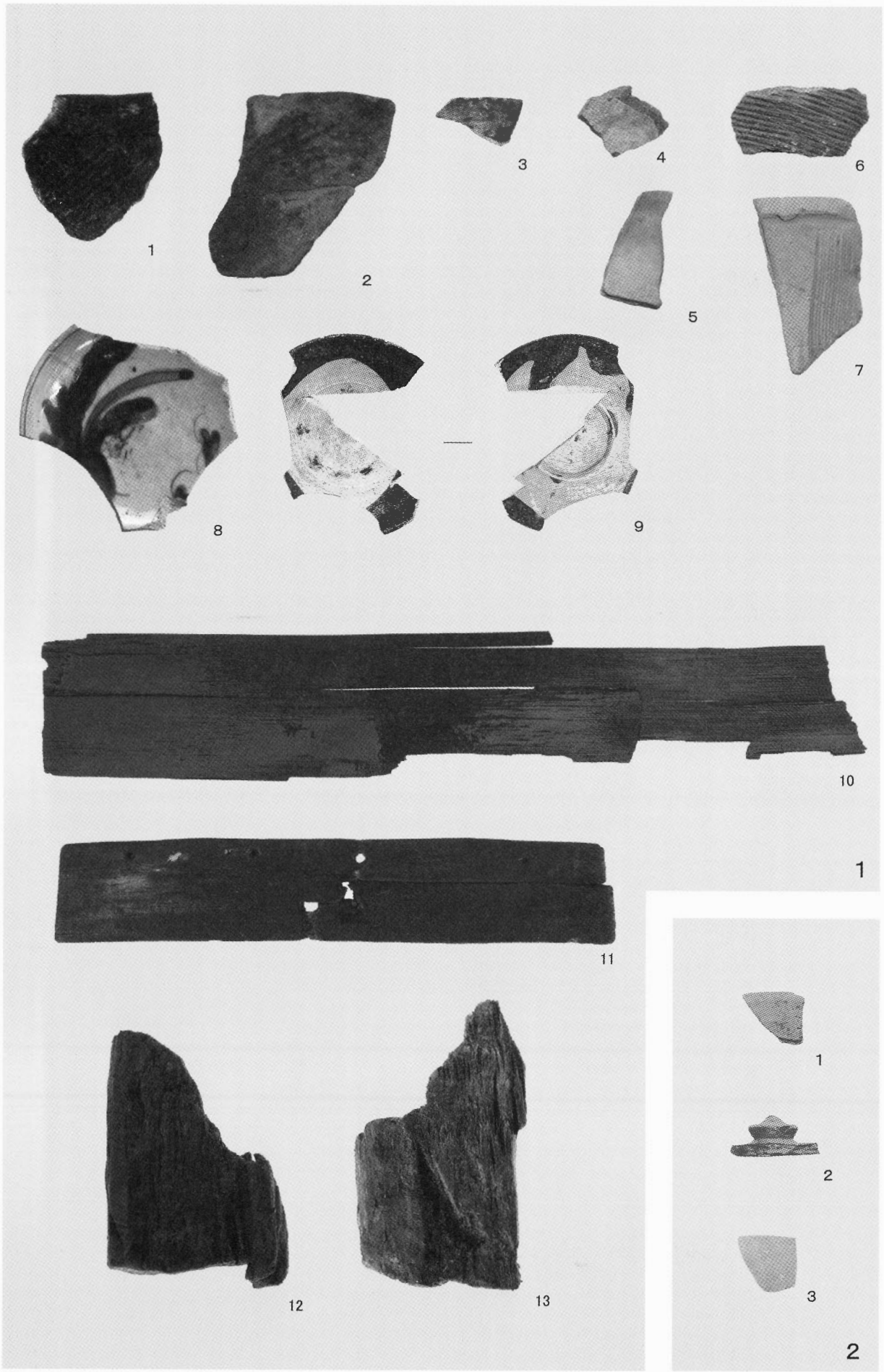


SD03 断面（南から）

SD02・03（西から）

SD02・03 断面（南東から）

図版40 西二俣遺跡（1）・花ノ木C遺跡（2）



3. 砂川カタダ遺跡

（1）基本層序

基本層序は、盛土の下から地山（黄白色粘土）までの間に灰色シルト、黒褐色シルトが堆積する。

（2）遺構と遺物

遺構は溝 19 条、土坑 15 基、ピット 43 基を検出した。

A. 遺構

a. 溝・自然流路

SD02：SD01 と平行して東西方向へ延びる溝である。検出長 1.46m、幅 0.52mを測る。珠洲（21）のほか、須恵器・土師器が出土した。

SD105：東西方向へ延びる溝である。検出幅 1.20m、幅 0.62mを測る。中世土師器（17）が出土した。

SD106：SD106・107 は隣接し、東西方向に平行して延びる溝である。検出長 1.04m、幅 1.02mを測る。珠洲（23）が出土した。

SD107：検出長 1.04m、幅 0.40mを測る。弥生土器（2）が出土した。

SD109：検出長 1.20m、幅 0.52mを測る。珠洲（18）が出土した。

SD110 検出長 1.10m、幅 1.20mを測る。須恵器（19）のほか土師器が出土した。

b. 土坑

SK05：平面形は楕円の可能性が高い土坑で、長さ 1.00m、幅 0.72mを測る。弥生土器(5)が出土した。

SK06：平面形は楕円の可能性が高い土坑で、長さ 0.68m、幅 0.42mを測る。弥生土器（8）・土師器（12・14）のほか内黒土器が出土した。

SK07：長さ 0.68m、検出幅 0.20mを測る。土師器（11）が出土した。

SK09：平面形は楕円の可能性が高い土坑で、長さ 1.02mを測り、調査区外に拡がる。遺物は須恵器（20）が出土した。

SK103：幅 3.82mを測る大型土坑で、P1・2を伴う。

c. ピット

SP02：長さ 0.52m、幅 0.26mを測る。弥生土器（7）が出土した。

P3：径 0.40mを測る。柱痕は黒褐色土を小ブロック状に多く含む。

P4：径 0.36mを測る。埋土に粘土ブロック（小）を多く含み、中央部に黒色土の柱痕がみられる。

P9：平面形は楕円で長径 0.48m、短径 0.30mを測る。埋土に粘土ブロック（小）を多く含み、中央部に黒色土の柱痕がみられる。柱抜き取り痕が残る。

B. 遺物

1 ～ 8 は、弥生土器の甕である。有段口縁（1 ～ 3）、付加状口縁（4）、くの字口縁（5）が確認できる。9 は弥生土器の高杯脚部、10 は蓋と考えられる。いずれも弥生時代後期後葉に属するものである。

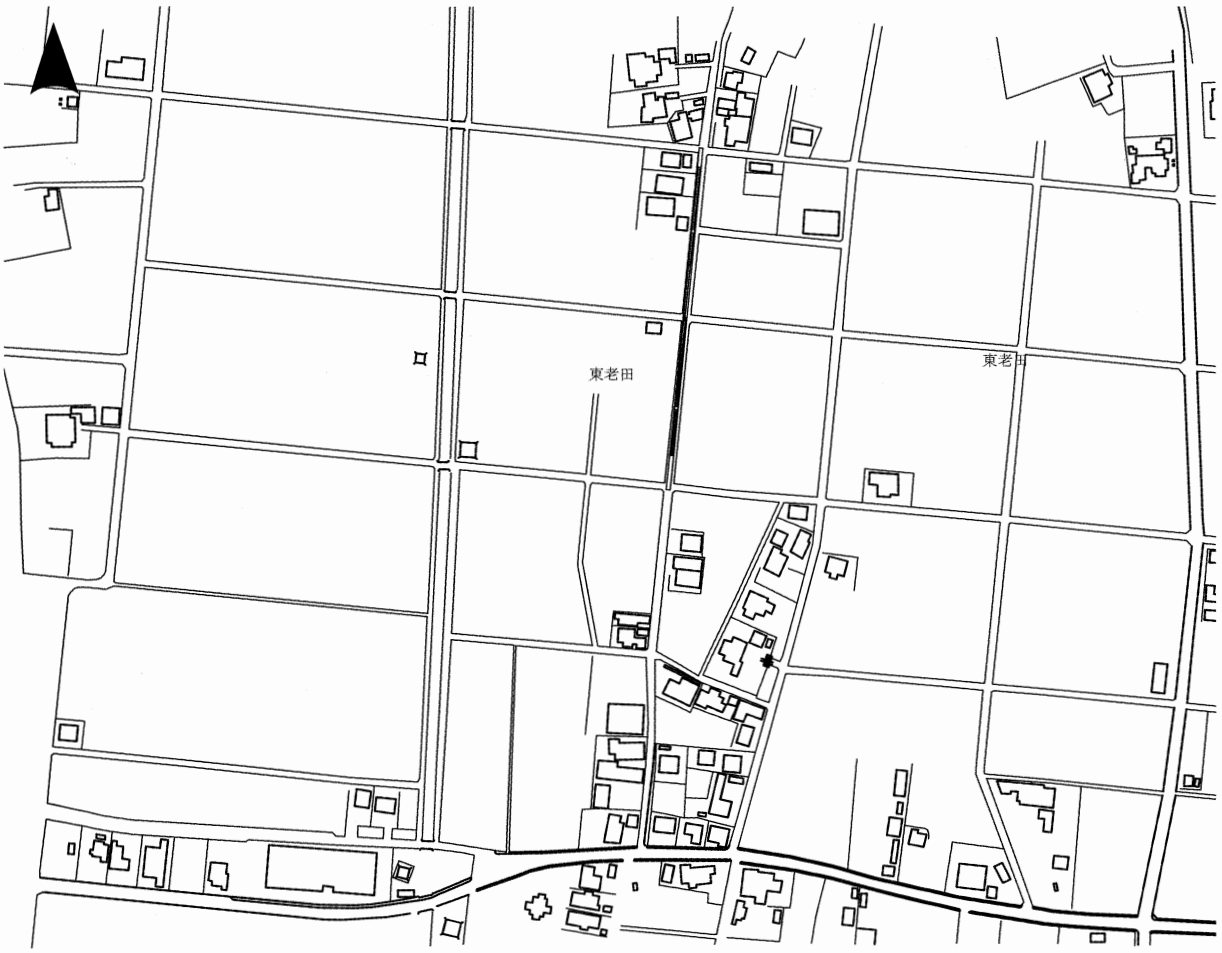
11 ～ 14 は土師器の椀である。12・14 は赤彩を施す。11・12・14 は被熱し、11 には煤が付着している。11・12・14 は9世紀に比定できる。

15 ～ 17 は中世土師器の皿である。いずれも非ロクロ成形で、口縁部にヨコナデを施す。17 の内面は同心円状のハケメが残る。15 は越前分類NDⅡ類で 13 ～14世紀に比定できる。

18 ～ 20 は、須恵器の甕である。18 は口縁部に波状文を施す。20 はカキメが見られることから、肩部または瓶の可能性も考えられる。

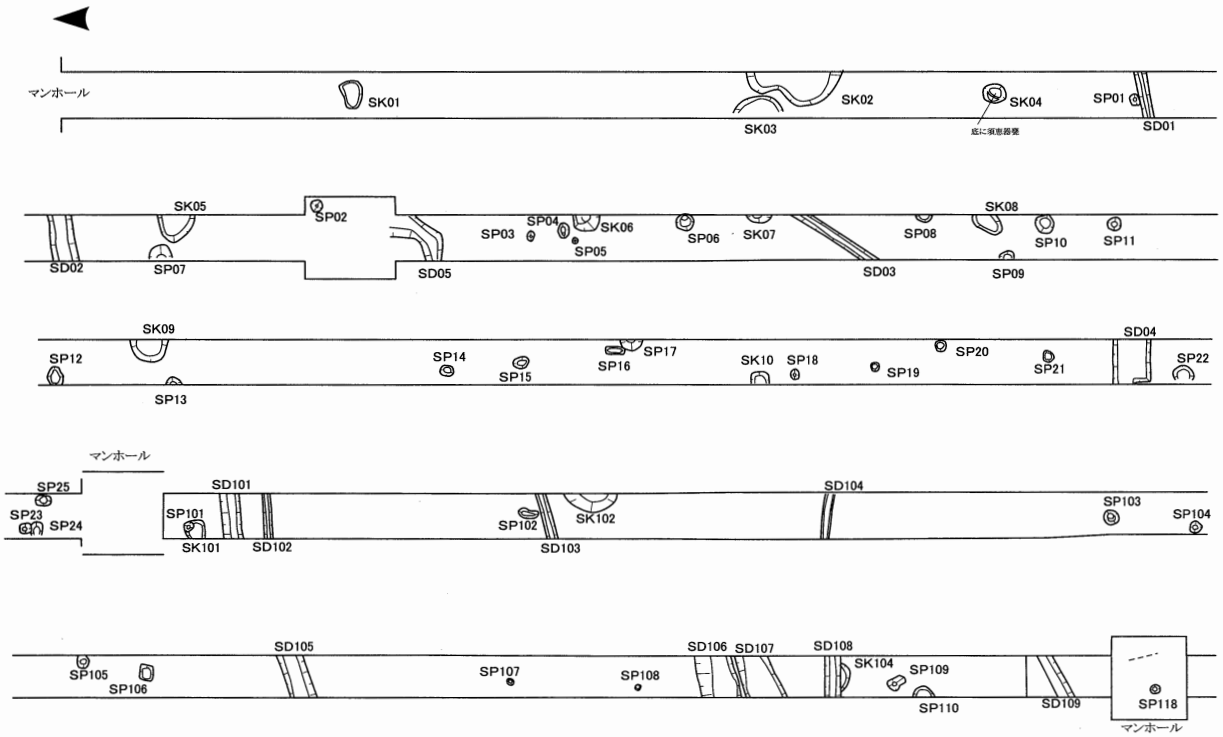
21 ～ 23 は珠洲である。22 は壺と考えられる。23 はタタキが粗く、吉岡編年のⅢ期以降に比定できる。

24 は塼である。細片で、表面は遺存しない。



第 69 図　砂川カタダ遺跡調査区位置図

0　1：4,000　20m

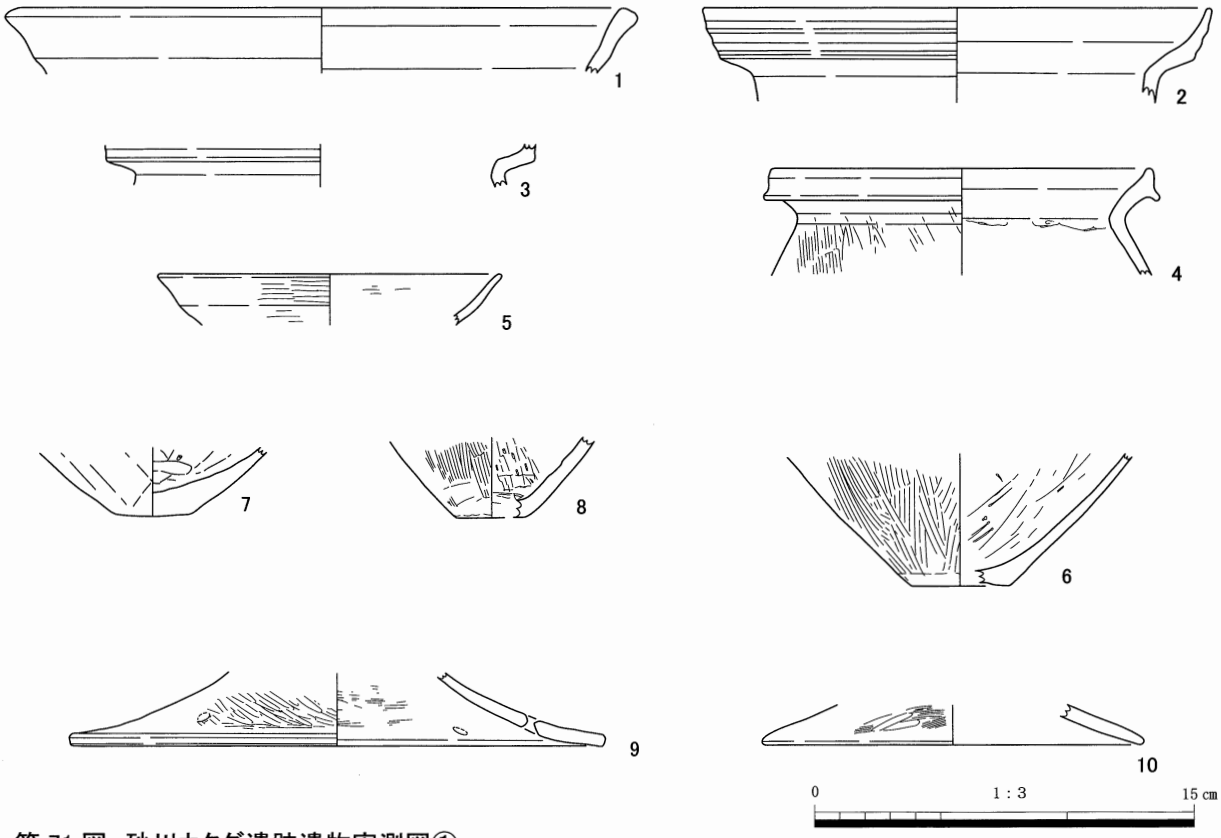


第 70 図　砂川カタダ遺跡遺構図

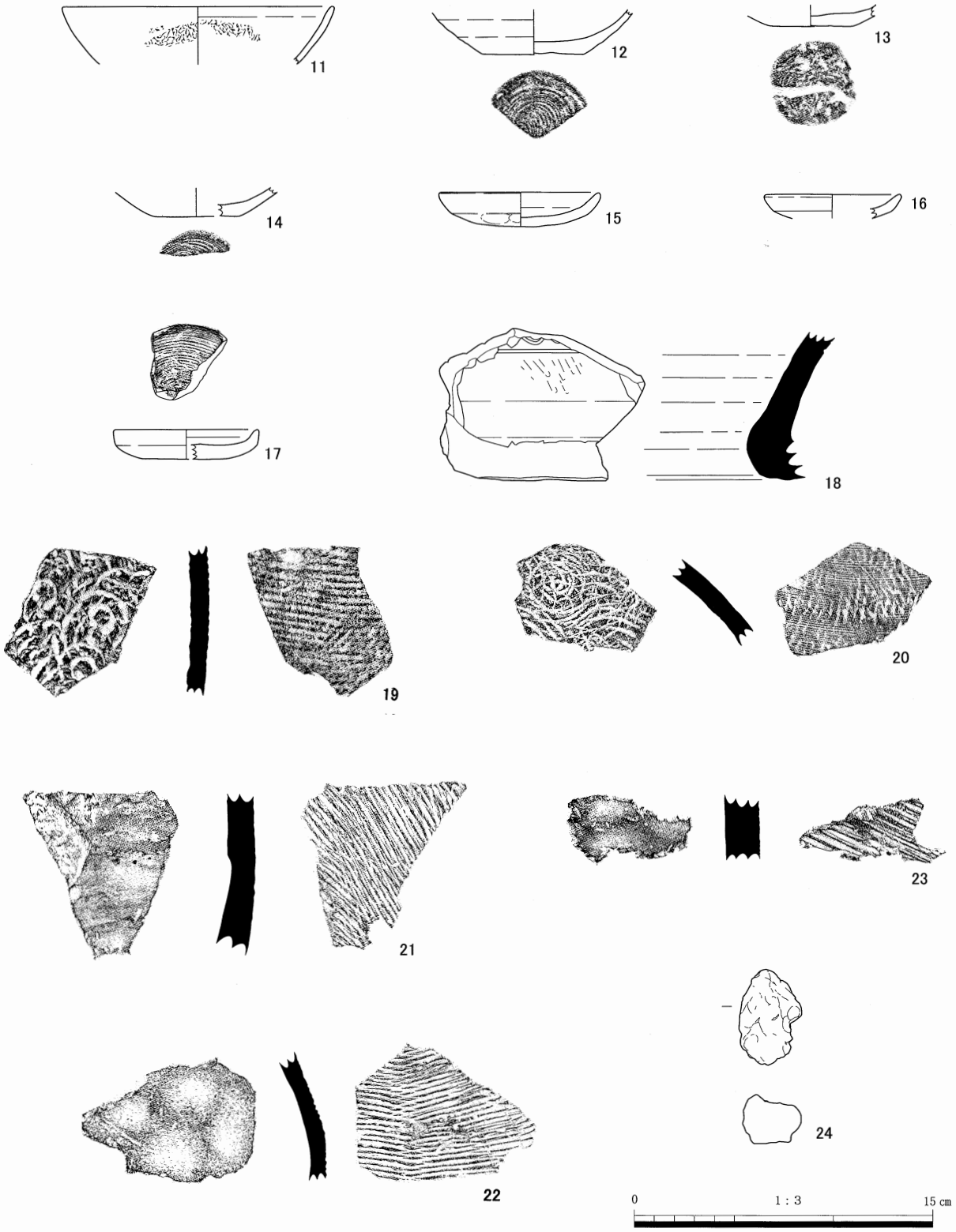
0　1：40　2m

第 14 表　砂川カタダ遺跡遺構一覧

遺構No.		平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	出土遺物	備考	遺構No.		平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	備考
SD	01	東西	(1.24)	0.35			SP	06	円形			
SD	02	東西	(1.24)	0.62	須恵器・古代土師器・珠洲(21)		SP	07	(楕円形)			
SD	03	北東-南西	(1.28)	0.28			SP	08	(楕円形)	0.44	(0.20)	
SD	104	東西	(1.20)	0.26			SP	09	(楕円形)	0.39	(0.18)	
SD	04	東西	(1.20)	1.00			SP	10	円形	0.50	0.48	
SD	101	東西	(1.20)	0.50			SP	11	円形	0.36	0.34	
SD	102	東西	(1.20)	0.22			SP	12	楕円形	(0.48)	0.40	
SD	103	東西	(1.22)	0.28			SP	13	(楕円形)	0.42	(0.20)	
SD	105	東西	(1.20)	0.62	中世土師器(17)		SP	14	円形	0.32	0.29	
SD	106	東西	(1.04)	1.02	古代土師器・珠洲(23)		SP	15	楕円形	0.32	0.43	
SD	107	東西	(1.04)	0.88	弥生土器(2)		SP	16	(楕円形)	0.50	0.20	
SD	108	東西	(1.04)	0.40		SD108＞SK104	SP	17	(楕円形)	0.60	(0.30)	
SD	109	北東-南西	(1.20)	0.52	須恵器(18)	土管埋設のための攪乱に切られる	SP	18	円形	0.30	0.22	
SD	110	東西	(1.10)	1.20	古代土師器・須恵器(19)		SP	19	円形			
SD	111	東西	(1.18)	0.56			SP	20	円形	0.30	0.28	
SD	112	東西	(1.30)	0.34		SP115との新旧不明、遺物なし、黄灰色粘土、暗褐色土(地山)粒状混	SP	21	円形	0.30	0.28	
SD	113	南東-北西	(1.40)	0.65			SP	22	円形	0.54	(0.38)	
SK	01	楕円形	0.72	0.62			SP	23	円形	0.32	0.28	SP23＞SP24
SK	02	不整形	1.60	(0.90)			SP	24	(楕円形)	(0.30)	(0.30)	SP24＜SP23
SK	03	(楕円形)	1.30	(0.40)			SP	25	楕円形	0.40	0.28	
SK	04	円形	0.60	0.50		遺構底に須恵器甕	SP	101	円形	(0.38)	0.30	
SK	05	(楕円形)	1.00	(0.72)	弥生土器(5)		SP	102	不整形	0.52	0.26	
SK	06	(楕円形)	0.68	(0.42)	弥生土器(8)・古代土師器(12・14)・内黒		SP	103	円形	0.40	0.40	柱痕は黒褐色土ブロック(小)多く含む
SK	07	(楕円形)	0.68	(0.20)	古代土師器(11)		SP	104	円形	0.36	0.36	粘土ブロック(小)を多く含む、中央に黒色土の柱痕あり
SK	08	(楕円形)	(0.74)	0.52								
SK	09	(楕円形)	1.02	(0.60)	須恵器(20)	黒褐色土、地山(黄灰色粘土)混、遺物あり	SP	105	円形	0.48	0.46	
SK	10	(楕円形)	0.50	(0.35)			SP	106	円形	0.43	0.40	
SK	101	(楕円形)	0.58	(0.48)			SP	107	円形	0.20	0.16	
SK	102	(楕円形)	1.40	(0.50)			SP	108	円形	0.20	0.20	
SK	104	(楕円形)	0.68	(0.24)		SK104＜SD108	SP	109	不整形	0.48	0.30	柱抜き取り跡あり
SK	103	(方形)	(1.10)	3.82		SK03-SP1・SP2との新旧不明	SP	110	(円形)	0.52	(0.28)	
SK03-SP	1	(楕円形)	0.52	(0.22)		SK103との新旧不明	SP	111	円形	0.32	0.30	
SK03-SP	2	(楕円形)	0.80	(0.70)		SK103との新旧不明	SP	112	円形	0.22	0.22	柱穴状(小)ピット
SP	01	円形	0.30	0.25			SP	113	円形	0.40	(0.28)	
SP	02	円形	0.32	0.30			SP	114	円形	0.22	0.20	
SP	03	楕円形	0.28	0.20			SP	115	円形	0.18	0.18	SD112との新旧不明
SP	04	楕円形	0.40	0.28			SP	116	(楕円形)	0.24	(0.10)	
SP	05	円形	0.16	0.14			SP	117	円形	0.30	0.28	
SP	06	円形					SP	118	円形	0.26	0.24	



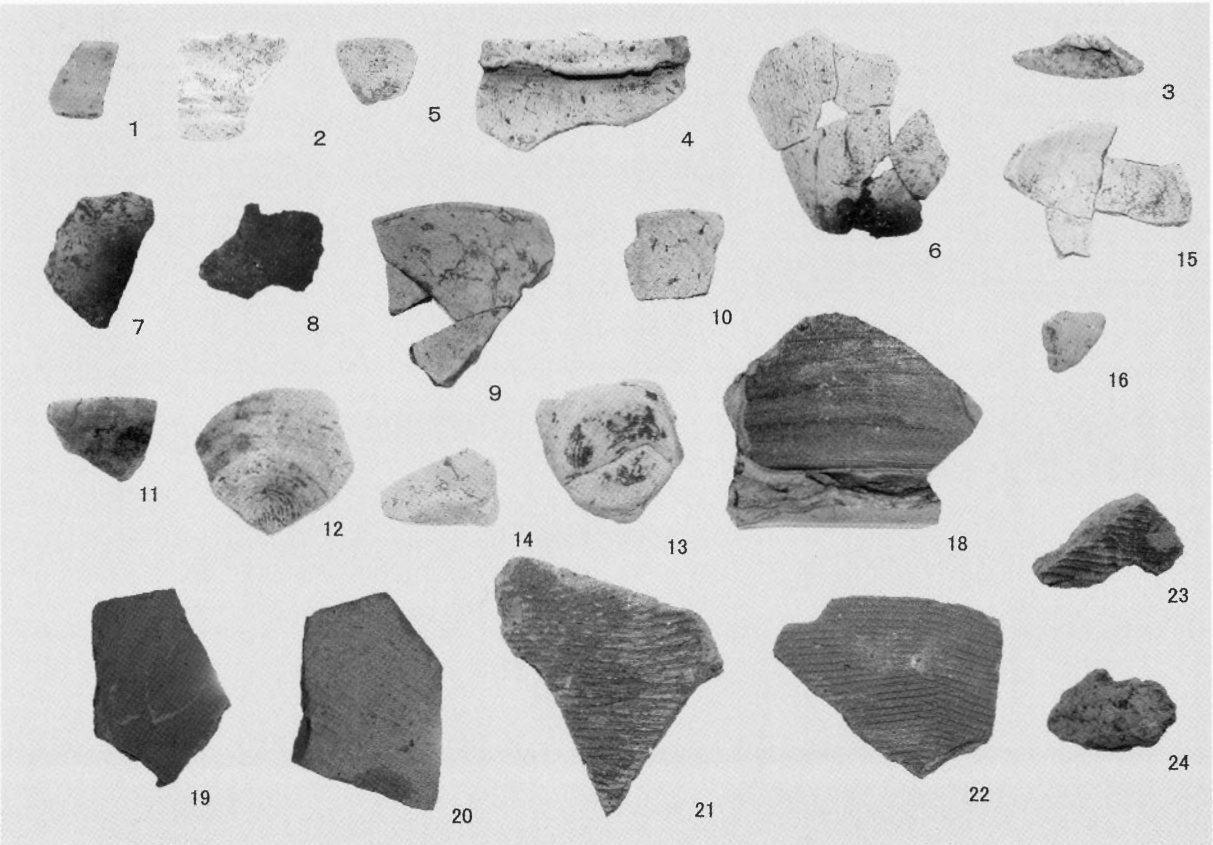
第 71 図　砂川カタダ遺跡遺物実測図①



第 72 図　砂川カタダ遺跡遺物実測図②

第 15 表　砂川カタダ遺跡遺物観察表

遺物No.	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調				成形・調整		備考
	層位／遺構			口径	底径	器高					外面	内面	
1	包含層	弥生土器	甕	—	—	—	10YR7/3	にぶい黄橙色			横ナデ	横ナデ	
2	SD107	弥生土器	甕	(10.70)	—	—	10YR8/3	浅黄橙色			ハケメ	ハケ後横ナデ、胴部オサエ	
3	包含層	弥生土器	甕	—	—	—	10YR8/3	浅黄橙色			ヨコナデ	ヨコナデ	頸径14.6
4	包含層	弥生土器	甕	14.90	—	—	7.5YR 8/3	浅黄橙色			口縁:ヨコナデ、頸部ハケ後横ナデ、体部ハケメ	口縁部横ナデ、胴部ケズリ	全体に摩滅
5	SK05	弥生土器	甕	(17.60)	—	—	10YR8/3	浅黄橙色			ハケ後ナデ	ハケ後横ナデ	
6	包含層	弥生土器	甕	—	3.90	—	10YR8/2	灰白色			胴部ハケメ、底部付近ナデ	ケズリ	
7	SP02	弥生土器	甕	—	2.80	—	10YR7/3	にぶい黄橙色			ケズリ、ナデ、底面にハケメ	ケズリ、ナデ	黒斑あり
8	SK06	弥生土器	甕	—	3.00	—	10YR3/1	黒褐色(外)	7.5YR 7/4	にぶい橙色(内)	ハケメ、ナデ	ケズリ、ナデ	
9		弥生土器	高坏	—	19.00	—	5YR7/4	にぶい橙色	10YR 7/3	にぶい黄橙色	ミガキ	ハケ後ナデ、端部横ナデ	透孔有
10	包含層	弥生土器	蓋	15.00	—	—	10YR 8/3	浅黄橙色			ハケ後ミガキ	横ナデ	
11	SK07	土師器	椀	13.40	—	—	7.5YR 7/3	にぶい橙色			ロクロナデ	ロクロナデ	
12	SK06	土師器	椀	—	5.10	—	7.5YR 8/3	浅黄橙色			ロクロナデ、底面回転糸切り	ロクロナデ、一部ミガキ	赤彩。外面に接合痕残る。
13		土師器	椀	—	4.20	—	10YR8/3	浅黄橙色			ロクロナデ、底面回転糸切り	ロクロナデ	
14	SK06	土師器	椀	—	4.20	—	10YR8/3	浅黄橙色			ロクロナデ、底面回転糸切り	ロクロナデ、ミガキか。	
15		中世土師器	皿	7.80	—	1.75	10YR8/3	浅黄橙色			口縁:ヨコナデ、体部:オサエ	ナデ	非ロクロ
16		中世土師器	皿	6.70	—	—	10YR8/3	浅黄橙色			ヨコナデ	ヨコナデ	
17	SD105	中世土師器	皿	7.20	—	1.35	10YR8/3	浅黄橙色			口縁部回転ナデ、体部オサエ	口縁部回転ナデ、底部ハケ状工具の回転ナデ	
18	SD109	須恵器	甕	—	—	—	5Y6/1	灰色					
19	SD110底面	須恵器	甕	—	—	—	N8/0	灰白色	2.5Y6/1	黄灰色(内)	平行タタキ	同心円当具痕	
20	SK09	須恵器	甕	—	—	—	5Y6/1	灰色			平行タタキ後カキメ	同心円当具痕	
21	SD02	珠洲	甕	—	—	—	N6/0	灰色			平行タタキ	当具痕	
22	黒色土包含層	珠洲	壺	—	—	—	5Y6/1	灰色			平行タタキ	当具痕	
23	SD106	珠洲	甕	—	—	—	N6/1	灰色			平行タタキ	当具痕	
24	包含層(埋土)	土製品	磚	長4.8	厚2.7	幅3.2	10YR7/3	にぶい黄橙色					



図版41　砂川カタダ遺跡

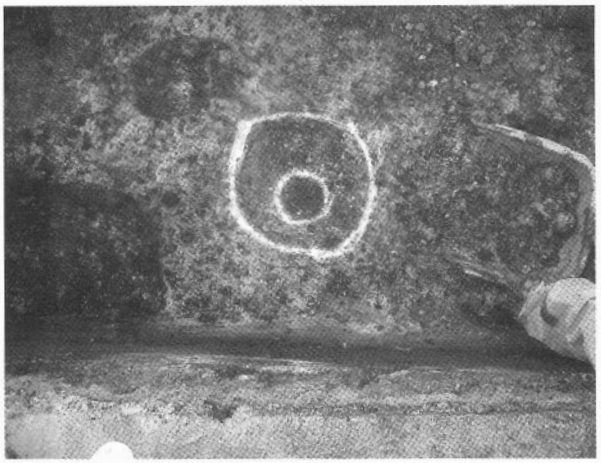
図版42 砂川カタダ遺跡（北側）

SK02・03（北から）

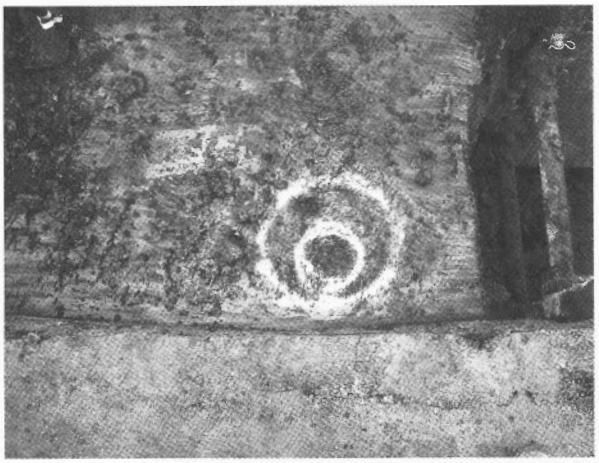
SD01・02・SP01（北から）

SK06・SP群（北から）

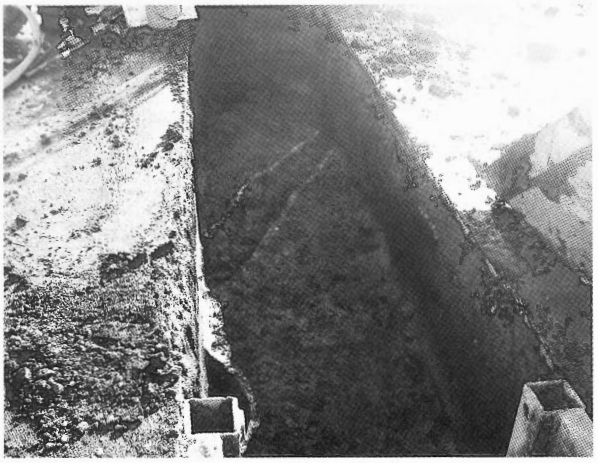
SK06（西から）



SP04（東から）



SP06（東から）



SK07・SP03（北から）

SK10・SP18・SP19（北から）

SP21・SD10（北から）

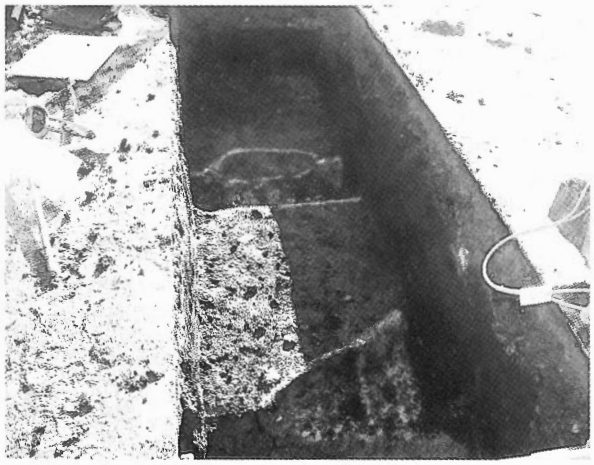
SD10・ピット群（北から）

SK101・SD101・SD102（北から）

SP102・SD103・SK102（北から）

P105・P106（北から）

SD105（東から）

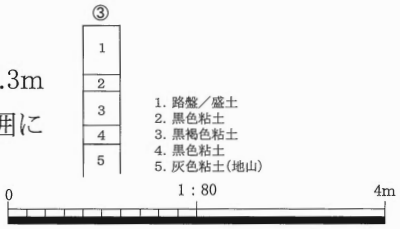

SD107・SD108・SK102（北から）

SK103（南から）

4. 東老田Ⅰ遺跡

(1) 基本層序

盛土直下に黒色粘土、黒褐色粘土、暗褐色粘土が各々 0.2 ～ 0.3m 程度堆積し、その下に地山である灰色粘土がある。調査区は広範囲に広がるが、堆積土の傾向は共通する。



第 73 図　東老田Ⅰ遺跡基本層序
③は第 74・75 図の③に対応する。

(2) 遺構と遺物

今回の調査では遺構は溝7条、土坑1基を検出した。

A. 遺構

a. 溝

SD2～5：SD2は検出長 1.45m、幅 1.15mを測る。SD3は検出長 0.57m、検出幅 0.97mを測る、南北方向に延びる溝である。SD4は検出長 1.16m、幅 0.69mを測る、東西方向に延びる溝である。SD5は検出長 1.50m、幅 0.90mを測る溝である。

SD6：長さ 1.95m、幅 0.47 ～ 0.51mを測る南北方向に延びる溝である。中世土師器（2）が出土した。

SD7：検出長 0.90m、幅 2.49 ～ 2.75mを測る。

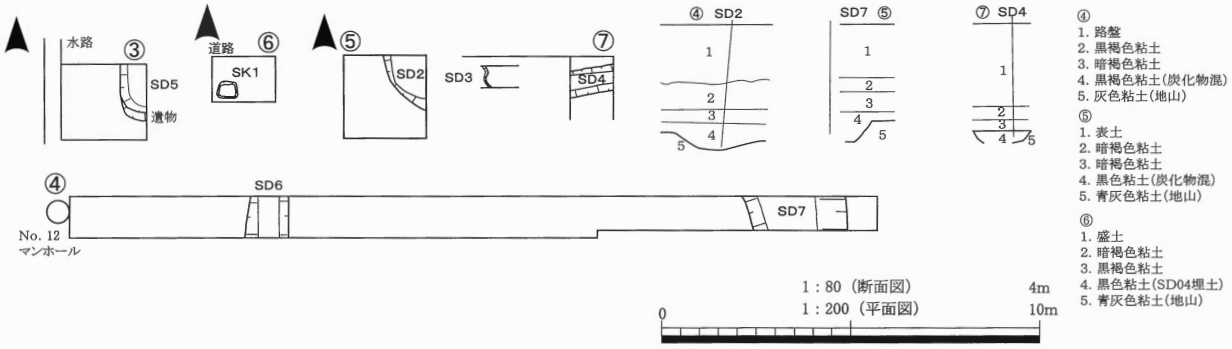
第 16 表　東老田Ⅰ遺跡　遺構一覧

遺構No.		平面形・軸方向	長さ(m)	幅(m)	備考・出土遺物
SK	1	楕円形	0.54	0.45	
SD	2		1.45	1.15	南西端部分
SD	3	(南北)	0.57	0.97	
SD	4	東西	1.16	0.69	
SD	5		(1.50)	(0.90)	南西端部分
SD	6	南北	(1.95)	0.47～0.51	中世土師器(2)
SD	7	南北	(0.90)	2.49～2.75	

b. 土坑

SK1：検出長 0.54m、幅 0.45mを測る南北方向に延びる溝である。

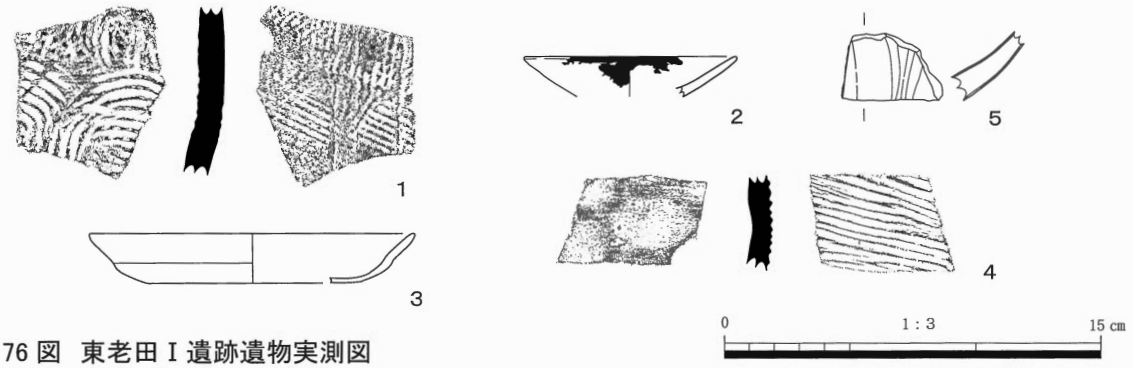
第 74 図　東老田Ⅰ遺跡位置図



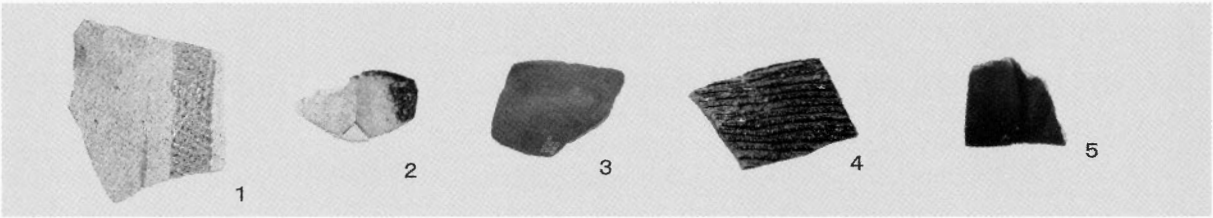
第 75 図　東老田Ⅰ遺跡遺構図

B. 遺物

1は須恵器の甕体部である。 2、 3は中世土師器の皿である。 2は灯明皿として使用されたものである。 3は径13.0㎝を測る大型のもので、体部中程で外側に屈曲して広がる。 口縁部はそのまま丸くおさめる。 宮田編年Ⅴ期で 15 世紀後半～ 16 世紀前半に比定できる。 4は珠洲の甕体部である。 5は龍泉窯系青磁碗である。 鎬蓮弁文をもつ。　(朝田)



第 76 図　東老田Ⅰ遺跡遺物実測図



図版 44　東老田Ⅰ遺跡

第 17 表　東老田Ⅰ遺跡　遺物観察表

遺物No.	出土地点		種別	器種	法量			色調		成形・調整		備考
	場所	遺構／層位			口径	底径	器高			外面	内面	
1	北側工事区		須恵器	甕	—	—	—	2.5Y7/1	灰白	平行タタキ	同心円当具痕	
2	北側工事区		中世土師器	皿	8.40	—	—	7.5Y7/3	にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ	油煙痕
3		SD04	中世土師器	皿	13.00	8.60	2.00			ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	
4	北側工事区		珠洲	壺	—	—	—	2.5Y3/1	黒褐	平行タタキ	当具痕	
5	基点より-90m	暗褐色土	中国製青磁	碗	—	—	—					龍泉窯系、片彫蓮弁文

v）総括

1．西二俣遺跡

今回の調査では、中世～近世の井戸・溝などを確認した。SE01は、出土土師器の年代から15世紀後半に帰属する。SE01出土板材の放射性炭素年代測定の結果、15世紀前半～中頃の年代を示すことから、存続時期は15世紀前半～後半と考える。包含層からは、中世の珠洲、近世の越中瀬戸・伊万里が出土しており、その他の遺構の年代は中世後期～近世と推測する。中世～近世の遺構検出面より下層の黒色土層からは、縄文時代中期中葉の縄文土器が出土しており、周辺には縄文時代の遺構が広がっている可能性がある。

隣接する平成17年度調査では、溝や土坑から出土した炭化物の14C年代測定の結果、15世紀中頃～17世紀中頃の年代を示し、出土遺物などから中世後期～近世前期の集落と考える〔富山市教委2006〕。今回の調査では同時期の遺構を確認し、同一集落の広がりと考えられる。

2．花ノ木C遺跡

今回の調査では、古代の溝などを確認した。遺構は、包含層出土遺物から8世紀代に帰属する。

平成15年度調査では、斎串や人形など律令祭祀具が出土する8世紀後半の溝を確認した〔富山市教委2004、堀沢2008〕。今回の調査は、平成15年度調査の西側にあたり、遺物の年代からも同時期の遺構の広がりと考えられる。

3．砂川カタダ遺跡

今回の調査では、弥生時代・古代・中世の3時期の遺構を確認した。弥生時代の遺構は、土坑や溝などを確認し、出土遺物は、弥生時代後期の法仏式に帰属する。古代の遺構は、土坑や溝などを確認し、出土遺物から9世紀代に帰属する。中世の遺構は、掘立柱建物や溝などを確認し、出土遺物は14世紀代に帰属する。SP04・06には柱根痕が確認でき、狭隘な調査区で全体像は掴めないが、掘立柱建物のピットと推測する。SP04-SP06間は0.64mを測る。SP104には柱根痕、SP109には柱抜き取り痕が残る。柱根痕の残るピットに出土遺物はないが、規模から中世に属すると推測する。

隣接する平成18・22年度調査では、弥生時代後期～終末期、平安時代の集落を確認した〔富山県埋セ2007、富山市教委2011〕。今回の調査では、平成18・22年度調査の結果に加え、新たに室町時代の集落を確認した。

4．東老田Ⅰ遺跡

今回の調査では、中世の溝などを確認した。中世の遺構は、出土土師器の年代から14世紀前半に帰属する。

平成7年度調査では、平安～室町時代の粘土採掘坑、井戸、溝などを確認した〔富山県埋セ1996〕。

今回の調査では、室町時代の遺構の広がりを確認した。（堀内）

引用・参考文献

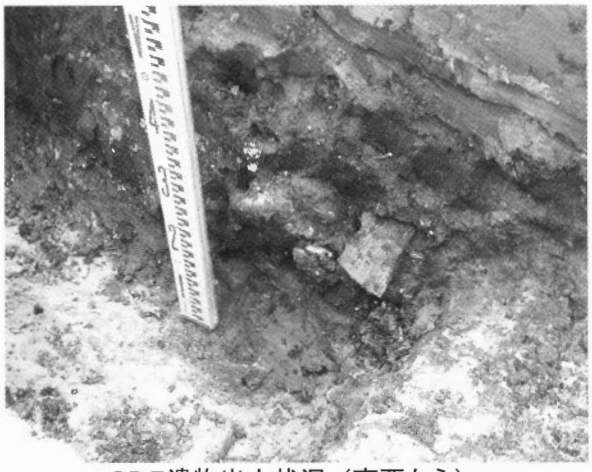
富山県埋蔵文化財センター 1996『富山県埋　蔵文化財センター年報－平成7年度－』
富山県埋蔵文化財センター 2007『富山県埋蔵文化財センター年報－平成18年度－』
富山市教育委員会 1970『富山市金草第1号窯址発掘中間報告書』
富山市教育委員会 1973『呉羽丘陵城山南部の自然科学および文化史跡調査報告書』
富山市教育委員会 1974『富山市境野新遺跡発掘調査報告書－古墳時代住居跡－』
富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
富山市教育委員会 1975『富山市杉谷（A･G･H）遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1976『富山市古沢・金屋地内古墳概要調査報告書』
富山市教育委員会 1983『富山市古沢A遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 1984『富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』
富山市教育委員会 1988『昭和62年度　富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
富山市教育委員会 1999『栃谷南遺跡』
富山市教育委員会 2002『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2003『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ　－水橋二杉遺跡・願海寺城跡・北代遺跡－』
富山市教育委員会 2004『富山市の遺跡物語所報№5』
富山市教育委員会 2005『富山市願海寺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2006『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅰ　－砂川カタダ遺跡・西二俣遺跡－』
富山市教育委員会 2006『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2011『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ　－砂川カタダ遺跡・今市遺跡－』
富山市教育委員会 2012『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ　－西金屋・西金屋窯跡　米田大覚遺跡－』
富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 2000『富山市西金屋窯跡発掘調査概要』
西井龍儀 1987「赤土の中の石器文化」『富山市史　通史』上巻　富山市
西井龍儀・小林高範 2005「呉羽山古道の調査」『大境』第25号　富山考古学会
堀沢祐一 2008「富山市花ノ木C遺跡の祭祀具について」『富山市考古資料館報　№45』富山市考古資料館

SD4検出（西から）

SD4完掘（西から）

SD7検出（南から）

SD5検出（南西から）



SD5遺物出土状況（南西から）

SD5（南西から）

SD2（南から）

SD2断面（南西から）

報告書抄録

ふりがな	とやましないいせきはっくつちょうさがいようじゅう
書名	富山市内遺跡発掘調査概要X
副書名	南部Ⅰ遺跡・願海寺城跡・今市遺跡・西二俣遺跡・花ノ木C遺跡・砂川カタダ遺跡・東老田Ⅰ遺跡
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	60
編著者名	堀内大介・朝田　要・橋　日奈子
編集機関	北陸航測株式会社
所在地	〒933-0353　高岡市麻生谷400　　TEL　0766-31-6033
発行機関	富山市教育委員会　富山市埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0091　富山市愛宕町1丁目2-24　　TEL　076-442-4246
発行年月日	西暦2014年2月26日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
南部Ⅰ遺跡（なんぶいちいせき）	富山市婦中町熊野道（とやましふちゅうまち やんど）	16201	2010636	36度37分51秒	137度8分25秒	20100308～20121011	－	下水管渠敷設工事
願海寺城跡（がんかいじじょうあと）	富山市願海寺（とやましがんかいじ）	16201	2010091	36度43分10秒	137度8分31秒	20080114～20130108		
今市遺跡（いまいちいせき）	富山市八幡（とやましやはた）	16201	2010023	36度44分28秒	137度11分31秒	20080730～20081224		
西二俣遺跡（にしふたまたいせき）	富山市西二俣（とやましにしふたまた）	16201	2010075	36度42分57秒	137度7分40秒	20070108～20130605		
花ノ木C遺跡（はなのきしーいせき）	富山市東老田（とやましひがしおいだ）	16201	2010354	36度42分6秒	137度8分38秒	20060611～20111112		
砂川カタダ遺跡（すながわかただいせき）	富山市東老田（とやましひがしおいだ）	16201	2010098	36度42分14秒	137度8分20秒	20070108～20110914		
東老田Ⅰ遺跡（ひがしおいだいちいせき）	富山市東老田（とやましひがしおいだ）	16201	2010085	36度42分31秒	137度8分40秒	20071211～20120625		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南部Ⅰ遺跡	集落	弥生時代	竪穴建物・土坑・自然流路	弥生土器（後期後半～終末期）	工事立会 S字甕が出土
		古代	竪穴建物	古代須恵器、古代土師器	
		中近世		瀬戸、肥前、伊万里	
願海寺城跡	城館	戦国	堀、溝、井戸、土坑、ピット	中世土師器、中国製青磁、瀬戸美濃 木製品（漆器、建材等）、取鍋	工事立会
		江戸	溝、井戸、土坑	越中瀬戸、伊万里等近世陶磁器	
今市遺跡	集落	弥生時代	土器溜まり、ピット	弥生土器	工事立会 絵画土器が出土
		平安	溝、道路状遺構	平安須恵器、平安土師器	
西二俣遺跡	集落	縄文時代		縄文土器	工事立会
		弥生時代		弥生土器	
		中近世	溝、井戸	中世土師器、珠洲、越中瀬戸	
花ノ木C遺跡	集落	奈良	溝、土坑	奈良須恵器、奈良土師器	工事立会
砂川カタダ遺跡	集落	弥生時代	溝、土坑、ピット	弥生土器	工事立会
		平安	溝、土坑、ピット	平安須恵器、平安土師器	
		室町	溝、土坑、掘立柱建物	中世土師器、珠洲	
東老田Ⅰ遺跡	集落	古代		古代須恵器	工事立会
		室町	溝、土坑	中世土師器、珠洲、中国製青磁	

要約

（南部Ⅰ遺跡）弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて変遷する竪穴建物11棟を検出し、南部Ⅰ遺跡の集落の中心部が判明した。同時期の旧井田川の可能性が高い大型自然流路があり、土器溜から多量の弥生土器が出土した。県内で2例目となるS字甕が出土し、胎土分析の結果、在地産と判明したことが注目される。

（願海寺城跡）中近世の願海寺城の一部であったと考えられる薬研堀、箱堀、土橋や、その付属施設である井戸などを検出した。土器・陶磁器は中世土師器の他、越中瀬戸や伊万里・唐津等が多く、漆器など木製品も一定量出土した。放射性炭素年代測定の結果および中世土師器の編年から、中心となる時期は応仁の乱後の15世紀後半～16世紀前半と考えられる。検出した堀の位置関係から、願海寺城は南郭（実城）・北郭（二之廻輪）で構成されていたと推定できる。

（今市遺跡）土器溜まりから弥生時代後期後半（法仏期）の絵画土器（有段甕）が出土した。南北方向に平行して延びる2本の溝を持つ道路跡を検出した。平成24年度調査で確認した道路跡と繋がる古代道路と推測する。

（西二俣遺跡）中世～近世の井戸、溝などを検出した。井戸出土板材の放射性炭素年代測定の結果、15世紀前半であった。平成17年度調査と同一集落の広がりを確認した。

（花ノ木C遺跡）遺物から8世紀代の遺構を確認した。平成14年度調査で律令祭祀遺物が出土した8世紀後半の溝と同時期の遺構と考えられる。

（砂川カタダ遺跡）平成18・22年度調査同様に弥生時代後期・平安時代の集落の広がりを確認し、新たに室町時代（14世紀代）の集落を確認した。室町時代の遺構としては、掘立柱建物や溝などがある。

（東老田Ⅰ遺跡）室町時代（14世紀前半）の遺構の広がりを確認した。

富山市埋蔵文化財調査報告 60

富山市内遺跡発掘調査概要X

—南部Ⅰ遺跡・願海寺城跡・今市遺跡・西二俣遺跡・花ノ木C遺跡・砂川カタダ遺跡・東老田Ⅰ遺跡—

発行日：2014（平成 26）年 2 月 26 日
発　行：富山市教育委員会
編　集：富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山市愛宕町 1 丁目 2 番 24 号
TEL：076-442-4246
FAX：076-442-5810
Email：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷：中央印刷株式会社